THE CENTRAL REVIEW

中央公論

五月號

第三十一年第五號　第三百三十號

ノベル賞金を得たる、白耳義國文豪
マーテルリンク著
文學士 栗原古城先生譯

【忽再版】

死後は如何

▼將來の世界を支配するものは心靈の學也

人間の死後は絶滅か、永生か、將た「醒むる無きの睡眠」か、既成宗教は其權威を失し、近代科學は之に就て何等の説く所無し。而も闇黒の中に一道の光明あり、泰西の新科學は既に靈魂の不滅を實證し、將に輪廻轉生の眞理を説かんとす。現代第一の文豪にして思想家たるマーテルリンクは、深く此不可思議なる心靈の現象に動かされ、其神秘的冥想と、聰明なる理智との高潮に乘じて、此大問題を解決せんとしたる者、即ち此書也。譯者は將來世界を震撼すべき心靈運動の曉鐘として、本書を提供する者と云へり。附録とせる「交靈術とは何ぞや」に至りては、眞に人界靈界に亘る一大驚異を説ける者にして、物質萬能の現代社會は、之を讀んで將に大なる戰慄と畏怖とを禁じ得ざるべき也。

附録『交靈術とは何ぞや』

四六判總洋布装・全一冊
正價壹圓貳拾錢 郵稅拾錢

◎三版◎

デゼルチス著
高橋五郎先生譯

心靈學講話

四六判總洋布製
全一冊
正價金八十五錢
郵稅八錢

(前付一の一)

東京本郷西片町
玄黄社
電話下谷一三一九番
振替東京七九九五番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

武者小路實篤氏著

小さき世界

紙數五百廿頁 ▼總洋布 ▼最上製 ▼定價一圓三十錢 小包料十二錢

わが國の藝術は、今や一の轉換期に在る。眞の藝術の大道は、恐らく將に開く可き斯の道であらう。**斯の道とは**、本書の著者武者小路實篤氏の夙に踏み來り、而して今現に踏みつゝあるの道である。著者の藝術に就いては、毀譽もとより區々であるが、之を閑却して現時の文藝を語ることは出來ない。本書は著者從來の作中より、その**最も代表的なるものを選集**したもので、著者の踏み來れる道、又踏みゆかうとする道は、本書を一讀することによつて明かに指顧し得るであらう。而して之を指顧することによつて藝術の眞意義と、併せて現下に動きつゝある**藝術の新機運**とを了得することを得よう。敢へて熱讀を勸むる所以である。

徳田秋聲氏著

奔流

才色雙絶の婦人を中心として婀娜艶麗を極めたる題材を、嚴正なる藝術的態度によつて觀察し解剖せる傑作也。

上製美本 定價九拾五錢 送料八錢

島崎藤村氏著（縮刷）

破戒

我邦の近代文學中、最初に現はれたる長篇にして、種々の點に於いて新藝術の芽生を示せる、意味深き作なり。

上製美本 定價六十八錢 送料八錢

田山花袋氏著

縮刷傑作文庫 第四編

生

「生」は「妻」「縁」と共に花袋氏畢生の努作として高名なる其三部作の一にして氏の自然主義は此一篇に於て完成せり

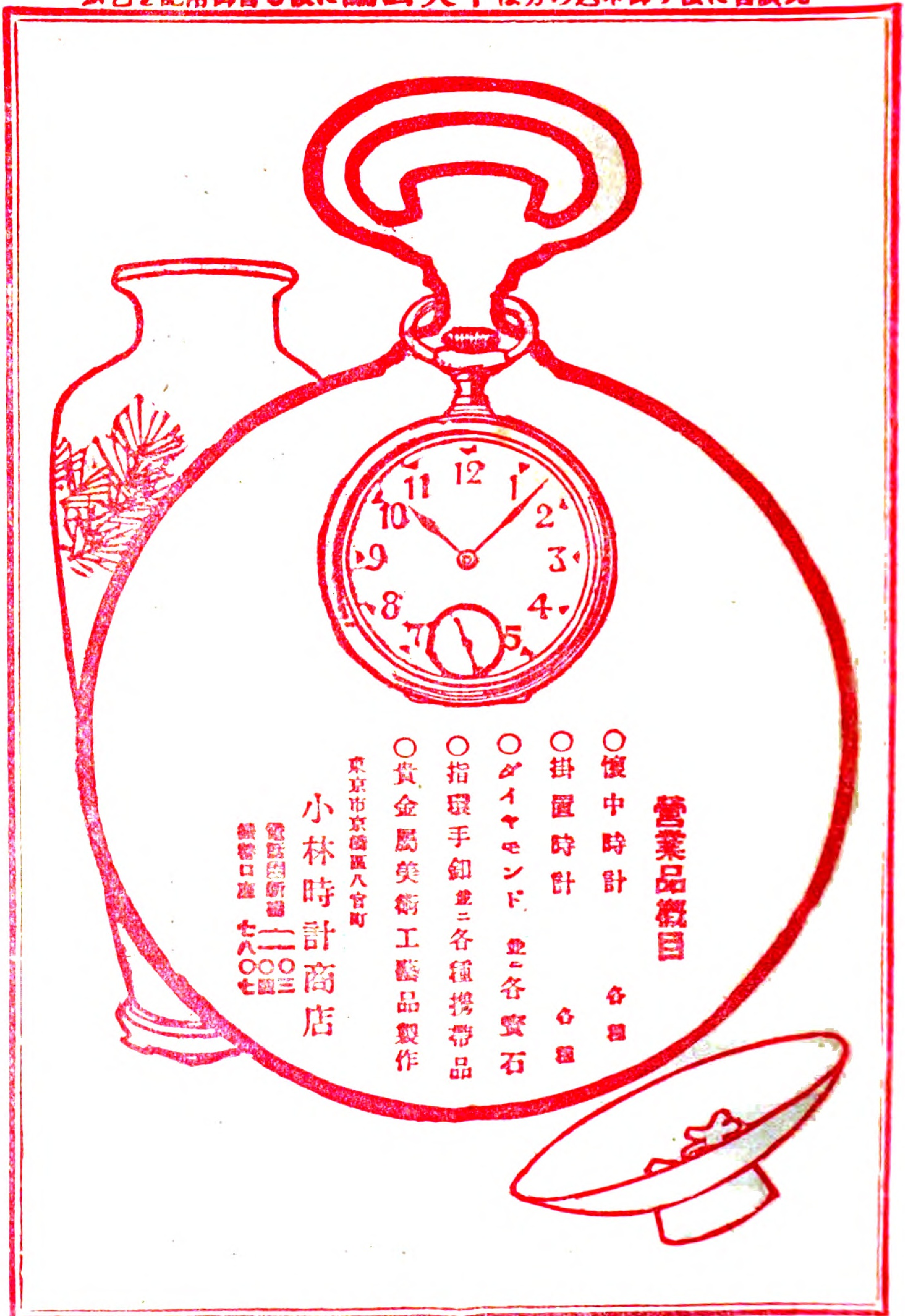
上製美本 定價五十五錢 送料八錢

東京市牛込區矢來町中の丸 新潮社 電話番町二二二三番 振替東京一七四二番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

（前付一の二）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央公論第卅一年五月號目次



古河家經營

博愛生命

一 當會社の保險料は低廉にして且つ利益金の百分の五十以上を五箇年目毎に契約者に分配す

一 當會社の保險料拂込方法は保險證劵訂正の煩を要せず其變更契約者の隨意とす

一 當會社は拂濟保險の便法を設けあり

社長 男爵 中島久萬吉
專務取締役 小原元美
專務取締役 鈴木市之助
常任監査役 安達仁造

一 當會社は低利なる金融機關の設あり

一 當會社は被保險者の年齢範圍最も廣く滿九年七箇月以上滿六十年六箇月迄契約す

一 當會社の保險金支拂は最も迅速なり是れ保險契約の目的を遂行せんが爲なり

本店 東京市日本橋區本町四丁目十五、十六番地
電長本局一八五六、五一五〇、一二八七番
振替貯金口座東京一七一七番
支店 大阪市東區本町一ノ一三(電長本局二三一一番

A. EAST



Evening Song

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

日とのみ競ふ

マツダランプ



五拾燭光迄長型壹個金五拾錢

東京電氣株式會社

神奈川縣川崎

電話川崎五〇番一〇一番一〇二番一〇三番一〇四番

販賣部

東京出張所 東京市京橋區銀座尾張町一丁目 電話新橋一九三・三二一二 長一〇五九

橫濱出張所 橫濱市伊勢佐木町一丁目 電話橫濱一七一一

大阪出張所 大阪市西區阿波堀通一丁目五番地 電話長西一〇九五

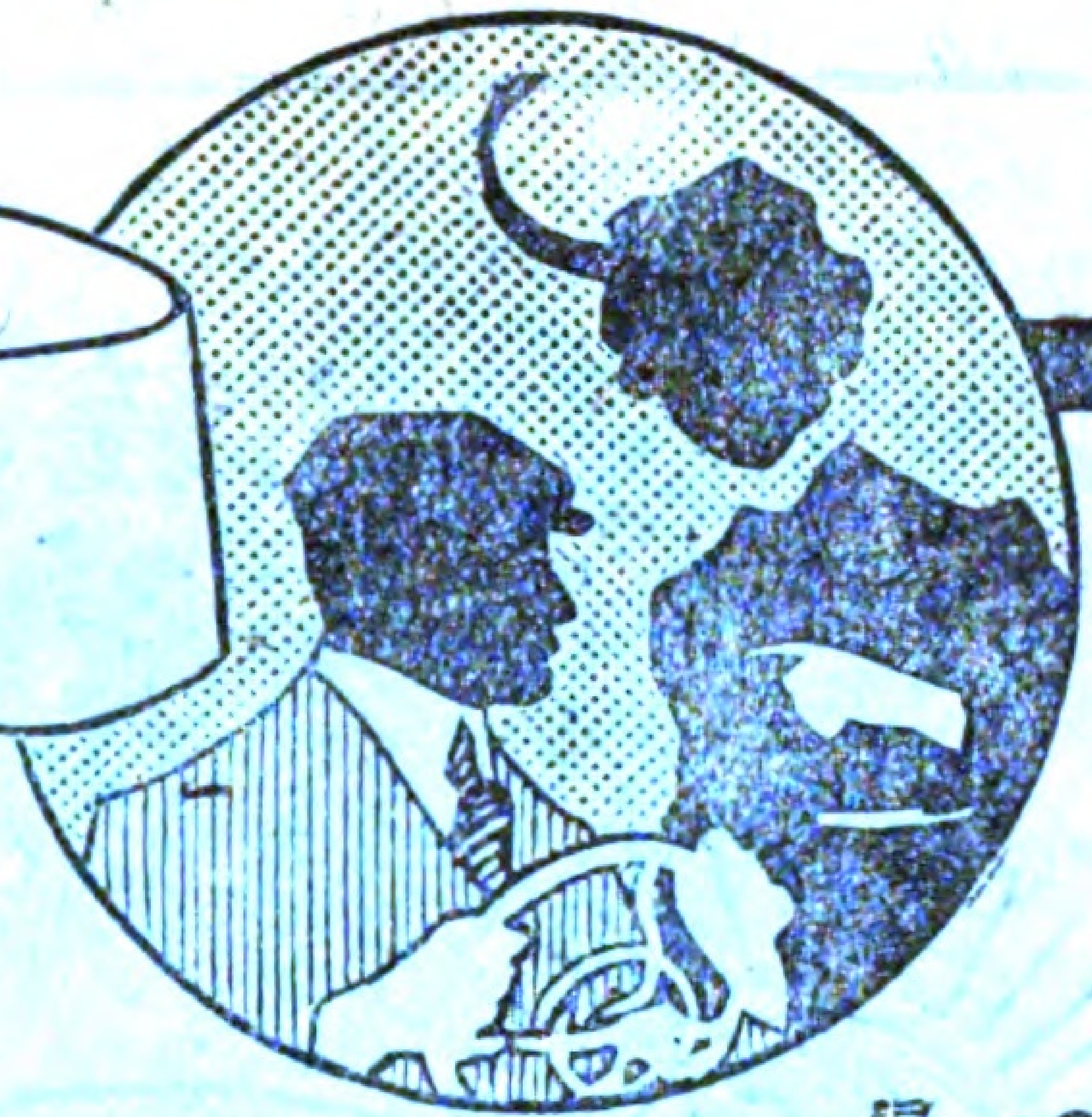
御經營の節は此點線を切取りお送り下されば詳細な說明書を差上ます

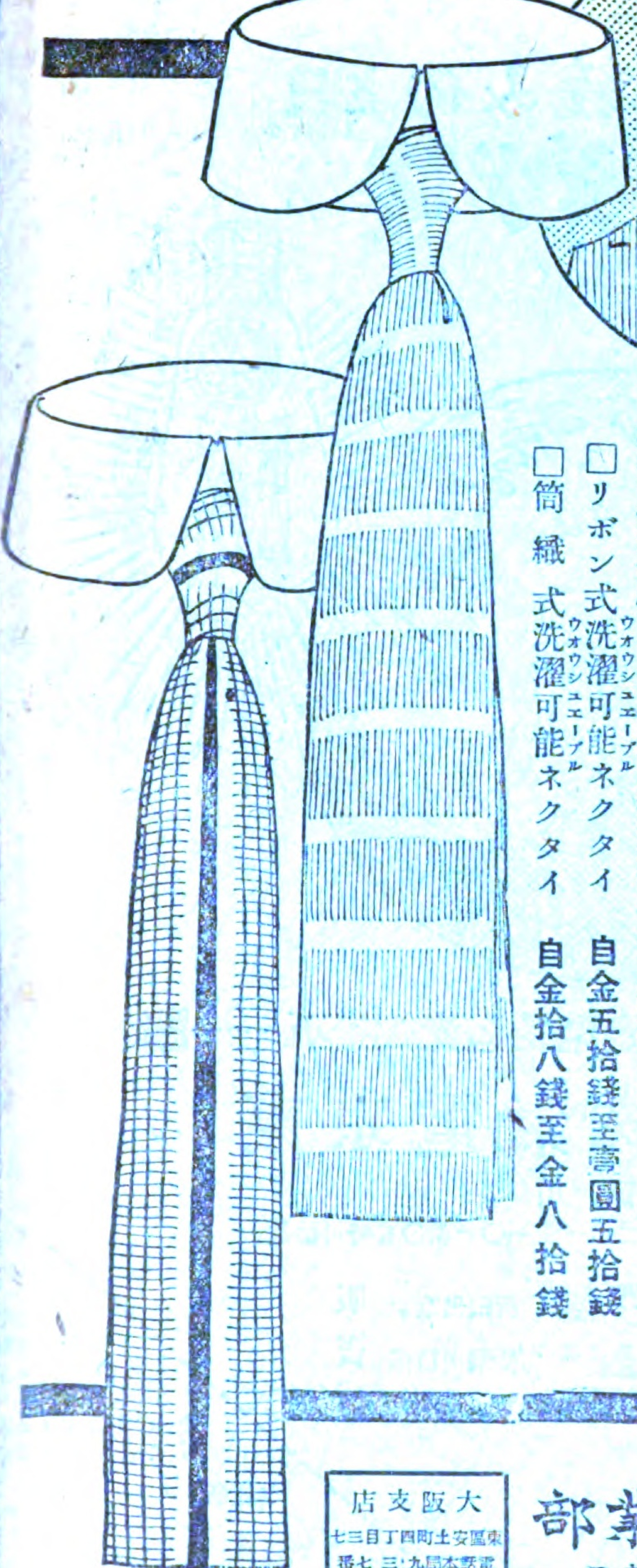
御住所

御姓名

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ





登録商標

BEST MADE

RED HAT

WEAR GUARANTEED

清快の象徴たる洗濯(ウオッシュエーブル)可能ネクタイ

洗濯保證

輕い着物を着て愉快に活動の出來る季節となりました。清新。爽快。溌溂。鋭氣の充ちた若い新しい季節となりました。此季節を代表する生氣ある輕い清い新らしい壯んなる精神を象徴する洗濯(ウオッシュエーブル)可能ネクタイの新柄が取揃ひました。皆様御覧下さりませ。本年の新製品にはリボン式も筒織式も御座います柄行色合は現代の流行を更に洗練しました瀟洒なる逸品揃いで御座います。染織は堅牢でリボン式の内には皆様をあつと言はせる優秀なるものも御座います其れで價が低廉です一日も速く御注文下される様願ひます。

□リボン式洗濯(ウオウシユエーブル)可能ネクタイ　自金五拾錢至壹圓五拾錢

□筒織式洗濯(ウオウシユエーブル)可能ネクタイ　自金拾八錢至金八拾錢

東京本店
日本橋區通塩町一五
電話浪花二一〇四番
振替東京九七四三番

南文藏商業部
赤帽印ネクタイ發賣元

大阪支店
東區安土町四丁目三七
電話本局九三七番
振替大阪一九一九番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央公論



五月號
第卅一年第五號
第三百三十號

支那統治の前途を論ず

（一）

支那民國大總統袁世凱氏が其股肱腹心の密謀を納れ政體變革を企畫してより既に五たび月を閲みし、其初めに當りてや代行國會の建議あり、各地都督將軍の贊成ありて表面頗る順調に事件の進行を見んとするが如くなりしも、國内の人心暗冥の裡に甚だ平穩ならざるものありて日英露佛の警告を喚起したりしが、遂に雲貴獨立の擧を觀るに至り流石に智巧を誇る計畫も一大頓挫を來せること是非なき次第と謂ふ可し、當時吾人は本論壇上に於て形勢の甚だ容易ならざるを論じ各方面の注意を喚起し置きしが爾來廣西省を初め浙江、江西亦獨立を宣言し帝政復活の取消は素より袁氏の退職を要求し、四川湖南湖北江

蘇福建等亦た近き將來に於て獨立の擧に出でんとするもの丶如く、民國の創立によりて僅に小康を得たる支那も袁氏の飽くことなき野心に囚はれて再び亂麻の狀態に陷らんとするは誠に痛歎の極なり。雲貴獨立の後幾許もなく形勢の漸く重大ならんとするや袁大總統は徐世昌段琪瑞兩氏を招致し副大總統黎元洪氏を加へ其高誼に訴へて南北妥協の法を講ぜしめたる結果、帝政取消、謀叛罪不問、責任內閣創始等を條件として南北兵戈を止めんと欲して計畫中なるが、雲貴獨立の首腦たる蔡鍔氏は黎元洪及び徐段兩氏の交涉に對し左の如き反電を爲せりと報ぜらる、曰く

三公此の大局糾々の時慨然出で丶維持の任に當る欽佩に堪へず袁氏今回共和を倒し自ら帝制を興し敢て四億の公產を變じて袁氏一家の私產とす、旣に國民の反對を知り帝位を中斷せるも袁氏數年來の失信背約行爲は太く國民の公憤を買ひ何人も彼を信ぜず眞僞旣に明かにして威信旣に傷つく、袁氏は常に救國救民を唱ふ眞に其意あらば退位を即行すべきなり、斯くて彼の功業初めて生き國民初めて威服せん公等民國の柱石たり必ず善く辯法を盡し國家を泰山の安きに置くを信ずと、

想ふに蔡鍔氏の此論殆んど申開辯解の餘地を存せず、革命派の脚地よりすれば袁氏の罪は其帝政を企畫したる一事に在らずして、其人格の問題に屬して彼れの不誠意不信義に在り、故に其帝政取消も一時の便法として認められ、一朝其位置更に鞏固なるを致さば再び同一企畫を繰返さるべきを豫期せざるものはあらず、是れ蔡鍔氏等の袁氏の言質に信を置かざる所以にて、時局の拾收を益々面倒ならしめんとする所以なり、袁氏曩きに人の孤兒寡婦を欺き民國の名の下に天下を奪へり、若しも逆取順守の故智を學ばんとせば須らく信義を中外に立て丶以て民國の基礎を確立すべかりしなり、然るに袁氏の志す處一に變權譎詐を事とし內は國會を破滅して革命志士を國外に逐ひ、外は與國を離間し信義の依るべき無ら

しめたり、故に列國の袁氏を觀る只だ支那の平和を維持すべく便宜にして必要の人物なりとするに過ぎずして、一たび袁氏の手に依り統治の維持す可らざるを知るや孰れの國と雖も強ひて袁氏の在職を希はんとするものあらず、袁氏は支那の大權を逆に取り且つ之を逆に守らんとせしもの、其帝政の企畫に一跌して以來着々破滅に近かんとするが如き蓋し自業自得と謂ふべく、袁氏たるもの將た誰をか咎めん誰をか恨みん、但だし明かに獨立を宣明せるは南方數省に限り、其他は未だ態度を宣明せず、殊に北方は自ら南方と人情を異にするものありて、所謂革命派の勢力も此方面に於ては比較的微弱なるに似たり。然れば袁總統の位置尚ほ容易に動かす可らずと云はんか、然れども北方に宗社黨の潛勢力は意外に侮り易からざるものあり、若しも南方諸省能く聯合の實を擧げ假政府を設立し事實上列强の認識を得るにも至らば、各地の反袁運動は一層の氣勢を加ふるに至るべくして、宗社黨の如き亦た袁氏を不安ならしむる一危險要素と謂ふ可らずや、此に至らば袁氏は腹背に敵を引受くることに至るべく、而して黎、徐、段其他馮國璋張勳諸將軍の如き支那統一を念とするもの遂に袁氏に迫り大總統の職を退かしむることゝ袁氏が曾て清朝に迫りて位を退かしめしと同一筆法に出でんこと想像に難しとせず、是れ吾人が方に袁氏及び支那統治の前途に對し多大の危懼を懷く所以なり。

(二)

抑も第二十世紀の今日に於て國內統一せず二分又た三分して兵火相見ゆるが如きは文明國に有り得可らざる現狀なり、北米合衆國には今より約五十年前に南北戰爭あり、我日本にも當時維新戰爭あり、獨逸、墺匈、伊太利亦た内亂を免れざりしも、是等は凡て過去の事蹟に屬し、今や各國とも進達、交通機關

を整備し兵力を充實したれば世界の列强中内亂の危險ある國としては殆んど一國も見當らず。但だし中南米諸邦は、現に墨西哥が數年間兵亂相續きて民生塗炭に苦める如く到る處内亂の要素に富み、印度亦た全く其危險なしと云ふ可らずして、而して支那は最も統治難を苦しむの國なり、是れ世界最古の文明國として頗る不似合の現狀にして、近來我邦にても一部の觀察者は甚だ支那統治の前途を悲觀し、現代の支那人は國家を統治すべき能力を缺くが故に、政治は之を傭聘外人に一任し支那人自らは專ら心を商買事業と文學美術の好尙に委ね一切國務に關せざるを智とすと說けるものあり、文學博士內藤湖南氏の如き近頃最も露骨に此論を公けにしたる一人なり、其說に曰く

今日に於ても中央集權は支那に取りて何の必要も無いのみならず、又十分なる統一をすると云ふことも何の必要もない、從來の經驗に依れば軍隊でも財政でも其他有らゆる財政上の機關は、支那人が支配するよりは常に外國人が支配した時に成功を收めて居るのである、支那の軍隊が最初に役に立つ組織をされたのは長髮賊の時の常勝軍で、ワードとかゴルドンとかの力であつたので、今日でも支那で外國に留學したものが如何に支那の軍隊を組織しても、ワード、ゴルドン以上の組織さへも出來やうとは思はれない、況んや日本式の訓練を經たとか獨逸式の訓練を經たとか云ふても、實際其幹部に日本人又は獨逸人を使はない以上は單に形式の訓練で効力のある軍隊を造ることは出來ないのである、支那の如く長い間財政上の能力の痲痺した國では到底本國人に因て之を整理することが出來ないのは當然であつて、財政各項中で最初に年々國勢の發展に伴れて其收入が增加すると云ふ實績を現はしたのは即ちロバートハートに依て支配された海關から始まつた、××××それから裁判でも居留地に於ける支那人と外國人の訴訟は支那の十分の利益を保護せられないことは明であるけれども其不十分の下に於ける裁判でも、支那人が自ら其土地に於て支那官吏の裁判を受くるよりか安全として居る、支

那の如き政治組織の簡單なる國では古來民政と云ふもの財政と裁判と、其から軍隊、警察ぐらゐである、が此等のものは總て外國人の手に渡つて居る方が安全なのである。×××支那今日の政治狀態は自分の國のものが之を支配すると啻に之を良い方に導かない耳ならず、益々惡い方に導くと云ふ位にまで墮落して居るから、今日の支那の狀態は政治機關が全部外國人の手で行はれる方が支那人民の爲めに非常な幸福であらうと思ふと、

吾人は平素博士の學識に對し多大の尊敬を拂ふが故に今其結論に同意する能はざるを恨事とすれども其現代支那人を末世亡國の民とし政治の能力なしと云ふの所論に對しては大に異議なきこと能はず、内藤博士は學者にてありながら聊か史的比較的觀察を缺けるの嫌なきを得るか、抑も支那が十九世紀の終末に至るまで尙ほ其尊大自負の舊態を脫せず全然世界の進運と沒交涉にして、醉生夢死の境涯にありしは如何にも亡國民に近きの譏を免れず、又其一たび日露戰爭の敎訓に刺激されて覺醒したる以後の狀態の如き或は利權回收を狂叫し或は政體に關する空論に囚はれて竟に實際政治の改良を行ふに至らざるが如き世態澆季に屬すと云はるも殆んで辯解の辭なきに似たり、然れども吾人は支那が今過渡の時期に在るを記憶せんことを要す、之を我邦幕末の政情に對照せば豈獨り支那現代をのみ笑ふべけんや、蓋し舊弊の惰力尙盛にして改良の容易ならざる幕末の日本と滿朝晚年の支那と比較すれば五十步百步の觀あるを免れず只だ我に在りては歐米東漸の壓力未だ甚だしからざるに先だち改革に着手するを得たるの便利ありし耳ならず世界に比類なき國體あり以て改革の斷行にも、國論の統一にも多大の便宜を有したりし耳、支那は國土廣大にして人情統一し難く且つ四圍の壓迫甚だしくして國家革新の事業頗る容易ならず爲めに第一革命と滿朝退位ありて以來已に五歲を經過するも尙ほ國基の安定を見る能はざる耳ならず最

近南方數省の獨立宣言ありて以來時局の收拾殆んど想像すべからざるものあり、袁氏帝政を企畫するの愚及ぶ可らずとするも、黄興孫文諸氏亦た大に政治の才幹を發揮し得たりと云ふ可らずして、内藤博士の斷案頗る因據ありと云ふべきに似たり、然れども國家の秩序一たび亂れて之を回復する爲めに三十年五十年は愚か百年百五十年を費やしたるの例は支那に在りては稀有ならず、今日の事ある決して驚くを須ゐず、春秋戰國のことは措て問はずとするも、漢亡びて晉の武帝天下を一統するまで魏蜀吳の三國分立時代約五十年に及べり、晉亡びて天下南北に分れ小國續々として代を換ゆること百六十八年にして僅かに隋に一統せられ引續き大唐の世となりしが、唐亡びて五代の間天下亂るゝこと約五十年、宋の晩年に至り遼金元互に覇を爭ひ中原を荒らすこと數十年、元明の間亦た爭亂數十年に及び、明清の交代に際しても亦た然り、之に由て之を觀れば今日支那が容易に統一治平せざる必ずしも時勢澆季に入れるの罪に非ず、殆んど是れ古來支那歷史上の通有常事にして大國たる支那の地勢之を然らしむるものと斷ぜざる可らず、吾人故に曰ふ若しも現代の支那人民に對し政治無能力の斷案を下さんと欲せば單に其數千載の歷史を有する舊國なりと云ふの一事は未だ以て十分の論據と爲すに足らず、此外尙ほ他に幾多の考慮を必要とすべしと。

（三）

上下四千載に亘る歷史を有する一事よりせば支那は當然老朽國たらざるを得ざる譯合なり、而かも此長年月の間國家を存續し獨立を維持し來れるは世界中古今東西他に類例なき事に屬す、バビロン、アッシリヤ、埃及、印度は支那と同じき古國なりしが孰れも遠き昔に亡びたり、希臘羅馬も亦た一たび亡び

約千年を經て近代に至り再び勃興するを得たり、獨り支那に至りては此間幾多治亂の迹を經過したるに相違なきも兎も角も國家民人存續蕃殖して今日に至れるは人種特別の生理力に由れりと云ふべきか、然れども支那人に限り特別の能力あるべくも非ざれば他に之が原因を求めざるべからず、而して吾人は主として之を地形の關係に歸せんと欲す、即ち支那は他の多くの諸國と異なり一國にして殆んど別天地を爲せるものにして、其東と南の一半とは海を以て限られ、其南の一半と西邊とは疊々たる高山峻嶺により牆壁を築かれ、而して其北境には數千哩に亘れる弋壁の大沙漠あり、斯の如く四圍の構ひ堅固なる此國は其中區に當り二大川の横流するありて此邊一圓沃野萬里最も人類の繁殖と文明の進歩に適せり、即ち南方海を經て來る民族も此中原に出でんことを志ざし、殊に北方、西方より古來間斷なく侵入し來れる幾多の蠻種民族は歐洲の新民族がアルプス山の嶮を越え日光の照り輝き檸檬の花咲く伊太利の平野に出でんことを欲したる如くに、河北、河西の地を經て中原の沃土に侵入し來たれり、故に支那中原は古來人種の混成場となり幾度が風俗廢頽し人心靡弱なる毎に北方の强健なる血液は注入せられて又た新生面を開くを得たりき、例せば第五、六世紀即ち東晉の末葉より南北朝時代を觀るに第二世紀漢代より侵入し始めし北方蠻族等は此頃に至り大に文化に進み續々獨立して國を建てたりしが、後燕、後秦、後凉大夏と云ふが如き鮮卑、羌、氐、匈奴等の種族の國を建てしもの十數個に及び、直隷山西陝西甘肅一帶は殆んど擧げて新民族の統治に委せり、爾來五代の時には閩、呉越、南漢諸國起り南方蠻民の勃興を示せしが、十三世紀には蒙古種の元朝支那を統一し更に十七世紀に至れば滿洲朝廷の創立あり、一方より觀察すれば此れ漢民族に取り屈辱の歷史なるが如しと雖も更に他の方面より之を見れば自ら是れ人種更

新の一大妙法にして斯くて始めて漢民族の今日ある主として雜種雜婚の効果に由れりと謂はざるべからず、之に由て見れば支那人民は内藤博士等の想像する如く老朽人民と見限る可らずと同時に、我大和民族、スラウ、チウトン各民族、其他英佛各國民の如き英氣活潑の人民にも非ず、寧ろ老朽民族と新民族との中間に位する相當の精力氣魄を有すと見るを至當とすべく、若しも新民族特有の元氣を以て之に期待せば必ず失望すべきが如く又た之を波斯、埃及の老朽國と同一視せんには必ず事を誤らざるを得ざるべきなり、別語之を言へば支那現代の人民は漢唐宋時代に於ける程の政治的能力なく又は知識的活機なしと雖も必ずしも支那を統治し能はざる程の無能力者にも非ず、現に今より僅に五十年の以前長髮賊の亂により中國亂麻の光景を呈するや曾國藩、左宗棠、李鴻章の如き人傑輩出して撥亂反正の偉勳を奏したり、今日の支那は五十年以前と比較して必ずしも多く墮落せりと謂ふ可らず、單に墮落せざる耳ならず、現代の支那人に對し吾人の特に注意すべきは其國家的覺醒に在り、日清、日露の兩役の影響を受けて變法自彊の必要を感じ新學を開き新知識を求め、我邦を初め歐米各國に遊學せし青年有志輩は孰れも慷慨の士にして、又た支那各地の牛耳を執れる紳商輩も近年深く國勢の振はざるを憤慨し居れるは彼等が殊に(南洋各地に居るものが)革命運動の爲め少なからざる義献金を爲せるを以て察すべく、又た利權回收、日貨排斥等極端なる排外に似たる行動に徵して想像するを得べきなり、吾人は繰返へして言ふ支那は日本に非ずと、直情徑行の邦人が迂餘曲折多き支那民情を解するに苦しむは止むを得ざることながら、吾人は力めて支那の長き歷史に由來する國情に同情し輕卒に之を誤解するなからんことを要す、揚子江の水は濁流にして我富士川、天流川の清澄なるが如くならざれども、滔々滾々として數千哩に亘り

て流るゝは我河川の到底及ばざる所たり、現代支那には政治熱旺盛にして、從つて政治の能力、少なくとも其潛勢力あることは疑ふ可らず、斯る人民に向ひ政治を親らすることを斷念し之を外國人に委任し自らは文學、商業等に身を委ねて安穩平易の生涯を求むべしと云ふが如き頗る彼を誤解するものに非ずや、而かも內藤博士の如きは此誤解に陷れり、博士曰く

近來外國との交渉を生じてから、それ等の人(篤學の士)もどうかすると一時の氣風に動かされて支那を强國にしやうと云ふ誤つた考へに囚たれるのであるけれども眞に支那民族の運命を考へ其幸福が如何にして維持されるかと云ふ事を考へ、さうして支那人の天才を何處までも伸ばして行くと云ふ事を考へる上から言へば、卽ち此の宋、明以來段々發達した學問藝術などに對する天才を發揮してそれに依りて世界文明の上に立派な地位を造り、假令政治上他の者が自分の國を支配しても、それ等は謂はゞ富豪の巡査を賴んで置くやうなもので、巡査が家を取締り盜賊を防いでやつたからと云ふて、それが決して家の主人ではないと同樣に、其文明に對する迫害を他國人に依りて防禦しても、其自己の特色の文明を維持することは、寧ろ高尙なる天職を盡す所以であるかも知れない、殊に支那は此學問上に於て長所を有つて居る耳ならず、例へば商業と云ふやうな近代的に且つ平和的な事業でも恐らく世界中で並ぶものなき程の立派な長所を有つて居る、×××それで其長所をどこまでも伸はすが爲めに自分の短所である職務は之を外國人に附託して、そうして自分の長所に向つて進む方が宜しいのである云々、

內藤博士は懇々切々支那人に忠告して政治向きの事は一切之を外人に委任して、自己の長所たる學問商業等に專心從事すべしと云へるも、是れ不可能を以て支那人に求むるものなり、吾人を以て之を觀れば現代の支那人が覺に斯くの如き灑然脫然たる心底に成り能はざるべき耳ならず、若しも斯かる考を以

て支那に對する日には假令我邦が今後或る一方面の政治の委任を托せらるることありとするも到底首尾よく其任務を果し能はざるべきなり、吾人は斯の如き忠告を現代支那人に向つて試みんとする內藤博士高明なる心術を認むると同時に其或は世間に誤解され易からんことを恐れ、又その不可能の空論たることを指摘せずんばあらず。

然らば則ち支那統治の前途如何、吾人を以て之を觀れば勿論支那は支那人に由り統治せられざる可らず、假りに列國中の一國が支那の統治權を掌握せんとする野心を懷くものありとするも、其志は到底果たし得らるべくもあらず、何となれば外國にして支那を統治するの法は只だ武斷的强壓を以て之に臨み支那人をして有無を云はしめず屈服するより外執るべき途なきを理解せしむるの一法あるのみ、而かも斯の如き武斷的權勢を或る一國が振はんことは到底列强の承認す可らざる所なればなり、若しも今後支那に對し或一國が他の列强に比して多少優越の位置を占め得べしとせば是れ其國の地勢の關係上然るものたるべく、而かも其優越の位置なるものは單に他列强を代表するの意味に於てせられ、決して絕對的のものたるを得べからず、然れば昔時蒙古人侵入して中國の主人となりし如く又は近世愛親覺羅氏滿洲より起りて二百餘年の帝業を開きし如きは其當時に於て之を爲し得べく、現在の如き世界六大强國の猜視の下に於て決し爲し得べきものに非ざるなり、論者或は列國共同監視を一步前進して列國共同統治を說くものあらんも、共同統治の弊は其久しく一致を保ち難きことと支那人を屈服するに足るべき强壓力の發揮に適せざるに在り、故に列國と支那との關係は北淸事變以來、旣に行なはれ來る所の共同監視を維持するを以て足れりとせざる可らずして、其監視は主として財政問題に基つき且つ世界市場たる支那

の秩序維持を主眼とすべきなり、而して支那が帝政に復歸すべきか又は共和民政に安定すべきかは列强の關すべき所に非ず、其内政の問題は支那人民に假すに時日と自由を以てせば必ず自然に解決する所あらん、古來一の國朝の亡びて新らしき國朝の興るまでには必ず數十年に亘る亂世若しくは半亂世の中間期あるは數の免れざる所にして、現在支那は即ち其過渡期に在るものなり、故に一九一一年革命勃發以來已に五年を過ぎ國體尚ほ安定する所なき亦怪むに足らず、前例に由れば數十年間の爭亂を見るを期すべきに似たれども、二十世紀の今日斯る悠長の注文には應ずべくも非ず、此上更に五年を要して始めて支那改造の基礎成るべしとせば吾人は此數年を假すに吝なる可らず、但し支那を一擧にして近世的文明社會に改造し得べきかは素より疑問なり、民國としても帝國としても鞏固なる組織ある國家を速成するには今の支那は餘りに公人間に於ける信義及團結の要素を缺く、而かも第二の埃及又は印度となりて一强國又は數强國の統治の下に晏如たらんには餘りに氣概あり餘りに愛國心に富めり、故に列國の支那に對する態度は應揚迫らず必要なる監視の下に自由に支那人をして其統治問題を解決せしめざる可らず。

（四）

終りに眼前の時局に立歸り觀察せんに、何人も之に對し知らんと欲する所は今の動亂が果して何時に鎭定すべき又た如何の形式を以て收拾さるべきかと云ふにあらんも、之を測定せんこと甚だ容易ならず最も切迫せる問題は袁氏の運命なるが其帝政發起以來の經過に鑑み反袁運動益高潮し來るに察すれば恐らくは退位は遂に免る能はざるべきか、想ふに袁世凱氏が排滿革命の氣運に乘じ以て清朝を退け南方孫黄を籠蓋して大總統の位を占めし以來僅かに五星霜を經るに過ぎず、未だ袁氏一家の聲望以て一代を掩

ふに至らず未だ反對派の野心隱謀國家を危ふするものありとして之を指摘するに足らず、此間に於て一躍帝政を復し九五の位を踏まんと欲せば須らく背後に强大の兵力を擁するの準備あるべし左もなくば深謀權變クウデターを行ひ迅雷耳を掩ふに遑あらざるに際し簒奪の目的を遂げざる可らず、前者は一世ナポレオンの執りし方法にして後者は三世ナポレオンの擇みし方法なり、袁氏に至りては大ナポレオンの盛名兵力なきは言を待たず小ナポレオンの深謀膽氣もなく、米國一學者の說に聽き卒爾として籌安會を設けて帝政回復の利害を考究せしめ、各省都督將軍に旨を傳へて意見を徵し代行國會に帝政回復を勸進せしめ、漫然として機運の熟するを待てり、卽ち彼は一種の立憲的方法形式に由り非立憲なる簒奪行爲を成遂げんと欲したるなり、袁氏にして果して謀と略とありしならば彼は日本外三國の警告に先だちクウデターを以て帝國回復を斷行しフェートアコムプリー(既成事質)を以て四國の警告又は警告せんとする心意に答ふべかりしなり、然るに何事ぞ彼は平々凡々何の奇策もなく深謀もなく、五國の警告に遭ふや面從心違し、南方の獨立宣言に對するや妥協交讓を是れ事とす、英雄に非ずして英雄の事業をなさんとす、袁世凱氏亦た其祖先と稱せらるゝ袁紹の亞流にして未だ第二の曹操の起るを待たずして、殆んど同一の運命に終らんとするものに非ざるなきか。

支那南方一圓及び中部の一半既に獨立を宣言し或は將に宣言せんとする今日に於て袁氏の退位は到底免れずとせば(素より此間尙ほ幾多の迂餘曲折はありとするも)、支那の統治は今後果して何人に依り行はるゝに至らんか、五年前袁氏大總統の職に卽くに當りてや、氏を推戴するに至りし重立たる理由は氏が中外に對し政治家として重望ありと云ふに在りしは隱れなき事實なるも、今や袁氏は其重望を失ひ氏

に代りて四百餘州を統一し且つ列强の間に威望を繋ぐべき人物としては一に岑氏一人ある耳にして、他に殆んど其人なきに似たり、黄興氏や孫文氏や第一革命の試驗に落第して其一時の聲望の大半を失ひ、徐世昌、譚人鳳諸氏の如き寧ろ其關係南北一方に偏するの嫌ありて此際國家統一の任に當るに足らず、其他長繼、蔡鍔、梁啓超、李烈均、陳其美又は段馮兩將軍の如き人材に乏しからずと雖も閲歴尚ほ足らずして大總統たるの貫祿なしとせらるべし、岑氏は目下事實上南方各派の間に隱然次の大總統を以て目され、若しも袁氏退位し國會召集せらるゝに至らば大總統として其推擧に與らんものは蓋し岑氏ならんか、然れども氏の德量人格を以てするも南北を統一するは決して容易のことに非ざるべし、抑も南方と北方との間に著るしき人情の相違あり、若しも南支那を以て南伊太利に比すべくは北支那は北伊太利に比すべく、一方は智謀權變の人を出し一方は剛毅朴訥の人を出す、蓋し此れ前段已に指摘したるが如く主として北方は古來順次新なる蠻族の雜居して幾度か民族の血液を更新したるに職因するものにして、此人情の相違は支那統治に影響する處少なからず、北方は保守的にして政體上には帝政に傾き易く南方は進歩的にして共和政の贊成者多し、宗社黨の如き主として北支那に其根蔕を有するは清朝が北滿方面に起り且數百年間都を北京に置きしに因るべけれども、亦た北方人情の比較的純朴なるに因ること論を待たず、然れば北方と南方とは統治上分離し易く、事實上古來幾度か分離したることあり、三國時代然り、南北朝時代然り、晉、宋南方に割據せる時然り、然れども支那の地勢は到底永久に分治を許さず、揚子江の一流は古來天塹の稱ありて自然の境界たるの觀をなせしことなきに非ざるも、交通自在の今日に於て素より論ずるに足らず、寧ろ長江流域の盆地は東西南北よりする人民物資の集散地にして、支那

統一の媒介とこそなれ分離の原因たるべからず、蓋し長江が支那南北を分離す可らざるは恰もミシッピ河が米國東西を分離す可らざるが如し、然れば支那が二國又は三國に分れて統治せられんことは極めて不自然にして、假令一時斯る現象を見ることあらんも竟に永續するの望なしと謂はざる可らず、殊に現代の支那人間には、前云ふが如く北と南との間に人情の相違はあれども、民族的區別を見ること能はず例せば匈牙利人が歐洲に在りて劃然他の獨逸人、スラヴ人と相違の歴史慣習あるが如きは支那本部に於て之を見る可らず、然らば政治上の理想に關して南北甚だしき區別ありやと云ふに、進歩保守の多少の相違はあれども根本的相違ありと云ふ可らず、共和民國必ずしも北方に不可ならずして、立憲君主制亦た必ずしも南人の排斥する所たらず、素と南人が排滿反袁を唱ふるは清朝袁氏共に信頼するに足らずと思惟するが爲めのみ、即ち政體上徹底せる理想なき亦是れ支那南北が其人情氣風の相違よりすれば容易に分離すべくして竟に永久に分離し能はざる所以なり。

更に國家統一に利せんとする一事は近時支那人民、殊に政治家郷紳間に愛國心の勃興しつゝあるとにして、支那政治家の如き世界各國の政治家と同しく名利を追求するの野心盛なるは言を待たざるも、此外別に何物か彼等の活動の動機たるものありとすれば其は愛鄕心に非ずして愛國心なり、光緒帝の晩年康有爲一派が變法自强を唱道して以來、國勢の衰微を慨して革新を希望するの聲は年と共に高調し來るの觀あり、共和民國と云ひ立憲帝政と云ひ更に清朝復辟論と云ひ其起りを尋ぬれば如何にすれば積弱の國勢を一轉して大國の面目を挽回すべきやと云ふに歸す、此の傾向は云ふ迄もなく國家統一に取りては頗る有利にして、統治分離に不利なるものあり、然らば支那統治の前途毫も分離の危險なきやと云ふに必

らずしも然らず、吾人が曾て屢々指摘したる如く支那政界の一大弱點は中心勢力の存在せざるに在り、如何なる國にても其始めて統一されんとするや必ずや之が中心勢力と稱すべき政治團あり一大中心力の下に智勇辯力の士を網羅し且背後に强大精鋭の兵力を擁して何時にても緩急に應ぜんとするもの是れなり例せば明治政界に於ける薩長藩閥團、伊太利創業後に於けるサルディニャの勢力、獨逸聯邦に於ける普魯西國の勢力の如き即ち是れなり、吾人は袁世凱氏及一派を以て支那改造の中心たらんとすべく期待する所ありしも、其帝政を企圖せる以後の形勢は殆んど吾人を絶望せしめんとす、然らば何人が此中心人物とならんとするか、目下各般の表示を總合して考ふれば前云ふが如く岑春煊氏或は來るべき大總統に擧られんとすべく察せらるゝも、岑氏の聲望威力果して四百餘州を双肩に荷ふに堪ふ可きや否や、壯年有爲の幾多の政客輩は果して氏の德量に服し一致團結して國論を統一するを得べきや否や、若しも不幸にして岑氏の力足らずして國家の中心勢力を建造する能はずとすれば、秩序紊亂更に益々甚だしきに至り遂に南北分離の變態を見ることなしとも限らず、北方に於て復辟論勝ちて淸朝回復せられ、南方に共和主義の樹立となり、双方對立の外に或は雲貴、四川別に一國を爲さんとも限らず、是れ從來史上屢々觀る所の光景にして毫も怪むに足らずと雖も、今や列强四方に迫るに際し統治の分離をなすは即ち部分的干渉を招くの始めにして支那民族の前途に容易ならざる禍因を遺すべきは想像に餘あり。

論じて茲に至れば我邦の對支政策として別に祕策の有るべき樣なきは自ら明ならん、偏せず黨せず周到なる監視の下に支那人をして自由に其統治問題を解決せしむるの一事あらんのみ、唯袁氏ほど一時中外の聲望を收め得たる人の將に失脚せんとするは支那の一大不幸と云ふべく、彼に代りて同一若しくは

より以上の聲望を博し得べき人物の卓出せんこと容易に望む可らざるに似たり、第一革命後袁氏あり兎に角南北の統一を保ち來れりしが、排袁の後には何人が國家統一の中心に立たんとするか、之を想へば隣邦の前途に對し吾人は或一派が輕々に觀察する如く樂天的なる能はずして、極東平和の危害は今後寧ろ歐洲東漸の壓迫に在らずして却て支那內政の不安に在らんことを恐れずんばあらず。

公論

新一元論

醫學博士 文學博士 富士川游

一、先在性一元論と後在性一元論

一元論といふ言葉は、ライブニッツの門人クリスチアン、ウォルフの著述（Psychologia rationalis）の内に始めて用ひられて居ると言はれて居る。ウォルフはこの著述の中に、一元論者（Monist）とは本體（Substanz）のただ一種を認むるものを言ふと記述して居る。この本體といふ文字は又、宇宙の原理若しくは根本（Prinzip oder Urgrund）といふ文字に代へることが出來る。故に、哲學上で一元論（Monismus）と名づけらるゝものには、幾個の種類があるが、これを大別すれば

唯物論（Materialismus）宇宙に於ける萬有を物質に歸するもので。動植物の生活作用は理化學的機能に外ならぬ。精神の現象も同様であるとする。

唯心論（Spiritualismus）宇宙に於ける諸有の過程を精神現象に歸するもので。物質も亦精神の現象に外ならぬ。最單簡の原子も、化學的勢力も共に精神現象に外ならぬとする。

右の二種である。しかるに、近時、更に第三種の一元論が現はれて來た。この一元論に據れば、精神を物質に歸すべきものともせず、又物質を精神に歸すべきも

のともせず、物質と精神とは共に一個の物質の現象の形式又は屬性(Attribute)であると説くのである。ヘッケルの新一元論はすなはちこれである。この新一元論は、科學的研究の結果に成つた一元論で、今日までの科學的經驗の結果を綜合したものであるから、これを後在性一元論(Monismus a posteriori)と名づくべきものである。これに對して、從來の一元論は先在性一元論(Monismus a priori)と名づくべきもので、單一といふことが、思考の出發點になつて居る。新一元論では、全くこれに反して、諸有の存在及び現象が單一のものであると説くのは、科學的經驗の最後の結果で決して單一から雜多を發展せしめることに努力するものでは無い。故に、新一元論は哲學上の體系(システーム)の一種では無く、科學的の方法(メトーデ)の一種であると言ふべきものである。故に、余は、こゝに、新一元論を説くに方りて、先づ、科學につきて、大體の記載をするの必要があると信ずる。

二、科學の定義

科學(Wissenschaft)はその名稱の示せるが如くに、知識學である。即ち經驗を集め、理性に本づきて、これを批判して、結論を作るのが科學である。科學といふ言葉は、昔から同じやうに行はれて居る。しかしながら、その概念は、近時に至りて、全く一變したと言つてもよろしい。昔の意味では、科學は知識(Wissen)を本とするもので、その知識といふのは、過去のもの及び現在のものを知るといふことであつた。新らしい意味の科學では、これに異なりて、過去及び現在の認識から、當來を豫言し得るものを知識とする、故に若し當來に應用することの出來ぬ知識に本づくものであれば、これを科學とする價値が無いのである。しかしその應用は今日又は明日といふやうに、即時に行はるべきものには限らぬ、數百年又は尚ほ久しき後に至りて始めて應用せらるべきものも尠なくない。應用の時期は何れにしても、豫言の可能はどこまでも知識に離れることなく、この豫言の可能に關聯して集められ、獲得せられたる知識に本づきて始めて科學は成立する

のである。

當來につきての知識は、固より千差萬別であるが、その個個別別の知識は、何れも、皆、普汎的の自然法則(Naturgesetz)を明にすべきものである。すなはち、吾人は一定にして且つ反覆せる觀察によりて一定の現象の法則を明にし、これによりて、これに關聯して起るべき結果を豫想することを得るのである。但し、吾人の周圍に現はるゝところの現象は多般窮まれるもので、吾人がその法則を明にすべきものは誠にその一小部分に過ぎないことは言を俟たぬところである。自然法則は國家の法律の如くに制定せらるべきものでは無く、發見若しくは證明せらるべきものである。

此の如くにして、科學は、當來につきての知識と、自然法則につきての知識とを獲得し、體系(システマティッシュ)的にこれを按配することを趣旨とするものである。

三、科學の種類

科學の定義を、此の如くに解釋して、さて科學を分類して見ると、第一に整理的科學(Ordnungswissenschaften)がある。これに屬するものは論理學及び數學などで、概念(Begriff)の全體を體系(システマティッシュ)的に排列することを目的とし、その概念は吾人の思考の對象となるべき、すべてのものに渉つて居るから、科學としては最も普汎的のものである。第二に勢力的科學(Energetische Wissenschaften)がある。これに屬するものは理學及び化學である。理學は溫熱勢力、電氣勢力、輻射勢力等の勢力(Energie)を研究するもので、化學はすなはち原子の理學に外ならぬのである。第三は生物學的科學(Biologische Wissenschaften)で、生活の概念につきて、研究する。其内で、生活全體の事實及び法則を研究するのが生理學で、心理學は神經系統及びその機能を攻究するものである。其外、之に屬する科學は社會學等である。此の如く、科學(Wissenschaft)には、三個の方面がある。しかし其趣旨とする所は、既に前にも言つた通り、當來につきての知識と自然法則につきての知識とを獲得するのが、すべての科學の目的であつて、その當來につきての知識は、自然法則につき

ての知識によりて得らるゝが故に、要する所、自然法則を研究することが、科學の主要なる目的となる譯である。すなはち、この意味から言へば、すべての科學は自然科學(Naturwissenschaft)に外ならぬのである。自然(Natur)といふ言葉はこれまで種々の場合に用ひられて居るが、吾人がこゝに自然といふのは、宇宙に於ける出來事(ゲシエーニッセ)のすべてを指すのでなるから、吾人の知識の內容をなすものは悉くこれを自然と名づくるのである。すなはち吾人の陰秘なる思考も、これを自然とするのである。從てこの自然の法則を攻究するところの科學は皆これを自然科學の稱呼の下に列記すべきである。

四、紙知識と紙科學

然れども、知識の範圍はこの自然科學の領分ばかりでなく、その外に、なほ甚だ大なる領域がある。これは主に古代から傳はつて來た文書から得たるもので、オストワルドが言ふところの紙知識(Papierwissen)である。故に、この領域のものをば、自然科學に對して紙科學(Papierwissenschaft)と名づけてもよろしい、(オストワルドの說を採る)。しかしながら、この領域の知識が、新しい意味でいふところの科學(Wissenschaft)を成すことが出來ないのは改めて言ふまでもないことである。吾人が、こゝに科學といふのは、此の如き範圍の知識を除き、經驗(Empirie)によりて得たる知識に本づきたるものを指すのである。科學の範圍は廣大無邊のもので、宇宙のすべてのものは、何れかの科學で、研究せられ得るのである。而して、この科學は、宇宙に於ける出來事(ゲシエーニッセ)のすべてが、何れかの方法にて、法則的である、すなはち、自然の出來事は、規律的に類同の狀態の下に、同樣に反覆して現はれて、その間に連絡があるといふことを豫定するのであるが、科學の進歩は常にこれに基づくのであるから、この豫定が絕對的に正しいか、正しくないかを詮索するには及ばぬことである。

五

科學は、其根據を科學的認識の上に置くべきものであるが、此科學的認識は、現實の事實を緻密に批評的

に觀察することゝ、實驗(Experiment)によりてこれを證明することとによりて始めて獲得せらるべきものである。而して、此の如き外界の觀察は、吾人の覺官によりて惹まるゝもので、外界は吾人の覺官器の上に、その作用を及ぼすところの客體(オブエクト)である。覺官器に致されたる作用は大腦皮質の感覺竈に入りて主觀的(スブエクチーフ)に表象に變化する。この覺官器と、大腦皮質の感覺竈との間に思考竈がある。これが吾人の理性器官である。更に少しく細かに説明すれば、人體の器官で、精神作用を呈する所のものは大腦皮質(灰白質)の一部で、思考器官(Phronema)はこれに相接する覺官竈(Sensorien)である。思考器官は最も十分に構成せられたる力器械(Dyuamonnschiene)で、その各部は數億萬の精神細胞(Phronetalzellen)から集まつて出來て居る。この精神器官は身體の他の部分に於けると同樣に、その細胞の機能の全量をば總括して、その作用(即ち精神)として表現するものである。此の如くにして、科學的認識は、他の自然現象と同じく、腦髓の作用として現はるゝものである。

此の如くなるが故に、カントの形而上學(メタフィージック)にて、最も須要なる認識の一部分は、各個の經驗に關係なく、ひとり理性(Vernunft)の結論によりて得らるべきものであると説くのは、科學上の經驗に牴觸するものである實際の所、所謂先在性認識(Erkenntnisse a priori)は多數の表象の聯合によりて成立するもので、その表象は常に必ず經驗の連鎖の上に現はるゝものである。

六、宇宙の謎

此の如く、吾人は自然的經驗によりて、個個別別の知識を得るのであるが、更にこの個個別別の知識を集めて、宇宙の全體を統一することの必要がある。これがために、哲學が成立する。すはなち哲學は吾人人類の研究と、觀察と、思考と、認識との結果を、一個の燒點に集むることを企つるものである。ヘッケルが『すべての自然科學は哲學なり、而して、すべての眞正の哲學は自然科學なり、而かも、すべての眞正の科學は自然哲學なり』と説くのも、道理で、吾人の科學はす

べて經驗に本づくところの認識であるから、これを經驗的哲學（Empirische Philosophie）と名づくべきである。而して、吾人が經驗的哲學に本づきて、宇宙の全體の統一を圖らむとするに方りては、ここに若干の基本問題が現はれる。近時の學者は、これを概括して宇宙の謎(Welträthsel)と名づけて居る。宇宙の謎は、文化の程度に從て、その數に多少あることは勿論で、文化の低い人種は多數の基本問題を有して居るが、文化が進歩し、科學が發達するに從ひて、宇宙の謎の數は漸次にその數を減ずるものである。一千八百八十年ヅボア、レーモンは伯林大學ライブニッツ記念會に講演して、七個の宇宙の謎を擧げた。その七個の宇宙の謎といふのは次の通りである。

（1） 物質（マテリー）及び勢力（クラフト）の本態
（2） 運動の根本
（3） 生活の成立の最始
（4） 自然の目的適應の構成
（5） 單一感覺及び意識の成立
（6） 理性的思考及びこれに密接せる言語の根本
（7） 意思自由の問題

この七個の謎の中で、第一と第二と第五とは、人智の外のもので、到底解決すべきものでないと、ヅボア、レーモンは言つた。又第三と第四と第六とは、解決することは出來るが、容易の業でない、第七の謎は確實に判斷することが出來ぬものと說いた。

ヅボア、レーモンのこの講演から、今日まで殆ど四十年近くになつて居る。その間、吾人は上段に記述したる科學的方法を進歩せしめ、殊に覺官的の經驗と、理性的の思考とを相併せて、以て確實の認識を得るに努力したる結果、吾人の知識は更に一段の進歩を致しヅボア、レーモンが今から四十年前に擧げたる七個の宇宙の謎は、減じてたゞ一個となつた。すなはち今日吾人が宇宙の謎として擧ぐべきものは、ただ一個の根本問題、即ち本體問題(Substanz-Problem)である。

七、本體の問題

本體問題は宇宙の本態の問題である。從來の哲學は

これに關して、種種の說を立てて居る。之を今日の自然科學の見地から區別すれば、二元論的即ち分離的の宇宙觀と、一元論的即ち統一的の宇宙觀とに區別することが出來る。古昔希臘の自然哲學では一元論的の思考が行はれて居つたが、プラント以來、二元論(Dualismus)が現はれて、物質界と精神界とを區別することになつた。その說に據ると、物質界は吾人の覺官的經驗に入るべきもので、現實的、變動的、物質的の現象である。精神界はこれに反して、ただ吾人の思考に入るべきもので、超覺官的、理想的、不變的のものである。アリストテレスに至りて、この二元論は體系的に組成せられ、廣く世の學者の信用を博し、それから四百年後に興りたる基督教は全くこれに據りてその說を立つるやうになつた。それから後の多數の哲學及び宗教の體系は、多くは皆二元論を奉じて居る。カントも一千七百五十五年、その少壯の時に著はしたる著述(Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels)には一元論的の思考に本づき、ニウトンの法則に據りて宇宙の器械的根本を論じて居る。しかし、カントも後には唯心論を唱へ、自然界は經驗的世界で、これは吾人の經驗に入るものであるが、精神界は吾人の經驗以上のもので、感情及び理性によりてこの存在を知ることが出來ると說いて居る。その思考の基づく所は、精神を非物質的の本態とするにある。精神は非物質的のもので、吾人の認識は先天的に、この精神から成立するものであると說くのである。

八、二元論

二元論に據れば、宇宙は自然界と精神界との二個から成立する。自然界は物質的の體界で、精神界は非物質的の靈界である。その自然界の方は吾人の經驗によつてこれを認識することを得るものであるが、精神界の方は、超自然的の方法、即ち天啓によつて、これを認識することが出來る。自然界にありては、物質と勢力とは常に相離るることなく、そのすべての現象は理學的及び化學的變化によりて起るものであるが、精神界にありては、これに反して、その現象は理學的及び

化學的變化には相關聯することが無い。

此の如く、物質的の體界と、非物質的の靈界とを區別し、兩者の間に關聯する所が無いとするところの二元論を根本思考として、更に幾種の思想が行はれて居る。その主なるものは次の通である。

有神論（Theismus）はこれにありては、宇宙と神とは二個の相異なりたる物と見るのである（物質と勢力とは一部分相聯結せるものとする）

創造論（Kreatismus）　宇宙は神が一たび（或は數度）これを造りたるもので、無始無終のものでは無いと說く。

神秘論（Supranaturalismus, Mysticismus）　精神の現象は超自然的のもので、物質界の現象と相關聯するものでは無いと論ずる。

生活論（Vitalismus）及び目的論（Teleologie）生活力と名づくるものが有機體の中にあつて、その身體の目的に相應して作用する。これは理學的及び化學的の力に關聯するものでは無いとする。

不死論（Athanismus）　人類の精神は獨立的のもので、死滅することなく、超自然的の本態として腦髓の機能とは全く關聯することなく、若しくは一部分關聯するばかりであるとする。

九、一元論

一元論は、上章に略述せる二元論に反して、統一的に宇宙を見るもので、宇宙には物質的の體界と、非物質的の靈界とがあるにしても、宇宙の本態とすべきは、その何れかの一個であると論ずるのである。希臘の哲學者ターレスが『萬物は水より生ず、隨て水は地上に實在するところの萬有の唯一原理なり』と言つて居るのは一元論の古い所である。それから幾多の哲學者が出て、火を以て水に換へ、或は精神、或は物質を以てこれに代へて、種種の一元論が行はるるに至つた。近時ドリウスは古代の一元論の歷史に關する著述を公にして、その內に十三種ばかりの一元論を舉げて居る、(Drews, Geschichte des Monismus im Altertum.)。しかし、此の如き一元論は、宇宙に於ける現象の全體を、

唯一の根本的原理に歸著せしめむとするものであるから、その歴史は無論、哲學の全體に渉り、その說も因より多岐になつて居る。中には二元論と一元論との中間に位するものもある。余は、ここに、その詳細に渉りて叙述する考でなく、余が新一元論を紹介するに必要と認むるだけのことを略述する積である。

此の如く、唯一の根本原理を以て、宇宙を說明せむとする哲學の體系(システーム)を一元論として擧ぐるときは、既に本篇の冒頭に說いた通りに、之を唯心論（Spiritualismus）と唯物論（Materialismus）とに大別することが出來る。

唯心論は宇宙を以て、非物質的の自然力又は勢力(エネルギー)の空間的の連結に外ならずと說くものである。唯物論はこれに反して、物質(ストッフ)と力(クラフト)とは互に相別つべからざるものとし、非物質的の力(クラフト)を否認する。唯物論には又、理論的の方面に屬するものと、實際的の方面に屬するものとの二種類がある。

唯心論と唯物論とを對照するに、一方は器械說（Mechanismus）にして、一方は力動說（Dynamismus）である。しかも、その用語は双方共に曖昧で、たとへば唯物論の所に、その正反對ある唯心論の語を用ひても、些も差支ない有樣である。

一〇、新一元論

新一元論（Neomonismus）は、經驗、理性及び科學の基礎の上に立てられたる、純正の宇宙觀を指すものである。普通には單に一元論（Monismus）として、世に行はれて居るが、從來の哲學上の一元論と混同せらるる廉があるので、余はここに故らに新一元論の稱呼を用ふるのである。新一元論は、輓近に於ける自然科學の產物で、認識の方法が科學的となつたために、新たに立てられたものであるが、この自然科學的宇宙觀が著しく世人の注意を惹くに至つたのは一千八百九十九年、獨逸國エーナ大學教授エルンスト、ヘッケルが「宇宙の謎」（Die Weträtsel）を著はして、所謂一元論的哲學の通俗的解說をなした時に始まつたのである。

ヘッケルは本と醫家より出でて動物學を專攻し、生物

發生律を發明して生物學上新紀元を劃するほどの偉大なる業績を擧げた、非凡の大學者であるが、その五十年間、自然を研究して得たる知識に本づき、宇宙の謎を解釋せむと試みて、通俗的の著述を公にしたのである。但しヘッケルは此時より三十三年ほど前に『有機體の形態學』を著はし、それから『自然創造史』『人類發生史』『人類の根元につきての吾人現在の知識』等の數書を著はし、又一千八百九十二年に、『自然科學者の信仰、宗教と科學との連鎖としての一元論』と題する小冊子を公にして、一元論的哲學を唱道したのであるが、『宇宙の謎』は全く通俗的のものであつたために廣く世に傳はり、出版後一年間に一萬部が賣り盡されたほどの盛況であつた。それから五年の後、一千九百四年、ヘッケルは又『生命の不思議』(Die Lebenswunder)と題する著述を公にし、生物學的哲學の通俗的解釋を試みて、『宇宙の謎』の足らざる所を補ふた。

一、ヘツケリスムス

ヘッケルが唱道する所の論說(Haeckelismus)は、自然的統一的の宇宙觀で、全く晩近の自然科學の知識に本づくものである。その說に據れば、全宇宙は統一的の一個の全體即ち大宇宙(Kosmos)として認めらるべきもので、この大宇宙は固定的の自然法則によりて支配せらるゝものである。而して、この大宇宙の內には、終極のない宇宙空間と、その中にあつて自然法則に從ひて運動する所の宇宙體(太陽系統)を包括して居る。從來世に行はれたるが如くに、宇宙を二個に區別することは出來ない。即ち一方にありて、物質界又は自然、一方にありては精神界又は超自然を區別することは現今の自然科學の認可せぬ所である。超自然に關する觀念は事實を知らざるか、又は思考の明瞭でないかに基づき、一部は神秘的傳習の力に壓せらるゝに由りて起るものである。十九世紀の後半に於ける自然認識の著甚なる進步のために、吾人の世界に住する生活體のすべてのものは、無機物と、全然同一の自然法則に支配せられるものであるといふことが證明せられた。從て、有機世界と、無機世界との間の障壁は取り

除かれて、兩者は全く同一のものであるといふことが明瞭になつた。理化學的法則は無機世界には適應するものであるが、有機世界には適應せずといふことは、今日でも猶ほ多數の人々の唱道する所であるが、輓近の自然科學は此の如き觀念を否認する。所謂生活力(Vis vitalis)があつて、有機體中に於ける理化學的過程を主宰するものであるとの說も是認せられぬのである。又輓近發生學の進歩によりて、吾人は自然の全體が、因果的に相關聯して、統一的の發育過程の下にあるといふことを知つた。而して、この宇宙の發展が不斷變化しつゝ進行して底止する所がなく、無機物の發育も、有機物の發育と共に同一轍のものであるといふことが證明せられた。現在直接に吾人の認識に入るものは此の如き普汎的發育過程の一部分で、その初始と終局とは共に吾人が知ることを得ざるものである。

一二、本體法則

新一元論で、最高の自然法則とする所のものは本體法則(Substanz-Gesetz)で、この自然法則によりて大宇宙は支配せらるゝものである。而して、この本體法則は一千七百八十九年にラヴオアジエーが立てたる物質恒存の法則(Konstanz der Materie)と、一千八百四十二年に、ローベルト、マイエルが立てたる勢力恒存の法則(Konstanz der Energie)とを併合したもので、この兩個の法則は自然科學者の認可する所である。物質恒存の法則とは、「無邊の宇宙空間を充塡する所の物質の量は常に不變である」といふので、たとへば一個の物體が消失することあるも、これはその形態の變化したに過ぎないので、宇宙に於ける物質の量には少しも增減が無い。勢力も亦同じくその量は恒久不變で、宇宙に於ける勢力は少しも消失せず、又新しく加はることは無いのである。この兩個の法則は決して相離るべからざるもので、物質と勢力とは同一本體の相異なれる二個の方面たるに過ぎぬのである。

一三、本體の三屬性

一元論的物質の概念を科學に始めて入れたるは哲學者スピノザで、ラヴオアジエーに先たつこと凡百年で

ある。スピノザの說では、宇宙の本態は一個の本體物質(Substanz-Stoff)で、この物質には無限に擴延せる物質即ち物(Materie)と、思考性の勢力即ち精神(Geist)との二種の性質があると說くのである。ヘッケルはこのスピノザの說に從ひて、同じく本體(Substanz)の名稱を用ひ、これを三様の屬性(Attribute)に別けて居る。

(第一)物質(Materie)無限の宇宙間腔を充塡するもので、擴延性物質(Extensa)とも名づけらる。

(第二)勢力(Energie)運動性物質として、無限の宇宙間腔に不斷性の運動によりて存在して居る。

(第三)感覺(Empfindung)覺感性物質として、勢力より區別すべきもので、ヘッケルはこれに對して、別にプシコーマ(Psychoma)の稱呼を附して居る。

ヘッケルは物質を別ちて、右の三様の屬性となし、(一)力及び感覺の無い物質は存在せず(二)物質及び感覺の無い力は存在せず(三)物質及び力の無い感覺は存在せずと說き、宇宙全體にありても、その最小部分にありても、各個の分子にありても、原子にありても、この三様の屬性は常に相離れずに存在して居ると主張して居る。故に、ヘッケルの新一元論では、普通に擧げらるゝ所の物質(Materie)と勢力(Energie)とは全く同一の物體の二方面に過ぎないので、その物質と勢力とを併せたものを本體(Substanz)と名づけ、この本體の統一的のものなること、從つて、物質恒存法則と、勢力恒存法則とを統一して、これを宇宙物質法則(Substanz-Gesetz)又は單に宇宙法則(Universal-Gesetz)又は恒存法則(Konstanz-Gesetz)と名づけるのである。

一四、感覺屬性

スピノザが擴延及び思考と名づけたるものは、今日の言葉にて、物質及び勢力に相當するもので、人類の精神作用も固よりこの勢力の特別の形態に過ぎぬもので、こゝに甲の勢力が變化して乙の勢力となり、潜伏性の勢力が、能働性の勢力となることは全く機制作用の法則に本づくものである。ヘッケルはこれを本體の感

覺(Empfindung)の屬性に歸し、プシコーマ(Psychoma)と名づけて、宇宙物質の第三の屬性として居る(上章を見よ)。即ちスピノザの所謂勢力(エネルギー)の內から、感覺の一部分を取り去り、機制作用の法則に從ふべき運動(Bewegung)の一屬性を別ち、これを勢力と名づけ、感覺の屬性を思考として、物質、勢力、思考即ち感覺の三種の屬性とするものである。ヘッケルの主張に據れば、この感覺(或は靈魂)は宇宙にありて不變的に一定の量を存するもので、感覺の交替を致すは單にプシコーマの形態を變化するに過ぎぬ、又この感覺の屬性は自然界に於ける普汎的の過程(プロセッス)であると認めねばならぬ。

一五、物質論

此の如く、ヘッケルの新一元論は、宇宙の本態を唯一の本體(Substanz)に歸し、この本體は、物質、勢力、感覺の三種の屬性によりて吾人の認識に入るものであると說く。その關係を一目瞭然たらしめむがために圖で示すときは次の通である。

- 本體(Universum)
  無限の宇宙の本態
  - 物質(Materie — Stoff)
    擴延性、空間充塡性の物質
  - 勢力(Energie = Kraft)
    運動性或は運動物質。緊張力及び活力。潜伏性及び能働性勢力
  - 感覺(Psychoma = Empfindung)
    感覺性及び刺戟性物質

ヘッケルは自家の新一元論に物質論(Hylozoismus oder Hylonismus)の名稱を用ひて居る。唯物論の中でも、理論的のものは同しく物質論(Hylonismus)と名づけられて居るが、この種の唯物論と、ヘッケルの物質論との間には、著しい區別がある。理論的唯物論でも物質と勢力とを相別つべからざるものとすること、非物質的の勢力の存在を否定することは新一元論と同一である。しかし、理論的唯物論では、物質に感覺の性質があることを認めぬから、能働性の勢力をば死したる物質の機能の一つとする譯である。つまり、理論的唯物論はヘッケルの新一元論で三種の屬性として擧ぐる所の物質(Materie)のみを擧ぐるもので、これを

一側的物質的一元論（Einseitigstofflicher Monismus）と名づくべきである。ホルバッハ、ビュフネルなどが説く所の理論的唯物論は卽ちこの種のもので、これとヘッケルの新一元論との區別は判然として居る。

一六、唯覺論と汎精神論

ヘッケルが感覺（Psychoma）として擧ぐる所のものは、ネーゲリ等が唱道する所の汎精神論（Panpsychismus）の精神本體（Seelen-Substanz）に比すべきものである。コンヂラック及びヒューム等が唱道せる唯覺論（Sensualismus）は一側的に、この感覺の屬性のみを擧げ、吾人の精神作用は單に覺官的感覺に本づくものであると說くのである。エルンスト、マッハ、マックス、フエルヴォルンなどが說く所の精神一元論（Psychomonismus）は、ヴントの精神物理的併行論（Psychophysischer Parallelismus）と同じく、認識論的の唯心論（Idealismus）に屬するもので、身體と精神とを二元論に見ての說であるから、これ等はヘッケルの新一元論とは全くその趣旨を異にしたものである。

一七、勢力的一元論

以上に說いた所の新一元論はヘッケルの所說（Haeckelismus）である。その說の本づく所は人類學及びその分科たる、比較解剖學、生理學、組織學、胎生學等で、これによりて人類が脊椎動物の一種であること、並に他の脊椎動物と同樣に數千萬年の長き時日の間に、今日は已に死絶したる脊椎動物から發展したるものであるといふことを知つた。これによりて、人類と動物と、その根本は單一のものなることを明にし、又形態學古生物學等によりてこれを證明することを得た。此の如く人類の發生史に關する知識は、精神の方面にありても同樣に發展して、吾人の精神生活は、腦細胞の機能として、哺乳動物から歷史的に發達したものであるといふことを認識した結果、自然科學の宇宙觀として、上段に論述したる新一元論が立てられたのである（Ernst Haeckel, Die Fundamente des Monismus. 1912）。すなはちヘッケルの新一元論は生物學上の知識に基づいたものである。しかしながら、新一元論

には、別にオストワルドの一派がある。オストワルドは獨逸ライプチッヒ大學の教授で、物理化學の泰斗である。オストワルドは一千九百二年『自然哲學』Natur-Philosophie)と題する一書を著はし、自己が專門とする所の化學及び理學上の知識から出發し、勢力（Energie）を以て宇宙の本態を說明せむとし、所謂勢力論(Energetiks)の新說を立てたのである。オストワルドが勢力論は、ロベルト、マイエルが已に十九世紀の半頃（一千八百四十二年）に唱道した所に本づきたるもので、ロベルト、マイエルは宇宙萬有の本態を以て、量知すべからざる客體となし、この客體は破潰することが出來ず、變動するもので、不可量的のものであるとして、これに力(Kräfte)の名稱を下した。この力の名稱は、後になりて、勢力(Energie)と名づけられた。ロベルト、マイエルはこの勢力を以て、量の概念とせず、一定の物料であるとして、これを本態(Substanz)に外ならぬと說いて居つたけれども、この說は後の人から深く注意せられず、又ロベルト、マイエルは二元論の見地に立ちて、勢力を物質から別けて論じて居つた。オストワルドは此の如き勢力的唯物的二元論（Energetisch-materiellen Dualismus）を一層進めて、純正の勢力的一元論（Energetischer Monismus）としたのである。オストワルドが始めてその說を公にしたのは一千八百九十八年で、リユーベックの學會で、『科學的唯物論の勝利』(Wilhelm Ostwald, Ueberwindung des wissenschaftlichen Materialismus. 1898)といふ題で演說したのである。それから、五年の後に『自然哲學』を公にし、その外に、勢力的一元論に關する數種の著述を公にし、今日では、一元論者の首領として、獨逸一元論者團體(Deutsches Monistenbund)の會長に擧げられて居る。

一八、勢力の概念

勢力(Energie)の概念は、ライプニッツの哲學にも說かれて居る。しかし、これは純數學的に說明したものである。オストワルドの勢力論は理學及び化學の最近の發展に基づいたもので、宇宙のすべての自然現象

は、勢力の範圍に屬するもので、吾人が外界に就て知る所のものは現存する所の作用の勢力を表はすばかりであるといふのである。すなはち、オストワルドの説に據れば、宇宙は變化性を有せる勢力の集合せられたもので、個々の物質は空間的に結合せられたる勢力の形式の種類に外ならぬのである。しからば、オストワルドが勢力といふものは何であるかといふに、その思想は、已に前にも言つた通り、ロベルト、マイエルの説に本づいて居るのであるが、ヘッケルが本體の三屬性として居る所の勢力(Energie)に比して差支ないものである。故に、ヘッケルはオストワルドの勢力論を評して本體の三屬性の一たる勢力を一側的に擧げて唱道するものであると言つて居る。勢力には固より種々の種類があつて、運動の勢力(速度の勢力)重さの勢力、形の勢力、容積の勢力、表面の勢力、熱の勢力電氣の勢力、化學的勢力、遊離的の勢力又は輻射的の勢力などが其主なるものである。この種々の勢力は凡百の現象に與かり、又その現象に方りて轉變するによつて宇宙間に雜多の事物を生起するものと説く。言葉を換へて言へば、吾人の覺官器は、宇宙に存する物料の勢力を外界から受けるか、又はこれに反して、外界が覺官器から勢力を受けるによりて、吾人は全く宇宙を認識することが出來るのである。此の如く、種々の勢力が空間的に結合するによつて物體と名づくるものが出來るのである。しかし、何が故に、種々の勢力が空間的に結合するものであるかは解釋せられて居ない。オストワルドは又、意識の現象を説明するに精神勢力(Geistige Energie)を以てして居る。その説に據ると、精神生活の全體即ち感覺及び意思、思考及び意識はすべて神經勢力(Nervenenergie)に歸すべきもので、吾人が精神力(Geisteskräfte)と名づくるものはこれを思考性勢力(Phronetische Energie)と名づけて神經勢力の尋常の表現から區別すべきものである。

一九、ヘッケルとオストワルド

これを要するに、ヘッケルの新一元論と、オストワルドの新一元論とは、宇宙の謎を説くに、科學上の

知識を用ふるといふ根本の思想に於て一致して居る。眞率なるべき吾人の思考から神秘說を排除するといふことに於て一致して居る。古來の一元論が固執するやうに、或は水にしろ、或は神にしろ、或は唯一の原理からして全宇宙が生起せることを假定する（先在性一元論）ものでは無く、却てこれに反して、吾人は第一に宇宙を、無限の雜多なる渾沌と經驗して、それから科學の知識に一致して、次第にこの渾沌の內に、整序(オルドヌンク)をつけ、或はこの渾沌から一の宇宙を形造ることを得ると說く（後在性一元論）ことに於て、兩者は相一致して居る。つまり、ヘッケルが始め、宇宙が唯一の本體から成立するといふことを、生物學の上から、發生史的に說いたものを、年齡に於て二十年若いオストワルドが、理化學の上から、これを證明したのである。しかしながら、その本體を論ずるに方りて、オストワルドは勢力(エネルギー)のみを擧げ、ヘッケルは勢力の外に物質と感覺を擧げて、本體の三屬性とする。この點に於て、ヘッケルの新一元論と、オストワルドの新一元論とは大にその趣を異にして居る。余の考では、オストワルドはスピノザの本體槪念に代ゆるに勢力槪念を以てし、本體の他の屬性たる物質を否認するもので、寧ろライブニッツの物力論に近い。一轉すれば、唯心論的の思考に近づくものである。オストワルドは勢力（Energie）と本體（Substanz）とを混同して、スピノザが言ふ所の本體と同樣の意味に勢力の槪念を用ひて居るものと思はれる。オストワルドの勢力的一元論につきては、尙ほ詳細にこれを說明する必要があるけれども、こゝには、單に、今日の新一元論の中に、ヘッケル派の說と、オストワルド派の說とが、併び行はれて居るといふことを、特に擧げて置くに止むる。

二〇、一元論的思想

新一元論の大略は、上に敍述した所であるが、これに本づき、吾人は今日左の如き思想を有するに至つた。即ち

宇宙の統一　全宇宙は統一的の一個の全體即ち大宇宙（Kosmos）として、認めらるべきもので、この大宇

宙は自然法則によりて支配せらるゝものである。從て、從來の諸說の如くに、物質界と精神界とを別ち、又は自然界と超自然界とを區別することは出來ぬ。

自然の統一　吾人の世界に住する生活體のすべては、無機の死物と、全く同一の自然法則で支配せらるゝものである。故に、從來の如くに、有機界と無機界とが二個の相異する領域で、理學的法則は無機界には適應するが、有機界には適應せぬといふやうな說を否認する。

宇宙の發展　自然の全體は因果的に相關係して、統一的發育過程の下にあるものである。而して、この宇宙の發展は不斷、變化しつゝ進行するもので、僅にその一部が直接に吾人の認識に入るのみである。その初始と終局とは共に吾人の知ることを得ないものである。

生活の變轉　今日の世界に動物及び植物の幾億の種類が成立したのは、生物學的變態の妙機によるもので、これは全く理化學的作用によりて生活物質が無窮に變化するがためである。

精神の不死　精神は腦髓機能の總計に外ならぬものである。人類の精神器官は大腦皮質の一部に位し、その機能は精神物理的規則に於けると同一に營まるゝもので、この關係は爾他の哺乳動物に於けるも同一である。又この機能は固より身體の死亡と共に滅亡するものでないから、靈魂の不死は認められる。しかし精神(意識)の個人的不死はこれを認むることが出來ぬ。

意思決定(定命)論　吾人人類の意思は腦髓の他の機能(感覺、觀念)と同じく、神經中樞の生理的機能で、この機能は腦髓の解剖學的組織によりて左右せらるゝものである。又人類の腦髓の個人的特性は、一部は遺傳によりて先代から傳はり、一部は適應によりて個人的生活の內に獲得するもので、その必要性によりて、意思を左右するものである。故に、意思自由の說は認むることが出來ない。

神の概念　神の意義は固より多般であるが、宇宙萬有

の最終の根本、即ち意識することの出來ない本體(Substanz oder Urgrund)を神とすることは差支ない。これによりて、神の概念は維持せらるゝものである。

これは固より大略を擧ぐるのみである。尚ほ一元論と倫理、一元論と藝術、一元論と宗教等の題目を掲げて論ずべきことがあるけれども、あまり長くなるから、これを他日に讓る。又ヘッケルの『宇宙の謎』が刊行せられてから、哲學及び宗教の方面から、種々の批評と駁論とが現はれて居る。これに卑見を加へて紹介する積であつたが、これもこの度は省略する。

議院政治論

田川大吉郎

議院政治に味方する者でも、日本の議會の現狀には惑ふ、これでいゝのか、これだけでは可けまいと言ひたいやうな事が數々ある、然らばそれをどうするか、その改善や刷新の方法は如何にと問はるれば、それは此うだ、此うすれば可いに定まつて居ると、はつきり捗々しい返事を爲し得ない、これは僕一人の當惑に非ずして、多數が先づそんなやうな感じであらうと想ふ、そこで或は議院無用論を唱へる人も偶には有るが、これらは例に依つて性急にして、移り氣の早い、粘り氣の少い我が邦人の病であらう、その一端の發露で有らう、幸なる哉、我が國民の多數は未だ俄に此說に與みせず、多大の望みを議院政治に屬して、その十二分の發達を將來に期待して居る、日本は確に議院政治の國である、議院は國民の興味と希望の中に活きて

居ると申して差支へ無い、吾等は十二分にその發達と活用とを圖るべきである。

こゝに卑見の一斑を申述べて見る。

（一）大いに議論を興したい

今日の議會に一番不足なものは討論の乏しいこと、寧ろその殆んど無いことで有らう、近年の議會にはどれを盛んな討論で有つたと言ふか、これと言ふべき討論は全く無つたやうに覺える、昨年の臨時議會に外相加藤氏は日支交渉問題を辯じ、原氏、犬養氏の論難の後を承けて、堂々たる武者振を發揮したが、此の如きは極めて稀有の例であつたらう、殆んどその創始の例であつたらう、此より先き海軍次官樺山氏が薩長閥のため氣焰を吐いたことは有る、善し惡しは別として、凄じい健氣な振舞で有つたが、それも討論といふべきかは疑はしかつた、討論の機會に、討論する覺悟で、準備ある討論の陣を布いた者は、多分彼の時の加藤氏の例がその唯一の例で有つたらうと信ずる、自餘歷代の各大臣で、討論の舞臺に討論の覺悟で參加した者は、未だ曾て其人の有つたことを聞かない。

反對黨は何故に討論をしないか、討論すべく努めないか、討論は反對黨唯一の武器では無いか、近年の傾向に依れば、反對黨は質問を武器として居るやうである、隨つて彼等は何事をも質問の材料とせんとし、如何なる機會をも質問の機會たらしめんと努めて居る、隨つて討論は閑却されつゝある、全く討論しないでは無いが、その時の討論の材料は多くは質問の場合に利用し盡くれた蒸返しの材料である、二度目、三度目の材料である、故に演說者自身の感興が既に萎靡して居る、聽者に至つては又かと言つた風に冷笑の氣を以て之を迎へる、故に折角の討論も討論としての意氣を見ず、生彩を缺き、存外下らないものと爲つて仕舞ふ、その材料が必らずしも貧しい譯では無い、その論脚に相當の基礎を缺いて居る譯でも無い、而して此の如く振はなくなつて仕舞ふ譯は、畢竟するに其の材料の取扱ひ方が拙いのである、その材料を始めから討論の材料としないから惡いのである、これを質問とするから

質問には自ら範圍があり、如何な無遠慮な論客でもその發論の氣勢を自ら緊張し得ず、我れ知らず窘束せらるゝことに爲る、然も本來討論の材料であり、又討論の氣で居るから、議論は自然に質問の範圍以外に走る、そこで批評が起り、掣肘が入り、兎角その氣焔を殺がれて仕舞ふ、加之、滔々たるその一時間の議論も、他の衝に當れる政府方は冷々相關せず、唯今のは大部分議論で有つたから答へる必要は無らうと三下り半で刎ねつける、そこで一切がおじやんに爲る、其の後之を討論の議題と作り換へた所で、其の際は既に藥拔けの殼である、此くして我が議會の近年の趨勢は、質問か質問に非ず、討論か、討論に非ざる中途半端な鵺の如き發論の交換所と爲りつゝある、只それ中途半端な發論である、隨つて冷笑嘲侮の氣が期せずして滿場に湧く、然質問者（實は討論者）も嘸不本意であらうが、然し乍ら不本意に思ふ者は獨り質問者のみで無い、之と直接相對しつゝある政府者の側にも有る、政府者も不滿反對派も不滿、結局議會全體の不滿の中に、今日の多くの發論は送迎され、跡も無く片付られつゝある、殘念千萬と謂はねばならぬ、而してその原因は主として質問の名に於て討論する所に在る、討論の材料を強ひて質問の材料とし、討論者自らその範圍を制限し、その態度を窮屈にし、その爭ひを文句の端、口舌の末に蹈蹐たらしむる所に在る、此くせずして、始めから之を討論の材料とし、討論の覺悟を以て自由に陣を布けば、その議論は十二分に暢發され、論歩も、態度も意氣も、一層緊張されて、生氣之に伴ひ、議論の目的も自然割好く貫徹せらるゝやうに爲る、どうかして議論をもつて盛んにしたいものである、議論を盛んならしむべく努めたいものである、議論は言論の府である、討論はその言論の精華である、今、帝國議會を言論の府と言ひ乍ら、その言論の府に討論の華は開かずに居る、帝國議會の振はざる所以である、勉めて言論を盛んにし、何事をも討論の材料として利用することに、彼我相戒めて戮力邁進したいものであると思ふ。

（二）　首領の努力を要す

世の帝國議會を論ずる者は、動もすれば議員の種が可けない、議會を組成する各分子が可けない、先達には相當の人物もあるが、所謂平の議員に人物が無い、その人達に學識が無く、主張が無く、本領が無いから折角の先達も其の武を用ふるに所なく、半生の經綸を抱いて、空しく窮途に彷徨し、可惜精力をむざ〳〵消散せしめつゝあるやに嘆くを常とするが、僕の觀察は此種の世論と聊か趣を異にし、反つて首領其の人の乏しいことを今日の議會の第一の患ひと看て居る、所謂平議員は彼の如くにして十分なり、或意味から言へば十分過ぐる程十分なり、世界の何處の議會にか此の如く無邪氣にして眞率、歩調の善く揃つた集團あらんや、我が議會は英雄武を用ふべきの處である、先達其人あらば、どんな事でも出來る、たゞ先達其人が無いから今日の變態、陋態を現じつゝあるのであらうと思ひ、どうかして議院の爲に相當有力なる首領を得たい、果して、其人を得さへすれば我が議會は容易に興る、大いに興るに相違ないと思ふて居る。

議會の紛擾に就て獨り議長島田氏を責むるは酷である、各派の首領はいづれも其の責任を頒たねばならぬ、請ひ問ふ各派の首領中その責任を頒つ覺悟あり、平生そのやうな準備訓練をして居る人幾何ありや、全く有りはしまい、一昨年の春英國にて愛爾蘭自治案の第三讀會を通過する時、議場は無前の混雜を呈して、反對黨は延會々々と叫喚する、政府派は秩序々々と呼號する、何とも取締が着かなくなつた、その時議長ローサー氏は立ち（此人は少數黨即ち統一派の所屬である）此混雜に對し反對黨の首領ボナロー氏は責任を負はるゝかと念を推した、ボナロー氏は憤然として、議長の批評は議長の自由であるが、自分の事は自分で知つて居る、只今のお問は答へる限に非ずと答へた、而して反對派は之に喝采して尚更叫喚混亂を續けた、議長は再び立ち、議長の位地は各派首領の責任ある援助を得なければ一日も保てない、自分は其の援助を得たいと望んで立つたのであるが、それを得ず、混亂の狀此の如きに陷つた以上は遺憾ながら延會の外はあるまいと

延會を宣告したとが有る、これは名にし負ふ自治案の最後の機會で、此案の爲には彼等反對派はウルスターに十萬の民兵をさへ訓練して居た非常絶體の場合である、議場がかゝる稀有の混雜を呈し、平生重厚の譽れを傷つけたのは餘儀なかりし事情行き掛りとせんも、然し乍ら此一事に由つて、議場の整理に關する彼等の平生の慣習が想ひ知らるゝ、議長と各派首領との間に議場の整理に關し如何の申合せ慣例あり、若くは如何の氣分期待あり、それが現にどれ位迄行はれつゝあるか、其樣子が知られる、彼等の各派の首領は議場の整理、其黨員の結束に關し、現に若干の責任を負ふて居る、而して我國には其やうの首領なく、其やうの慣例なく、議場は所謂機敏しにて頓狂なる彌次連の跳梁に任せ、所謂首領は知らざる顏して之を看過して居る、看過して居るのみで無い、自ら彌次の組に投じてその混雜を激成しつゝある者もある、要するに首領が無い、首領が無いから、あのやうな喧騷が起りつゝあるのである、その有力の首領を得たい、國家を以て自ら任じ、責任を重んじ、氣品を貴び、身を以て衆を率ゐる首領其人を得たい、或はそれを階級思想の餘弊と非難する人もあらんが、世界の民衆政治は總て優秀なる首領の指導に成つて居る、何處にも首領なき民衆政治は無い、我國にも亦首領其の人を要する、而して其の人の無いことが、我が議院政治の第一の患ひである。

議場の取締に就て此く感ずるのみならず、黨の態度方針の決定に就ても亦此く感ずる、我が政黨の各首領は、その黨の態度方針を自ら挺んでゝ策定し指導しつゝ有りや否や、これが頗る疑はしい、曾て政友會は桂公と戰つたが、此時の原氏の意は桂公と戰ふに在らずして和するに在りと傳へられた、原氏は總裁として和する考へ一方であつたが、部下のため、その部下が逸まつて戰端を開き、漫りに戰機を早めたゝめ、本意なくも戰ふに至つたのだと、當時專らの評判であつた、この評判に幾何の眞實があるかは知らないが、其の後政友會は二箇師團問題に關し大隈内閣と衝突した、その時も、衝突する一二日前まで、總裁原氏には衝突の

意思が無かつたと傳へられた、その後、政友會は大隈内閣の對獨宣戰、別けて膠州灣還附の宣言に對し苦情を唱へたが、その派の一人床次氏は、政友派を代表して壇に立ち還附 趣旨に賛成なりと言明した、西洋でなら黨の首領は問題の起りがけの當初から其の主張を公けにして居る、國民はそれに由つてその派の態度を測定し、向背の決を卜して居る、いざ採決の間際に至り遽々として其の方針を決する黨派も、黨派の首領も全く聞かざる所、況や、採決の後に至つてまで彼の時の首領の眞意は實際どつちで有つたらうかと疑はるゝ如き全く以て咄々奇怪の沙汰で有る、此點に於て國民派に於ける犬養氏の位地態度は稍選を異にして居る、然し乍らその犬養氏すら、果して時に臨んで一黨の向ふ所を指示し、黨員を策勵し、輿論を作興すべく努力して居るや疑はしい點がある、犬養氏尚然り、我が國の政黨の首領は、概するに其の名が副ふ實際の働きをして居ない、彼等はその働きを働かずして、其空名を擁して居るのである、而して反對の政府を責め、その無責任を難ずるはいかゞな次第である。

若し各首領にして自らその弊を思ひ、進んで責任を負擔し、議場をして混亂の態なからしむるやう黨員を結束し、黨の主張方針をも、廣く群議を容るゝ間に、自ら考量し、策定し、奮つて陣頭に辯難攻擊の衝に當らば、政府も勢ひ安坐する能はず、大臣諸氏の出でて之に應酬するは自明の理である、此くて大臣諸氏と首領諸氏と、互ひにその胸臆を傾けて所信を盡くせば、その戰闘振は今日よりもずんと向上するに相違ない、此くなれば元來公事には趣味淺からざる我が國民である、その興趣は自然に此方面に集注され、生氣、活氣期せずして興旺するに定まつて居る、今日の所、僕は平議員餘り有り、唯り首領其人を缺ぐとの所見を換へ得ない、切に其種の人の自彊改新を望む、特に後の其種の人の鑑戒奮勵を望む。

(三) 大處の警策

議會以來既に二十六年、議員の議會に關する知識、例へば議院法や衆議院規則に關する如き知識に非常に

進んで來た、中にはその條目の微に至るまで殆んど皆暗記せるかと思はるゝ程の人もある、その先例も解釋も頗る整頓して來た、然るに議場は年と共に紛擾の度を加へる、島田氏の議長の時のみに然るのでは無い、奥氏の時然り、大岡氏の時然り、長谷場氏の時然り、歷代皆然りである、何の故に然ると言へば、知識が進んだからであらう、第一議會の頃には議長獨り議院規則を知つて居て、その條文の解釋は殆んど皆議長の爲す所に一任された、議員は此の如きを瑣々たる末事として之を討究し難詰することを敢て(割合に)しなかつた、今や然らず、彼等は規則を呑込めるが儘に、その先例を記憶せるが儘に、その規則の適用や、解釋や、先例の異同に對して顯著の記憶あるが儘に、多く事端を釀して喧囂を極め、議場の不整理から延いて議會の權威を失墜せしめつゝある、その第一議會の頃に於ては島田氏の全院委員長は頗る振つたものであつた、當時の議員にして才華の評判一代を蓋ふた中江篤介氏は口を極めて島田氏の全院委員長振りを賞揚した、而して議長たる中島氏、副議長たる津田氏に對しては之に對し充ち足らざる情意を痛快に表白した、當時に在つては感賞に餘りあつた島田氏(全院委員長として)が今日非難詬罵に滿たさるゝに至つた譯は、外の關係も固より有らうが、規則に關する議員の知識の進んだことが蓋その有力な一原因であらう、進んだ知識を何處に用ふる、揚げ足取りに用ふる、小股掬ひに用ふる、穴探しに用ふる、弱點の探し合ひ、訐き合ひ、ほじり合、私憤の果し合ひに用ふる、只此の如きのみ、知識は進んだ、小さい方面に進んだ、品位は落ちた、こせこせとして、氣の詰るやうな方角に落ちた。

幸にも國勢は之に逆行して居る、二十七八年臺灣を得て、三十七八年樺太を得て、朝鮮を略し、滿洲に伸び、今は蒙古をも、山東省をも亦我が帝國の勢力圏内の一部と認めらるゝに至つた、而して連年結んで解けない苦情はあるが、北米の一角には十萬以上の邦人が移住して居る、單に支那を挫き、露西亞を挫いたのみでは無い、今では獨逸の鼻柱をも幾分か挫き、世界の強

國たる英、佛、露、伊と相結んで、又世界の强國たる獨墺と相對峙するの機會に接し、帝國日本の地歩は年と共に高まり、世界は目を圓くしてその發展に驚いて居る、即ち國の境域は日に〳〵廣まり、その關係は日に〳〵繁く、その信用勢力は日に〳〵伸びつゝある、是れ正に我が國民が抃舞踴躍して、興國の大計を畫すべき千載の好機では無いか、而してそれらしい議論は幾何かある、我が帝國議會には、政府當局の口からも議員の口からも、曾てそれらしい議論の半口たりとも、隻語たりとも漏れたことがあるか、演べられたことがあるか、訴へられたことがあるか、鼓吹され主張されたことがあるか、殆んど無い、全く無い、有つた幾百千回のその長々しい演説の中に、それらしい抱負、見識、規模、精神の籠つて居たものは一つも無かつた、意外と謂はねばならぬ、實は驚くべき矛盾と謂はねばならぬが、察するに我が國民は小處に敏なる民で、大處に疎なる民で、其の小處に專らなる餘り、大處を疎そかにし、小處に其の才氣を小用し、大處に其の力を閑却し、隨つて規則條文の末の末には細心の注意を拂ひ、辛辣錐の如く、而して國勢の大處、雄處、高處に至つては漠焉相關せず、視て對岸の火災の如くなるに至つたので有らうか、議場外には國運隆々たり、議場内には蕭殺の氣秋の如し、議會の空氣は議會外の空氣と觸れず、國運は常に議會の咒咀以外、愁嘆以外、怨望以外に堂々として濶歩して來た、即ち議會は常に國運の發展に協調して來なかつた、口惜かつた次第である、小處に敏なるも可からうが、大處に敏ならざるは遺憾である、寧ろ議會の言論は其の大處からと勉めて、其の大處から打算した立論で無くてはなるまい、此場合或は小處を遺却するも可なり、小處に膠着して大處を遺忘し去つては全く可けないと思ふ。

之をどうするかと謂へば、又たゞ首領連の勉めて壇に立つことである、大臣連の勉めて之に應酬することである、左すれば小さい問題は自ら起らない、起るにしても幾何か大きく之を取扱ふ、その小さい處から論ぜずして大きい處から論ずることに爲るからである、

今日の議會には一日に百餘の日程の掲げらるゝことも有る、問ふ迄も無く其の甚だ小さい問題であることは分り切つて居る、小さいから多いのだ、多いから小さいのだ、誰も本氣に議論をする者は無い、即ち議論なしに迎へられ、送られ、始末さるゝものが頗る多い、これは所謂平議員の見識が幼稚で、地方問題の末に沒頭されて居るからとのみ思ふては可けない、首領連が働かぬから、首領連が働かずして、平議員の跋扈に一任するから自然に此くなるので、若し首領連が奮發自彊して、他の重大問題を提議し、進んで陣頭に立つて策戰に勉めるなら、彼の一日百餘に上る紛々たる議案の如きは、期せずして消滅し去り、若くば壞に送られずして終るであらう、議場は彼の一日百餘に上る地方議案を提出する所謂平議員が之を汚して居るので無く、他の首領連の怠慢放逸、爲すべきの務めを爲さゞる所に汚されて居ることが多いのである。

昔は博士シーレイは大學の講座に據つて、議院政治家の眼孔豆の如く、英國の國運の年久ふして益々盛んる潮運の形勢を看誤まり、議院内に泣き言の雨を降らして、議院外に悲愁の氣を送り、英國の民心を萎靡沈退せしめた非を論じ、議院政治家の無識を啓發すると共に、英國の國運は議院政治家の內紛、黨爭、偏見、昧視の外に隆々として既に發達し、現に發達しつゝあることを論斷し、學者として、經世家として、炬の如き史眼、一大權威を示した、英國民の悲觀的亡羊沈滯の氣習は此時から洗新されたと云ふ、今は日本にも此の如き活眼の學者を要する時では無いか、而してその學者の收拾し、展開するに任ずる材料は隨處その多きを嫌ふ、決して少さきを患へざる有様では無いか、議院政治家も無識に相違ないが、無識な者は獨り議院政治家に限るか、此の如きの形勢を閑却する史家學者も亦議院政治家と同樣の誹りを受くべきで無いか、憾みは議院政治家に在る、憾みは學者歷史家に在る、憾みは日本國民に在る、して見れば獨り議院政治家の無識をのみ貶され無くなる、僕は我が帝國の大學にシーレイ教授其の人の如き、活ける材料を活かして取扱ひ、

世の先導として、木鐸として、國民の生氣を鼓舞する、力ある教授の輩出せんことを希望に堪へない。

（四）議院外との交渉

議會が議會の外に連絡を有しないから困る、我が議院政治の弊の一端はこゝに在るとの趣意は前節にも述べた、言葉は同じだが、内容の稍變つた或事柄をこゝに述べたい。

外國でなら代議士は其の地方の公事に何日も世話役、音頭取りの身分である、例へば日露戰役に對し出征の軍人遺族等を見舞ふこと有りとして、日本ではその表て向の世話役は郡長であつたが、外國でなら、それは代議士である、白耳義人に義捐するため、塞爾比人に義捐するため、慈善會、音樂會の類は、先般來有志の手で所々に催されたが、その發起人中には代議士は少かつた、外國でなら此の如き事柄は多く、代議士の發起に成り、たとへ本人自發の思ひ立に非ざる場合でも、何日とは無しに其の計畫に推しつけられて仕舞ふ、外國の此の如き催しで代議士の奔走盡力に依らざるものは少い、彼等に在つては、代議士は議院内の一要素たるに止まらず、社會の貴重なる一要素である、たゞ日本に於ては然らず、日本に於ては代議士は議院内の一要素たるに止まつて社會上には何等の地歩を占めて居ない、日本の代議士は議會の外には何等の連絡交渉を有つて居ないらしい身分である。

更に議員直接の關係に於て、外國には平生から議員の候補者がある、例へば次の總選擧が大正七年に行はるゝとし、大正五年の今日から早くもその際の議院候補者がある、その選擧區の各黨派が今日から次の候補者として某氏を指名し、某氏もその指名を諾して候補者と名乘り、その身分を以て奔走し又演説をする、新聞も代議士候補某氏の演説として之を紹介しその行動を評判する、此の如きは外國には極めて普通の例である、英國の軍需大臣ロイドジョージは確か二十七の時代議士に當選した、而して二十五の時早くも候補者に推薦された、その二十七當選の際は定期の總選擧では無く、何かの事情で料らずも一二年早目に其の時期を

迎へたのであつた、かゝる次第だから代議士と選擧區の關係は始めから善く出來て居る、その間に水も漏らさぬ親密の關係が久しく已に出來て居る、然るに日本にはその關係が無く、いづれも其場に臨んでの俄出來である、善き關係が出來ない筈だ、これはどうかして改めたい一つと思ふ、改めねばならぬ急務の一つと思ふ。

代議士を作ることにも右の如く不用意である、故に其代議士も政務に對し日ごろは全く不用意である、何といふ意見も主張も無い、これが現狀である、例へば今度の議會に如何なる法律が出來て、その內容は何々その論點は何々であつたと記憶して居る代議士は殆んど有るまい、それどころで無い、現に今日某の議案が議場に上るとしてその內容を知悉して居る代議士の數は多く有るまい、甚しきは現に自ら贊成者として署名して居る議案である、而してその議案の內容を知悉して居らぬ代議士は少く有るまい、これは議案の出し方が餘りに多過ぎるのは其の弊を招いだ一因である、議案を其の初め素人の提議し得らるゝ直覺的範圍に大體の論議を盡さしめず、始めから專門家振りの細かい窮屈な規程を必要としてかゝるから、廣く多數の興味を喚發し得ないこともその第二の原因であらうが、何としても準備不充分の嫌ひは免れない、代議士が其の場其場の出來星である如く、法律案、建議案の類も亦其時〳〵の出來星だらけである、即ちたゞ議會に於ける當座の主張、骨折であつて、之が爲に議會の外に永く苦勞し、其の後もその施設に就て永く苦勞するといふ氣風傾向は認められない、議會は社會の外に隔絶して居る傾がある。

前にも書いた床次氏の膠洲灣還附贊成論に對し、政友派の多數者は目を睜つて異樣の感をたゝへたといふが、政黨に平生の準備、調査、研究、打合せの缺けて居ることはこれでも分る、若し平生の準備打ち合せが屆いて居るなら、斯樣な行き違ゐは決して起らぬ筈である、此の如き風に不準備では國政は議せられぬ者と思ふ迄にしたい、如何なる才人でも一旦の思ひ時には思ひ違があるものである、政治はもつ

と鈍重なもの、深く平生の準備を要するものとしたい、左樣に平生から準備をし研究をしてかゝれば、議する法律出來した法律の結果には、社會の注意が今日よりも深くなり、面白くなり、工合よくなるに定まつて居る、總じて之を言ふ、我が議會は我が社會と殆んど沒交渉の態である、遺憾至極に堪へない。

(五) 協力の工夫

どうかしてもつと力を協せたいと思ふ、その工夫をしなければ可けないと思ふ、現在に於てはその協力の實も工夫も著るしく欠けて居るやうに思ふ、議院政治は言ふ迄も無く協力の政治である、協力を必要と思ひ、それを生命の綱としての事業である、協力なければ議院政治は無くなる譯、自然の勢は漸く今日の政黨を作り成した、これは喜ぶべし、悔ゆべきで無い、然し乍らその協力の意氣効果は未だ足りない、もつともつと大いに協力を促がさねばならぬ、敢て擧國一致と言はないが、殆んど擧國一致と言ひ得らるべき程度の協力を以て、海外諸邦と相競はねばならぬ、海外諸邦は現にその通りの實を現して居る、我國のみ獨り散り散りばら／＼に、烏合の家を以て之と對抗する譯には往かない、彼既にその衆力を合して來る、我も亦衆力を合して進まねばならぬ、さうして進むのが當り前である、それにはどうしたら可いか、そこには屹度國民性の問題があると思ふ、そこで話は頗る面倒に爲り、容易に意見を立て難い。

國民派の犬養氏は之に關し如何に思ふて居らるゝか、氏の政黨の爲に盡さるゝ既に四十年、その盡力は決して原敬氏に下ら無い、又加藤氏に下らない、然るにその加藤氏は一擧にして百五十名の選良を羅致し、その原氏も衰へたりといへども百名以上の代議士を抑へて居る、而して當の犬養氏は僅かに二十七八名の衆と煢々相依り相憐んで居るに過ぎない、肝癪も起る筈である、皮肉も洒く筈である、いろ／＼同情すべき理由事情も有る、然し乍ら氏は果して如何に思はるゝか、日本の政治を如何にせんと思はるゝか、二十五節の船も

あり、二十三節の船も有り、二十節の船もあり、十八節の船も有る、而して戰ひに臨むとすれば、司令官は當然に十八節の速力を出さすべきであらう、然らずして二十五節の速力を出せば、他の二十三節以下の船はいづれも落伍する外は無い、而してそのいづれも落伍し去り、茫々たる海洋、たゞ我と我船とのみを餘す時、氏は司令官として尙我が用兵の過ちに非ず、我に隨ふ能ふざりし他の各艦のおくれたるなりと嘯嗷せらるゝか、我は我が一艦にして足れり、速力快速なり、以て他の大艦隊にも當るに足るべしと、一艦を率ひて他の大艦隊と競逐せんとせらるゝか、意氣は壯なれども、世にその戰略を危み服せざる者の出づるは至當の義に非ざるか、氏はそれを至當と思はれざるか、僕は此等の點に關し、氏の沈痛なる告白を聞いて見たいとの感じを抱いて居る。

前に大處の觀察、大處から、高處からの觀察といふ意味を書いたが、人は互ひに人の美を成すべき者では有るまいか、それが立憲政治の精神で、又長所では有るまいか、衆力を合せて國に盡すのである、その間には互に相許す所があるべきである、進んでは一國の精力を傾けて外に當るといふのである、その間には尙更一點の疑心が有つてはならぬ、互に相信じ、相擁し、相寄り、相勵むが、即ち立憲政治の趣旨根本であるらしい、で無くては協力は出來ない、然るに我が日本人は、兎角に人を信ぜぬらしい風がある、朋友相伐ち相軋る風がある、上海に於て然り、天津に於て然り、倫敦に於て然り、紐育に於て然り、桑港に於て然り、凡そ日本人の集まれる各地には皆此風がある、日本人は協力を爲し得ない民である、立憲政治、議院政治に向かないらしい民である、失禮ながら政界の先達者宿たる國民派は、そのやうな氣習の長所か短所かを、ありありと暴露した團體では有るまいか、獨り今日の結合に就ては申さず、久しかりし其間の聚合離散の跡に就て申す、但、國民派にはそれらに換へ難き一定の主張本領があるのだと申されやう、それは宜しい、それを否むでは無いが、偖、議院政治は多數の政治である、

日本國民の力を成し得る限り多く集めて而して行はんとする政治である、然るに多數の集まらざる此の如くにして何を以てその志を行はんとするか、我が志も貴いが、立憲政治の志も貴い、我が志貴いか、立憲政治の志貴いかといへば、我が志よりも、立憲政治の志が貴いと謂はねばならない、多數を集むることは非常に貴い務めである、侵し難い立憲政治の命令である、之に逆ふてはならぬ、之に逆ふなどは立憲政治に逆ふ者である、此の如きは殆ど立憲政治下の自殺である、果して然らば議院政治家の本領知るべきのみ、多數と力を協せねばならぬ、而して我が國民はその方の傾向を幾分か欠いて居る、政治家は之を考へて自ら矯め直してかゝらねばならぬ、知らず國民派の諸氏は自ら此く考へられたるや否や、國民派の諸氏に限らず　我が政界の先進後輩はいづれも此點を仔細に考へられたるや否や、協力が必要である、協力は力である、今日の立憲國家は皆此基礎の上に立つて居る、獨り我が國家の此點に於る基礎は未だ鞏固で無い、未だ確實で無い、餘程の反省と勇往を要する、どうぞしてもつと協力したいものである、協力の工夫を講じたいものである、然らずんば我が議院政治は到底本當の發達を遂げ得られないと思ふ。

* * * * *

述べて見たいことは以上に盡きないけれど、既に多く紙幅を塞いだから一先づ筆を擱くとする。

何と言つても、日本は既に議院政治の國である、議院政治は日本の生命である、それに必要なる機關は儼然として聳へ立つて居る、而して國民の信望は日に〳〵議院　集まりつゝある、一部の人には不平も有らうが、前年の桂内閣も議院で斃れた、其の後の山本内閣も議院で斃れた、今日の大隈内閣も議院で立つて居る、議院の力は此の如くにして伸びつゝある、之は無視する譯には往かない、學者が何と言はうが、理論では何と解しやうが、實際、日本の政治は目下議院で動いて居る、議院がその中心となつて居る、議院が良くなればそれだけ日本の仕合せ、若

し此儘にして良くならなければ、それだけ日本の不仕合せである、所謂明哲の士は、その改善作興のために同情を寄せ、注意を拂ひ、指教を垂れられねばなるまい。

議院の見物者が目下少からず有る、その有る程度は西洋の程度よりは劣つて居る、西洋では何國でもその見物の群集はもつと盛んであるが、僕は時折その見物人の後に附隨して議院內を見廻る、其の際、衆議院の議場を見下す見物人の多くは、こゝで日本を寐かしも起しもする、こゝが其の評議の所であると、得意氣に嘆賞するのを常として居る、僕はそれを幾度幾人の口より聞いたか知れない、彼の赤毛布連は學者の目から見たら、何にも値ひせぬ手合であらう、西も東も分らぬ埒も無い手合であらう、然し乍ら僕は此語を聞く度に幾何まで激勵され啓發されたか分らない、彼等は無智であらう、でも民衆の聲は神の聲である、日本の現狀は彼等の此一句を以て說明し盡されて居る、これが破的の言である、此外に復た一語を加ふるを要しない、後藤新平氏は屢々木を數へて林を知らないと云ふ語を用ふるが、世には往々にして木を數へて林を知らない學者理論家がある、後藤氏の慨する通りである、堂々たる學者を以て赤毛布に如かざるべけんや、僕は、日本の議院政治の現狀並に將來に關し、學者先生の更に大いに注意せられんことを希望する。

今は議會は既に閉ぢた、而して大隈內閣沒落の噂ある時である、何れの國にか議會を無事に終へて、而して後沒落する政府あらんや、有る無しは之を舍いて、それが立憲政治、議院政治の本領で有るか、日本に立憲政治の行はるゝこと久し、その割合にその思想の會得されて居ないことには、此一事でも能く分ると思ふ、學者先生の奮起の秋である、どうぞして議院政治の將來を善くするために、先づその思想の徹底を期すべく、學者先生の四方奮起、各その力を致されんことを切望する。

支那革新の將來

稲葉君山

一

近世紀になつてから、支那は、數回となく、革新の機運に逢着しつゝも、而も其の都度、不成功の結果に終はつた。不成功の原因に就ては、主として、支那民族性の內容に與かることも多いが、又た一面には、國際上の關係を考量するの妥當なるを想はしむるのである。革新の機運とは何ぞや、吾人をして言はしむれば從來支那人ことに漢人が、政治上に於て優越の地位を占め、革新の實績を收めんとする希望に副ふべき機運であるが、此の機運は、前後三回ほど逢着したのであつた。乃ち其の第一は、太平天國(長髮賊)の革命、其の第二は團匪事件、第三は、清末の革命のそれであらう、そして、此等の機運は、一階は一階づゝ、一歩は一歩づゝ、漢人に對して有利なりと思はれたのであるが、其の結果を顧みれば、全然反對を語るものといつてよいのである。

支那には、古より政治上、革新といふことは無いのである、革命といふことは、古典の文句ではあるが、それは、一朝（ダイナスチー）の上に與へられた天の寵命が、他の一朝の上に移動するといふことを語るので、政治的革新を語るのでは無い、反對に、支那の革命は、復古の意義に解せられぬでも無いのである。近代支那の革命は、之れと較々撰を異にすること、言ふまでも無いが、事實は、復舊政治に還元せんとしつゝ、あることは否定し難い。ともあれ、與へられた機運の、何樣の事情に因りて不成功に終はつたかは、新に吾人の考究に位するものといつてよいのである。

二

第一の機運たる太平天國の革命は、咸豐元年（一八五一）陽八月二十七日、太平黨の一枝隊が、廣西なる永安州を陷れた時より、同治三年六月十五日、南京の天京陷落に至る約十有八年の騷亂をいふのである。長髮賊蜂起の動機や、其の經過やは、今、絮説するの要を認めないが、此の十有八年間には、吾人の記憶すべき重大事件が、種々包含されつゝあるといつてよい、乃ち英國と佛國との聯合軍が、長驅して北京を衝き、時の天子咸豐帝は、祭器を抱いて長城外なる熱河の避暑山莊に蒙塵したのである。聯合軍は、ロード・エルヂンの果斷なる政策の下に、圓明園離宮を燒棄した、此事件は、咸豐十年（一八六〇）陽三月八日、二國が最後通牒を、北京政府に致してから、十月廿四日、北京假條約の調印まで、約八個月の長日子であるといへば、太平黨が、燎原の火の如く、豐沃なる蘇・浙の市街を侵略しつゝあつた時代に相當し、三百年の威福を縱にした滿朝は、支那全土に、何等權威を保持せりとは認められないのであつた。不思議な現象といへば、いはれにでゐ無いのである。此の場合において、漢人の統領、曾國藩・左宗棠・李鴻章及び彭玉麟などいふ人々は、同じ漢人で成り立つた太平黨を幇助せずして、却て滿洲朝廷に加擔した、但だに幇助を敢てせざりしのみか、彼等は、全力を南京征伐に傾注して、やがて、其目的を遂成したのである。

此の事實は、單に、外面に現はれた經過のみを以ては、説明し難いところもある、さりながら、太平黨が滿洲朝廷の排斥を標榜し、漢人を奴隷の境遇より救ひ、かねて、腐敗の極度に達したる政治より脱出せんと努力したことは爭はれない事實であるが、彼れ曾・左・李の諸人は、それに考慮を拂はなかつた、勿論、太平黨が、支那の固有の信仰を尊重せざるのみか、反對に基督教を強要したことや、掠奪による軍政を繼續したことやは、漢人の主なる人々に、異常の反感を懷くに至らしめた原因ではあるとはいへ、結果の迹から見る時は、折角、勃興した興漢の氣象は、再び粉碎し盡くされて、異種族なる朝廷に、中興の光榮が附與せらるゝ

ことゝなつたのである。

三

右の曾・左・李諸人の行動に就いて、故副島蒼海伯は予に對して下の如きを語られたことがあつた。それは、伯爵が、明治五年、淸國に大使として赴かれた時の、李鴻章との對話の一節である。李は、先づ日本の國勢の日進月歩なるに反して、自國々勢の不振を嘆息したのである。伯爵は右に對して、それは既に矛盾といつてよい、國勢の發展を望みたならば、公等は、何が故に太平黨を亡ぼしたであらう、太平黨を亡ぼして、今日の不振をいふのは、寧や既に遲いのである。伯爵は、斯く言つた。伯爵の如き明治維新の經驗を踏みて來た人には、滿朝の能く爲すことなきは、德川幕府のそれよりも甚しく、人心の渙散は、封建時代のそれよりも甚しかつたことを直覺して、早くも、玆に想倒したのであらう。之と同じい話が、俾士麥（ビスマーク）と李鴻章との對話として傳へられてあるから面白い。李は歐洲諸國巡遊の伯林訪問中、一夕、俾公と會見して、平生の自慢話なる太平黨や剿匪やらの撲滅を誇説したらしい、俾公は曰く、公の武功は、誠に稱すべくもある、然ども、吾々歐洲人に在りては、異種族に抗敵するを以て名譽となし、同種族を戕害して、一家を保全するといふやうなことは、何等の武功に値ひせないのであると、李は、之を聞いて慙色あつた。以上は、實に同工異曲、東西偉人の見るところは、符節を合すが如しといつてよい、然ども、玆に吾人の考量すべきことがある、それは、吾人は、暫らく、當事者の地位に身を置いて、批評を下すことである。明治十八年、故伊藤公が、全權大使として、李と天津の官署で會見した時に、彼は、予の北京に於けるは、恰も往年貴國に關東と京都とが對立しつゝあつたと同樣である、予は幕府の大老伊井に、一掬の淚なきを得ない。彼は、語り終りて憮然たるもの之を久うしたとのことである。

四

日淸戰役以後は、天津政府——李鴻章の勢力失墜時代であつた。李の失墜といふことは、所謂中興元勳の

凋落し盡したことを語るに外ならぬのであるが、副島老伯は、團匪事件の起つた前年に於て、予の問に答へて、支那は、舊穀將に盡きんとして、新穀未だ登らずといつたやうに、最も危い時期であるといはれたのであつた。果然それが適中したのである。實に、中興元動の凋落は、一般の民心に、自由と放縱を與へ、昨日までは、北京の一隅に屛息し、何事にも、漢人の顏色を窺ひつゝあつたところの滿人すらも、再び政界にその首を擡ぐるやうになつたから、愈々危い。李といふ人は、外國人の勢力に依りて一倍偉らくなつたので、外國文化には、少からず敬重を拂つたが、多數の民心、ことには族人には、それが一向に理解されぬのである。吾人は、今に於て、三十三年の義和拳匪即ち團匪事件が、扶淸滅洋なる旗幟を翻へしたことに就て、何等怪むを須ゐぬであらう、滅洋は、實に一切の外國人及び外國品を支那より驅逐せんとする排外熱の表的を意味するので、此の暴動の範圍は、殆ど支那の過半に及び國内は、無政府の情態に陷つたといつてよいのであるが、歷史は繰り返へす、問題の黑幕たる西太后及び其一派の西安逃亡は、恰も三十年前に於ける咸豐帝の熱河北狩と揆ぶところが無い、太公に於ては、實に二回目の蒙塵を經驗し、北京は、再び聯合軍の手中に陷ちたのである。

以上の事實は、如何に漢人に革命の好機會を與へたりしぞや、滿人より政權を奪還し、民心の一大更新を斷行するを得ることは、今や一擧手一投足の勞なるかに思はれたが、張之洞・劉坤一などいふ中部支那の總督は、北方の波動の、揚子江流域に及ばんとすることをこれ恐れ、近い山東に重兵を擁しつゝあつた袁世凱ですら、團匪を境外に驅逐することを以て急務とし、殆ど他を顧みる遑は無い、若しも彼等の意志にして飽くまでも、滿洲朝廷の惰力に依賴して、大局の保全を誇るといふに存したりとせば、尙ほ多少の貢獻に償ひするものがないでもないが、實際は、自己の現在の地位に滿足して、一日の苟安を偸みたに過ぎぬのであつた。第二革新の機運は、實に斯くの如くにして、終末

を告げたが、第三の機運は、清末の革命によりて、新たに提供せられたのである。

五

請ふ吾人をして、今少しく、革命の前後に亘れる一般の形勢を語らしめよ、支那は、團匪事件以後、漸次に覺醒し、それが人民の參政權要求の運動として現はれたのである。清朝の方では、革命黨に對する恐怖はある、さりとて、之を群衆の潮の如き運動に比しては、さまでに懸念せなかつたことゝ想像されぬでは無いのである。反對に、政府では、此の運動に對する利用を誤まらざる時は、革命黨の要求は、帳消しになるものと思惟したらしい。斯くして、千九百五年（光緒三十七年）七月の考察憲政五大臣の海外派遣となり、同翌年九月の立憲預備に關する上諭となつたのであるが、これで安心したのは、抑もの失策であつた。政府者は、斯く考へたらしい、人民は、日本の眼前の發達に憧憬して、憲政を要求するのであるから、右に對する誓約をさへ發表すれば、落着するのである。試みに見よ、千九百八年八月發表された憲法大綱には、愛新覺羅氏の帝位が、萬世一系であること、君首は神聖にして侵すべからざることなどが、劈頭に揭揚されたでは無いか、これが第二の失策といつてよい。吾人をしていはしむれば、清朝は、自己が漢人から二重の排外思想を振り向けられつゝある、即ち一般的排外思想と異種族排斥思想との二重思想に包圍されて、漸次にその基礎を危くしつゝあることに注意を拂はない、尚ほ**切言すれば、滿人は漢人から見て、異種族の覇者であるから、排外思想の發展上、第一に排斥せられねばならぬものであることに注意を懈りて、彼れは、恣然として、日本の明治維新に於ける京都の地位を要求するのであつた。**

革命黨の興漢排滿は、政府の此の失策の下に再び其の勢力を回復し得たのである。

六

實際をいへば、團匪事件は、清朝當局の暗愚と民心の無智とにより胚胎し、其の結果は、滅洋どころか、

益々外人を内地に引き入れたが、支那及び支那人は、此一大失策に鑑みて、排外の思想を放棄したのでは無いのである。反對に、前に採用した義和拳の幼稚なる攘夷手段に悔悟の念を抱き、何等別に報復手段を得て積憤を洩さんとしたのであつた。これが乃ち清末の一大暗潮である。吾人は、今更めて、千八百四十二年代に於ける英國の對支行動が、餘りに暴慢なりしこととや、千八百六十九年代に於ける佛國宣敎師が、餘りに不法なりし爲めに、所謂敎案の簇出したことを追責するのでは無いが、日清戰役以來、支那の眞價の暴露と共に、外國の利權獲得は、いかにも大膽で、又た不法なりしもの多きを認めざるを得ない、果して然らば、彼等支那人が、國權回收を利權回收の標榜の下に包み、熾烈なる行動を開始したことに關して、吾人は、寧ろ多少の同情を寄與せざるを得ないのである。

利權回收論は、實に清末以來の最大潮勢であつた、政府は、之を利用したが、革命黨は、尙ほ一倍此の氣勢を煽動した、但だ時として、彼等は、その手段のために、最終目的をさへ忘却するかの如き行動に出でたこともあつた、不可解なるは、革命黨である。然ども此等種々の事相を綜合するに、利權回收による國權回收論は、晩近支那に於て、最高最大の思想を占め、一切の政治的野心をも、包容するの力を有する者と判斷してよいのである。

然るに、何者の靑盲ぞ、清朝は、宣統三年秋に於て、川漢鐵道國有問題に觸手したのであつた。

七

川漢鐵道國有問題は、民間の資金にて成立したところの川漢鐵路公司の事業をば、郵傳部が外債を成立せしめて、國有を斷行せんとするに端を發したのである。今日から見れば、政府の處置が、必しも不法であるとも思はれぬが、公司當事者は、國有後の外資、及びそれに伴ふ危險を虛張して、株主たる四川人民に向つて、反對運動を煽り立てたらしい。總督と人民との衝突、官兵の暴徒加擔、省城の罷市、抗糧について抗捐、内亂は、順序よく其の徑路を辿り、湖廣總督端方

が、討伐の師を率ゐて、征途に上るや否や、對岸に潜伏して、久しく機會を窺ひつゝあつた革命黨は、其の空虚に乘じて、急遽、白旗を武昌城上の秋風に翻へしたのである。

事實は、斯の如くであつた。四川の騷亂と武昌の革命とは、始めより何等連絡が無い、啻に形而下に於て連絡なきのみか、精神上に於ても、連絡の認むべきものゝ無かつたことは、注視すべきであらう。四川人は、實に、光緒帝の靈位を祀りて、政府の失政を愬へたといふでは無いか。然ども、武昌兵變後、何日ならずして、四川のそれも、興漢排滿の色彩を以て、同じく其の外皮を被ふに至つたのである

八

同一の理路は、革命黨に向つても適用されるのである、如何なる題目でも、又た、如何なる計畫でも、利權回收による國權回收論の前には、何等存在の意義を有せざること乃ちこれである。

見よ、革命黨は、排滿興漢を以て、唯一の旗幟となしゝに關はらず、轉瞬の間、その主張を拋擲して、五族共和を容認し、五色の旗を標榜したでは無いか。

南京なる發祥地と第一大總統の名譽とをば、袁世凱の膝下に捧呈せるのみか、曾つて彼れと氷炭相容れざるかに見えたる革命黨の所謂諸名士は、爭つて、此京政府に馳せ參じ、彼れの爪牙となつたでは無いか。

更らに甚しきものがある。共和制は、實に彼等の生命であらねばならぬのである、例へ袁世凱の大總統振りは、僞共和の張本であるとはいへ、共和政治を存續する限りは、尚ほ多少の辯解の認められるであらう。今日は果して何似、彼等當年の革命黨は、共和を呪ふところの梟雄の手を援助し、彼れを推し薦めて、帝位に卽かしめんとしつゝあるでは無いか。

實に利權回收に發源するところの國權回收の思想は、支那の思想界の最高權威を語りつゝある、然り而して、此の思想の前には、革新の題目も、主張も、何等威力を有せざることを眼前に立證するのである。(三月十五日稿)

歐洲戰爭の永續と我國經濟社會の利害

法學博士　堀江歸一

所謂戰爭の利益に對する三箇の觀察點

歐洲戰爭は一年九箇月の久しきに亘りて終熄するの機會に接せず、開戰の當初交戰國の政治家が決定的勝利を收むるに非ざれば、戰爭の爲めに、三五年の歲月を費すも尙ほ之を辭せずと聲明したるは、必ずしも一場の豪語に止まらずして、或は事實に的中するに至るやも未だ知る可からず。歐洲戰爭が開戰以來今日に至るまで、我國の經濟社會に及ぼしたる影響を見るに、或る方面に於て、有利なりと認む可きもの少なからず。就中輸入の減退、輸出の增進に依て、輸出超過の勢を馴致したるが如き、輸出の增進に加ふるに、政府の交戰諸國に對する軍需品の賣却を以てし、其代金決濟に依て、在外正貨に著しき增加を來したるが如き、斯く增加したる正貨處分の一策として、外債の一部を償還したるが如き、即ち歐洲戰爭の我國經濟社會に齎したる利益の重なるものと認むるを得べし。玆に於てか世間或は歐洲戰爭を以て我國に絕對的利益を與ふるの效果ありとし、經濟上の利益より立論して、戰爭の永續す可きことを希望する者あり。歐洲多數の國が巨額の資本と勤勞とを、戰爭に空費し、大なる資金を消費しつゝある場合に於て、內外の經濟社會に種々の變動を生ずるは、當然の數にして、而して其變動の內に偶々我國に有利なるものゝ存することも疑を容れずと雖も、斯る利益を以て、戰爭の永續を可なりとするが如き、果して斷案の宜しきを得たるものとす可きや否や、偶々軍需品供給に關係ある事業に從事する者が自家の狹隘なる立脚地より、此說を唱導するものならんか、之を承認するを得べしとするも、大局より利害を判斷

せざる可からざる人士が斯る説に雷同するが如き、聊か輕卒に失するの嫌なしとせず。吾輩を以て之れを見るに、歐洲戰爭が果して我國に有利なるや、將た又有害なるや、其の永續を可なりとするや、近き將來に於ける終熄を不可なりやとするの問題は、單に既往に生じたる二三の利益のみを以て斷定す可からず、第一是等の利益が戰爭の繼續中に於ては勿論、戰後に於て繼續す可きものなりや否や、第二是等の利益は何等損失の伴うものなくして、我國の收むる所たりしや否や、若しも或る損失の伴うものありたりとすれば、損得を比較して、我國に若干の純利得を齎すや、將た若干の純損を及ぼすや、第三假に歐洲戰爭永續し、而して其永續する間我國に若干の純利得を與ふるとするも、戰後交戰諸國に生ずる各種の變動は戰時の利益を一掃して、尚ほ損害を我國に及ぼすの恐なきや否やの諸點に顧みて解決を下すの必要あり。

戰爭の利益は繼續せず

輸出貿易の增進、輸入貿易の減退、是等兩者に基く輸出超過の趨勢が歐洲戰時に於て我國の經濟社會に有利なる影響を及ぼしたる主要の原因たるは明白の事實なりとして、是等の事情は今後に於て繼續するの望ありや否や、是れが第一の問題にして、而して此問題を論ずるには、戰爭の繼續中と戰爭の終熄後とに區別して、立論せざる可からず。今昨年中の貿易表に基いて、輸出品中如何なる種類の貨物に於て、輸出增加の勢の著しきものありたるやを檢するに、我國輸出品中の大宗たる生絲の如き、重要輸出品たる精糖、石炭、絹絲の如きは、前年度に比較して、輸出高減少し、製茶、米、銅、羽二重、綿織物、陶磁器、燐寸に於て若干の輸出增額を來したると共に、從來重要輸出品を以て目せられざりし豌豆、隱元豆、靴、皮革製品、羅紗及びセルヂ、安知母尼、鐵製品、玩具、小麥粉、硝子及び同製品、セメント、雜鑛石等の輸出高に急速の增加を告げたるの跡あること明なり。即ち輸出貿易が大正三年度に於ける五億九千一百萬餘圓より同四年度に於て、一躍七億八百三十萬餘圓に上れるは、主として後者に屬する輸

出品の增加したる結果にして、而して斯る輸出品の數量の特に增加したるは(第一)歐洲交戰國に於て軍需品として需要の增加したると、(第二)聯合諸國の貨物が內國に於ける供給の減少、船舶の不足等に依り、獨墺兩國の貨物が通路の遮斷に依て、中立諸國の市場に販路を失ひたる隙に乘じたることを以て、重なる原因とす可し。若しも我國の輸出貿易にして一般經濟上の事情例へば輸出市場に於ける商工業の繁昌、內國に於ける製造工業の發達等に依て增加したるものならんか、其增加は大に慶す可く、又其勢の將來に持續せらるゝことを望む可しと雖も、輸出增加の原因が軍需品に對する需要並に中立諸國市場に於ける交戰國商品の缺乏に基くものなる以上は、其效果は自ら一時的なるを免かれず。蓋し戰爭終熄し、交戰諸國の狀態漸く舊に復するに至れば、軍需品に對する需要は自ら減退す可く、或は交戰諸國が戰後軍備を擴張し、兵器を修理充實する場合に、銅、鐵、羅紗、革等には多少の需要の存續するものある可しとするも、食糧等に對する需要は自ら消滅す可く、中立諸國の市場に於ては戰爭以前に於けると同一の程度を以て、交戰諸國の競爭を受くることを避く可からざるを以てなり。

戰爭繼續の場合は如何

茲に於てか論者は歐洲戰爭の永續することを以て我國に有利なりとするの意見を懷くに至れり。卽ち戰爭の繼續する間は軍需品に對する需要の依然たるものあるに加ふるに、中立諸國に於ける競爭微弱にして、我國商品の販路を維持擴張するを得るの二點は論者の認めて重大なる論據とする所のものなり。歐洲交戰諸國が戰爭に全力を擧げて、他を顧みるの遑なき以上は我國が中立諸國の市場に於て、商業上の權勢を維持し擴張するを得るの餘裕あること、論者の所說の如しと雖も、中立諸國の內にて米國の如き今や歐洲戰時に際して、內國經濟社會に收めたる利益を擧げて、外に伸張するの計畫に忙はしく、國內に種々の新事業を創設しつゝあるの事情なるを以て、中立國の市場に於て我國が歐洲戰時偶然に得たる販路擴張の效果を確實ならし

めんとするには我國亦中立國間の競爭に對抗するの用意なかる可からず。即ち戰時の今日に於て輸出貿易奬勵に必要なる諸般の政策を講ずるは、中立諸國に對する販路を維持擴張する捷徑にして、官民の努力を要する所なるに拘はらず、今日の如く此點に何等施設の行はるゝものなく、單に戰時に於ける販路の擴張を以て、一種の天惠を得たるが如き念慮の下に、之を迎ふるに於ては、一時の利益は忽にして消滅し去らんのみ。

戰爭の繼續する限り、歐洲交戰諸國の軍需品に對する需要は依然として強大にして、我國亦軍需に關係ある貨物の輸出に依て、貿易上の有利なる地位を占むるを得ること論者の認むる所の如しと雖も、一方に是等輸出品の代金は如何にして決濟せらるゝや。英國は開戰當初より聯合諸國の爲めに金貨拂債務決濟の任に當り、聯合諸國が中立諸國より購入したる物資の代金を支拂ふ場合には、倫敦に於て資金を調達し、斯くて之を中立諸國に對する支拂に振替へたり。即ち開戰以來英國の聯合諸國に貸出したる金額は本年三月末日に於て、四億七千萬磅の巨額に上り、自ら英國の軍事費に於て、重要なる項目を爲したる所以なり。露西亞が我國より物資を購入するや、其代金は斯る方法に依て決濟せられたるが故に、我國の對露軍需品の輸出は倫敦に有する我國在外正貨を増殖するの原因と爲れる次第なれども、英國が斯く聯合諸國に與ふる資金の融通に就ては、自ら限度の存するものあり。英國にして金貨拂の債務を輕減し、兌換制度を擁護すると共に、自國の對外債權を維持せんとする以上は、聯合諸國に對する資金の融通に就て、自ら適當の制限を加へざる可からず。此制限の加へられたる場合に、聯合諸國は如何にして對外債務の決濟に當るやと云ふに、債務を負う國に對して、自國の公債を發行するの外に、適當の道を存せず。即ち佛蘭西も過般軍事公債を發行するに當て、頻に其應募者を我國に求め、露西亞が我國市場に五千萬圓の短期大藏省證券を發行したるが如き、何れも諸國が自國の債務を以て對外債務の決濟に振替へ、以て即時に於ける金貨拂の負擔を免かれんとする

方針の發現したものと認む可く、此勢を以て進まんか、英國と雖も次回の軍事公債發行に當つては、我國に其應募者を求むるに至るやも未だ知る可からず。然らば我國は今後歐洲戰爭の繼續する限り、交戰諸國に對して軍需品を供給するも、金貨を以て代金の決濟を受くる能はず、外國の有價證券殊に戰局の進行と共に、價格低落し、金貨に轉換することの困難なる證券を受取りて、自ら甘んぜざる可からざるの地位に立つ可し。然も外國の必要とする募債條件と我國の必要とする應募條件と容易に一致して、斯る決濟の手段を成立するに至らしむるを得るやも一箇の問題たらざるを得ず。

戰爭に伴ふ經濟上の損失

今日まで我國は歐洲戰爭に依て、經濟社會の或る方面に有利なる影響を受けたることの著しきものなり。然れども是等の利益を收むると共に、他の一面に於て、大なる不利益を蒙れることを閑却す可からず。蓋し外國貿易の一國經濟社會に與ふる利益は輸出の方面に存すると同時に、輸入の方面に存するものなり。重商主義の謬想に支配せらるゝ我國の人士は十の輸入に對して百の輸出あり。一の輸入ありて、十の輸出あり、外國より何等購ふ所なくして、外國に多く賣るの貿易狀態を有利なりとするの信念を懷き、昨年中の外國貿易が前年度に比較して、一億一千七百萬圓の輸出增加と六千三百二十八萬圓の輸入減退とに依て、前年度の輸出超過五百三十六萬圓より、一躍一億七千五百八十五萬圓の輸出超過を呈するや、之を以て絕對に有利なる經濟上の事相なるが如くに考ふるもの〻如しと雖も、輸入貿易に六千三百二十八萬圓の減少を來し、一方に內國に於ける生產の能く之を補充するものなき以上は、我國に於ける物資の需要供給は調節の道を失ひ、供給不足の爲めに、物價の騰貴を來すは之を免かる可からず。大正三年度と比較して大正四年度に於て輸入の著しく減退したる貨物中、米、小麥、豆類、砂糖等は內地に於ける增收の結果として、輸入の減少を來したるものなるを以て、內國の供給の影響を及ぼさずと雖も、硫酸アムモニウム、燐鑛石、アニリン染料、毛織絲、鐵

製品、羅紗、機械等の輸入減少に至つては、戰爭に基く原產地の供給不足、需要增加併に運輸の杜絕、運賃保險料の騰貴に胚胎し、內地に於て同種類の貨物の產出に依て、其缺乏を補はざる限り、代價の昂騰するは論を俟たず。之に加ふるに內地に於ては或る貨物の軍需品として、交戰國に需要せらるゝことに依て、內國に於ける供給を不足せしめつゝあるもの少なからざる以上は、歐洲戰爭に伴ふ偶然の結果として、我國の諸物價が著しく騰貴し、爲めに經濟上に種々の變動を齎したるの事實は之を否認する能はず。我國に於て偶々軍需品の製造に從事しつゝある資本家、其製造工場に使役せらるゝ勞働者、供給の不足したる物資を所有せる商人の如きは、此間の變動に依て意想外の利益を博し其利益は生活費膨脹に伴ふ損失を償うて、莫大の剩餘を存し、所謂染料成金、船成金、鐵物成金等の熟語の行はるゝに至れる所以なる可しと雖も、我國の大なるより見れば、斯る階級に屬する輩は國民の一小部分にして、多數の國民は今や物資の供給不足に基きて、一般物價騰貴し、生活費の膨脹甚だしきに拘はらず、其所得は毫も增加せず、次第に生活難の壓迫を感ずるに至れり。戰爭を以て有利なりとし、其永續を希望する論者は纔に社會一部の階級に起れる事相を捉へて、以て全體の利害を判斷せんとするものにして、斯る僻論に對しては、吾輩は遽に贊成を表するに苦むものなり。

或は政府の經濟政策上に於ける施設宜しきに適し、外國貨物輸入の減退と共に、其供給の不足を補ふの目的を以て、內地に代用工業の創設せらるゝことを奬勵するの方針に出でたらんには、內國市場に於て物資の供給せらるゝもの漸を逐うて增加すると共に、新事業の創設は自ら好景氣を誘致して、多數の國民に職業を與へ、其所得を增加し、國民所得の全體を豐富ならしむるを得るの道理なるに、政府の產業方針は今日に至るまで確立せず、供給の不足し、代價の騰貴せる貨物ありて、之を補充す可き代用工業の盛ならざるに於ては、多數の國民が生計の困難に苦むの弊は戰爭の久しきに亘るに隨て、益々其甚だしきを告げざるを得ず。從來

吾輩が屢々世間に向つて產業方針確立の必要を主張したる所以にして、此方針確立し、世間一般の好景氣を招致せざる以上は、戰爭に伴うて生じつゝある經濟上の利益の如き、到底部分的たり、一時的たり、幻影的たる嫌を脫する能はざるなり。

戰後の經濟的壓迫

假令ひ今日我國經濟社會の或る方面は歐洲戰爭の爲めに利益しつゝありと雖も、戰後に於て果して如何なる反動的影響を受く可きや。歐洲戰爭に於ける經濟社會の狀勢に就ては之を樂觀するものと、之を悲觀するものと二樣の見解並び行はるゝが如し。即ち樂觀論者は今回の戰爭に於て、交戰諸國が大なる消費を行ひ、或は物資に對し、或は勤勞に對して、巨額の支拂を爲したる以上は、其消費金は國民の財嚢に入り、彼等の財嚢甚だ豐なるものあり、戰後彼等が其豐なる資金を社會の諸方面に向つて、消費する以上は、貨物並に勤勞に對する需要は依然として盛大を極め、好景氣を現出するに至る可しと云ふものゝ如し。然れども此所說たる、經濟學の見地より批判するに、通貨と資本とを混同したるの譏なき能はず。若しも戰爭が交戰諸國に於ける國民の貯蓄を刺戟する特殊の効果を奏し、戰爭の行はるゝ一面に、國民の間に新なる貯蓄行はれ、軍資金は總て貯蓄金に依て醵集せられたるものなりとせんか、斯る事態の發現亦望み難きに非ずと雖も、戰爭は國民の貯蓄を減却してこそすれ、決して之を增加するものに非ず、否歐洲交戰諸國は現に年々國民の貯蓄する金額よりも大なる資金を戰爭に供しつゝあるものにして、兩者の差額は即ち戰爭の爲めに既存の資本を破壞するものと認めざる可からず。諸國が既存の資本を破壞する程度に於て、軍資金を消費しながら、今日に至るまで必ずしも軍資金の調達に大なる困難を訴へず、多々益々辨ずるを得るの趣あるは何故なりと云ふに重なる原因は之を通貨若しくは銀行信用の膨脹に歸せざるを得ず。

英國の如き他の交戰諸國が悉く兌換制度を停止し、不換紙幣を流通しつゝある間に於て、獨り兌換制度を

維持するの誇を有すと雖も、政府紙幣の形態を以て、通貨を膨脹せしめつゝあるのみならず、市中の諸銀行亦預金に對する支拂準備金の比率の薄弱と爲るを顧みず、取引先に向つて、信用を擴張して已まず。而して大陸の交戰國に至つては、開戰の當初より中央銀行をして兌換制度を停止せしめ、政府に對する貸出金として、民間に對する貸付金として、盛に不換紙幣を發行し、以て財政上金融上に於ける要求に應ずるの狀なり。戰後諸國が兌換制度を復興し、又は其基礎を鞏固ならしめんとする以上は、其前提として、戰時に異常の程度に於て膨脹したる通貨を收縮するの必要を避く可からず。通貨の收縮と共に、物價に低落を來し、戰時に國民に撒布せられたる支拂金も亦國庫に回收せられんか、國民は物資並に勤勞に對する支拂に何物を用ひんとするか其資金の存ぜざるに苦しまざるを得ざる可し。

今回の戰爭に於て、交戰諸國が戰時財政を維持する主要の財源として、依賴したるものは、即ち軍事公債の發行にして、英國の如き他の諸國に比較すれば增稅の收入に重きを置きたるの觀ありと雖も、公債收入に對する租稅收入の割合は十分の一內外に過ぎず。獨逸の如き、佛蘭西の如き國內治安の關係上、殊更に增稅を回避しつゝある國に於て、公債發行額の大なるは疑を容れず。斯くて戰後の財政處理に遺さるゝ一問題は交戰諸國は如何にして戰後公債の利拂に必要なる財源を收む可きやの一事是れなり、假に交戰諸國が今日まで發行したる公債のみに就て計算するも、英國の公債費は戰爭前の二千四百五十萬磅より一躍五千三百八十萬磅に上らざるを得ず。英國は開戰以來所得稅を增徵して、軍事費殊に軍事公債利子支拂の財源を收めんとし開戰の初年度に於て、從來の稅率に三分の一の增加を施し、次年度に於て稅率を倍加し、更に今回二割三分の增率を加ふるの提案を試みたり。斯くて所得稅の收入は戰前の四千萬磅臺より八千萬磅臺に增加するに至らんとするものゝ如しと雖も、增稅の結果は各種所得に過重の負擔を及ぼし、今や高額の所得例へば十萬磅の所得を收むる者は殆ど三割に近き稅金を所得稅の

本税幷に超過税に依て負擔せざるを得ず。斯る重税は平和の時代に於て、之を存續す可からざる一方に、公債利子の支拂額は今後に於ける軍事公債の發行と共に、增加す可きを以て、益々加重するを免かれずとすれば、戰後に於て英國が大增税を計畫して、以て戰後財政の處理に當らざる可からざるは、必然の勢とす可く、昨年來英國の關税政策が動搖しつゝあるが如き、戰後課税の基礎を擴張して、國庫の增收を期する用意の一端を認められざるに非ず。

英國以外の諸交戰國に就て見るも、公債利子支拂の爲めに、增税を行ふは避け難き所なるに加ふるに、諸國に於ては不換紙幣の銷却に依て、通貨の收縮を惹起し以て不景氣を助長す可き重大なる原因の存するものあり。而して戰時に增發せられたる高利率の軍事公債市場に流動する一方に、戰時に破毀せられたる資本の巨額に上る以上は、戰後に資本の供給缺乏して、金利標準の高歩に居ることも亦必然の勢とせざる可からず。或は戰後に於ける產業上の變動は特殊の事業に有利なる影響を及ぼすことと戰時の今日と異ならざる可しと雖も、之大局より見れば、吾輩は戰後交戰諸國の經濟社會が沈衰の狀態に陷るものと認む可く、而して沈衰の程度は戰爭の久しきに亘るに隨て、甚だしきに至るを至當なりと信ぜざる能はざるなり。

我國經濟社會の前途

我國貿易上の關係は米國支那を重なる輸出市場とし、歐洲諸國よりは輸入を仰ぐもの多きの狀態なるを以て、或は歐洲諸國の經濟社會が沈衰するも、米國幷に支那にして好景氣の維持せらるゝ以上は、自ら輸出貿易を伸張するを得るが如しと雖も、支那の經濟狀況は借款の成否に依る所多く、而して歐洲戰爭後支那に向つて、資金を輸出するの餘地あるは、一の米國あるのみにして、歐洲諸國に其餘地ありとする可からず。而して米國も亦對外放資に就ては、支那よりも南米中米の方面に重きを置き、年來の理想とする全米主義を實現せんとしつゝある以上は、米國の對支放資は必ずしも其大なるを望む能はず。米國は歐洲戰時交戰諸國に對

して巨額の輸出を行ひ、有利なる貿易差額を維持して、經濟社會の繁昌を示すが如しと雖も、西部南部の如き粗製品原料品を輸出する地方に於ては、船舶不足の爲めに、物資停滯して、商業上の不景氣を感じつゝあり。戰後歐洲諸國の經濟社會にして沈衰するものとすれば、歐洲に貨物を輸出して、經濟上の繁榮を收めたる米國は輸出貿易に一頓挫を招きて、經濟上の機運に變動を生ずることなきを期す可からざるなり。

歐洲戰爭が偶然の結果として、我國經濟社會の一部に利益を與へたるの故を以て、他の部面に於ける弊害を閑却し、戰爭を以て絕對的利益を齎すものとするが如き皮想の見解に過ぎず。況や此見解を基礎として、戰爭の永續を以て、我國に有利なりとするものに於てをや。經濟生活に於ける多くの利益は交換に基き、生產の目的とする所亦交換に外ならず、我國にして從來の如く、歐洲諸國に債務を負ふもの大なる以上は、諸國より輸入する貨物、諸國に支拂ふ可き債務に相當する程度の貨物を歐洲諸國又は他の諸國に輸出し、斯くて國際貸借の均衡を維持する道理なるが故に、歐洲交戰諸國の疲弊は卽ち諸國の我國に對する輸出を減じ、又我國の諸國に對する輸出を抑ゆるの結果を生ぜしめざれば已まず。固より歐洲交戰諸國が戰後に於て經濟上の實力を恢復するに如何なる方策を講ず可きやは、戰時の今日より諸國に於て研究せらるゝ所に屬し、獨墺兩國の經濟同盟、之に對抗する聯合諸國の經濟同盟の如き、實際の成否若しくは利害は姑く措き、其目的とする所の經濟力恢復に存するや、疑を容れず。然れども國家が大消費を行ひたる後に、大生產を以て、之を補塡せざる可からざるは、箇人の生活に於けると異なるものを存せず。而して大生產を行ふの間に於て、各種の消費を節約し、生產資本の補充に全力を擧ぐるは當然の數にして、英國に於て將た又獨逸に於て戰時極端なる程度まで行はれつゝある節儉の風の如き、戰後に至つて尙ほ其甚だしきを見る可く、此一事も亦戰後に於ける景氣の恢復を妨ぐるの原因たらざるを得ず。

經濟上の關係にして交換を基礎とする以上は、一國

の憂とする所は他の諸國も亦之を共にせざる可からず。他の諸國が盡く沈衰疲弊しつゝあるの間に於て、一國獨り繁榮活躍を極むるが如き、望む可からざる所なり。固より我國は聯合諸國の側に立ちて、東洋の方面に於て軍事上の行動に出でたりと雖も、交戰國として大なる影響を蒙らず、寧ろ米國其他の中立國と同じく、或る方面に利益したるものありと雖も、戰後の沈衰疲弊に至つては、日本も亦交戰諸國と共に、其憂を頒たざるを得ず。他の諸國の獨り沈衰し、疲弊する間に於て、日本獨り利益を收めんとし、此見地より歐洲戰爭の繼續を希望するが如き、火事場泥棒の心を以て、世界の經濟を律し、交換の相互の利益を基礎として行はるゝ經濟上の原則を忘れたる所說なるのみ。吾輩は世界人道の爲めに、將た又世界經濟の爲めに、歐洲戰爭の一日も早く終熄するに至ることを希望して已まざるものなり。

出版物取締に關する當局の態度を論ず

▽上演禁止と發賣禁止

中村吉藏

先づ自分の最近に嘗めた苦い經驗から語りたい。

藝術座の春季興行用臺本として自分の書いた三幕物の社會劇「眞人間」は、最初、大阪で七日間上演し、次いで京都で五日間、神戸で四日間、それから岡山でも、馬關でも、福岡でも、無事興行を續けて來たにも不拘、それを愈々東京へ持ち歸つて、イザ帝國劇場で開演せうとする間際、警保局から、警視廳の手を經て上演禁止の命令が下つた、何ういふ點が、其筋の忌諱に觸れたのかと、詮索して見ると、脚本の女主人公が日露戰役の戰死者の未亡人で、それが私通をするのが、いけないといふ譯らしい、どちらかと云へば教化の程度の低い地方で上演して差支ないものを、日本の教化の中心地たる東京では禁止するといふのは、論理にも、常識にも外づれた遣り口であると思はれるが、當時この事件に關して、「大阪朝日」の社説に「言論彈壓と意見の相違」といふ最も公正無私な、又最も理義の透徹した文字が現はれて來た、「大阪朝日」は、我國言論界の一大權威であるが、地方の新聞の事だから、中央では讀んでゐる人が少いかも知れぬ、假令讀まれてゐても、新聞はその日、その日で忘却され易いから、右の論文の一節を玆に抄出するのも強ち無益ではあるまいと思ふ。

即、右の社説は云ふ。

「……日本にても國家に對する自由を高調する事を時代遲れと考ふるは大間違也、日本は未だ專制時代の壓迫より全く解放され居らず、自由の觀念は歐洲にて何度かの革命を經て精練されしとは比ぶべくもなく、眞の意味の立憲國たるに未だ遠し、法治國たるに尚遠し、まして歐洲に於ても階級的壓迫、社會的壓迫に對する自由の叫びは、愈々高きものあるをや、日本が今日早計に歐洲の國家干渉主義にかぶるれば、英國の如き社會政策實行に、行かずして、獨逸の如き國家萬能主義に行くに相違なし、故に日本は歐洲が既に卒業し了りたる徑路を進みて國家に對する自由を高調する要あり、此の意味に於て吾人が殊に遺憾とするは、思想の自由に對する一般の感覺の鋭敏ならざる事也、思想の自由に對する壓迫は我國家に特有の現象にして、文明國にては思想の内容と、政府者との意見の相違に基いて取締るが如き事なし、所謂

教權（オルソドックス）に對する反抗を禁じ、又國家並に皇室の歴史に對する研究を禁壓する等の事の、舊時代の現象なる事に、日本に於ても認められ居るが、日本にては宗教的教權（オルソドックス）なき代りに、國家的教權（オルソドックス）あり、一の政治問題が、此の國家的教權（オルソドックス）に觸れるか、或る思想の發表が、此の教權（オルソドックス）に矛盾する時は、直に政府者の壓迫加はる、乃木問題に對する言論の壓迫の如き、或種の文藝に對する壓迫の如きは皆、此處より來る、而して國民が案外、斯る壓迫に對して冷淡なるは、出版法及營業法に於て、政府の下級官吏に重大なる權能を與へて平然たるに依ても見るべし……

かく論じ來つて、一木内相は其個人性と其歴史とに見て、教權派を奉ずる者と斷じ、近來の出版の自由に對する壓迫は、大に内相の特色を窺はしむるものとし、更に論斷を進めて曰く、

國家的教權は、吾人の自由研究の下に十分精練されたるものならざるべからず、自由研究の試煉に堪へ得ざる如き教權は、今日の國家の教權として存立せん事難し、此意味に於て國體に政體に對する研究に壓迫を加ふるが如きは我邦に於ても明らかに時代遲れとせられ、國體に對する研究の如きは官立大學に於てさへ比較的自由となり居れり、然るに政治問題が一度其點に觸れるか、文藝の作物又は興行物が少しく其方面の研究に入れば、直に出版法、營業法の威力の下に壓迫せられ居るは、自由裁量の權能を有する行政官吏が、自己の意見又は思想に反する出版物に禁壓を加ふると見るの外無し、現に先達て大阪にて公演せられたる演劇が、京都にて興行中止の命令に接せるが如き事あり、法が自由裁量に任かせたる事項に於て斯の如きは已むを得ざる事なれど、其範圍には、法が要求する禁止條件なかりしにも不拘、其思想の傾向が、官僚の思想の傾向と反するが爲めに禁止の災厄に遭ひし事は之を一見するもの、直に思ひ至る所なり、換言すれば、自由裁量を委任されたる官吏の教育の時代遲れと、專制思想に對する盲從との爲めに、法の正當なる要求に基く自由裁量を行ふ能力無きものなる事を推定し得る也、黃色紙風の新聞雜誌の禁止は、何人にも明白に法の要求する安寧秩序、又は善良の風俗を害する條件を備ふる顯著なるものある故、此頃の實例も甚しく不法ならず、唯眞面目なる言論、又は藝術上の作品に對する壓迫に、明かに官僚の個人的傾向に判斷の基礎を置ける事を察せしむる也、個人的傾向に基く自由の壓迫は、專制政治の一特徵也……

と斷じ、更に、刑の適用に於て自由裁量の廣き權能を與へられ居る今日の裁判官が、其の個人的傾向に基いて大なる過失に陷ることを危ぶまれ居ると比較し、

吾人を以て見れば、多くの場合は、不良民を取扱ふ裁判官よりも、良民を取扱ふ行政官の誤れる自由裁量の方、遙か恐るべきものあるを感ず、殊に政治的言論と、文藝的作物との自由は國民の文化の促進の二大要件也官憲が此の二大要件に壓迫を加ふる事は、我國の文明の阻妨也、歐洲の戰爭にて交戰各國は言論の注意に忙殺され居るが、之に反

家生存の戰に於て已むを得ざる警戒なり、然も英國の如きは毫も平時の出版行政を攪亂せしむる事無しといふ、而して活動フイルムの檢閲官の任命の如きにも重大の注意を拂ひ、其人の教養と人格を保障し得る事を期せり、我邦の言論出版の取締の實況を明白にせば、恐らく文明國たる誉を毀くるものあるべし、我國家の教權の確定は斯かる官僚の徒に依て擁護せられずして却つて破壞さるべきものなる事は、愚なる迷信的宗教家が自家の教權を保護せんとして、破壞せしめたると同一のものあるべし……云々、（大正五年三月廿三日大阪朝日新聞社説欄參照）

苟も常識を備へた者は此の所論に首肯せざるを得ないであらうと信ずる、而して此の文藝的作物の自由を尊重する點に於ては、所謂、國家萬能主義の獨逸に於ても、決して英國に讓らない、否、或意味に於ては寧ろ英國以上であるといふ事をも附說して置き度い、それは獨逸の官憲が、一國の文化の促進を以て、國家の心臟を强健にし、國民的生命を伸長せしむる所以の、最重、最大の事件である事を理解してゐるからである。少くも獨逸文化の指導者たり、鼓吹者たる地位に在る高級知識階級の意見に聽き、猥りに自家の狹隘なる性癖の爲めに、一大過失を犯すに至らん事を自ら恐れ、自ら誡むる思慮と常識とを所持してゐるからである、もう大分以前の事であるが、肉慾滿足主義謳歌の小說「ザアニン」が、露國語から獨逸語に譯せられて出版されると、官憲はやがて發賣禁止を命じた、而も文壇の高級知識階級から成る委員會の意見に聽いて、早速その發賣禁止を取消した實例もある、それから、社會主義的傾向の演劇の上演は勿論カイザーの喜ばざる處であるが、而かもカイザーはその上演禁止を命じない、唯、自分はそれに對抗して、獨逸の祖國主義の古典劇を保護し、奬勵し、何れが果して國民的教化の上に、最後の勝利を占むるかを、自由競爭に一任してゐる、否、自らその自由競爭に參加して男子らしく戰つてゐるやうな次第である、所謂、國家萬能主義の獨逸が、文藝的作物に對してかゝる尊重の態度を取つてゐるのは、深く鑑みなければならぬ事實であると思ふ。

行政官吏が自己の自由裁量を以て發賣禁止を行ふの危險なる實例は、頻々として眼前に現はれて來るが、最近「白樺」の發賣禁止が聖徒セバスチアン受難の插畫を慘酷だとする見地から行はれたとすれば、此れ等は甚だ戒愼し、省慮せなければならぬ事實だと思ふ、數矢が肉體に簇り血が流れてゐる畫面は、一見して慘酷だと云へば慘酷であらう、それは恰も、人體を十字架に縛り付け、兩足は釘付にされて、脇の下からは血が流れてゐる畫面の、一見して慘酷であるのと同じ事である、乍併、これ等の畫面には思想の背景がある、その思想を會得する者には、慘酷といふ感は消失して、崇拜の念、渇仰の情が湧上つて來る、若しかゝる繪畫を慘酷と判斷する者があつたら、その人は即ち思想の無い人である、否、この繪畫を理解せざる者であると云つても、差支ないのである、朝日新聞社說の所謂「官僚の個人的傾向に判斷の基礎を置く」事の危險を痛切に感ぜしむるものではなからうか？

要するに出版物、興行物の取締を行政官の自由裁量に一任する事は、

一國文化の大問題を輕々しく取扱ふ者たるのみならず、當局者も亦、過失に陷り易く、迷惑な話であるから、此れは何しても、制度を改めて、文藝批評家、學者、經世家等より成る一種の諮問委員會を設け、當局者が自ら判斷に迷ふ際に、その委員會の意見に聽いて、過失を少くするの手段、方法を取るのが、今の處、最良の途であると思ふ、かゝる新制度を法律案若くは建議案として、議會に提出するのが差當り、改善の門戶を開く所以であらうと信ずる、言論、思想の自由主張の開山、大隈伯を首相とする現內閣には、殊にこの事實を省慮せなければならぬ一大責任がある。

▽發賣禁止に對する三要點

岩野泡鳴

（一）

大正元年のこと、西園寺內閣の時、僕は文藝に關する行政的取り扱ひ方に就き、時の總理大臣西園寺侯並に內務大臣原敬氏に一つの建白書を提出したことがある。それは僕の創作的生涯にたツた一回受けた發賣禁止を動機として一般のかかる禁止に關する意見を述べたもので、その意見は今でも僕には變はつてゐない。

その要點の第一には文藝取り締りの方針に當局の不理解と偏見とを排し、第二には當局と文藝家との衝突に二種の原因があることを云ひ、第三にその衝突原因の第二種が最も多いので、それに對する今少し便利な實行法を說いたのであつた。

（二）

今の警保局で、或雜誌を口繪に出た名畫が殘酷な感じを與へる恐れがあるとして發賣を禁止した如きは、僕の云つた要點の第一に當るのである。繪その物には少しも弱點はない。繪の全體を平均に見ないで、ただ矢が深山ささつてると云ふ一面だけを誇張して殘酷だと見做したのは、圖書檢閱と云ふ役目を餘り故意的に働かせ過ぎたのか、然らざれば、高級の趣味を理解しない偏見からかの爲めでなければならぬ。

小說の禁止にもこれまでにかかる場合のもあつた。僕が禁止を受けた作『發展』には、癩病をうつされた女がその痛みに苦しんでる所の描寫が、云はれて見ると、少し露骨であつた。それが禁止の原因であつたとすれば、露骨な箇所をもツと控へ目に書く道が確かにある。然し、眞面目な人生研究に當る種類の小說――これには人生の必然上隨分暗黑な方面が添ふものだ――に對して、人生その物の研究や觀察が深くないところからの表面的獨斷若しくは偏見を以つて、そんな方面は書かないで、もツと面白いこと若しくは光明界のことが書けるではないかと尤もらしく添へ言したり、命令したりするものが少くはない。

代々の當局者にもそんな偏見と無理解とを以つて公けの處分を實行したとがないとは云へない。そしてそれは公けの事を一私情を以つて處分

したことになるのである。蓋しかの添へ言や命令は單に一私人の遠慮や安價た獨斷であるからだ。文藝家だッて、當局者と同樣公けの人である。ただ政局に當ると當らぬとの相違があるだけだ。僕等が一面に於いて公けの文藝家である以上は、その點に於いても當局者はもッと理解ある讓歩を爲すべきだと思はれる。

この要點に關して今一つ云ひ添へて置きたい。眞面目な人生研究的小說が自然に暗黑面に深く這入る場合、當局者の無理解な觀察の爲めに、賣れ行きばかりを目的とする通俗小說やきわ物出版物と動機が同じであるかの如く見做されることがあるやうだ。が、僕等の如き眞面目な作家連の作は、深刻に暗黑面を寫せば寫すほど、讀者の範圍が少いのである。それを重々承知の上で、或ものは貧乏をも忍びつつ、なほ且賤い低級の趣味と惡戰苦鬪してゐるのは、その動機や態度に於いて少しも卑劣や不眞面目のない所以だ。『不如歸』の小說があはれッぽくて多くの讀者を得た如きを暗黑小說のうちに數へてゐれば間違ふ。あんな涙は光明的も光明的も最もあまい安價な光明である。

（三）

警保局の後藤課長の談話が時事新報（四月三日）に出たのを見ると、或呼び出された出版社が『私等も　發賣禁止に逢ふことは）當然のことと思ひます』と云つたさうだ、『但し困るのは風教上のものを作つても賣れて行かぬ』と。そんな不眞面目な出版社を標準にして他の眞面目なものを取り扱はれてはそれこそ困る。且、その出版者の所謂『義あり涙あるもの』ばかりが眞面目な出版物ではない。それから『風教上』と云ふことも、さう容易に區別が出來ぬことで、一私情的斷定を以つて云爲しないやうにして貰ひたい。

たとへば、ゾラの小說『ナナ』に於いて、ナナが暖爐のそばで男とあられもないことをするところの描寫などは、僕等が見ても發賣禁止に價へするのが當前だと思ふ。が、今の英文譯にはその場を入れてない。そしてそれを重譯した邦譯が禁止になつたのは何故だらう。僕が或英譯に依つて判斷して見たところでは、どこにもさうひどいところはないが、たッた十七八才の少年がナナを戀して花輪を送り、それから度々母の看視を拔けてナナに會ひに行き、ナナも或時はこれを自分の初戀の氣になつて愛した。

ところが、或時少年を呼び戻しに行つた少年の兄なる若士官も亦、とう〳〵、少年に隱れてナナに會ふやうになつた。そして少年は恨み死に自殺した。こんなことがいけないのだらうか？また、ナナの場合は別としても、こんなことが——若しわが國の小說に出れば——今の當局には發賣禁止の問題になりさうな傾向だ。が、僕等ならば、たとへ風教上からでも、こんな事が徒らに挑發の筆ではなく、眞面目に研究描寫されて發表された方が、世のあまい親に取つても、無經驗な青年に取つても、處世上教育上の反省を與へて、爲めになりこそなれ、風教を害するやうなことはない。わが國の箱入り娘に失敗が多く、またちょッとした誘惑にでも落ちてしまうのは、こんな小說を讀んだこともなく、こんな話を聽

いたこともない爲めではないか？また、曾て娘が親に反抗したことを書いた小說だからと云つて禁止になつたのがある。が、子が親に反抗するのは親若しくは老年者から云へば如何にも不都合だが、今の一般世間の子から見れば、新時代の理解を親にも敎へる點で、風敎上最も必要なことにもなる。現代は青年が老人に物をそはるよりも、青年が老人に敎へねばならぬことが多い時代だ。

（四）

以上は當局者と文藝家との接觸點を十分に理解させる爲めに述べたことだが、これから第二の要點に移る。

兩者の間に不理解若しくは偏見の私情が撤せられ、公けと公けとの突き合はせになつても、なほ且衝突しなければならぬ場合には、その原因は二種ある。その一つは、出版物その物の全體に現はれた思想若しくは事實が全く衝突の原因になる場合だ。たとへば、無政府主義に類する主張だとか、露骨な共和主義の意見書だとか、全部がわざとらしい挑發若しくは殘酷で埋まつてる書物だとか。それ等でさへ、あたまから罪惡扱ひにすることはすべきでなく、多少でも研究的であり、若しくは研究材料の提出でありとするところが見えれば、成るべくおほ目に見るべきである。かの幸德事件の時に、無政府主義の物も、それでない社會主義の物もごッちやにして、捲き上げてしまつた如きは、誰れが見ても當を得てゐなかつた。

一出版物の全體に渡つて衝突の原因があるのは、そこに書いた事實若しくは思想に於いてだ。淺薄な光明小說のみを善良だと見做す當局者が假りにあると見て、──無論、當局者がはの思ひ違ひからだが、──眞面目な暗黑小說の事實を全部よくないとする場合がないとも限らぬ。先年、『マグダ』が上場禁止されたのは主人公なる娘があまりその老父を子供あつかひにするのがわが國の習慣に反する事實だと云ふに在つた。今年、藝術座で軍人の未亡人が人に隱れて男を拵らへたに基づいた悲劇の上場を禁じられたのも、事實の上からだ。然しをかしなことには、同じ事實を軍人から一私人の探險家に取り換へて許された。これは、曾て、姦通の事實が高等官、殊に宮内省なら判任官にも當てはめられるのがいけないと云つて禁止になつた時のやうなものだ。あの場合には、宮内省以外の官吏なら、高等官にさへ當てはめなければそれでいいと云ふのであつた。あの時の當局の申しわけは、明治聖代の歷史を汚すと云ふのであつた。馬鹿々々しい！高等官だッて、判任官だッて、また軍人だッて人民だッて、人間として文藝に取り扱はれるには平等ではないか？

（五）

それから、專ら思想の上で衝突するのは前々項に云つた無政府主義、共和主義等がそれだ。これは禁止も止むを得まいが、そのまた前に云つた親子の衝突なども亦多くは思想問題である。但しこれは禁止すべきものではない。昔は親の貧窮を娘が身を賣つて救はぬなら不孝の極だと思はれたが、今日では、娘に身を賣れと云ふ親の方が一般に攻擊を受けてゐる。で、ここに或小說があつて、子が親に對して飽くまで反抗の意志

若しくは行爲を示めし、自分を親が生んだことさへ不平を云ふとしても、その不平が親の無理解な命令に基づくとすれば、その動機なり行爲なりに於いて禁止を價へさせるべきではない。老人から云へば、自分の無理解は棚に置いて子の不都合を責めやうが、子の理解から云へば、時代に相當した着實の歩みである。かかる關係は、獨り家庭上ばかりでなく、他の場合に老人と青年、先進者と後輩、爲政家と人民との間に多くなつたが、すべて舊思想と新思想との衝突だ。この種の衝突をよく理解しないで、直ちにわが國從來の善良な習慣に反するなど云ふのは、賢明なる爲政家の言ではない。

この場合若し當局者が舊思想家なる爲めに新思想を――別に新時代に向ふ人々には危險でも何でもないのに――禁止する手段に出るとすると、それは如何なる申しわけがあつても、――乃ち、風教上にしろ、他の政策にしろ――私情的處分であつて、爲政家としては專横である。そしてそれをもいい氣になつて敢へてするのは言語道斷で、舊い官僚派的餘風に過ぎぬ。かかる專横な餘風を襲襲する爲政家があればあるほど、必然に新時代を開らきつつある有爲の人々に不平と反抗心とを起させるばかりだから、現代の風教を矯正するどころか、却つて爲政家から風教や秩序をかき亂だす所以なのを覺悟すべきである。

然しこれまでの發賣禁止には出版物の全體の思想若しくは事實が惡かつたと云ふのは甚だ少かつたやうだ。そして現今の責任ある眞面目な人生研究的小說家等の作に、若しそんな場合が出るとした時には、當局者は先づ、自分の舊思想の偏見からさう取れるのか、それとも作家の新思想が餘りに過激な爲めであるかを、十分公平に考へた上にして貰ひたい。理窟と云ふもの、申しわけと云ふものは、偏見者や不公平家にも尤もらしく付くのであるから、そんな事を手頼りにして處分を斷行するのは僕の所謂專横だ。當局者はよく行政上これでもなかなか苦心があるとやうに云ふが、その苦心はただ專横の傾きから私情的苦心に落ちてる恐れがあらう。

（六）

で、當局者と文藝家との衝突原因は多くは第二種のである。乃ち、一作物中の部分的若しくは字句的衝突である。『マグダ』でも僅かのせりふを書き改めて許されたし、『お葉』でも軍人が探險家に變はつただけだ。して見ると、あつい雜誌がそのさし絵一枚の爲めに禁止になつたり、或書の如きはたツた一ケ所、而も僅か二三言の不穩當な字句があつた爲めに三四百頁の書全體を禁止されたりしたやうなことが、實際は、少くはないのだ。

そこで、第三の要點なる發賣禁止の實行法に就いての注意だが、簡單に云ふと、如何に禁止しても、禁止前に人の手に渡つた分は致し方がないから、賣れ殘りを先づさし押さへて、雜誌なら惡い箇所を訂正若しくは抹殺させるし、書物ならその分をたとへ沒收したとしても、訂正の上第二版を出してもいいことにして貰ひたい。これは多少當局者に於いても手段がかさむだらうが、それ位のことは寬大に取り扱つてもよからう

と思ふ。そして全然禁止することだけにやめさせたい。

（七）

以上は僕の正面からの意見であるが、若しこの種の當局者と文藝家とが社交的に互ひに談會し合ふ機會を作つて行けば、別にまた相互の理解が出來るだらうと思ふ。但し當局者もおもな人々は政變毎に變はるので、文藝家がはに永久的な自衞方法をもやつて置かねばならぬ。僕は曾て僕の著『近代思想と實生活』に於いて『文藝家の團體的武裝』を論したのは、それだ。最近に出來た日本著作家協會の如きを、もツと範圍の狹い、そしてもツと權威のある團體にすれば、それが實行も出來よう。

（大正五年四月十六日）

▽不當なる近時の發賣禁止

東京辯護士 法律新聞主筆 安達元之助

一、發賣禁止の流行

最近『中央公論』が谷崎潤一郎氏の「恐怖時代」を掲載した爲め、發賣禁止となつてから、次いで『白樺』も亦た一掃蕩の爲め同一運命に陷り、其他の各雜誌に對しても、當局者は嚴しく發賣禁止を斷行して居る、其掲載の事柄が發賣禁止に値ひするや否やは、當該官吏一片の好惡に因る認識に作つべきものに非ずして、國民の思想、社會の習慣、實際の法理より容納して、之を斷ずべき筈であるが、我が當局者の文藝に對する態度は、常に貧弱なる自個の頭腦に從つて、直ちに斷案を下すことを辭せざる暴勇である、現時の警保局長湯淺氏は、所謂大浦門下の逸足にして、隨つて其見や固陋、其心や官僚、民衆と社會とに對して、豊かなる理解を有して居らぬ、同局長時代に入りて發賣禁止の頻々たるもの、寧ろ當然とすべきであるが、吾人は國家の文明と國民の藝術との爲に、之を默することが出來ぬのである、今日の警保局は警務、保安、圖書の三課に分れ、警務課に於ては行政警察、保安課に於ては高等警察、圖書課に於ては圖書、出版、著作權の事を司掌して居るが、新聞雜誌の內容は先づ圖書課に於て査閲し、而して後に保安課に於て、夫れが秩序を紊し風俗を害するかを判斷するであらうか、文藝上の鑑識なき高等官五六等の官吏が、果して正當に之を解釋し得るや否や、甚だ疑はしと云はねばならぬ、警視廳とても同一であつて、其保安部の事務の一項として、風俗警察を司掌して居るが、三拾圓や四拾圓の警部、屬官が、文藝の批判を下して、發賣禁止の大鉈を揮ふに至りては、一種の滑稽を感ぜずに居られぬ、不當なる對談術の壓迫は、斯くて其弊を制度組織の不完備にて受けて居る、若し當局者其人を得れば、此不備を補ふことも出來るであらうが、官權萬能の猾吏を迎へて居る今日では、其弊や益々甚しきに至るであらう、自由民權運動の自然時代にありては、治安妨害と云ふことが即ち一切の言論著作を禁止する當局者の口實であつた、大正の當局者は風

俗壞亂と云ふことを標語として、藝術の壓迫を試みたとするのであるまいか。

二、風俗を害するとは何ぞや

『中央公論』所載の「恐怖時代」及び『白樺』の一挿畫は、其自殺場面の描寫、或は磔殺の光景が、人に殘忍酷薄の感を與ふることに於て、風俗を害するものであると云ふ解釋らしい、而して當局者は窃かに此新方針を誇つて居るとのことである、成文に依れば出版法第十九條は「……風俗を壞亂するものと認むる文書圖畫……」は其發賣頒布を禁し、且つ差押をなすことを許し、同法第二十七條にも「風俗を壞亂する文書圖畫を出版したるものに著作者發行者を十一日以上六月以下の禁錮又は拾圓以上百圓以下の罰金……」と現定し、新聞紙法第二十三條には「……風俗を害するものと認むるときは……」發賣頒布の禁止、差押並に第四十一條には「風俗を害する事項を掲載したるときは發行人編輯人を六月以下の禁錮又は貳百圓以下の罰金」と規定して居るが、此風俗と云ふこと、及び害すると云ふことを當局者は如何に解して居るであらう、吾々の知らむとするところは之れである、風俗と云ふことは社會の進歩移動する文明の尺度に從ふべきものであつて、當該官廳又は裁判所と雖も、必ずや一般民衆の相當純正なる認識に基きて、之を決定せねばならぬものである、若し當局者が藩閥政府時代に於ける方針、或は日清戰爭以前の思想を以て、風俗と云ふ觀念を定むるが如くならば、總て藝術のみならず、今日の一切の事相世相が、悉く風俗を害することになるかも知れぬ、且つ風俗を害するとか壞亂するとか云ふことは、善良なる風俗に反するといふことではない、固よりまた風俗の向上發達に資益するところなしと云ふ意味でもない、國民の思想、感情、認識に依つて構成せられたる風俗そのものを動搖せしめて、積極的に害毒を傳播せしむるの謂ひである、舊刑法は第六章に於て「風俗を害する罪」なる一項を設け、第二百五十九條に於て「風俗を害する冊子圖畫……を販賣したるものに……」と定めてあつたが、現今刑法は全然之を削除して斯くの如き章條を設けず、單に第百七十五條に於て猥褻の文書圖畫を公然販賣陳列するものを處罰することにして居る、是れ風俗を害すると云ふことは、時代の推移、國民思想の變化に依つて、永久的に之を定むることが出來ぬからであるのみならず、道徳に反する文書圖畫と雖も、必ずしも風俗を害するものにあらざるが故である、我民法第九十條も善良の風俗に反する法律行爲を無効として居るが、其風俗に反するや否やは、主として國民の感覺に基きて之を判定し、一片の理論若くは理想を以て之を解釋すべきに非ずとせられて居る、思ふに「恐怖時代」一篇を以て風俗を害するものとしたるは、當局者が自個の最高理想とする道徳觀念を以て之を律し、善良なる風俗を展開せしむるに資益するところなしとしたるが爲めであらう、果して然らば是れ法の要求する風俗の壞亂と云ふことを理解せざる處である、而して文藝と社會との關係に盲目なるが爲めである、吾人は當局者の固陋を憐まざるを得ない。

三、一種の矛盾也

藝術が至境に入るとき、吾々はたゞ渾然として其眞美と調和とを感じ得するのみである、誰れか基督の十字架上に殺さるゝ聖畫を見て、不快の惑を起すものあるべき、誰れか會津白虎隊の少年か、相擁して自殺するの場面に接して、慘忍を感ずるものぞ、人を斬ること瓜の如き古勇士の繪畫を見るも、吾人は決して殘薄の念に襲はるゝことがない、一切が美化されて居るからである、思ふに『中央公論』や『白樺』の讀者は、主として中學以上青少年にして、其思想に充分に藝術を包容して居るから之れあるの故を以て風俗を害するの文書圖畫なりとせる當局者の頭腦は現代の文明と思想と、併せて藝術とを解せざるものと云はねばなるまい、若し當局者の見を以てすれば、旅順の屍山血河を描きたる『肉彈』や日本海上の慘殺を描きたる『此一戰』の如きも、殘忍性を養成するものとして、其發賣を禁止せねばならぬことゝなるであらう、久しく國民に愛讀せられつゝある英雄、勇士、美人、節婦の物語や繪畫も、其或部分は之を禁止せねばならぬであらう、之を爲さずして單に新しき思想感情を以て描きたる現代文藝に對してのみ、壓迫を加へ發賣禁止するは、當局者が近代思想を了解せず、風俗を害すると云ふ法の精神を誤解したるものにして、重大なる矛盾と云はねばならぬ、當局者は言ふであらう、彼の『肉彈』や『此一戰』や其他は、悲慘の裡に教訓を含むで居るが、此の「恐怖時代」は道德に關係して居らぬと、藝術は必ずしも善を對境とするものでないと云ふことを知らぬ當局者が、斯くして發賣禁止を續々することは、國家と民人との爲めに甚だ憂ふべきことである、藝術そのものは國に害毒を流すものとせば、宜しく之れが發賣禁止を命じて其文ない、然れども藝術を以て倫理道德の教科書たらしめむとするに至りては當局者に明かに誤解を繰返して居るものである。

四、其救濟法如何

不當なる發賣禁止を防止する方法如何、所詮は人の問題である、我國の官吏が官僚思想に囚はるゝことと今回の如く、而して近代の文明を咀嚼し、近代人の思想を味得して、藝術と國民との關係を知悉することとなき今日にありては、藝術に對する迫害、出版物に對する過重の制限は、到底之を救濟することが出來ぬかも知れぬ、然れども社會立法と自由法學とが、漸く其勢力を扶植して、判檢事と雖も尚ほ其裁判上、新しき思想に接觸することを要する現代にありては、出版物取締を司掌する當局官吏も、今少しく自覺せねばなるまい、而して吾々は當面の問題として、左の四事を要求して置く、

(1)出版物取締職制の改定　今日の如く出版物の取締を警察官と警察官舍の警保局官吏に一任して置くべきでない、此等の官吏は文藝を理解せずして、國民を盲隷視する習慣の見地より、發賣禁止を獨斷するからである、故に之を文教を掌る文部省の官吏との共同判斷に求めたり、東京市にあつては警視廳より之を申達して、警保局の官吏と文部省の圖書官吏との共同審議に依る決定に待つべく、地方にありては、各警察署より之を申達して、警務長、視學官、内務部長とをして之を審議せしめたいのである、文教を掌る官吏と雖も、其思

くが藝術に關する知識、同情、理解を有して居ると云ふこと能はざるも、警察官根性に囚はれて居る今日の當局者よりは、幾干か進歩して居ると思ふ。

(2)禁止處分に對する訴訟　發賣禁止を受けたものは、其行政處分に對して内閣總理大臣に訴願することを得せしめ、更に其訴願の決定に對して、行政裁判所に訴訟を提起することを許して宜しい、發賣禁止は瞬間に起り、其差押は直ちに來るを以て、禁止處分の當否を爭ふこと、畢竟無益なるが如くなるも、風俗壞亂を以て發賣を禁止せらるゝと云ふことは、其出版者の名譽と信用とを害するものであるから、若し訴訟の最後判決に於て、行政官廳の處分が不當であることと明かになれば、出版者は一時の金錢上の損害は之を救濟することを得ずとするも、永久に其名譽信用を回復するのである、風俗壞亂と云ふことは、甚しく家庭を顰蹙せしむるのであるから、其販路を妨ぐること甚しいものである、之を神聖なる裁判に依て、處分の當否を決定せしむるの必要がある。

(3)不當處分に對する國家の賠償　國家の不法行爲に對する損害請求權は、歐米と雖も未た充分に之を認めて居らぬ、然れども第二十八回獨逸法曹大會の如きは、速かに之を實行すべきものと決議して居る、日本の法律に於ては判檢事、登記官吏等が、故意又は重大なる過失を以て、他人に損害を與へたるときは、其賠償責任を命して居るが之れさへ正確に實現せられぬのである、然れども公權の發動に因る不當不法の行爲と雖も、直接に國家に責任を負擔せしめて差支ない、不當なる發賣禁止は多大の損害を出版者に與ふるものなる以上、其不當裁判の確定と共に、國家は宜しく其損害を賠償すべきである、是れ近時の立法思想と合致したものである。

(4)禁止理由の發達　刑事裁判に理由を附せざるの不當は、屢々在野法曹に叫ばれて、近時聊か其滿足を得たるが、警察處分に關することも、其重大なるものに至つては、宜しく其理由を附して、當事者をして其決定の趣旨を知らしむべきである、出版物禁止の如きは、讀者をして其期待を空ふせしめ、出版者をして多大の費用を空費ならしむると共に、併せて信用を失墜せしむるものなるが故に、當局者をして其理由を發達せしむるを可とする、單に禁止處分を通告するのみであれば、社會は之に對して批判すること能はず、隨つて當局者も官權を濫用して、輕忽に禁止處分を斷行するの虞れがあると思ふ、故に出版物の禁止に付きては、如何なる點が秩序を紊すか、如何なる意味に於て風俗を害するかの説明をなさしめ、之を被禁止者に發達せしむべきである、其理由の完不完に依りては其官吏の能力を判別し、之を黜陟することも出來ることであらう。

不當なる發賣禁止の頻發に際會して、吾々は切に官吏の社會的知識に乏しきを慨嘆せざるを得ぬ、風教に關係し文藝を取締る官吏位は、哲學、社會學の一片や、若くは近代の思想と文藝とを研究して貰ひたい、何故に大文學は出でざるかの叫びは、其責任の一半を當局官吏の文藝に對す

る無智無能に歸することが出來ようと思ふ、敢て此一言を警保局と内務省との官吏諸君に呈するのである。

▽行政訴訟、民事訴訟を提起する道を開け

法學博士　大場茂馬

是迄に發賣を禁止されたものあることを聞知して居るが、如何なる出版物が如何なる理由に依り發賣せられたのであるか、其詳細を能く知らないのであるから、今玆で當局者の態度に就て其當不當を論ずる事は出來ない。然し取締る方法を執る以上は、劃一と云ふ事を期し、不公平不均衡であつてはならない。一方の出版物は許し他方は罰するとか、あれなら禁止されても可いと思はれるものが禁止されず、別に差支ひないと思はれるものが禁止されるやうでは駄目である。其邊に何とか然う云ふ事にならぬ方法が必要である。有體に云へば、此頃の出版物には如何にも挑發的であるものが有るらしい。然うしなければ讀者が喜ばないのである。然う云ふ出版物は、實際多數の讀者の趣味や要求に應じて生れたので、即ち社會の半面を描き得たものである。けれども文筆に携はる人は然う云ふ世俗の風潮を寫すのも任務であるけれども、一代の風潮を指導して行くのも亦其任務である。

當局者に就て云へば、一體取締り規則は取締るのが本旨であつて、處罰するのは本旨では無い。故に假りに風俗を亂し秩序の安寧を紊る出版物に對しては、禁止を命ずる前に於て注意其他の方法を執り、取締りを公平にする必要がある。一體吾々の考へて居る所では日本は警察國である。行政官の見込だけが終局の判斷となる場合が多いのである。これは甚だ危險だと思ふ。發賣を禁止した當局者に間違があつても、少しも之を匡救し是正する途を開かないのは、慥に制度に於ても惡いと思ふ。即ち不當なる言語思想の取締を爲すことの必要なること勿論であるが、其取締の過誤又は不當を匡救是正する途を開くことも亦必要であると思ふ。然ういふ不當なる行政處分を匡救是正するに如何なる制度を設けるが宜しいかと云ふに、行政訴訟とか民事訴訟を提起することを得る制度を設くるを可なりと思ふ、然して其具體的成案に至りては之を他日に讓りたい。

▽發賣禁止に就きて

谷崎潤一郎

出版物を取り締るに方つて、當局者が今少し親切に、且理解を持つて欲しいと云ふ事は、多くの人が望んで居る。

私は今の當局者に、直ちに理解を求めるのは聊か無理な註文のやうに思ふ。藝術家が彼等を征服せんが爲めには、今少し長い間の眞面目な努力が必要であらうと思ふ。殊に私の書く物などは、永久に彼等と相容れる日がないかも知れない。

たゞ親切な態度だけは、明日からでも取るやうにして貰ひたい。もう少し作者や出版者側の利害を考へて貰ひたい。たとへば劇場が或る脚本を上場するに方つて、豫め當局の檢閲を經る事が出來るやうに、雜誌の經營者が或る作物を掲載する際に、禁止の恐れありと感ぜられる物は前以て當局者の内見を乞ひ、双方の互讓相談に依つて削除す可き部分を定めるやうな方法を立てるのも一つの手段かと考へる。さうすれば、小說の爲めに外の記事までも犧牲を蒙むるやうな迷惑がなくなるであらう。

然るに今の當局者は、何故に、何處が惡いと云ふ事を摘示しないで禁止を喰はせる場合が多い。これでは當局者に誠意の認むべきものがなく唯折々の氣紛れで官權を濫用するやうに誤解されても仕方があるまい。私は彼等がいかに氣紛であるかと云ふ事實を證するに足る滑稽な逸話を澤山にきゝ込んで居る。

それから、彼等がほんたうに社會公衆の秩序良俗を標準にして取り締まるのなら、形式よりも實害を考へて貰ひたい。此の點に於いても綿密周到なる注意と親切とが缺けて居るやうに思ふ。

▽出版法改正の必要

澤來太郎

出版物の發賣禁止と云ふ事が、近時に至つて依然として盛んとなり、予の関知する範圍内に於ても、「中央公論」の「恐怖時代」、「白樺」のセバスチアンの挿畫、「講談倶樂部」の「赤いもの嫌ひ」の口繪、「帝國文學」の何とか云ふ小說等其數がなか〳〵多い。又中村吉藏氏の「眞人間」の如きも上場禁止となつたさうだ。而して其理由とする所を聞けば、殘酷だとか卑猥だとか、又は軍人未亡人の不品行を書くのは不可ぬとか、極めて茫漠たる、又は滑稽なるものである。苟も一國文明に至大至深の關係ある出版物に對するに、かゝる不見識なる、氣紛れ的態度を以て臨むと云ふ事は實に由々しき大事といはねばならぬ。

一體我が政府當局者の出版物取締に關する態度を觀るに、餘りに神經過敏の結果、往々取締の限度を超えて、著作權を侵害して顧みざる如き有樣となつて居る。甚だしきに至つては出版當時より遡つて數年以前の出版物に對して其發賣頒布を禁止する等の如きこともある。此くの如きは法文解釋上よりするも最も誤れる行爲と言はざるを得ない。何となれば『出版圖書ニシテ安寧秩序ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スルモノト認ムル時ハ内務大臣ハ出版法第十九條ニヨリ其發賣頒布ヲ禁止スルコトヲ得』るも、其權限は法文に明記しある如く『文章圖書ヲ出版シタル時』とあ

りて、取締範圍は出版當時に局限されて居る。然るにも拘らず或は數年前に遡り、若くば前記脚本『眞人間』を東京に於て禁止したるが如き、都會興業なれば之を禁じて地方興業なれば之を是認するが如きことは、當局自ら法文の解釋を二三にするものであつて、無定見といふよりも寧ろ滑稽と言はざるを得ない。加之政府が一般書籍の著作者をして出版法第三條によりて發行三日前に製本の屆出をなさしめ居るは、取りも直さず内務大臣をして其の發行前に發賣頒布禁止の事項なきや否やを檢閲せしめ、一は以て安寧秩序の妨害及び風俗の壞亂等を未然に防止し、一は以て著作者の發行後に於ける損害を豫防せんとするに外ならず。然るにも拘らず發賣後に於て初めて之を禁止するが如きは、全く發行三日前に於ける製本屆出の必要なきことを自白するのみならず、法律の精神を政府自ら沒却して顧みざるの行爲なりと言はざるを得ない。嘗て政府が社會主義なるものを極端に誤解したる當時の如きは、數年前に發賣頒布を許したる木下尚江、田岡嶺雲、幸德秋水等の著書小說の發賣頒布を禁止したることもあつた。斯くの如く屢々以前に遡つて其當時の出版物を後に於て禁止するが如きは、所謂昨是今非の極にして政府の無定見を公表するものなりといふも過言ならずと信ずる。斯くの如き行爲は法律の上に於て保護するところの著作の版權を随意に侵害し、多大の損害を加へながら何等の救濟方法を講ぜざる無法の暴擧と見做さざるを得ない。

現に今回に於ける中央公論の『恐怖時代』の發賣禁止の如きに徴するも、當局者徒らに神經を過敏ならしめ、其結果作品の大觀を缺き、漫に局部の描寫に拘泥したるの嫌を免れない。若し當局者にして作品を見るの明あらんか、之を作品の全局より觀ることを先にし、部分描寫の如きは寧ろ不問に附すべきである。惟ふに當局者は部分描寫の辭句中殘酷なるが如き點に重きを置きたるものなるべし。若し然りとせば從來我國に行はれ來りつゝある舊脚本及び舊講談中にはより甚しきものがある。然れども舊脚本舊講談の仕組は勸善懲惡を主眼としたるもの多かりしの故を以て、敢て部分描寫の殘酷に亘りし如き點を尤めなかつたものである。中央公論に於ける『恐怖時代』の如きも之を大觀すれば、惡事を巧む惡人も亦善人と共に亡びて人生は畢竟一の兒戲に類するが如きことを描いてあつて、寧ろ人生の弱點を指摘して社會を諷刺せんとしたものと見ることも出來る。之を殘酷の行爲を是認し且つ推奬したるものと見做すが如きは甚しき輕忽の擧と言はざるを得ない。

其他出版物取締に關する歴代政府の無謀無定見については指摘すべきこと多々ありと雖も、紙面に限りあるを以て今玆に列擧することを省略する。

之を要するにかゝる誤りたることをして平氣で居ると云ふのは其取締上最も愼重を要すべき人文風敎に關する出版物の價値を餘りに輕視し居る結果たらざるを得ず。同じ藝術品中にても一方繪畫の如きは比較的深き注意を拂ふて官設展覽會には特に審査官を設け、批判を公正ならしめんと努めつゝあるに拘らず、他方文藝作品の取締に限つては之が善惡の批判は表面警保局長專ら其任に當り居るものゝ如きも、其實之が部下に

して何等の藝術趣味を有せざる警部の如き一微官の手に委するを常とすと聞く。果して然りとせば其批評を誤らざらんと欲するも豈得んやである。何ぞ夫れ前者に重きを置いて後者を輕んずるの甚だしきや。

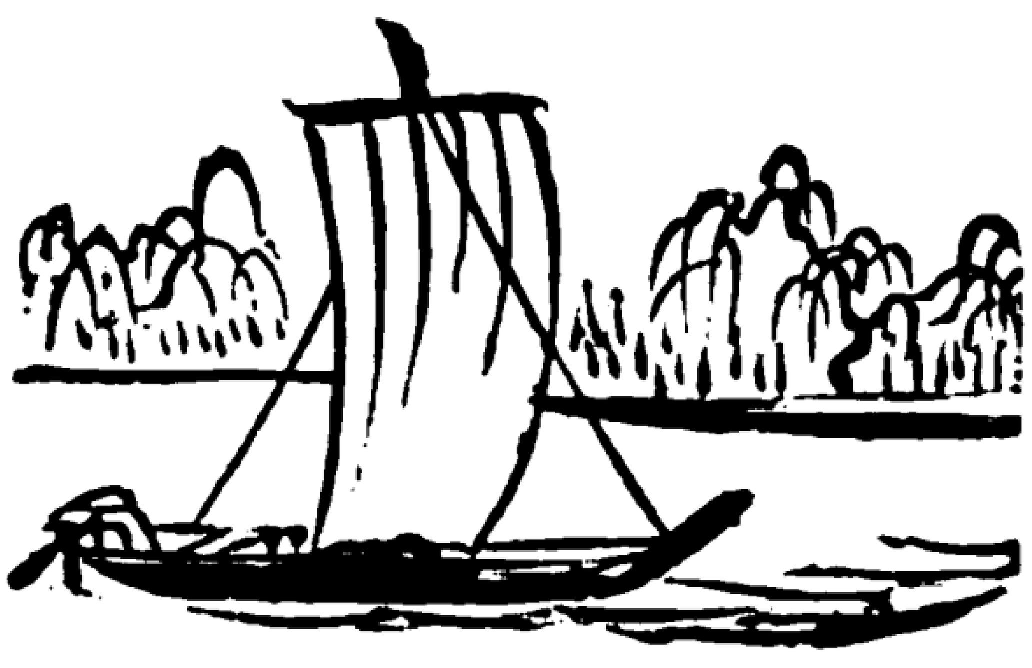
之が解決案としては人によつて見るところを異にする勿論なるべしと雖も、出版法の改正を以て第一となさゞるべからず。而して其改正中の重もなるものは、

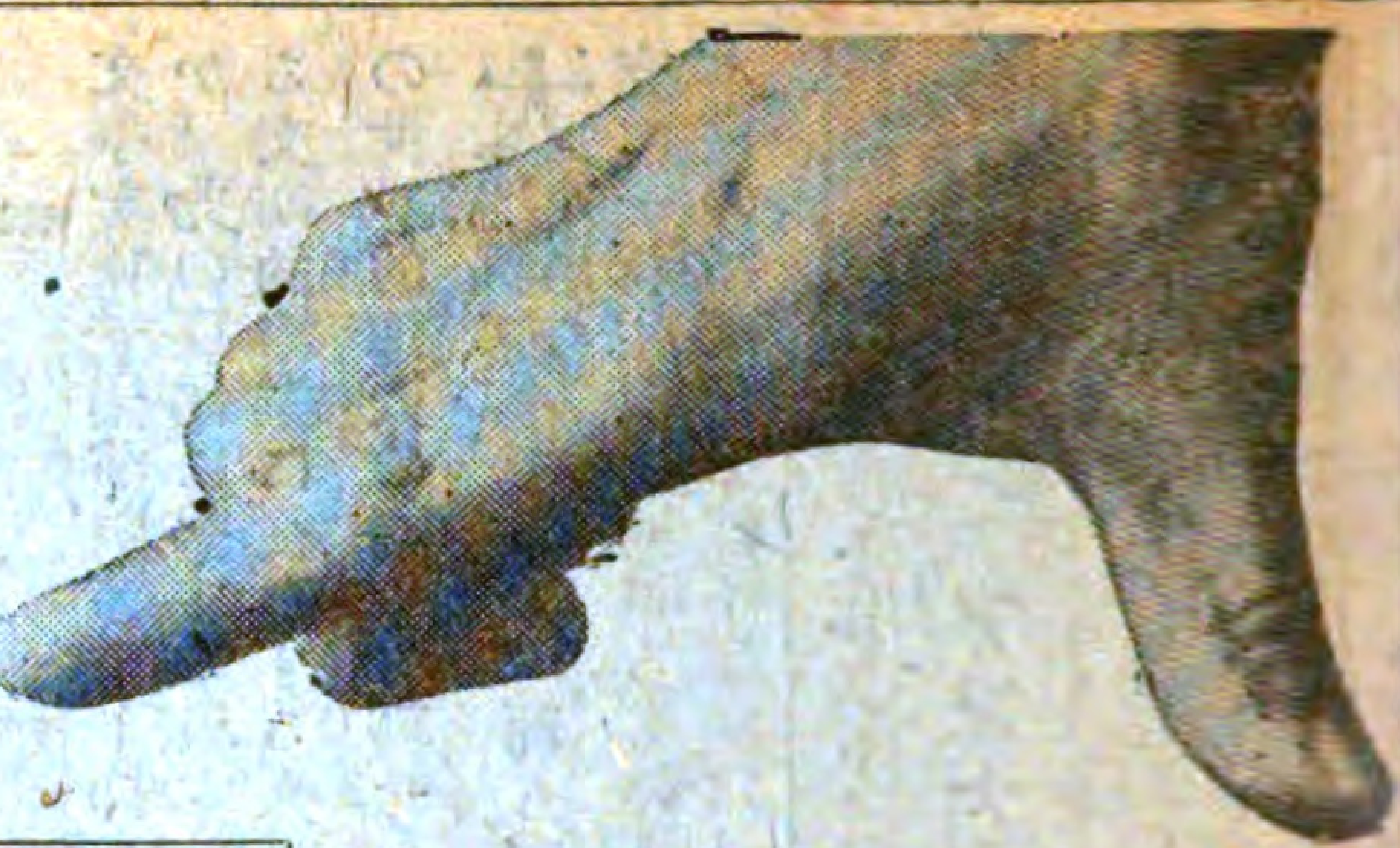
第一、無定見なる當局者の版權侵害を妨止する爲めに、著作者若くは出版者に對して其發賣禁止の當否を公爭するの途を開くこと。

第二、出版物の檢閲に關しては單に警察眼のみを有する屬吏のみの手に委することなく、必ず學識を具へたる學者、藝術家を之に加へて當局の偏見を妨止すること。

第三。公爭の結果當局不當の判決を得たる場合は無論著作者若くは出版者に對して之が損害賠償の責に任ぜしむべきこと。

等である。





激烈なる今日の生活戰場に
諸君は勝利者たるの自信ありや
若し無クンば來れ！
而して本書を讀め！本書中の戰略は直に以て今日の生活戰に應用されん

弱肉強食の現代社會に處する最上の處世法は寢るにも甲冑を身につけし戰國時代の戰略より學び得べし

名將之戰略

菊判天金附上製函入上下二卷
正價 五圓
特價四圓貳拾錢
內容見本無代進呈

本書は名將言行錄著者岡谷繁實先生北條氏より徳川氏に至る、我が歷史中最も興味多き戰國時代に於ける各名將の戰略、言行を蒐集せるものである。本書中の戰略は必ずしも専門的の兵法、戰術ではない。離間中傷の計、反間苦肉の策、之れは戰國時代の日常生活であつた。當時群雄の割據せる間に在つて、僅か一筋の鎗を以て如何にして一城の將となりしか、草間より起つて如何なる謀略に依て一國の主となりしか。本書は此の頗る興味ある歷史の裏面を解剖せると共に、權謀と術策とに滿ちたる現代社會に如何に處すべきかを敎ふるものなり。

▼本書は曾て諸君の知らない歷史の裏面に伏在せる種々の面白い史實と逸話とを各藩の秘書中より摘錄したもので、史劇脚本、新講談、歷史小說、等の新材料として文筆の士の好參考書たらん。

▲發行所　東京本鄉區大學正門前　文成社（電下三弐一〇番）

（中付一の一）

全十卷完成

坪内博士譯

沙翁傑作集

▲舶來上質紙刷、布製天金塗美裝、毎册口繪及木版密畫多數入、毎册定價一圓卅五錢、毎册送料八錢▼

沙翁三百年忌辰に臨み恰かもマクベス譯成りて本傑作集全部十册完成を告ぐ。逍遙博士の著譯尠からずと雖も永世不朽たるべきもの蓋し此書を以て随一とせん。原來沙翁の譯は學殖の豐富、筆力の靈活に加ふるに劇の通熟を以てするに非ざれば其の眞相を髣髴すべきに非ず。是れ歐米諸國に在りても好譯の極て乏しき所以なり。逍遙博士が沙翁研究の泰斗たると共に劇壇の大師宗たるは一世の與に知る所なり。則ち飜譯の典型、美文の模範たるべき此書が原著と共に不朽の双璧たるべきは之を贅するを須ひず。

第十編新刊 **マクベス**

ドストエフスキーの「罪と罰」の規模を更に雄大にし更に劇化せるが如き名篇にして、或は「ハムレット」以上、「オセロー」以上、「リヤ王」以上と稱せらるゝ沙翁の傑作也。

- 第一編 十一版 ハムレット
- 第二編 三版 ロミオとジュリエット
- 第三編 三版 オセロー
- 第四編 再版 リヤ王
- 第五編 再版 ジュリヤスシーザー
- 第六編 再版 ヴェニスの商人
- 第七編 再版 テンペスト
- 第八編 再版 アントニーとクレオパトラ
- 第九編 再版 眞夏の夜の夢

東京牛込 早稻田大學出版部
發兌
東京神田 合資會社冨山房

(中付一の三)



弱きが故に誤られた 私の新聞記者生活

中平文子

はしがき

私は中央新聞社に記者としての三年を、可成華かな色彩の裡に、多くの波瀾を重ねて來ました。私が記者生活に入るの初めには、如何に堅固な意志を持つて、此新しい婦人の職業に努力する決心で御座いましたでせう！けれども、私の性格はともすれば浪漫的な思想に駈られがちでありましたので、それ程の決意を持ちながら、其半面は絶えず戀の誘惑より離れる事が出來なかつたのでした。それ故に三年間の記者生活には、種々な運命に翻弄せられました。私は其間に經て來た戀の歷史を、私の記者生活の懺悔錄として、茲に告白する事に致します。

私は先づ最初に、中央新聞社長吉植庄一郎氏との間に起つた戀のいきさつを、最も赤裸々に發表する事にしました。都合上文體は氏への手紙風に認める事に致します。猶その他にも、文士の戀、新聞記者の戀、大學生の戀、外國武官の戀、參謀本部の花形であつた陸軍士官の戀、有名な某探偵の戀など、數へ上げれば多々あります。そうした事實を告白するのは私の罪ほろぼしで、又一面社會に對する責任殊に職業に生きんとする

世間幾多の婦人が、今後私と同様の徑路をたどる時、私が遭遇したやうな、巧妙な誘惑や强烈な刺激に試みられる場合を想像致しますと、私は實に戰慄する程の危險と不安とを感ぜずには居られません。それ故に此事實を告白する事は後車の戒として必ずしも無意義でないとの確信のもとに、自己を犧牲にして、其等の事實に筆を染める事に致しました。

◎私に二年の戀をした
中央新聞社長吉植庄一郎氏へ

一、人目忍んで大阪へ

拜啓別紙爲替券封入致し候、右は大阪新報より聊寸志迄に御座候御笑留下さるべく候尙小生は一月七日頃まで堺市大濱公園内一力樓裏手假寓に滯在致居候色々大阪新報家庭記事の事に付御相談も致度候間一月旅行として當地へ一二泊掛けにて御下阪被下間敷候哉小生多忙にて東西奔走を要し緩々御相談の暇無之候に付此一月休暇を利用し色々御意見も承り新計畫相立度と存候可成御出張願はしう存候右往復費用は實費支辨の事に取計ひ申べく候間可成一月三日頃迄に大濱假寓へ御來車下さるゝや否や電報にて御返事下され度候　早々頓首

三十日　庄一郎

中平文子様

二伸　東京にて御面會致度存候に彼是寸暇なき爲め只今着阪直ちに此書狀差上申候御下阪の事は御兩親以外何人にも御話無之樣希上候五月蠅き人口も厭はしく候に付爲念申添候也

あなたから、此お手紙を戴いたのは、一昨年の十二月三十一日でした。其日私は少し風邪の心地で臥つて居りましたけれど、兎も角も起きて、早速兩親にお手紙の赴きを相談致しました。その頃は父も母も、私に對してのあなたを、深く信じて居りましたので、

「先生のことだから大丈夫だらう、行つて來るが宜い」と快く頷いて呉れました。

それで私は、急に慌しく旅の支度を整へて、年明けて

の二日の朝、八時の急行で、たつた一人大阪へそつと旅立ちました。

出立の時停車場まで見送つて來た母が、

「あのね、そんな事は無からうが、若し又人に彼是云はれるやうなことがあつては不可ないから、大阪へ着いたら、梅田の伯母さんの家を宿にして、先生のお宅へは晝の間だけ上るやうにした方が宜いよ」

と注意をして呉れた言葉もありましたので、着いた二日の夜は、梅田の親戚の家に泊つて、翌日の正午過ぎ、初めて大阪のあなたの御別莊を訪れました。

南海電車を大濱公園で降りて、噂に聞いた一力樓で、吉植さんの御別莊を尋ねましたら、

「あの大阪新報の社長さんのお家だすか」

と赤前垂の姐さんが、わざ〳〵砂濱傳ひに小松原の中の、風雅なあなたの御隱宅へみちびいて呉れました。あなたはその折、私の上つたことを大層お喜び下すつて、

「能く來て呉れたね、餘り遲いので何うしたのかと思つて、僕は先刻から二度程停留場へ見に行つたが、來ないから三谷君の處へ寄つて、今歸つて來た處だ、恰度宜かつた。さあお上り」

と手を取らぬ許りに仰有いました。

其かくれ家に、あなたは大阪者の如才ない婆やを一人使つて靜に住つてお出でなのでした。それから私は婆やさんのお給仕で、あなたと御一所にいろ〳〵お話しを爲ながら、御自慢の玄米の御飯を戴きました。その食事の間に、あなたは私が來たら直ぐに旅行に出掛ける積で、今朝から其準備をして待つて居たと頻りにお勸めになるのでした。

「此家へは新聞社の連中などが年始に來るし、奥だの中橋だの三谷なんといふ代議士連も折々遣つて來るので、ゆつくり話が出來ない、幸ひ僕は山陰地方へは一度も遊びに行つた事がないから、一所に温泉でも廻つて、出雲の大社へ參詣しよう、何僕となら御兩親だつて別に心配なさりはしないよ、平生よく働いて下さるから、慰勞に四五日旅行に連れて行つたのだと、お父

さんへは僕から後で手紙でよく云つてあげるから、大丈夫叱られるやうな事は無いよ」

とあなたは、すつかり獨り定めして、氣輕に仰有るので、私はそれでもとは、流石に否やが云はれませんでした。

二、千鳥鳴く夜の物語

箕面電車で寶塚へ着いて、湯の宿松涼館の奥まつた河添ひの離れに落附いたのは、既う暮近い頃でした。

やがてあなたがお湯へとお出でになつたあとで、私はひとり欄干にもたれて、暮れゆく河の面を眺め乍ら、暫く深い物思に沈みました。昨日までは自分を指導して下さる師として先輩として、只管に畏敬して居たあなたと兎も角もあゝした場所へ、人に隠れて御一所に行つたといふ事は、その折の私の胸を、何れ程悔と不安とに戰かせたでせう。

その夜更けて、河瀬になく千鳥の聲を聞きながら、あなたは私に何を語り何を說かうとなさいました？埋火深く生けた桐胴の火鉢を圍んで、二人は夜もすがら寢もやらずに、談じ爭つたではありませんか。

曉に近い頃あなたは遂に情に堪へかね、私をつと抱へて、頰に熱い××をしようとなさいました、そして私の耳に、

「許して下さい、僕はあなたを戀して居たのだ、今夜斯うしてあなたに會はうが爲には、二年間の遣瀬ない思を包んで來て居る、あゝ二年の戀は長かつた、僕は最初社の編輯室で、初めてあなたに會つた時、既にあなたから一種の强い印象を與へられた、それ以來僕はあなたと屢々會ふことの危險を自ら感じたので、會見の必要がある折は、わざとあゝして筒井なぞを立會せて遭つて居たが、やつぱり駄目だつた、僕はとう〳〵戀に捕はれて了つた、近來は社へ行つても他所ながらにでもあなたの姿を見ない日は何となく物足りない氣がしてならなかつた。忙がしい議會を濟まして、一寸あなたに會つてから此方へ來やうと思つたのに、今度は其暇も無かつたので、梅田へ着くと急に懷しくなつて辛棒が出來なかつたから、直に今橋の社へ行つて、

何よりも先きにあの手紙をあげたのだ、それでも果して來て呉れるかどうかと、電報の來る迄は、何んなに心配したか知れ無い、ねえ、其僕の心を少しは汲んで呉れても可いぢやありませんか」とお囁きになつたのでした。河添ひの小窓が、曉の色にほの白くしらみ初めて、母屋でそろ〱戸を繰る音がする頃まで、あなたと私とは、對座して遂に一夜を語り明かして了ひました。

その翌日も二人は湯の宿の一室に閉ぢ籠つて、終日座り盡し、倦まず飽かず議論を戰せました。あなたは何うかして私を動かさうと、種々にお試みになるのでした。然し私はその事だけは決してあなたのお言葉に、從はうとしませんでした。

「そんなに思召して下さる先生のお爲めになら、私のやうな者でもお役に立つ事がある場合には、出來る限りお盡しする覺悟で居りますけれど、一旦師と敬つて來た方と、道ならぬ戀に墮る事だけは、私の良心が許しませんから――」

私は幾度となく斯う繰り返しました。

三、最後の手段は男泣き

終日論じても遂に私が動かなかつたので、形勢非なりと御覽になつたあなたは、その夜何と思召したか、俄かに形を正して、

「僕が昨夜から種々に云つてあなたを說くのは、實は少し仔細のある事で、何も此齡になつた僕が、あなたの肉を得るのが目的で、戀愛にあなたを攻める譯では決して無いのだが、あなたはあなた自身も云つて居る通り、僕を充分敬愛して居て下さる人と、豫てから見拔いて居るので、出來る事なら最う一歩深くあなたの心底を知つて、今後は現の職業よりも一層意義のある、責任の重い或る事業のために働いて貰ひたいと考へて居る次第でね、それにあなたは新聞事業にも趣味を持つて居るし、僕が終世の目的として居る政治をも、多少解する婦人だから、行く〱は自分の片腕とも賴みたいと考へて居る、それには先づ婦人が生命よりも重しとする、節操を得て置く必要があると感じた

からだ。僕は今日まで政治家として働いて來たが、尚晩年は一層政界に活動して、老後の思出になる華な頁で、自己の歴史が飾りたいのです。由來事業の裡には必ず婦人が潜んで居る、殊に權謀術策を要する政界の裏面には、婦人の力に待つ仕事が多々ある、其點で政治家の背後には、多少政治を解して共に助けて行くの氣概と才能を持つた婦人が必要だ。然るに僕にはそれが無い、僕の妻は遂に僕を解し得ない女だつた、あなたは何故僕が家庭を捨てゝ待合を家にして居るかを怪しむで居るでせう、イヤあなた計りでなく僕の友人も皆僕の爲めにそれを憂へて居て呉れる、然し僕は到底再び家庭に歸る考へはない、現の妻と終世を共にする位なら、寧ろ死んだ方がましだと思つて居る、何故僕が妻に對してさういふ感情を持つ樣になつたか？それは誰にも話した事のない僕一生の秘密だが、僕があなたを熱愛する證據として、あなたにだけ其秘密を打明けやう、あなたは屹度深い同情を持つて聞いて呉れるだらう」

思う云つてあなたは膝を進めて、先づ御自分の幼少の折の事から、青年の頃の活躍、壯年時代に故鄕の若者達を引連れて、北海道の荒野で開拓事業に苦心慘憺なすつた事、其零落困憊の境に際して、奥樣のあなたに對する態度が、如何に冷淡であつたか？

あなたはそれらを諄々とお話しになると共に、私に對する二年の戀の切なさを語つて、遂には情に激し、私の膝に顏を當てゝさめざめと聲を上げてお泣きになりました。

噫！あなたは最後に涙を以つて私を動かさうとなすつたのでした。

四、政界名士の品さだめ

大濱を立退いて、寶塚の湯の宿に幾日のやどり、あなたのお言葉たくみな御述懷に、深く心を動かされた私は、今まで師としてのみ、畏敬して居たあなたに、幾分の戀心を持つやうになりました。そして遂に行末あなたの御事業に働く誓の許に、或る時期には身をもお許しする約束を結びました。

七草の旦、小雪のちらつく湯の町に別れを惜むで、あなたと私とは寶塚を去つて、城の崎へと旅立ちました。汽車中他に人なきを幸ひ、二人は草色い窓の帳を半かゝげて、移りゆく窓外の、憂欝、山陰の自然に、淡い哀愁をいだき乍ら、感興につれて種々なお話を致しました。あなたが私のお尋ねするまゝに、當代の政治家を評論してお聞かせになつたのも其折でした。私はあの時のあなたの御批評を、もう一度こゝに繰り返してみたいと思ひます。あなたは先づ、政友會の領袖連を一人々々に品評して、

「世間では一口に政友會の幹部〳〵と云ふが其幹部にも自ら黒幕の黒幕といふのがあつて大岡だの元田だのと云ふ連中は、所謂表面の黒幕で、眞の帷幄には餘り與つて居ない、殊に大岡なんといふ人物は、品性が劣等で陰険極まる男だから、原君なぞからは敬して遠ざけられて居る。山本(達雄氏)や高橋(是清男)は財政上の手腕は多少あるが、猶且俗吏上りて、政黨的政治家ぢやない。目下原總裁に最も信任されて、眞の謀議に參して居るのは、他にも二三あるが、まあ僕なんかも其一人だ、鵜澤だの福井(三郎氏)だのは學者と云ふのみで、政治家としちやまだ陣笠だよ、小久保や高橋(光威氏)や松源か、あんな連中はありやおつちよこちよい丈で、とてもお話しにならない、要するに原君だつて忌憚なく云へば、總裁としての徳望はまだまださ。」

その外、同志會や國民黨などの惡口も大分伺ひました。それからあなたは政界の未來に就いて、日本が將來の發展は支那にあるのだから、是からはなるべく革命の婦人なぞに交際を求めて、一方機密を探ると云ふ事にも少し修養を積んで置く必要があると、其等に就いても具體的の說明を、いろ〳〵お聞かせ下すつたのでした。

盡きぬ物語のうちに、汽車は、寒雨蕭々と降りしきる山間の驛路を幾十となく過ぎて、たそがれに近い頃、城の崎に着きました。

その夜、湯の宿ゆとうやの二階に、あなたと二人欄干に凭つて、暮れそめては松も朧な彼方の山を眺めな

がら、あなたから近松や西鶴の心中噺を伺つて、温泉の町の艶めいた情緒にひたされた宵の思出、異な縁を結ばうとなすつた、雅な出雲の神様を遙に拜んで、デカンショの本場丹波の笹山から、歸途を京都へ廻つて、賑かな京極通りを御一所にそゞろ歩いたあの晩のことなど、戀の紀念として筆にしてみたい事は數々御座いますけれど、それよりも先づ、私はあれから後のあなたと私に就いて、申上げねばなりません。

五、電話口から嫉妬の焔

△△日の夜、梅田までお送り下すつたあなたとお別れして、夢のやうに東京へ歸つた私は、其翌日平常の如くに社の門を潜りました、雖然、編輯室の扉を開ける刹那、私は忽ち一種の云知れぬうしろめたさと不安とに、思はず胸を慄せました。

その頃は、未だ公然の社長では入らつしやらないまでも、兎に角社の實權を握つてお出でになるあなたと、人に隱れて幾日か御一所の旅を重ねた上、あのやうなお約束まで結んだ事は何うして私の良心が咎められずに居りませう、私はあれから後は、既う其以前のやうに虚心平氣で大手を振つて、社の門を潜る事が出來なくなりました。

東京へ歸り次第、直ぐに安否を報らせるやうにと、お別れする時のあなたのお言葉もありましたので、私は早速無事に歸着のおしらせと、百五十里の汽車の窓に、獨りさま〴〵な思を走せた感想などを認めた手紙を大濱の御別莊宛に差出しました。それと行違ひにあなたからも、私と別れて岡崎邦輔さんと御一所に、紀州の和歌山へ入らしたとかで、和歌の浦から私の安否を案じた、お手紙を下さいました。

それから四五日後の事です、或朝小林と名乘る女のひとから突然に電話で、あなたと私の旅行を、嫉妬がましく怨じて、罵詈雑言を浴びせかけられたので、私は驚きました。

あなたが御歸京になつたのは、一月の半過ぎでした。そして社の重役室で、例のやうにお目にかゝつた時、あなたから、私が大濱へ差上げた手紙が、あなた

のお留守に婆やの手から、築地の待合つくしの女將の處へ廻されて、其爲に飛んだ騷ぎが持上つたと伺つて始めて電話の謎が解けました。其折あなたは是から急に用の出來た時などは、重役室の机の引出しへ、誰も居ない折に手紙をそつと入れて置くのが、一番大丈夫だとお敎へになりました。あれは一月の二十何日でしたか、私の親友××子さんの一身上に、或る心配な事件が起つたので、私は只つた一度其手段であなたにお手紙を差上げて、夜分私の宅へお越しを願ひ、二時過ぎまでいろ〳〵協議をした事がありました、そしてあなたは其夜とう〳〵夜明けに近い頃、態とお俥にも召さずに築地まで歩いてお歸宅になりました。そうした事などが益々つくしの女將に猜疑を深くさせる動機となつて、遂に女將は恰で私があなたを籠絡するかのやうに、絶えず嫉妬の眼で、種々な手段の許に、私達の一擧一動を監視して、どうかして二人を離間しようと試るのでした。私はさういふ侮辱を受けて居ると知つて、自分のして來た事に、一層悔悟の念を深くし始めました。

何う考へても、あなたと御一所にあゝした旅をした事は、正しい行爲とは云はれません、殊にあなたの涙に動かされて、あのやうなお約束まで結んだ以上、私は破倫の罪を犯したも同然であると自覺しました。誘惑！墮落！破戒！私は日一日と腦裡にさうした文字を刻みつけて、夜も晝も云ひ難ない悔にさいなまれる身となりました。わけても社の編輯室に居る間は、絶えず後めたさの不安に襲はれて、己を責める道德的の文字や、婦人の先覺者らしい評論などは、再び筆にする勇氣が無くなつて了ひました。而も私はもう其以前のやうに、あなたを師として先輩としてのみはながめられ無くなりました、私は罪と知つて悔ながらも猶、自分を愛して下すつたあなたを忘れる事が出來ないのでした、そして、一度あゝしたお約束を誓つた以上は、何處までも自分としての眞心を捧げし、あなたにお盡しせねばならないと覺悟しました。

道學的の文章を筆にする資格の無くなつた私は、そ

の後やとな探險など、云ふ思切つた眞似をして、化込記事なぞに讀者の感興を牽かうと試みました。それもあなたの新聞である中央新聞を、せめて一枚でも多く賣りたい私の聊の苦衷に過ぎなかつたのでした。

六、花籠の柄に二十九の吉

一月早々から、餘りいろ／＼な事に頭腦を痛めたせいか、二月の中頃私は少し神經衰弱を起しましたので、醫者の注意で暫く小田原へ轉地しました。毎日やとなな物語の原稿を一回宛書いて、新聞社へ送る外は、私は何もせずに、湘南の海を見晴した宿の一室に、終日只茫然と物思ひにのみ耽つて居りました。沖に潮鳴りの多い夜、ねられぬまゝに窓うつ小夜時雨をきゝながら、亂るゝ胸の遣瀬ない悔と惱みとを書きつらねて、燃ゆる紅梅の花の幾片を封じこめてお送りしたあの夜の手紙なぞは、果してあなたのお手許に屆きましたやら？いまから思へばあの頃の私の戀は、ほんとうに果敢ないもので御座いました。

小田原から歸つたのは、雛祭り過ぎた三月の上旬でした。其頃東京では總選擧の、激しい逐鹿戰の眞最中で、猫も杓子も選擧熱に浮かされて居りました。あなたもその時分は千葉の選擧區で、遊說運動に必死になつて狂奔してお出でゞした。

私はあの折程、あなたのお氣をお案じしたことはありません、どうかして無事に御當選になるやうにと、それのみを蔭ながらに念じて、苦しい時の神だのみ、大人氣ないとお笑ひになるかは知れませんが、私は日頃のあなたの御厚意に報いたさに、あの當時は毎夜淺草の觀音樣へお詣りして、首尾よくあなたが御當選になるやうに、只管祈願を籠めました。或朝、新聞でふと、あなたが市川で最後の政見發表演說をなさるといふ事を見て、よそながら、士氣を勵ますよすがに、花籠なりとお贈りしようと思ひ立つたのでした。

其朝早く、江戶川の花屋で、薔薇と百合との花籠を作らせ、先づ行きがけに淺草の觀音樣へお詣りして、おみくじを引いてみましたら、二十九吉と出ました。

私はそれを、「政友會に志を寄する女より」、と認めた

小さな短冊と一所に、月桂樹の葉で卷いた花籠の柄に結び附けて、押上から電車で市川へと行き、其日の會場市野屋へ、人知れず屆けて置いて歸りました。其歸途です、私が△△探偵の許に訪れたのは。

私は小田原から歸つて後、何時までも徒らに煩悶の擒虜で居てはならないと、漸くに自ら心を勵まして、兼て出雲路の旅であなたが仰せになつた、機密を探る修養を積むで置くといふ事の一手段として、探偵術を研究しようと決心して、先づ斯界に高評のある、△△探偵の門を叩いたのでした。そして私は遂に△△探偵と師弟の約を結びました。(私が△△探偵の門に入つて、種々なる事件に働いたこと、其間に起つた或るロマンスなどは、他日一編の小説として書いてみたいと考へて居ります)

七、行李に秘めた縫の帶

私がその後大濱の別莊に、再びあなたをお訪ねしましたのは、春も暮れてゆく其年の四月の末でした。

△△探偵は、私を其門に入る事を許すと先づ、試に二三の事件に私を働せました、處が幸ひ私が其等に何れも豫期以上の効果を奏しましたので、△△氏はそれから非常に私に望を囑して、恰度其頃京都に突發した或る事件に、是非私の力を用ひたいと云つて、父の許可を得て私を京都へ伴ひました。其折洛西××の宿を根據に、△△氏と毎日京都へ往復して、或事件に働いた事思ひがけなく〇〇〇された、小說めいたお話などは、別にあなたに申上げる必要のない事とぞんじますから、こゝには態と記しません。

其時の事件は何うも思はしい結果が得られなかつたので、私達は四五日の後一先づ歸京する事にしました。歸京の朝私は△△氏と七條の驛で、其夜十二時に名古屋で落合ふ約束で、一旦袂を別つて直に大阪へ行き、今橋の大阪新報社へあなたをお訪ね致しました。

相憎その日、あなたは御出社になつて居なかつたので、私はがつかりして其儘引返さうかと思ひましたけれど、折角來たもの故何うかしてお目に掛つて歸りたいと、△△氏と約束した汽車に乘り遲れるのを覺悟

で、とう〳〵大濱のお宅へあなたをお訪ねする事にしました。その夜朧な月影を踏んで、大濱公園の御隠宅の枝折戸を押した時、私は云がたい感慨に暫月を仰いでイみました。私は何故に△△氏との約に背いてまで、あなたにお目にかゝらうとしたのでせう?

出雲路の旅を終へて、梅田の驛であなたとお別れする時、あなたは私に旅行費として○○金のお金を下さいました。私は其折幾度となく御辭退致しましたけれど、あなたが强ひてとお聞きになりませんでしたので、兎も角も懷にして歸りました。然しその後、私は何うしても、あゝした旅で戴いたお金を其儘にして置く事は、私の良心が許しませんから、どうかして穩かにお返ししたいものと、それにのみ頭腦を痛ませて居りました。恰度三月の中頃、私は自分の好きな京の四季の端唄の文句を圖案して、黑繻子に刺繡させた帶を作りました處、それがあちこちで大分好評を博しましたので、不圖あなたの最愛のお孃樣へ、それと同じのを刺繡せて、切めてあのお金の御返禮へお贈りしようと思ひ立ちました。

繡箔屋から漸くそれが出來上つて參りましたのは、四月の半過ぎでした。さて私は如何して其帶をあなたへお屆けしたら宜いかと又心を苦しめました。其頃あなたは相憎大阪の方へ行つてお出でになつたので、其方法に一しほ當惑致しました。其際計らずも△△探偵と京都へ同行する事になりましたから、私は願つても無い好い便と、行李の中へそれを忍ばせて、京都まで持つて參つたのです。其品をあなたにお屆けしたさに、私は什うかしてお目に掛つて歸りたいものと、遂に△△氏との約に反いて、大濱へあなたをお訪ね申上げたので御座います。あなたは其時喜こんで私の微意をお受け下さいました。そして久し振の對面に色々のお話を致しましたけれど、私は△△探偵との事は態と何も申上げませんでした。それといふのは、私が探偵事業で何か眼覺ましい手柄を擧げて、あなたを突然驚かせたいとの好奇心と、一つには日頃の御氣性を察して、又無意味な嫉妬などを受けてはならないと思ひま

したからで御座いました。

夜更けてお暇する折、門までお見送り下すつたあなたは、私に恁麼言を仰有いました。

『どうもね、築地の火の手が益々盛んなには全く閉口するよ、あれから從は恰で僕があなたに籠絡されて居るやうに誤解して、八釜しくわい／＼云ふんだから遣り切れ無い、何しろ彼麼な低級な女には、精神的の事なんかは、説明したつて到底解釋し得ないんだから仕様がない、まあ然し、餘り怒らせて又くだらない惡口などを、觸れ廻されるやうな事があつても馬鹿々々しいから、溫熱の冷めるまでは、暫くお互に注意しよう、我々は將來があるのだから、ああした馬鹿者に騒ぎたてられちや不得策だ、あなたも其邊はよく考へて居て下さい』。今から思へばそのお言葉も、私を遠ざけようの巧妙な、あなたの術策の一つに過ぎなかつたので御座いました。

八、おなさけの原稿買收！

馬鹿正直な私は、あの折のあなたのお訓戒を固く守つて、それからは萬事御迷惑にならないやうにと、只管に心を配りました。雖然、あなたの私に對する其後の態度は、全然前とは變つて參りました。其以前はお忙がしい中からも、時々お手紙を下すつたり、色々お心添へになつたりしたあなたが、何時とはなしに冷かに變じて、追々には用件で差上げた手紙にさへ、端書一枚の御返事もろくには下さらなくなりました。それでも私はあなたを猶深く信じて居りました。老練で入らつしやるあなた、先輩としてのあなたが、私のみならず父にまで、私の將來を指導しようと、誓つて置きながら、まさか私を誘惑して、一時の玩弄物になさらうなぞとは、何うしても私には受取れませんでした。私は相變らずあなたを師として、私を愛して下さる先輩として、敬ひ懐かしむで居りました。そしてあなたの御事業である、新聞の爲めにも出來る限りの微力を盡したいと、編輯長田村氏の依頼のまゝに、お目見得廻りのやうな極端な探訪まで致しました。あの記事のためには、私は何れ程苦しい思をしたか知れません。

夏も過ぎ秋も暮れゆく十一月の末頃、あなたは大阪新報の經營をお止めになつて、再び中央新聞社へお歸りになりました、そして私は又、他所ながら毎日社であなたに、お目に掛ることゝなりました。然し、あなたは既に其以前とはまるで違つた冷かな態度で、私を御覽になるのでした、のみならず、成べく私とは顏を合す事をさへ避けるやうになさいました。流石に私の心はもう穩かでは居られなくなりました。

忘れもしない十二月二十四日の晩突然輯編長田村江東氏から、

「今日實は筒井理事から、あなたに辭表を出して貰つて呉れとの話で、僕も餘り寐耳に水なので、如何した譯かと尋ねたら、理由は一切聞いて呉れ給ふな、只あの人には殊に氣の毒な次第だから、當分の間は是まで通りの範圍で社から原稿を買つてあげても宜いと傳へて貰ひたいとの事で——」

と日頃の多辯饒舌にも似ず云ひにくそうに話されました。

私はそれを聞くと、暫くは唇を嚙んだまゝ、何と答へもしませんでした。私の胸には、その時、それまで耐へ〳〵て居た、長い間の口惜しさが、一度に込み上つたのでした。理由の無い辭職の勸告！お情けの原稿買收！何といふ人を侮辱した宣言でせう？私は先づ筒井さんが恨しくなりました。然しそれは、果して筒井さん一人のお胸から出たお言葉だつたのでせうか？

「宜しう御座います、でも私から辭表を出すと云ふ事に就いては、少し考へてからお返事します」

と私は田村氏にさつぱり答へて其夜は歸りました。

九、原總裁への歸り路に

嗚呼！私はやつぱりあなたに僞られて居たのでした、弄ばれやうとしたのでした。あなたは私を誘惑せんが爲に、二年間巧言を以つて私を欺き、私の父をまで籠絡しようとなさいました。あなたは最初何うした態度で私にお對しになりました？私が中央新聞に入社の當時、筒井さんを立會にして、あなたは私に如何なる事をお話しになりました？

「新聞の將來の發展を計る一策として、婦人に同情のある新聞を作つて、家庭に歡迎されるやうにするために、立派な婦人記者を養成したい」との御意見で、私を後援しようとお誓ひになつたではありませんか。

「過去は問ふ必要は無い、只將來に於て社會の先覺者として、耻かしくない品性と人格とを修養なさい」と御激勵下すつた、あの折のあなたのお言葉に、私は何れ程の感謝と希望とを與へられましたでせう？あの時以來私はあなたを、恩師として、心から深くお慕ひするやうになりました。其お言葉も今から思へば、私を釣らうがための巧言に過ぎなかつたのでした。そして其後の二年間あなたは私の心を得むがために、如何にお得意の權謀術策をお弄しになりましたか？寸暇もない御多忙の中に、時々私を重役室へ呼んでは、記事に就いての御意見やら、新らしい計畫などを細々と親しく御教示下さいました。又大阪へ入らつしやる事になつてからは、御歸京の折など、原さんへ來た序でにと、私の家へお立寄下すつた事も二度三度ではありませんでした。さうした事が編輯室の誰彼に反目を買ふ原因となつて、私は絶えず皆からまゝつ子酷めをされて居ました。あなたはそれを氣遣つて、蔭で種々私をお慰めになつて下さいました。

あれは何時頃の事でしたか、露國から來朝されたゲルモニユース將軍を、私が築地の精養軒に訪問しました折、その禮に先方から翌日大層美事な花籠を贈つて下さいましたのを、私に見せもしないで編輯室の岡燒連が、皆で滅茶々々にして、死骸になつた籠計りを、私の机の上に投り上げて置きましたので、私は口惜しまぎれに、其事を其頃大阪にお出でのあなたの處へ訴へましたら、あなたには私を慰める爲め、早速左の御返事を下すつたこともありました。

　前略此度中央編輯局に於る男子部の無殘なる仕方は嘸御一驚遊され候事と察上候乍併是は社會一般の男子が女性に對する壓迫の縮寫と御認識相成候方適當と存候左れば社會婦人の地位を高め職業上の地步

を確立する事の困難豫想以上なる譯に候到底此困難に打勝つ丈けの忍耐と大勇猛心なくば、女性は永久の敗者弱者として男性の虐待に甘從するの外之無き次第に候

左は言へ荒くれ男の同情なきまとひの中に獨り孤舟の如く激浪にもまれ誰人よりも情けある待遇を受けられぬ現在の御立場は實に御同情に不堪所に有之候御許なればこそと竊に我鑑識の誤らざるを誇る心とまた一入御いたわしふ存上げ候萬人批難の中心に立つ時も我のみは衷心より滿腔の同情と敬意を表することを茲に重ねて申上置き候格別力にもなるべき力は無く候へども聊かにも御たよりとも相成べくは自分も本懷に存候まづ〳〵涙をふいて又々御勇戰をこそ祈上候　早々

十七日正午　　庄一郎

文子様

十、重役列座の懐柔策

さうした眞實らしい態度でお盡し下すつた、二年間のあなたの御親切の凡てが、私を弄ばうが爲の術策で、最後に私を誘きよせて、信用を餌に權威を笠に、事業を口實として私を釣らうとなすつた計畫が、不成功に終つた復仇に、先づ敬遠策を取つて、遂に弱きものよ汝の名は女！とばかり、私一人に制裁を加へ、社を出さうとの御計略と、筒井さんの御傳言を田村氏から聞いた夜、あなたのお心を始めて知つた私は、あなたを怨むといふよりも、寧ろ自分の愚かさが情けなくて、其夜は夜すがら身も世もあられない程、口惜し涙に泣き明しました。

其翌朝、中央新聞を手に取つて、ふと二面の下欄を見ましたら、あなたが愈々公然社長にお定りになつたとの事が、麗々と載せてありました。噫！私はそれを見て、事の凡てが讀めたのでした。私は獨り冷かな嘲笑を洩らさずには居られませんでした。私はいまあなたのあの當時の心理を、私の想像の儘に列擧して見たいと思ひます。

第一にはあなたは自分の目的を到底達する事が出來

ないと自發なすつた事。

第二にはつくしの女將の妨害運動が遂に效を奏した事。

第三には△△探偵の事業に走つた事を聞知して嫉妬の念をお起しになつた事。

第四には新らたに社長として社員を統御するに就いて、不都合を來しはしないかと懸念なすつた事。

大方は以上の事が原因となつたに、外ならなかつたので御座いませう。

其朝社へ出ると私は先づ田村氏に、

『私に落度があつて退社されるのは、何うも致し方の無い事です、私は決して惡びれは致しませんから、何卒社の方から公然解職の辭令を下さいまし、汚名を着るのが恐しさに自分から身を引くやうな潔よくない態度は、私には出來ません』

と明白に答へましたら、田村氏は當惑さうな顏で、早速筒井さんに相談に行かれました。軈て私は筒井、田村、舘の三氏列席の室へ呼ばれて、是非温順しく辭表を出すやうにと、色々お爲ごかしに說かれましたけれども、私はたゞ、諸氏の厚意を謝するのみで、其懐柔策には、遂に動かされやうとしませんでした。

一婦人記者の進退を決する爲に、社の重役が三人も列座して、樣々な詭辯を以てなだめやうとなすつたのは、果して何の意だつたのでせう？田村氏も平生は親切な態度で、私を引立てて下すつた方なのでしたが、何故かその場合には、平素とは打つて變つた冷淡な樣子で、私の爲に一言の助言をも試みやうとはせられませんでした。私はさうした賴みがたない人心に、心中密に皮肉な微笑を禁じ得ませんでした。

其翌日、私は田村氏から解職の辭令を受取ると共に、退社された事を公然自ら社の人達にも披露して、潔よく別れを告げて社を退きました。私はかうして、遂にあなたのために、社會から偏頗的な一制裁を加へられたのです。

私の三年間の記者生活は、かくて終りを告げました。

吁！私は猶且弱き女の一人に過ぎなかつたので御座いました。
最早私は何事も申上げますまい、只最後に一言あなたにお伺ひ致します。
制裁は弱者のみが受けるべき制裁でせうか？
權利は强者のみに與へられた權利でせうか？（了）

倫敦戰時日記抄（承前）

穗積重遠

佛兵の母

（一九一四年九月二十四日）「パリ」の「レアル、ホテル」（佛國留學當時の寓居）の御婆さんから手紙が來る。其中に曰く、

「伜儀出征後音信不通にて心配致居候處、去九月七日「ヴェルダン」附近にて砲彈破片の爲め右手に負傷致したる由に候。其聯隊は殆ど全滅にて、大佐少佐始め士官殘らず戰死の樣子に候。伜は目下「モンペリエ」に罷在り、一週間内には手を用ひ得る樣相成べければ、其上は亡友の仇討ちに再び出陣せんと申參り候。」

あのやさしい好人物の御婆さんが、愚痴一つ云はず自慢氣に知らせてよこした所、佛國の士氣振りも見えて賴もしい。勇士の母は「スパルタ」と日本のみの專賣かは。

西洋の子供

（九月二十五日）午後「リジェント、パーク」を散歩する。……道ばたの芝生の上で栗鼠が二三匹遊んで居る。近寄つても逃げない。子供達が五六人通りかゝつてチョッ／＼／＼と呼ぶと、後足で立つて丸い目をくる／＼させながら、向うでも『おいでおいで』をして居る。チョコ／＼した樣子が如何にも可愛らしい。子供

達が追つ掛けたり石をぶつけたりしないのが感心だ。西洋の子供は動物虐待をしないものだから、鳩や鴨は勿論、雀や栗鼠などまでが人を恐れず馴れ遊んで大きに公園の風致を添へる。數ヶ月前「パリ」の「ボア」をR君と散歩した時、池の白鳥や鴨が子供の手から爭つてパンをたべるのを見て、日本の子供は何故動物を愛することを知らないだらうと、猫を蹴飛ばしたり鳶を射落したりした當年の腕白君、眞面目になつて憤慨したことであつた。

動物を愛する點は同じだけれども、佛國の子供と英國の子供とは大分樣子が違う。佛國の少年少女は美しく愛らしい。男の子も多く女見た樣におとなしい。英國の男の子は見るからいたづらさうなのが多い。公園の池におもちやの船を浮べて大に海國少年を發揮して居る凸坊共を見て居ると、やがて靴を脫ぎ紐を結び合はせて首へ引つかけ、ヅボン高々とまくり上げてジャボ〳〵池の中にはいり込む。頗る元氣がよくて賴もしい。

公園の芝生では例の鳥打脊廣の兵隊さんがあちらに一組こちらに一組調練して居る。指揮官も脊廣でステッキを振廻はして居る。子供達に委細構はず芝生の眞中で遊んで居る。『前エー』といふので散兵が乳母車をよけ〳〵前進する。犬が驚いてワン〳〵吠へて居る。

時局御伽劇

（九月二十六日）寄席「エムパイヤ」座の時局を仕組んだ御伽劇が評判故見物する。

……次に「ミス某」が“Your King and Country want you”なる募兵の歌を獨唱して大に志氣を鼓舞する。併し我輩の聞き誤りにあらざりせば、“If you come back, we shall cheer you ; every woman will kiss you”と云ふ一節があつた。咄々『勇士の戰場へ赴く時は忘るゝ事三つあり』何ぞ況んや婦女子のキスの爲めに戰はんや。

扨て其次が愈々御待兼の御伽劇『ユーロープ』、一名西洋寺子屋「ユーロープ」夫人私塾の場。正面に歐洲大地圖をかけ、其前の掛腰に、第一列は「ロスチャン」を組長に「ろ組」の生徒が一樣に毛皮帽子をかぶつて著

席、次は「オーチャン」を組長の「お組」と「ハン子孃」が組長の「は組」とが一列、其後ろは「ドクチャン」を組長の「と組」が皆おもちやのサーベルをぶらさげて居る。次の列は「ベルチャン」「オラ子孃」「ルク子孃」等の小さな生徒、其次は「パリス孃」を組長に三色の美しい服を著けた「ふ組」の女生徒、最後の列は水兵服の「え組」で組長は「エーチャン」、其外「イタチャン」「セルチャン」「ブルチャン」「スイチャン」「トルチャン」等大勢の男生女生を前に、「ユーロープ」夫人頻りに敎鞭を執つて御座るけれども、御仕附が惡いと見えて生徒達中々大人しくない。「エーチャン」と「パリス」孃とはコソコソ話をして居る。「ロスチャン」と「オーチャン」とは何かと云ふといがみ合ふ。「ドクチャン」はサーベルばかりおもちやにして居る。其中に「セルチャン」や「ブルチャン」の小さなイタヅラッ子達が「トルチャン」をいぢめて取つ組み合ひが始まつたのを、先生と上級生とでヤット取り靜め、やがて御休みの時間となつて先生は引込む「『御師匠様の留守の間に手習するは大きな損』と弟子一同總立ちの大騷ぎ、「エーチャン」と「パリス孃」と「ロスチャン」とは仲好く手を取り合つて踊つて居る。「ベルチャン」「スイチャン」「ルク子孃」の小さい子達は、大きい子達が決していぢめないと云ふ約束をしたものだから安心しておとなしく遊んで居る。「ドクチャン」は意地惡で力自慢だものだから皆が遊んで呉れない、「オーチャン」や「イタチャン」と一所に踊つても相手が氣乘りがしないので面白く行かない、そこで自分達だけで兵隊ゴッコばかりして遊んで居る。其中に「パリス」孃の持つて來た「モロッコ」と云ふ御菓子を「ドクチャン」がヒッタクリにかゝつたのが元で大喧嘩が持上らうとした所へ、折よく「ユーロープ」夫人が「ピース」夫人と云ふ參觀人を案內してはいつて來る。外の子達は此の「ピース」夫人に心服して居るので直ぐおとなしくなつたが、「ドクチャン」だけは中々聽かない爲め散々叱られて不精々々におもちやのサーベルを鞘に納める。「ユーロープ」夫人は「ピース」夫人に對して甚だ面目なく、今日はもうこれ切りと生徒を歸し、

ホツトして教授によりかゝり氣疲れに思はずまどろむ體でダークチエンヂ。これより夢の場と御座います。

教室の壁にかけてあつた歐洲地圖が舞臺一杯に擴がると、其の「オーストリア」の所から「オーチヤン」、「ハンガリー」の所から「ハン子」孃が出て、一つの人形を持つて遊んで居る。そこへ「セルビア」の所から小さないたづら小僧の「セルチヤン」が出て來て、いきなり其人形を引つたくつて首をもぎつてしまう。「オーチヤン」おこつて「セルチヤン」を小突き廻す騷ぎに、「ユーロープ」夫人ビツクリして目を覺まし、それは「セルチヤン」がよくないと叱つて居る。さうすると「ロシア」の所から「ロスチヤン」がノツソリとあらはれ出で、何も「セルチヤン」ばかり惡いのぢやない、「オーチヤン」が平生「セルチヤン」をいぢめるからだと力む。さつきから「ドイツ」の所に顏を出して「オーチヤン」をけしかけて居た「ドクチヤン」が飛出して、餘計な御世話だと「ロスチヤン」に手袋を叩き附け、驚いて出て來る「ロスチヤン」の仲好し「パリス」孃にも手袋をぶつけるが早いか、いきなり「パリス」孃をなぐらうとして間に立つて居る「ルク子」孃を引退け、「ベルチヤン」を突き飛ばす。「ベルチヤン」小さいけれどもきかぬ氣の子供で「ドクチヤン」に武者振り附く。「イギリス」の所から「エーチヤン」が出て小さい子はいぢめない約束ぢやないかと云ふ。「ドクチヤン」があとでいゝ物上げるからだまつておいでと書いた紙きれを「エーチヤン」に渡す。「エーチヤン」それを破いて投げ返す。そこで一同其國の地圖の所に立つて劍を引拔き、引張りの大見得宜しくあつて平舞臺へ飛び下り、大立廻となる。「ユーロープ」夫人あわてゝ「ピース」夫人を呼んで來たけれども、もう手が附けられない。「ドクチヤン」は初め少し持て餘した「ベルチヤン」を力まかせに投げ飛ばし、「エーチヤン」と「パリス」孃とにかゝつて行く。喧嘩には強い「ドクチヤン」の勢に、「エーチヤン」も「パリス」孃もたぢろいだのを踏こたへて一生懸命に叩き合ふ。こつちでは「ロスチヤン」がとうとう「オーチヤン」と「ハン子」孃とを突倒し、ノツノツ遣つて來て「ドクチ

ヤン」の背後から襟首取つて引き戻す。引繰り返る様な大騒ぎの最中へ驅け出して來るのを誰れとかなす。旭日旗の「キモノ」を著、小さな癖に大きな刀を振りかざしたは問はずとしるき「アジア」學校首席の「ニッチヤン」、「エーチヤン」とは指ッ切りがしてあるし、「ドクチヤン」には折角貰つた御菓子を横取りされた恨みがある、喧嘩は萬更嫌いでなし、無二無三に「ドクチヤン」の横腹を突ッ突くので、流石の「ドクチヤン」七顚八倒の體宜しく、ダークチ・エンヂ。

扨てこれを日本でども遣れば、愈々「ドクチヤン」が喧嘩に負けて「ユーロープ」學校を退校されて大詰まで出すのだらうが、こゝではそんなに先走りせず、「ブリタニア」女神が海のあなたを睥睨して居る活人畫模樣で不得要領に幕。

次は活動寫眞。第一は獨軍「ブラッセル」乘込みの景、曾遊の町だけに人事ならず殘念な氣持がする。第二は「ベルギー」の諸市諸村落荒廢の慘狀、壁のみ立つた家の前に赤兒を抱いた女がションボリと立つて居る光景など、思はず涙を催す。第三は交戰各國軍艦、日本のも出た。こゝで英人の氣質がよくあらわれるのは、「ドイツ」兵や「トイツ」軍艦が寫つても Hiss! Hiss! の聲が少し聞える位で、惡口云つたりどなつたりする者もなく、自國の軍艦には喝采はするが非常に執狂的ではない所など、實際大國民には相違ない。

最後に聯合各國の君主の寫眞を映して、それぞれ國歌を奏する。一同起立。我が
天皇陛下の御尊影が大喝采の中にあらわれて「キーミーガーアー」と來た時には堪らなく嬉しかつた。God save the king を合唱して打出し。八時半から十一時半まで、出し物も山盛り、御客も滿員、海一つ向うでは數百萬人の命の取り遣り、各國の興廢此の一擧に在る眞最中に、扨も英國は天下泰平。斯んな他愛もないことを長々書く我輩も亦泰平の逸民なる哉。

大學入學

(十月五日)今月から「ロンドン」大學其他の諸法律學校が開講する故、それぞれ書面で講義目錄を請求した

所、「ロンドン」大學から折返し講義目錄を送つて來て、次の如き丁重な手紙が添つて居たには感服した。

Dear Sir,—In reply to your enquiry I beg to forward you the prospectus of the Faculty of Laws in which you will see full particulars of the courses in that Faculty. I shall be glad to answer any further enquiries or to make an appointment for you to see the Provost or the Dean if you wish.

Yours faithfully, (Signature) Secretary.

而して今日同大學の入學手續に行つて更に感服し且愉快であつたのは、其の入學志願者の取扱が懇篤親切を極めて居ることであつた。

先づ校門に小使が居て入學志願者手引とでも云ふべき印刷物を渡す。其の必要な部分を飜譯して入學手續の次第を示さう。

(一) 直チニ圖書館大閲覽室ニ入ルベシ。
(二) 入學書式ヲ請求シ、備附ノ机上ニテ出來得ル限リ詳細ノ記入ヲナスベシ。世話係附添ヒテ質問ニ答ヘ且書式記入助ヲカス。
(三) 當該分科ノ學長又ハ副學長ニ面談シ、聽講スベキ講義ニ關シ助言ヲ受クベシ。
(四) 世話係ニ伴ハレテ各自ノ就クベキ教授[illegible]面談スベシ。
(五) 學長ト面談スベシ。
(六) 事務室ニ至リ書類ヲ差出シ、聽講料ヲ支拂フベシ。

とあつて扨て次の一項を特筆大書してある。

世話係常設委員ヲ校內各所ニ配置シ、新入學生ノ望ム處ニ如何ナル助力說明ニテモ與ヘシム。助力ヲ要スル場合ニハ、直チニ其一人ニ申出デラレヨ。世話係ハ「ガウン」ヲ纏ヒ徽章ヲ帶ビタリ。

即ち此の世話係なる者が、新入生殊に我々勝手の知らぬ外國人に取つては、地獄で佛盲龜の浮木……と云ふ程のこともないが、誠に有難いものだ。多分上級生の世話燒連ででもあらうか中々大勢居り、女學生には女の世話係が居るなどは頗る行屆いて居る。此世話係が入口で我々を引取つて殆ど附切りで世話をして呉れること、丸で赤ん坊を湯に入れる樣だ。先づ書式の紙を取つて呉れ、机の所へ連れて行つてこゝは斯う書くあすこへは何を書くと一々敎へて呉れ、サー出來ましたかそれでは學長に會ひませう、……學長は濟みしたか、今度は先生方と一寸御話なさい、先生は誰々です、何?「マクドネル」教授にはもう御近附き、

も一人は?「ヒッペルト」教授?一寸御待さなさい、生憎「ヒッペルト」教授は今日見えて居ません、アイ、アム、ソリー、それでは直ぐ總長の所へ行きませう、さあこゝで少々順の來るのを御待ち下さい、濟んだ時分に私が又來ますから、……濟みましたか、そこで今日直ぐ聽講料を拂ひますか、では一所に事務室へ行きませう、サーこゝが事務室です、事務員が三人居ますからどれにでも手明きの所へ書類を御出しなさい、それで萬事事濟みです、まう何も分らないことはありませんね、それではグッドバイと云ふ次第、何だか幼稚園へ入學する樣な氣持もするし、一寸ボンヤリ立つてでも居やうものなら直ぐ誰かゞ側へ來て "What do you want?" "Are you attended?" と尋ねる所は、どうやらデパートメントストアーの樣な氣分もする。それが我々外國人に對して計りでなく、誰にでも其通り世話を燒く樣子だ。勿論我々外國人は特に世話の燒かせ方が多く、向うでも別して親切に世話をするには相違ない。學長總長との面談も至極四角張らず、「グットモーニング」に始まつて「グットバイ」に終り、「ドイツ」の大學見た樣に、大使館の學歴證明書を出せの、パスポートを預けろのと面倒を云はず、「ラテン」語で書いた大きな入學許可書を大學と法科と別々に二枚も吳れて歸り道のポケットを嵩張らせたりもせぬ。既往を問はず、將來を論ぜす、肩書を要せず、紹介を須ひず、況んや正副保證人をして拙者共に於て、一切引受けと牡丹餅大の印形を並べさせても尚ほ慥らず、右は當區內に於て土地家屋を所有しと區長さんまで引合に出すなどは思ひも寄らぬ。唯だ々々「ミスターホヅミ」のジエントルマンたるを信用して、「オルライト」「ヴエリグット」と通して吳たる。何と云ふ氣持のよいことであらう。流石は鐵道の預け荷物に合札のない國だ。勿論「ロンドン」大學の入學者が東京大學や「ベルリン」大學に比して極めて小數であると云ふことは考へねばならぬ。故に僕は我國の諸學校が萬事具體的に斯の如へあれ云ふのではない。唯だ願くは此の心意氣でありたいと思ふ。此の心意氣とは何ぞ。學生をジエントルマンとし

て待遇すること。而して學生自身がジエントルマンたら[illegible]（完）

春雨の降る時

松崎天民

春雨の降る時、温泉宿にとまつて居て、その滯在客の一人二人から得た物語の中には、私にいろんな事を考へさせる樣な、痛ましい事實があつた。私は今、その中の一つを、「十四年の間に」と題して、備忘録に書いた。――

十四年の間に

瀧田樗陰兄足下――新聞社を辭退してから、久し振りに寸暇を得ましたので、取るものも取敢ず、此の温泉場へ遣つて來ました。女房や子供を連れての湯治ですと、頗る妙なんですけれど、「人生探訪」の材料を得るために、僅に五六日の滯在を豫定しての旅では、餘り好い氣持になつて納つても居られません。

此の温泉場は、東京から僅に半日程の所ですが、仔細あつて熱海だとも、伊豆山だとも申し上げますまい。今日はこゝへ來て三日目になりましたけれど、晴れた日とては一日も無く、毎日〳〵、亭主に先立られた未亡人が、咽び泣きでもして居る樣な春雨が、冷たく淋しく降つて居ます。此の分ですと、私が東京へ歸りますまでは、「北西の風曇後雨」が、何時までも執念く、心を滅入らせることでせう。

避寒の客は、もう大概歸つてしまつて、土地で第一等だと云ふ此の温泉宿にも、滯在客は數へる程しか居ません。私の部屋を受持の女中の話では、新婚旅行らしい若い男女の一組と、上方者らしい老夫婦の一組と、他に學生さんが一人と、藝妓上りらしい中年增が一人と、目下の滯在客は、僅にこれだけしか無いと云ふ事です。二階三階を通じて、部屋數が五六十もあつて、多い時には二百人近い湯治客で賑ふ此の宿屋も、今はさながら伽藍の樣な靜けさでして、心ゆくばかり温泉

場の氣分を味はふ事が出來ます。時間と金とが有れば、當分こゝに滯在して、「溫泉ローマンス」でも書かうものをと、いろんな空想に耽りながら。東京に居る足下に宛て、先づ此の手紙を書きます。

○

楞蔭兄足下、漂泊の心を抱いて、此の溫泉場に來ました私は、幸にして「流轉の女」に恰好な、一場の物語を得ました。何んな男にも女にも、「漂泊の姿」と「流轉の心」とを見得る私の前に、其の物語は餘に小說めいて居ますけれど、事實は時あつて、小說以上の奇遇と驚異とを、多くの讀者に强るものである事を、閑却してはならないと思ひます。

其の物語を私に聞かせた人は、一月前から此の宿に滯在して居る△△の學生ですが、姓名は假に木下芳男と云ふ事にして置きます。其の木下君は胃が惡いとかで、一月下旬から此の溫泉場に來て居るのださうでして、二階の南寄りの八疊に、たゞ一人で呑氣に起臥して居る樣子です。齡は二十四五、背がヒョロ長くて色の白い、どちらかと云へば神經質らしい男ですが、まだ△△の學生だと云ふだけあつて、何處やらに子供〳〵した無邪氣さが見えます。私は此の木下君と日に三四度は、大きな浴槽の中で顏を見合せて居ましたが、昨日初めて言葉を交す樣になつて、木下君の室へ行つたり、一所に晚飯を食べたりしました。

私が「淪落の女」を書いた當人である事が判りますと、木下君は非常に驚いた表情をしまして、「あなたが彼の天民さんでしたか」と、二度も三度も繰返しました。そして「僕も淪落の女を一人、妹にもつて居ますが……」と云つて、何事か思ひ出した樣な顏色を見せました。溫泉宿に滯在して、病氣を養ひながら、勉强の出來得る身分の木下君の妹が、淪落の女であると云ふ事は、解き難い不思議の謎であると思ひます。私は笑つて、「戲談だらう」とのみ答へましたが、其の時、木下君の顏には、堪へ難い悲痛の色が表れて居ました。「若い木下君にも、人生の哀話がある」さう思ひますと、私は何だか木下君が氣の毒になつて、重ねて何と

も云ひ得る頭髪が出来ませんでした一飲ではない、可いと云つて、醫者から禁められて居ますけれど、僕は一人の妹のために、酒の香にも親しむ様になりました」と云つて、木下君は熱く燗をした白鶴の盃を、止め度もなく重ねたりしました。

○

樗蔭兄足下、「漂泊の男」では、新聞社を辭退した私自身の姿を、正直に眺めたに過ぎませんが、「流轉の女」では隨分いろんな方面に活動しました。或る女を訪ねて、此の溫泉場へ旅したのも、「流轉の姿」を見たいためばかりでした。久し振りに淺草の私娼窟に入込で、十二階下の夜をぞめき歩いたのも、「流轉の心」を讀みたいためでありました。

歐洲から歸つた閨秀畫家で、美しい名を有つた歌川若菜を訪ねましたのも、實は「流轉の過ぎ來し方」を知りたいためでありました。女優から藝妓になつたり、藝妓から女優になつたりした、福原花子を訪ねましたのも、「流轉の徑路」を眺めたいためであります。美日課展覧中の若い洋畫家の群と、學校の生徒達の一群に拝禮されて居ると云ふ、モデルのお若に逢はうとして居ますのも、實は「流轉の告白」を聞きたいためであります。淺草は駒春日家の玉枝を招いて、半夜を草津の二階で過しましたのも、「流轉の涙」を探りたいためでありました。思へば隨分、いろんな方面を歩いて、いろんな女に接觸して見ましたが、「漂泊の心」と「流轉の姿」とは、何んな類の人々の上にも、色濃く漲つて居る様に思はれました。

けれども此の溫泉で、不圖した機會から知合になりました木下君の話ほど、私の心を動かしたものは有りませんでした。「淪落の女と云つて宜しいか、又は數奇な運命の潮に弄ばれた女と云つて宜しいか。兎にも角にも、僕のためには一人しか無い妹の行く方を探ねて、僕は此の十年間と云ふものを、暗い心持で送つて居ました。詳しい事は、何れ後から手紙で申し上げますが、十四年目の去年の秋、やつとの思ひで妹の所在が判りますと、妹は既に生れた儘の君子では無くて、「やま

と」と云ふ名で生きねばならぬ、田舎藝妓の群に落ちて居ました」。斯う云つた木下君の聲は震へて、眼には涙の雫が宿つて居る樣に見えました。此の宿に滯在して居る筈の女には逢へませんでしたが、私は此の木下君に逢つた事を、神のお引合せとして、感謝しなければなりません。春雨わびしく降る溫泉宿の一夜、青春の血汐に燃え立つ木下君と、四十に近い中年の私とが、一人の若い女の上を語り合つた其の時の光景を、何うか想像して見て下さい。

こゝには先づ木下君の實話から申し上げませう。

○

――一人しか無い妹が、藝妓になつて居たと云ひましたが、若い娘がさうした境涯に落ちますには、必ず深い因緣が絡んで居ます。僕達二人の兄妹も、運命の黑い潮に苛責まれて、幼い時から悲しい鹽を嘗めて來ました。二人の生活が世間並の地平線へ出ますのは、要するにこれからだと思つて、僅に慰めて居ます。

妹は今年十八歲でして、僕は二十四歲になります。六年の月日を隔てゝ、此の世に生れて來ました二人は、三歲と七歲の秋に別れた限りで、去年の秋までと云ふものは、顏も知らず聲も聞かずに、別れ〳〵に成長しました。一家の恥を申さねば判りませんが、僕が小學校へ入學しました七歲の春に、父は何か良からぬ事件に連座しまして、監獄へ送られる身の上になりました。三十になるやならずの母は、その時、何と思ひましたものか、僕を父方の叔父に預けまして、三歲の妹を連れたまゝ、所在を晦ましてしまひました。何も知らぬ僕は、叔父さんの家に引取られて、そこから芝の小學校へ通學して居ました。

監獄へ入つた父は、三年經つても五年過ぎましても更に姿を現しませんでした。母と妹とは何處へ行きました事やら、僕は一時に父母と妹を失ひまして、孤兒同樣の淋しい心持を抱いて、賴りない月日を送りました。叔父さんと叔母さんとは、僕を子供の樣に可愛がつてくれましたし、僕も叔父さん叔母さんと慕ひましたが、心の何處やらには、父母の慈愛を離れた淋し

さが流れて居ました。叔父さんはお前のお父さんだよ、叔母さんはお前のお母さんだよ、と云はれましたけれど、僕はこの叔父夫婦に向つて、お父さんとか、お母さんとか呼びますのは、何だか嘘の様に思へてなりませんでした。そして僕には、僕を生でくれたお父さんとお母さんとがあつて、何處かで僕を見て居てくれるに違ひないと云ふ様な、果敢ない望みの中に生活して來ました。時には六つ違ひの妹が、何んな顔をして居るか、早く逢つて兄と妹の名乗がして見たいと、人知れず考へて見ては樂みにして居ました。

監獄を出ました父が、足尾の山中で憤死しました事を、叔父の口から話されましたのは、僕が小學校を卒業した年の夏でありました。同時に僕を捨て行く方を悔した母は、十五六も若年の男に關り合つて、本所緑町で暮して居ます事を、叔母さんから話して聞かされました。七歳の時に別れました限りで、碌々親と子の親し味を覺えない間に、父に先立られました悲嘆よりも、僕は母の不行跡を淺間しい事に思ひました。僕のためには一人しか無い生みの妹にしましても、叔父夫婦の眼を忍んでまでも逢ひに行かうと云ふ様な心持には、何うしてもなれませんでした。僕はたゞ不運で死ました父の面影を、幻の様に思ひ浮かべながら、妹は何うしたらうと、何かにつけて、其の安否のみが氣遣はれました。

その時から去年の秋まで、足かけ十年の間と云ふもの、戀人か何ぞの様に、一日も僕の心を離れなかつたのは、妹の身の上でありました――。

○

樗陰兄足下、木下君の物語に依りますと、その妹が母の許には居ないけれど、何處かで壯健で暮して居ると云ふ事が判りましたのは、一昨年の夏であつたさうです。壯健で暮して居ますにしても、母の許には三四年前から居ないと判りました時、木下君は何か知ら不安の氣持になつて、假に妹を探ね出さねばならない樣な、落着いては居られない樣な、急き立てられる樣な心持になつたと云ひます。

けれども本所の母を訪ねる事は、叔父夫婦が許さないばかりで無く、木下君も何う云ふ譯か、母には逢ひたくないと思つたさうです。母に逢はずに妹の所在を知らうとするには、いろんな手數を勞はさねばなりませんが、木下君は自分の力一つで、妹の所在を探し出す方が、意味ある事でもあれば、穩當であるとも思つたのでせう。そして不幸不遇に育つた妹に逢つて、兄妹の名乘もしたいし、身の行末の相談もしたりし樣とする心の一面には、十何年目で妹に逢ふと云ふ事に、輕い好奇心を有つて居たに違ひありません。三歳の時に別れたきりの妹の所在を搜索すると云ふ事にも、木下君は探偵的の興味をそゝられて、全力を妹の所在探査に盡したらしい樣子が見えます。

妹は何處に居て、何をして居るであらうかと思ふにつけても、木下君の心は、一日も落着いては居られませんでした。本所緑町の母の住居の近所へ行つて、それとなく樣子を探りましたけれど、母一人しか知らない妹の所在を、近所の者が知つて居る筈はありませんでした。叔父の家から、△△△に通學して居る憫な夕な、木下君の心は妹の上にのみ馳せて、更に安んずる日とてはありませんでした。時節を待つて居さへすれば、何時かは邂逅することもあらうと云ふ樣な、小說的の空想を心に描いて見ましても、木下君は安心する事が出來ませんでした。七歳の時に棄子同樣にされた怨めしい母には、進んで逢ひたくは無いにしても、神樣のお引合せか何かに依つては、逢ひたい心持がして居たに違ひありません。母にさへ逢へば、妹の所在も安否も判るに違ひないと云ふ、妹思ひの木下君の心が、無情な母にも通じましたのか。去年の秋も淺い九月の中旬、珍しい女文字の手紙が、木下君の滅入つた心を引立たせました。

それは本所の實母から、絶えて久しい十四年振りの消息でありましたが、文面はたゞ簡短に、「至急にお目もじしたいから、叔父夫婦には內所で、訪ねて來てくれ」とありました。その手紙を讀だ時の木下君の喜びは、果して何んな風でありましたでせうか。

詳しい事は、木下君が私に提供しました日記や、私に宛て手紙風に書いた木下君の手記に依つて、何うか承知して下さい。

○

——九月十六日　本所緑町に母を訪ふ。

僕は七歳、妹は三歳の時に別れしのみにて、思へば十四年目の再會なり。その頃、二十八九歳なりし母も、十四年の歳月に四十女となりて、何となく面影の窶れを見る。母も涙、僕も涙、十四年の月日を隔てしも、母のためには子なり、子のためには母なり。涙、涙。

「妹は何うしましたか」

「心配しなくても、君子は壯健で暮して居ます」

父の死と妹の安否と、語る母も泣けり、聞く僕も泣けり。母の言譯がましき述懐は、僕に對する無情を辯護する樣なれど、今更何の怨みも甲斐無しと思ふ。僕はたゞ、幼き妹一人に、この上の苦勞をさせるは、忍び得ぬ事なり。何處にありて、如何にして生活せるや、何も彼も打明けられたしと願へり。

されど母は語らず、一枚の寫眞を取出して、僕に示せるのみ。幼き頃の面影は、僅に目許に殘れるのみにて、電車の中にて逢たればとて、僕の妹とは氣付くまじ。派手なる友染模樣の晴着を着て、紅白粉に化粧せる樣は、幸福なる月日の下に、微笑みて居る樣なり。

「大きくなりましたね、何處に居て何をして居るのですか。僕は妹にも逢ひたい、早く逢ひたい……」

「少し仔細があつてねえ、何處に居るかは云へないけれど、斯うして幸福に暮して居るもの、少しも心配なんかしなくて宜いのだよ」

母は何と云ひても、妹の所在を明かさず。逢へる時が來たら逢へるとのみにて、妹の身の上話だけは、避ける樣な氣色が見えたり。妹は如何なる仔細ありて、寫眞の樣なる服裝をなし、何處に在りて生活せるか。母は何と尋ねても、「逢へる時が來るまでは」とて、多くを語るを好まぬ樣子なり。妹の上には、何か知ら祕密が伏在して居るに相違なかるべし。

ふと寫眞の臺紙を熟視したるに、「三島町××寫眞

館」とあり。三島町と云へば、伊豆の三島町なるべく、服裝の工合に依りて考ふるに、妹は藝妓か、藝妓に近き仲間にありて、生活し居るやも知れず。母が其の所在を語らず、其の現狀を隱す樣子に見るも、妹は普通の處女として、安全なる生活を送つては居ぬ樣に察せらる。あゝ僕のためには一人の妹も、相逢はざること十四年の間に、遂に白粉の女の群に墮落したるか。怨めしきは母なり、悲しきは運命なり。

　母が僕を招きたるは、其の心の一隅に、母としての慈愛が潛めるためならん。齡若き男に關り合ひて、一族一門に顏向けも出來ぬ樣になりたる母なれど、人の子の親としての情愛は、心の何處にか消えずに有るべし。されど若し妹を脂粉の巷に落したりとせば、其の罪は擧げて母にあり。母の血を享けたる妹に、母に似たる放逸の性質ありたればとて、「三島町」にて寫眞を撮る樣になりたるは、母の責に非ずして何ぞ。僕は君子の兄として、君子を現在より救ひ出すべき責あり。母には後日の再會を約して歸る。心快々として樂まず。慰め無き日なりしかな。

　歸宅の途次、友人を本郷に訪ねて、妹の件に就き助力を求む。Sは世間的の事に於て、僕の先輩なり。先づ手紙を三島町の寫眞館に送りて、妹に似たる女の在否を確むべしと云ふ。其の返書を見たる上にて、更に或る行動を取らんと云ふ。Sは賴母しき男なり。――

○

――天民先生、同じ宿に泊つて居るのですから、こんな手紙を書く必要は無い筈ですが、妹に關する一件の經過を申上げるために、特に此の手紙を書きます。斯うした事件でも、若し何かの材料になりますなら、御遠慮なくお役に立て下されば、いろ〳〵身の上の恥までお話した小生の主意が、徹底する次第です。

　年齡、人相、風體を書いて、三島町の××寫眞館に照會しましたら、五日目の夕方になつて、待設けて居た返書が着しました。「お問合せの御婦人は、寫眞さへ送つて下されば、何の造作もなく判りますが、數多いことですから、なか〳〵見當がつき兼ねます。けれど

も齡が十七歳で、御申越しの樣な人相の女ですなら、松武藏家のやまと、云ふ藝妓ではないかと思はれます。若し其の妓ですなら、生れは東京の近在でして、十六歳の春から松武藏に現れた美人です。この邊の藝妓屋の事ではあるし、齡もまだ若い妓ですから、前借と云つても二三百圓の程度でせうが、やまとは若いに似合はず、淸元が巧いと云ふ評判です。御問合せの御婦人が、其のやまとさんで有りますなら、手前の所で寫眞を撮つた事がありますから、若し御入用の事があるなら、特別に一枚だけ增燒して差上げても宜しい」と、叮嚀な文面の返事が參りました。

　友人のＳとも相談の上で、その寫眞を送つて貰ひますと、小生が母の許で見た妹の寫眞と寸分違はぬ全身のカビネ形でありました。小生は初めて、妹が三島町で藝妓になつて居る事實を確めましたので、もう一刻もじつとして居る事は出來ませんでした。養母の叔母に相談しましたならば、二百圓や三百圓の金は、其の費途の名分さへ立てば、小生に吳れるとは思ひましたけれど、養母のためには生さぬ仲の妹が、藝妓をして居ると云ふ事を、何うして打明ける事が出來ませう。叔母の娘の嫁入つて居る靑山のドクトルに相談すれば何とか好い智惠を與へてくれさうにも思ひましたけれど、小生は出來ることなら小生の力一つに依つて、妹を現狀から救ひ出さうと決心しました。それには何者が何と云ひましても、友人のＳを立物にしまして、萬事は其の指圖に從つて、事を計らうと覺悟を定めました。同じ學校の同級生の中でも、最も氣心の合つたＳは、女一人を救ひ出すと云ふ事に、非常な興味を有ちまして、いろんな畫策を授けてくれました。非常手段に訴へて、妹を三島の町から奪ひ取つて、東京へ連れて歸らうと云ふ、Ｓの計畫は單純ですが、其の方法は極めて大膽にして、且つ無謀でありました。

　Ｓは保證人の許へ行つて、大島物か何かの立派な風體を整へ、如何にも銀行員らしい恰好をして、新橋驛で待受けて居ました。僕は靑山の義理の姉を訪ねて、學校の同窓會で入用だからと云つて、ドクトルの紋付

と衣服を借用し、大家の若樣然と構へまして、新橋驛へ馳せ付けました。二人で工面した費用が合せて三十圓、これだけあれば三島へ乘込で、一寸した料理屋から藝妓を招で、晩飯ぐらゐ食べましたところで、貧乏書生のお化けとは思はれますまい。況んや藝妓やまとを奪ひ取に來た物騷な男である事は、誰にも氣付く譯は無いと云ふので、二人は呵々と大笑しました。——

○

——天民先生、小生は斯うした事にかけて、全く何の經驗も無い門外漢ですけれど、友人のSは世間馴れて居るだけに、萬事を一人で呑み込で居ます。三時半の下關行の急行に乘りまして、沼津で下車しました後、例の電車で三島町へ着いた頃には、十月の夜も薄ら寒くて、富士山の姿が氣高く仰がれました。

宿屋に行つては、反つて面倒になるからと云ふので、Sと小生とは車夫の案内で、三島屋(假名)と云ふ料理店に登りました。修善寺歸りの湯治客らしい振れ込みですし、服裝が書生さんでは無いのですから、三島屋でも大に歡迎して、二階の十二疊に通してくれました。わさび漬か何かのつき出しで、櫻正宗か何かをチビリ／＼初めますと、受持の女中がお定りの

「ちよいと、誰かお馴染をお呼びなさいな」

と出て來ました。同窓會の他には、料理屋に登つた事の無い小生は、へどもどして居ましたが、S君が萬事を心得た顏つきをしまして、

「さうね、呼んでも宜いけれど、何うだい、少しは話せる妓が居るのかね。顏が美しくて、聲が好くて、そして惚れッぽくて、浮氣も少しはする樣な妓が………」

と大きく出たものです。女中は笑ひながら、

「富士の白雪、解けて流れて、化粧の水と云ふではありませんか。三島にだつて、あなた、居ますわ」

と、此方が待ち受けて居た圖に當つて、しきりに藝妓を呼べと勸めました。

「何んな妓が居るのか、田舍者で不案内なんだが、さう／＼此の卷莨の樣に、敷島さんと朝日さんと、そ

れから大和さんでも呼で貰はうかね」

女中は「まるで花魁の樣だわね」と云つて、笑つて居ましたが、やがて眞面目になりまして、

「戯談ではありませんわ、あなた、敷島なんか云ふのは居ませんけれど、やまとさんなら居ましてよ」

と、次第にSの術策に落ちてしまひました。

「それ〱、そのやまとに限るんだよ、はッはッ」

藝妓に爲つた妹と、△△の學生たる兄とが、十四年目の對面は、實に斯うした場面の中で實演されたのでありました。小生は餘り飲めない口ですから、宜い加減にSの相手になりながら、小生等の前に現はれた妹の姿を注視しました。「今晩は‥‥」と云つて來た瞬間にも、「あなた、お酌‥‥」と云はれた刹那にも、僕の心は怪しく浪立ちました。あゝ何と云ふ悲慘な滑稽であつたでせう。

十四年前に別れた骨肉の兄が、疊一枚を隔てた直ぐ前に在つて、心の中で泣いて居るとは知らずに、妹のやまとははしやぎながら、サノサ節を唄ひました。磯節から奈良丸くづし、カチユーシヤ可愛やを唄つたり、淸元入りの二上りや、都々逸なども唄ひながら、十七歳にしてはませた座敷の取なし振りに、小生の舌を卷かせました。小生の妹と知りながら、藝妓やまとゝして取扱はねばならぬSの苦心を見るに付けても、小生は遂に座に堪へぬ樣になりました。便所へ行く樣な風をして、暫くは座を外して居ましたが、Sは愈々好い氣持になりまして、妹を相手に飲だり唄つたりして居る樣子でした。

三十分近くも過ぎて、座敷へ入つて見ますと、やまとは變な顔をして、小生に杯をくれと云ひました。

「君、便所は階下なんだらう」

と云つて、Sは女中に案内させながら、わざと其の場を外した樣な氣配が見えました。

「今、お連の方に承りましたわ。あなたは私の兄さんですッて‥‥何だか嘘の樣ですけれど、私には三歳の時に別れました兄さんが一人、東京にあるのはあることよ。あなたが其の兄さんだから、お話をして

御覧と云はれましたが、あなた、ほんとうに兄さん……私の兄さんなの……」

天民先生、お笑ひになつてはいけません。小生は其の時、默つてやゝまとの手を握りながら、熱い涙の落るのを、止める事が出來ませんでした。

「君子、お前に逢はうと思つて、僕は何のくらゐ苦心したか知れないんだよ。本所のお母さんにも十四年振りにお目にかゝつたが、其の時、見せて下さつたお前の寫眞を證據にして、漸とお前が此の土地に居る事を知つたのだ。僕はお前を連れて、東京へ歸る積で、いろんな要意をして來て居る。兄さんも變つたらうが、お前も大きくなつて、藝妓にまでなつて……ほんとに驚いてしまつたよ」

「あんな歌なんか唄つて、兄さん、わたし極が惡いわ。それでも、ほんとうの兄さんで宜かつた……。堪忍してね、堪忍してね……」

三島町の夜は、もう十二時に近くなつて居ました。

○

――前に申し上げるのを忘れましたが、注意深いSの要意に依つて、小生は一個の風呂敷包を持つて行きました。その包の中には、十七八歳の山の手の令嬢が著る様な衣類と帶と下駄とが入つて居ました。それを連れ出した妹に着せて、東京へ一所に歸らうと云ふのが、こんな事には拔け目の無いSの準備計畫でありました。

小生等二人は、更に一人の若い藝妓を招いて、何食はぬ顏をしながら、四人が一所になつて、三島屋を出ました。その夜は或る女郎屋に登りまして、泊る事に極めましたが、妹のやゝまとと小生とは他に氣取られぬ様に、いろ〳〵逃走の手筈を定めました。抱へ主に義理を有つ妹は、「逃げて行かなくても……」と、最初の間は承知しませんでしたが、然し田舍藝妓の末路の悲慘な事を語つて聞かせましたら、「では一所に行くわ」と云つて、漸と承知する様になりました。抱へ主に多少の迷惑を及ぼすにしましても、妹を一日でも藝妓として暮させますのは、小生の心から忍ばぬことであり

ました。

女郎屋に泊りました小生等は、未明に其處を立出まして、沼津街道を歩きながら、藝妓屋を脱けて出る妹を待受けました。銘仙物に黒襟の掛つた袷衣か何かを着て居ました妹の姿が、同じ沼津街道に現はれましたのは、それから二十分の後でありました。三人は三島の町外れの細い路次に入つて、手早く妹に着物を着かへさせました。髮は前夜の間（うち）に、廂髮に結かへて有りましたので、持つて行つた衣類を着た姿は、藝妓らしい様子とは少し異つて見えました。途中から沼津驛まて電車に乗りまして、首尾好く東京に歸つたのは、其の日の午後一時頃の事でありました。すべてを秘密の間に決行しましたから、東京に於ける妹の落着き所も秘密の間に何とか所置をせねばなりません。頼りになる親戚は二三軒ありましても、迂濶に事實を打明けましては、反つて折角の苦心を水の泡にしますので、これには小生も一方ならず心配いたしました。

友人のSが奔走しまして、妹は一先づ救世軍の婦人ホームに收容して貰ひましたが、田舍藝妓の境涯で、放逸な月日を送つて居ました妹にとつて、婦人ホームの朝な夕なは、一種の桎梏であつたかも知れません。間もなく妹は婦人ホームを出まして、或る親戚に引取られましたが、三島の抱へ主も、前借の殘額二百圓のために、烈火の様に怒つて來たりしました。遂には小生とSの力では及ばない様な、世間的の問題になりましたので、遂に一件の顛末を、青山のドクトルに打開けました。抱へ主の方へは、月賦で前借を返濟する様に話をまとめまして、妹はドクトルが監督の下に、青山の某家へ女中に住み込ませました。天分と云つても宜いほどに、清い聲を有つて居ます妹は、藝妓として一生を送る方が、或は花やかであるかも知れませんが、小生は一人しか無い妹を、私娼に等しい藝妓風情にして、一生を朽ちさせたくは無いと思ひます。そして濁り江の臭氣が、餘り深く骨肉の中に泌み込まない間に、助け出す事が出來ましたのを、せめてもの幸福とせねばなりますまい。

この後、妹の身の上を、何う云ふ風に所置したら宜いでせうか。その事に就ては、改めて御意見を伺つたり、お力添へを願ひたいと思つて居ます。こゝには唯以上の經過を申し上げて、若い女の運命に就いて、考へて頂きたいと思ふのです。――

○

樗蔭兄足下、此の溫泉宿に來てから、今日で五日目になります。明日はいよ／＼東京へ歸らねばなりませんが、雨は今日も亦た、咽び泣く樣に降つて居ます。いろんな材料を私にくれた木下君は、自分でも何か「自敍傳」らしい物を書きたいと云つて居ます。

今日は木下君の妹の寫眞を見ましたが、小柄な十人並の美人で、眼に一種の魅力をたゝえて居るのが、母婦としてよりも、娼婦に應しく思はれました。やまとの君子の樣な、十七八歲の女を、「流轉の女」として取扱ひますのは、何だか物足らぬ氣持がしますけれど、私の謂ふ漂泊の姿と流轉の心とは、年齡の老若を問はず、斯うした女の上にも漾うて居ます。十四年の歲月を、孤獨に似た心持で送つた木下君の上にも、十四年の間に、處女から藝妓に落ちた君子の上にも、漂泊流轉の人生が、色濃く浮んで居ると思ひます。

「妹はまだ、花やかな生活に憧憬れて居ると見えまして、今日もこんな手紙を送りました」

と云つて、木下君が開いて見せた君子の手紙には、次の樣な一節が、力強く書いてありました。

――兄さん、こんなにして、このまゝ齡を重ねて行く事は、何だかつまらないと思ひます。私は藝妓になつて、歌を唄つたり、踊を踊つたりするのが、私の一生涯の仕事かも知れぬと思ひます。この儘で人樣の妻に爲つたり、窮屈な家庭へ入りつたりしまして、一生を送るのは、何だかつまらないと思ひます。藝妓になるのがいけないならば、女優になつて花々しい月日を送りたいのですが、兄さんは何うしても許してくれませんか。兄さん、一人しか無い妹の私を、可愛相だと思つて下さるならば、何うか私の思ふ樣にさせて下さいませんか。――

樗陰兄足下、斯うした若い娘の過ぎ來し方は、漂泊の旅でありました。その行末もまた、流轉の旅ではないでせうか。私は木下君の顔を見ながら、こんな若い妹を有つた木下君の上に、何うか幸福がある様にと、心の中で念じました。

雨はまだ小歇みもなく降つて居ます。

天民附記――前號に掲げました「其の夜の氣持」は、名題が表示して居ます通り、私が毎夕を辭退しようと決心しました當夜、刹那の感情に基調を置きまして、徹夜して執筆しましたので、記述上に多少の錯誤がありました。殊に黒田湖山君の話として記しました事實の中には、私の滞在當談が混入しまして、黒田君の云はなかつた事が、云つた様に出たりして居ます。これは黒田君の人格のために、又毎夕新聞に於ける立場のために、謹で一切を抹殺したいと思ひます。又床次竹二郎氏は名義だけの社長だとありましたが、小野瀬不二人氏の打明け話に依りますと、社員の任免とか編輯上の根本方針とかは、床次氏が裁判決定されて居ますさうですから、これも誤を正して置きます。又「他の記者達は、他社に比して安價な俸給であり、冷薄な待遇であるにも拘らず」の一句は、事實無根と云ふよりも、私の見かたが違つて居ました様ですから、これも謹で訂正して置きます。私は彼の記事のために、木村持主、床次社長、小野瀬局長、黒田部長の四氏に、多少の御迷惑をかけました様な結果になりました事を、重ね〲不本意に思ひます。尚三月三十一日に、毎夕からは積立金全部と、三月分の給料も頂戴しましたから、こゝに記述上の錯誤を正すと共に、改めて毎夕新聞に對して、深厚なる敬意を表します。(四月十日)

伊藤野枝の批評に對して

▽伊藤野枝女史を罵る

中村孤月

伊藤さん。

自身の思ふことを言はずに虚僞ばかりを書くといふことは最も惡るいことで、其ういふことに比らべると、思ふまゝのことを思ふまゝに書くことが何の位優まつて居るか解らない。思ふまゝのことは思ふまゝに書いたといふだけで、讀む者に快感を起させるものです。

此意味に於いて、貴女の中央公論に書かれたものは、――少くとも貴女

の思つて居ることの一部を思ひのまゝ書かれたものである爲めに、外面から見れば、思ひ切つた正直な、無遠慮に書きなぐつたものゝ如に思はれます。其爲めに假令如何に下卑て見えようとも、淺薄に感じられようとも讀む者にとつて、必ず幾分かの面白さを交へずに讀まれることはありません。

書かれた當人こそ、厭やに感ずるかも知れませんけれども、其人間でもなほ、他人の書かれて居る所を讀む時には、多少の微笑を起すかも解らないと思はれます。其れ故に貴女の書かれた文章が、もし何所かの下品な、とるにも足らない待合の女將か、口汚い裏店の女房か、惡口好きな、あばずれな淫賣女か、其らいふ者の口から出たものと爲れば、其下卑た所や淺薄な所は餘り氣になりませんから、痛快な面白いものとして喜んで讀まれるに違ひありません。

しかし其れが貴女が書かれたとすると、貴女といふものを、下品な待合の女將や、口汚い裏店の女房や、あばずれな淫賣女や、おきやんな子守女とは、似て居る點よりも違つて居る點の方が何となく多いやうに思はれますので、甚しくつまらないものを書かれたものだと考へずには居られません。

中央公論の三月に書かれた時に、私は貴女に直接に、あゝいふものを書くことはつまらないことだと言ひました。其れは彼れには特殊な、私自身としては、非常に意味の深いことが書かれてあつて、心の中に感謝をして居ましたが、表面ばかり讀む人々、否、如何に賢明な人々でも表面ばかりしか讀むことの出來ない地位にある人々には、まことにつまらないものであると考へたので、あゝいふものを書くことをつゞけることは止めた方が善いと思ひました。

其時私は貴女の彼れに對して、彼の文章は非常に書きなぐりの如に見えるが、決してさうではなく、其中に非常に鋭く微妙に働いたリフレクシヨンが含まれて居る。そして其リフレクションは非常に鋭く働く爲めに殊によると貴女自身でも、唯だ一氣に書いたと考へられるけれども、決して其うではなく、若し如何かしてもう一度書く時には、同じことを書くつもりでも、可なり違つた所が多くなるに違ひがない。貴女は優しい人間であるから、到底思ひ切つて、自身の感じて居るとほりに書くことは出來ない。それであるから深いものを見せてもらふことは出來ない。淺いものならば貴女を待つ必要はないのだから、あゝいふものの代りにもつと價値の有るものを書くやうに爲た方がいゝと言つたのでした。そして其時、森田草平氏が、彼れを讀んで憤慨して居ました。草平氏は先にも、貴女が私にあてゝ書いた時も、憤慨したと他人から聞いたことを付け加へて、草平氏が明子氏から受けた心の創傷は非常に深いものだと言つたのでした。

貴女が私の言つたことの爲めに書くことを止める風もなし、私も其所から立ち入つて話すこともなかつたので、其まゝに歸ると、其後行つた時に今度は草平氏もかきました。貴女の先日の話を聞いて、非常に興味を覺えたから、と言ふことで、一度見かけたことが有るといふことでした。

中央公論の四月は、創作の批評を爲るために讀まなくてはならないので、貴女から借りる約束をして、まだ貴女がろくに眼を通さない中に借りて來て、創作を讀む前に貴女の文を讀んで見ると、草平氏や泡鳴氏まで書かれてありました。

此場合もし其書かれたものの價値が、前の月に書かれたものよりは多くなつて居れば、私は別に何にも言はないのです。しかし此れは決して前の月のものよりは價値が多くなつて居りません。其爲めに少し理由を上げて貴女の反省を促して見たいと思ひます。

貴女は此れを其れ程までに考へて見る必要がないと考へられるかも知れませんが、私にはさうは思はれません。人間の社會といふものは、當人の問題にならないと思ふことが常に煩さく問題になるもので、多數の人々は問題に爲たがるものです。其爲めに貴女が、其うまで考へられないと思ふことが起つて來るのです。

此文を讀んで誰れでも感じられさうなことは、貴女が眞面目で情熱家であるとゝもに貴女が惡戯者であるといふことです。混雜しない爲めに草平氏のことを書かれた所だけを例に爲ますが、一面非常に惡戯て居るし、一面眞面目で書いて居ます。そして如何なる所でも其惡戯氣が其れだけで書かれて居ずに眞面目な考と感情が裏付いて居るから、其んな所は、時に甚しい毒舌になつて居ます。私は貴女が何の爲めに草平氏に斯くまでの惡意を持つかそれが解りません。若し其うふことが惡るければ、斯くまでに惡意を持つと解される如な文を書くかといふことです。

紅い房のことを書いたのでも、ボヤッとして居ると書いたのでも其れです。

其次ぎは、徒らに口汚い言葉を使つて、筆先きで強く書いてあるが、其根柢の淺いことです。平塚氏と草平氏の彼の事件についても、公平に言つて、半分は平塚氏の方が怜悧であつたと考へて居るであらうし、後の半分の人々は、草平氏の方が却つて怜悧であると考へて居るかも知れません。此れは唯だ公算によつたので、貴女と同じ如に考へて居る人の方が多いに違ひないと思はれます。其爲めに此れだけのことであれば、口汚いといふことを除いては、日常知識階級少くとも草平氏を知つて居る人の半分は思つて居ることであらうと思ひますから、草平氏の居ない所では、其ういふ考を其まゝに言はないことはないであらうと思ひます。從つて藝術的氣分のない人ならば別であるが、其うでなく、常に書室の下では美しい細君が、若い踊り子に踊を習はせて居り、二階では萬年筆を握つて居る草平氏にあつて居らない所で言はれるから良い氣分であり、自身に解るよう書かれたから特に憤慨すると考へるのは、其考へる方に更らに甚しい侮辱であると思はれます。其れ故に其爲めには誰も怒らないと思ひますが、貴女が、單に見ただけで、直ぐに草平氏を間抜けた己惚れ家としたのは、聰明であると考へて居られる貴女にも似合はないことだと思はれます。世の中には、自らも聰明な女だと考へて居る如な女が、村役場の書記を米をといだ白水でふやけさした如な男と一所に居て、他人が其男を餘り感心しないと、躍氣となつて自分の一所に居る

男は偉らいと辨解する如な、女も居ます。そして小兒も矢つぎ早やに產みます。他人から見ると變に感じられますが、其女には少しも變でないとしか思はれません。其ういふことさへ有るのですから、人は見かけだけでは評は出來ません。貴女が其ういふ女を知らなかつたゝ言へば其れまででゝすが、其れでは餘りに見聞が狹過ぎたと思ひます。

貴女は草平氏が想像と違つて居たと書かれましたが、如何して其う考へられたのですか。他人の聞き傳へからですか、其れとも草平氏の書いたものからですか。書いたものには必ず其人の影が有るはずですから、若し其れならば、草平氏の何所かに其影が有るのを見落したことになります。人傳に聞いて其う思つたのならば、人の言葉を聞く時に善く注意して、其人の如何いふ人であるかを判斷し得なくてはなりません。要するに餘りに根柢がなさ過ぎます。貴女としてはもう少し愼重に書かなくてはなりません、考へなくてはなりません。

貴女は、少くとも此文章に於いては甚しく技巧が拙劣であります。口汚く力強く言ふよりは、內容を充分にもらなくては、其れは人に强く印象させる所が有りません。其れであるのに內容が極めて少いのを遺憾とします。貴女の書かれたものが、非常な毒舌、惡罵に解せられるのは其れが爲めです。もつと內容ゝ多くし、感じを緩やかに爲る所がなくてはなりません。

なほ私の貴女に言はなくてはならないことは、單に顏の見方にあつても、貴女の觀察眼の非常に鈍ぶいことです。草平氏の場合にももし貴女が其れを氣付かれたならば、草平氏が非常に偉らい人であると言ふことが解るのでした。

それは草平氏の下唇の下に、金絲雀の卷毛の如な髭が、二三拾本チョチョンと生えて居ることです。人間といふものは非常に妙なもので、何んな人の顏でも、墨とか白粉とか顏に塗れば必ず途を步いて笑はれるものです。墨や白粉が何だと言へば其れまでゝすが、可笑しいから爲方が有りません。然るに墨や白粉を塗つたほどでなくとも、草平氏は、チョチョンと爲た髭を生やして居ます。人間の髭の中で顎の髯は、拾人の中九人、否、百人の中九拾九人までは、非常に老人になつてからでなければ、必ず可笑しいものです。まして此チョチョンとした、上に卷きあがつた髭などは、まづ人の笑ひのたねになると覺悟しなければなりません。しかるに草平氏は人と話を爲て居る時に、其チョチョンとした髭を更らに時々手で上に撫で上げますが、それで誰れも噴き出さない所を見ると何かなくてはなりません。其れを貴女は、單にポワツとして居るの、ボンヤリだの、ウスノロだのと言つたのは、非常な過失です。

人間は決して一と眼見たゞけで、或は單に少と考へたゞけで其眞の底まで解るものでは有りません。泡鳴氏は小膽な正直者でありますと言ふあたり、僅かのことから直ちにコンクリュウジョンに飛んで居て、十五六の少女ならば、愛嬌にもなりますが、貴女も若くても既う二人の兒のお母さんです。餘り惡戲をして嬉しがる如なことを爲ないで、充分眞面目に深く考へて貴女の價値の有るところを知らしめるように爲なくてはな

りません。書室の卓に向て頭を捻傾けて居なくてはならない時に、外に出て、翼を開いて鬼ごつこや踊りなどを爲て居てはなりません。

▽伊藤野枝に與ふ

西村陽吉

野枝さん。

その後御無沙汰いたしました。このごろに一度いろいろな事で手紙をあげやうと思ひながら、つひその折を得ませんでした。この度はまた『妾の會つた男の人人』の中にどういふ積りか私を引合ひにお出しなされて誠に光栄にも、また少々は迷惑にも存じました。あなたの御覧になつた「私」といふものに就て、あなたの印象を卒直に赤裸々にお書きになつたものに對して、私がいま兎や角申すのは言譯がましく聞えていかにも面白くありませんが、そしてあなたが「私」をさうごらんなされたのを、當人の私が今更訂正したところで、知らない人には信用されさうにもありませんが、あれを讀むと、許された當人としてなんだかムズムズしてきたので、少し言はして下さい。これは辯解ではありません。あなたがあまり何もかも解り切つたやうに片づけて了ふのが少し癪に觸つたのです。そんな淺慮でものを言ふなら、おれの方がもう少しホントの物言ひができるといふ氣持です。女の淺墓とか女の猿智慧とかいふ言葉がありますが、(日本女性の最も堅實なタイプを代表するあなたに對つてこんなことを言ふのに失禮千萬ですが)あれをよんだ時にやつぱり女だな、殊に田舎の女だな、と思ひました。但しこれは多少私の憎惡が手傳つてゐたかも知れません。

野枝さん。

あなたに最初に會つたのはやはりあの青鞜を私の店でやつてゐた時分ですね。その時分あなたは親のきめた結婚とかを嫌つて、田舎から飛出してきたばかりの時で、ほんとに粗野な、嚴丈な、田舎田舎した娘さんでした。あの平塚さんの圓窓の室で會つたときの印象を、私は今でもはつきり覺えて居ります。あの時はたぶん紅吉も歌津ちやんもゐたと覺えて居ます。私はその時の事を『手』といふ小品に作つて「黒耀」に出しました。みんなが手の話をはじめたので、私はみんなの様々に異つた手を見ながら、非常にそれを面白く思つたのです。あなたは肉付のいいガツシリした手を出して、これで畠も耕したとか、二里の所を競泳したとかいふ話をしました。あなたの顔の色も手も一番黒かつた。そして平塚さんの手が一番白くつて小さかつた。あの時の前後のあなたは覺えてをりますが、その後のあなたはあまり明瞭ではありません。ただあなたが青鞜の社中で一番若くつてゐながら相愛の郎君のあるといふことや、野枝さんが懐胎したといふやうな噂がその時折の驚異となりました。青鞜をやめてからはぱつたりあなたにも會はなくなりました。その後一年か二年經つてあなたは何かの用事で私の店へおいでになりました。そして

店先で一時間ほどいろいろ話をしました。それからもう二三年といふもの、一度もあなたの顔を見ません。ですからあなたが「私」といふ人間を描き批評するのに、四五年前の私及び青鞜經營者及その他としての私の印象を基礎として、私の全部とか未來といふものまでも評價されたのだと言つても、あなたはそれを否定なさりはしますまい。勿論その後、「私」といふ人間の實質が變化したといふ譯ではありませんが、とに角それだけで「私」といふものの全部を決定して了ふのは少しく輕卒だといふことをあなたもお認めになるでせう。あなたをして強ひてあゝいふ筆を執らせたのは、他になにか刺戟的な原因があつたことと、確かに私はそれを怖れてをります。

野枝さん。

青鞜發行が今から四年前とすれば、私の二十一の歳です、その時分私は思慮に乏しい、血氣にはやる珍奇を趁ふ青年でした、青鞜の發行を引受けるといふことがどういふ動機であつたか、今私ははつきり記憶しませんが、私の異を樹て奇を好む性情があなた方の連中に近づかせた原因のかなり大部分であつたと今でも思つてをります。あなたは私が「石橋を叩いて渡る人」といふ稱號を青鞜社の同人から貰つてゐると仰せられましたが、さういふ異數な事業を私が始めたと同時にその事業に蹉跌しまいとする私の注意が、私を特別に臆病にしたと思ひます。仰せの通り私は隨分小心翼々としてゐました。さぞ傍から見てゐるあなたはぢれつたかつたでせうね。しかし私は出來るだけ周密にやらうといつも注意してゐました。「石橋を叩いて渡る人」の稱號は謹んで頂戴いたします。從つて『心の底から可笑しがつて』あなた方の前で『笑ふことの出來なかつたのは無理もないこととお察し下さい。

『この人の心持が激昂することなんか、なささうに見えます。』

それはさう見えれば甚だ結構です、私は實は甚だ危い血を皮膚の裏に包んで居ります、私は幼時から甚だ多感でパッショネエトでした、私は自分の身の裡を流れるその血を感じた時、私はこの危險な血をどうしても抑壓しなければならないと考へました、私はかなり生意氣な奴、出しやばり者として、友達からも周圍からも見られてゐたので、私は勉めてその血を抑へてゐました。熱してくる血を一度はすぐに冷たくする術を習ひ覺えました。けれどもいつの場合もさうするといふことはまだ出來ませんでした。歌非ちやん對私、紅吉對私、しかし私の口から今それらの巨細を申す譯にはまゐりません。私は物を熟慮する爲めになんでも即決することをしませんでした。そして努めて平靜になつてゐたのです。してみると大分あの時分はその修業が積んだと見えます。

『一しきりは大分、江戸ッ子を氣取つてゐましたが、私はまだ氏の江戸ッ子らしい所を見たことがない。』

野枝さん。

借問しますが、江戸ッ子らしいといふのはどういふことが江戸ッ子らしいのですか。『物事に淡白でない、執念深くて、あきらめが惡い』とあなたはその次ぎに言つてゐますか、もしこれが江戸ッ子らしからぬ所だ

とすれば、それに實に江戶ッ子に缺けてゐる長所だと私は常々から思つてゐました、それがないから江戶ッ子はいけないのだと思つてゐます、『宵越しの錢は持たねえ』と威張つたのは昔の江戶ッ子の事です。江戶ッ子も進化しました。私は曾て木下尙江氏に、『江戶ッ子に似合はない男だね。』と批評されたことがありました、それはその後ある人の口から聞いたのですが、その時私は竊かに私の血の中に流れてゐる、あきらめ易い淡白な、執着の薄い、江戶ッ子の、都會人の性情を怖れました、そしてもつと執念ぶかく、もつと野暮にならなければいけないと私は一生懸命に決心しました。私はいまでもまだ私の身の中に流れて居る執念の薄い血を怖れてをります。

『云ふ事は洗錬された江戶ッ子の皮肉でなくて』とあなたは仰いますが私は輕口を言つて喜んでゐる、類型的な江戶ッ子なんかには忘れてもなりたくないと思つて居ります、もし私がさういふ人間であつたらあなたは、江戶ッ子の典型を見たと言つてお喜びになるかも知れませんが、私は少し性の變つた江戶ッ子でまことにお氣の毒でした。それから野枝さん、あなたに敎へて置きますが、江戶ッ子には陰性と陽性とあります、陽性の江戶ッ子はいまあなたの言ふ『テキパキ』した洒落の種を見つけて步いてゐる方の部、陰性はよく言へばくすんだ、しぶい、おとなしい方、惡く言へば少し陰氣臭い位かも知れません、しかしすることだけは分らない事や間違つたことはしません。私がその點で江戶ッ子らしいからしくないか、それは聞くところに行つて聞いて下さい。——とでも小さな聲で申して置きませう。

野枝さん。

『この頃ではまた御苦勞樣な社會主義者顏！ 生活々々と「生活と藝術」で悧巧ぶつて大變な勞働でもしてゐるやうな顏がをかしい。』

とあなたはお書きになりましたが、なるべく口は注意しておきなさい。『大變な勞働』をしなければ社會主義者になれないのですか。また生活を口にすることができないのですか。私が自分自身進んで勞働階級に屬さないといふならばそれは別に申條があります。『他人の勞作をもとでに商賣をしてまうけながら、その上に恩を着せたがるこの若い商人が社會主義面！』とあなたは仰せられますか、野枝さん、私は商人ですから商賣で儲ける外に路はありません。そしてあなたの御勞作になる『婦人解放の悲劇』は千部印刷した本が三年後の今日まだ半數賣れ殘つて居ります。これでは恩に着せる位で澄ましこんではゐられないではありませんか。御飯が食べられませんもの、恩を着せなくても、社會主義者面をしなくつてもいいから、もう少しお金を儲けたいものだと常に思つてゐます。

昔、私は平塚さんのところへ、『本屋は私の假面だ、私の素志はもつと外の所にある』とか『この假面があるために皆さんとの折衝が苦しい』とかいふやうなことを書いてあげたことがあります、さうしたら本屋が假面でなく、本當の本屋になることを望みますといふ意味の返事が平塚さんから來ました、その時私は平塚さんは豪いと思ひました。商賣上の

ことで數々平塚さんと爭つた事があつたので、平塚さんの横嫉を挺くするやうなことはないかと私が怖れたのです。ところが私の稚い心を叱るやうなこの言葉に、私はひどくショックを覺えました。そして私は商人ですと言ひ切れなかつた私の子供らしさを恥しく思ひました。私はなんと言つても平塚さんは豪いと思つてをります。

野枝さん。

社會主義者面をしてお上からニラマレたり、世間から變に警戒されたりするのは商人として損なことです、それよりは金持面をして好き勝手な紳士階級の生活をした方がどんなにいいか知れないぢやありませんか、……まアあなたの言ふ通りこれは『どう考へても』「茶にしてゐる」のでせうかね。

野枝さん。

ちよつと訂正して頂くところがあります、私は『金持』ではありません、『金持』だなんてウツカリ言ふと、貧乏人どもが借りに來てうるさいから。

『心に巧をもつてゐる人程落ちつきはらつてゐます。』――野枝さん、拳々服膺してあなたの御評言に沿ふやうにしたいと思ひます。それから末筆ながら大阪毎日の『雜音』ですね、誰よりもの熱心をもつて愛讀してをります。私はあなたには塵ほどの惡意も持つてゐないことを言明いしますから、何卒御手柔かにお願ひいたします。あれが完結したら私もなにかあれに對する感想やらコンフエッションやらを書きたいと思つてをります。書餘いづれ拜眉の節萬々。草々。四月七日夜。

全國醫學大會に於ける 青山派及び北里派

鐵拳禪

一 醫界の黨派的色彩

陽氣も漸く暖かになり、滿城の花將に開かんとするに際し、全國醫學大會ぞ開かれたる。開期は四月一日より六日まで六日間、日本内科學會、日本外科學會、日本婦人科學會、大日本耳鼻咽喉科學會、日本消化機病學會、日本小兒科學會、日本眼科學會、日本泌尿器學會總會、日本神經學會、日本病理學會、北里研究所同窓會、日本衞生學會、日本齒科醫學會等の諸會合は、東大醫科大學を中心として各所に開かれたり。尤も日本皮膚科學會のみは、特に三月二十八・九の兩日、東北醫科大學に於て開か

れたり。東北の地、氣候未だ寒く、花も亦逡巡として開かざる有様なれば、喧嘩の花の咲かざること勿論なりしも、東京は陽氣の陽氣なるが上に、陽氣以外の事情に煽られ、唆られたるが爲めに、内科學會に於て喧嘩の花大に咲けり。喧嘩の花、既に未曾有の椿事なるに、花時の氣分にて景氣を添へんとてか、物々しく壯士を連れ込み、羅起運動をすら試みたるものあり。選擧運動、或は政談演說會等に壯士を審用するは、屢聞く所なるも、醫會——殊に講演會に之を使嗾するに至りては、花見に長刀を振り廻す以上の亂暴、且非常識の行爲と云はざるを得ず。

惟ふに醫學大會は、黨同伐異の機關に非ず、醫界の帝國議會の如きものにも非ず、各自の親睦を厚うすると同時に、各自の研究を發表するの機關なり。彼の議會の如く互に黨勢を張り、其の研究の結果を議すること、議案の如く多數決に依りて其の可否を決すべきものに非ず。論戰に火花を散らすこと壯は即ち壯なりと雖も、其の黨派的色彩を帶べる論戰は、動もすれば感情に走り、是非を餘りに誇張的に批判するに至ること尠からず。内科學會に於ける古賀液問題の如き、各自其の實驗せる所を發表し、以て其の功無功、害無害を論究し、其の價値を斷定するにあるも、其の發表する所の態度、實驗の誠實を審査するに於て甚だ遺憾なき能はず。

古賀液は、博士古賀玄三郎の發見に成るもの、結核患者に用ゐて有功無害なりと稱せらる。然るに、此の『稱せらる』は、醫學界一般の是認し、證明する所に非ずして、北里研究所側の審査する所なり。博士古賀は、北里研究所の一員なるが故に、北里派に依らざる者は何程か色眼鏡を以て見るの傾向あり。例へば文博井上圓了の妖怪研究が、妖怪否定を前提として研究しつゝあるが如く、非北里派の古賀液を見る、最初より無功有害を證明すべく研究せるに似たり。之に反して、北里派は徹頭徹尾其の有功無害を審査すべく努めたるの觀あり。是に於てか、古賀液は青山・北里兩派暗鬪の犧牲となりて、其の眞價を發揮するに至らざりしなり。見よ、濱川發生院長西川恒彌は極力古賀液を賞揚し、大阪石神病院長石神亨(代理高木審三)及び北里研究所技師大谷彬、博士草間滋等は之に賛成し、官設傳染病研究所の結核主任なる博士芳我石雄は飽くまで之を排斥し、赤十字病院の平澤精藏、東大醫科病理學助教授の博士緒方知三郎、新博士高田耕安、ドクトル永井秀太、博士尾中守三、博士高木兼二等は之を援助せり。其の如何に兩派の色彩の鮮明にして、如何に猛烈に鎬を削りしかを知るべきなり。

而して之が行司格にて出で來れるは、藥學博士石津利作なり。曰く、『臨床家互に其の價値に就て爭うて決せず、乞ふ予は製藥家の立場より、其の成分を分析研究し、以て其の價値を判定せん』と。彼は衛生試驗所長、素より青山派なり。其の分析の結果、或は北里派の不利を醸さんことを怖れ、北里研究所の名譽乃至權威の爲めに之を峻拒せり。表面上の理由は如何にもあれ、眞に古賀液を是認せるに於ては、何人をして分析せしむるも可ならずや。然るに之を峻拒し、自所に於て之を分析し、其の分析の結果を近き將來に發表せんと云ふに至りては、其の襟懷の餘りに狹

量なるを笑はざるを得ず。縱令青山派が如何なる策を弄し來ると雖も、之に對するに略を以てせず、醫學界の爲めに學者の誠意を披攊し、研究の便宜を與へ、徒らに嫉妬排擠を是れ事をする者を赧然愧死せしめざる可からず。然るに敢て此の態度に出でざるは、抑て何等かの疚しき所あり、何等かの不備あるが爲めなりとの非難を免るゝ能はざるなり。

二　官民兩派反噬の過程

由來杏林には、官僚・民間の二派あり。互に軋轢して下らず、其の鋭利なるメスを以て、他の腐肉を抉出せること其の例に乏しかず。其の嫉妬排擠すること婦女子の如くなる醫者根性は、徳川時代に侮蔑せられたるの因襲なりと云ふと雖も、今日の醫師若くは醫學者は、悉く其の子孫なるに非ざるが故に、其の遺傳なり、因襲なりとの觀察は、決して當を得たるものにあらず。然れども、其の周圍狹少にして、黨同伐異を是れ事とし、嫉妬排擠に日も是れ足らざるの狀あるは蔽ふべからず。始め官僚派と云へるは官學出身を指し、民間派と稱せるは私學出身の謂なりしも、何時しか大學派、非大學派となり、漸次轉じて官僚派とは官學又は官廳に衣食するの徒を指し、民間派とは民間の開業醫を包括するの稱呼となれり。されば今日の民間派と稱する者に、赤門出身あり、歐米仕込あり、舊濟生學舍出身あり、受驗登第者ありと云ふの有樣にて、舊時の派別とは大に其の趣を異にするものあり。又同じく官僚派と云ふも、東大出身あり、外國歸りあり、京大出身ありて、必ずしも統一ある勢力と見るを得ず。故に官僚派と云ひ、民間派と稱するは、一種の感情眼を以て、其處に二つの色彩を施せるに過ぎず。換言すれば、其處に統一せる勢力を認めたるに非ずして、唯漠然と斯か稱せるのみ。未だ以て、截然たる勢力圈の色別とは見るべからざるなり。

杏林の現狀より觀れば、素より其の部分に過ぎずと雖も、官民兩派中に於て比較的纏りたる勢力を有するは、東大醫科大學長たる博士青山胤通、北里傳染病研究所長たる博士北里柴三郎の二人なりとす。彼等が如何にして其の勢力を作りたるかと云ふに、一は東大醫科に立脚せるが故に、其の周圍の教授・助教授は勿論、其の教授せる所の後進の多くを勢力圈内に羅致し得たるの結果にして、一は内務省所管の傳染病研究所に雄視せしが故に、其處に奉職せる技師を股肱とし、其の講習を受けたる者と密接の關係を結べるに由るなり。前者は一種の權力關係、先生弟子の關係なるも、後者は情義關係、親分子分關係とも謂へば謂はれざるに非ず。東大出身にして、苟も職を官學乃至官廳に求めんとする者、或は博士の學位を得んとする者は、勘くとも博士青山の鼻息を窺ひ、彼の塵を拂ふの要あるが故に、彼れの勢力に阿附せざるを得ず。是れ、彼れの勢力の年と共に增加する所以。宛然官僚派の頭目たるの觀を呈す。之に比すれば、博士北里の勢力は一局部に限らると雖も、而も根强き勢力あり。必ずしも彼れの勢力圈内に非ざるも、青山の專橫に反感を抱く者は、彼れの勢力と抱擁するが故に、偶ま民間派の首領なるが如く思惟せらる。其處に青山の青山たり、北里の北里たるの貫祿と、勢力とはあるなり。

是に於てか、官僚派の代表者として青山あり、民間派の代表者として

非擧ありと謂ふの、必ずしも失當にあらざるを覺ゆ。然れども、吾人は其の意味を明瞭ならしめんが爲めに、之を部分的に見て、一を青山派と云ひ、一を北里派と云はんとす。此の兩派は始より文部内務の兩省に分屬せる關係上、兩々相對して下らざるの觀ありしも、未だ甚しく相反噬せず、未だ大に論戰の火花を散らすに至らざりき。其の對立の形勢の變じて、猛烈に嫉視反目し、最も露骨に敵對行爲を敢てするに至れるは、傳染病研究所の内務省所管を離れて、文部省所管に移されたるの後なりとす。其の故如何と云ふに、北里派は、此の移管を以て、政費節減なる表面の理由以外に、青山一派の畫策せる、排北里の裏面あるを觀取せり。博士青山は常に首相大隈邸に出入し、頻りに大隈に耳打し、獻策せるの結果、玆に至れるに非ざるやを疑へり。是れ單に北里派の臆測のみに非ずして、實に天下の疑ふ所なりき。果然移管反對の聲盛んに起れるも、遂に政府の意を飜すこと能はずして止めり。此の仕打に憤慨せる博士北里は辭表を呈出し、其の部下悉く連袂辭職を決行せるは世人の記憶に新なる所なり。彼等の斯く辭職せるは、北里に殉せること論なきも、青山派に屈服するの不快を忍ぶ能はざりしなり。其の移管の單に移管に止まらず、東大醫科の附屬となるべきは、豫定の事實なるが故に、留任を肯んぜざりしなり。之が爲めに天下の同情は翕然として彼等に集り、別に北里研究所を創立し、以て從來の研究を持續するを得たるも、青山は爲めに一時非常の惡評を招けり。此の惡評の影響今尚去らず、依然として感情上の反青山派も亦尠からざるなり。更に青山側より觀れば、研究所に自側の事中に收め得たるも、幾分の名譽を失墜せるが上に、一大切齒を作れり。夫の醫學大會の席上、彼れが威信行はれずして喧騒を來せる、又議長島田式に昂奮して『拍手する者は退場せよ』など呼ばざる可からざる、何れか青山の術の漸く剝落せるに非ざる。醫界の大御所たる、又難いかな。

三　醫界の大御所及周圍

博士青山は、移管問題後第一次の研究所長を兼ね、新銳の技師を率ゐて、儼然として北里派を下瞰せり。今次官制改正の結果、研究所は眞個東大醫科直屬となりたるが故に、彼れは廢官となり、同教授たる博士林春雄新に所長となりたるは、愈よ彼れの威を逞うし、他派をして窺覦を許さざらしめたるものならずんば非ず。彼れにして十年排北里の計劃を成せりとせば、宿志始めて達するを得たるに相違なからんも、學界の爲め必ずしも慶すべき現象には非ず。政界に於ける元老の横恣、殊に目白の大御所の干渉の如き、其の弊の及ぶ所尠からず。今又學術の自由境に醫界元老の勢力を扶植し、帝大を背景として、帝王の威を逞しうせしむるが如きは、決して刀圭界の向上進歩を圖る所以に非ず。

博士青山の自ら醫界の大御所を以て任ずると否とは暫く問はざるも、彼れの東大醫科に立脚して、盛んに勢力を築き、宛然帝王の威を示し居るは事實なり。彼れは普通一般の賣名手段を取らず、町醫者の俗間性を露出せざるも、決して名利物欲の上に超然たる學者的仙骨を有せず。飽くまで官僚的開業醫なり。臨床家なり。學理の深遠と技術の優秀とに多

少の疑問あるにせよ、彼れは能く權門に出入し、權勢の前に叩頭するの術を解し、其の權勢と結んで名聲の廣告をなすことを忘れず。町醫者を以て低級幇間とせば、彼れを目するに高等幇間を以てするの可なるが如きも、彼れは幇間性よりも、寧ろ多くの策士的手腕、政治家的資質を有す。醫界の政治家を以て稱せらるゝ者、博士金杉英五郎あるも、彼れ畢竟放言漫語の徒のみ。蠹蝕せるモス風呂敷の類のみ。博士青山の著實と善策とを有せず。徒らに權家に結托するが故に、幇間の非難を蒙らざるを得ず。既に其の人格品位に於て輕重あり。博士青山は策士的手腕あるが故に、芝居を打つことも上手なり。人氣を取ることも亦上手なり。曾て大學の手術室にあり、尿毒症の治療に使用せるグラスにて水を飲み、學生をして驚異の眼を輝かしめたる事あり。斯の如きは、彼れが他を信服せしめ、敬服せしむる爲めに、時に行ふ方法にして敢て珍しからざるも、初會の人は必ず彼れが名醫たるの手腕と確信とを賞揚して止まざるべし。彼れが此の初會惚れさせるの手腕は、總て後進を籠蓋し、併せて人氣を博し得る所以。常に倨傲尊大に構へ、豪放を粧ふは其の表面にして、思慮周密、小心翼々たるは其の内面なり。夫の大會の席上、勃然として怒氣を發せるは、此の小膽の遂に豪放を裏切れるものなりとす。

既に彼れは小膽の散薬を包むに、豪放のオブラートを以てするが故に、麾下の際其の眞實に觸るゝ事能はず。されば初會惚れせる者も、其の親分の懐合の廣からざるに失望して、離反する者無きに非ず。然れども彼れが赤門に傲睨する以上、其の威望俄かに墜落すべしと思はれず。現下研究所にありて、彼れの一勢力たるもの、林春雄、二木謙三、長與又郎、芳我石雄、横手千代之助、石原喜久太郎の六博士、及び城井尙義、西澤行藏、八木澤正雄の三軍醫あり。長與は先代の關係上、北里と親交あるも、東大の新進にして青山の智囊なり。二木は細菌學の造詣深く、赤痢及び狂犬病を以て名あり。職を駒込病院副院長に奉じ、駒込A菌、駒込B菌等の發見あり。北里派の博士志賀潔に對し、其の名聲及ばざるが如きも、其の發見の價値に到りては彼に優るとも劣るものに非ず。芳我は歸朝後兩三年に過ぎざるも相當の地歩を占め、何事をか成すの人物なるを期待されしが、果然民間派の中堅に向つて突撃せり。其の研究未だ足らず、論鋒爲めに鈍り、辭窮せるの觀ありしも、闘士的元氣は乃ち在り。林は奇彩の見るべきなきも、博士青山の股肱として、研究所の調和劑として、或は切要なり。所長として大なる活動をなし得ざるも、又大なる失敗を演ずる底の人物にあらず。之を北里、青山の仕事師に比すれば、學者肌の備員的人物たること論を俟たず。

四　北里及幕下の人材

醫界の大御所に對して、醫界の大山師あり。謂ふまでもなく、博士青山と對峙する所の博士北里なり。彼れは世の噂の如き大山師に非ず。相應に學識もあり、實力も備へたる人物なるも、其の非難を受けざるべからざる所以のもの、實に彼れが金儲けに汲々たるが爲めなり。賣名に手段を擇ばざるが爲めなり。相場界に片鱗を現はせるが爲めなり。此の點に於て、彼れは醫學者に非ず、醫山師なりと許せらる。果して非學者か

大山師か、彼れを外面的に觀察する時は、如何にも其の器の然るゝ所あるを思はしむ。彼れは講義に衣食せず、從つて常に學理に没頭せず。養生園を經營し、研究所に長たりしが故に、勢ひ實地の方面に手腕を揮はざるべからず。學者的尊大を以て素恩を威嚇するよりも、先づ温顏を以て患者に接し、藥種商を操縱せざるを得ず。事情斯の如くなるが上に、彼れは熊本人の怜悧と、奇策とを有する人なり。交際上手なり。饗應の背後に利用の手を廻す程の機敏はあり。醫家の蓄財に巧なるは一般的傾向にして、敢て彼れのみに限らざるも、彼れは經濟の頭腦特殊に發達し贏利貨殖に餘念なきこと常人に超ゆ。加ふるに相場界に辣手を揮ふるが故に、如上の非難を蒙るに至れるなり。然れども、醫者の相場に手を出すは獨り彼れのみならず、仁術以外の餘分の儲けをなさんと欲する者は皆之を敢てすと聞けり。博士入澤達吉の如きも相場にて儲け、博士呉秀三の如きも土地賣買に由りて巨利を博しつゝありと云ふに非ずや。彼れの大山師と目されたるは、此の贏利貨殖に非ずして、傳染病研究所を利用して儲けたると、其の人物何程が山師肌なるの點にあり。既に山師肌なり、一攫千金の豪快を思ふが故に、一擲千金も吝まざるの襟懷ありやと云ふに、必ずしも然らず。外頗る磊落にして親分の風あるも、内極めて狹量にして儉素に過ぐ。博士金杉の豪華を衒ひ、政治家を粧ふとは、全く其の趣を異にす。唯博士青山に比する時は、其の豪遊、豪懷、何程か語るに足るものありと雖も、其の人格の點に於ては特に矜るべき物を有せざるに似たり。

其の年齡に於て、北里は青山に七歲の兄たるも、其の東京大學醫學部を出でたるは、一年の後なり。青山の卒業は實に明治十五年、二十四歲の時なりき。翌年獨逸に留學し、二十八年歸朝、教授に任命以來、赤門を去らずして今日に及べり。北里も亦獨逸に赴き、血精療法並に細菌學を學び、北里菌を發見して世界的名聲を贏ち得たり。青山は曾て黑死病研究の爲め上海に派遣されたるも、細菌學に於ては到底北里の敵に非ず。然れども、北里の世界的名聲と雖も、今日の學界に至大の權威あるにあらざるは勿論、其の實力の其の名聲に副はざるの憾あり。是れ、彼れが贏利貨殖に耽りて、研鑽を怠れるが故なりと云ふも、或はと首肯かれざるに非ず。彼れの新に一個の私立研究所を創立し、醫界に雄視する所以のもの、此の過去の名聲を資本とし、現在の勢威を動力として、官僚派に頡頏するにあり。加之、彼れが幕下には、名聲あり、實力あり、研究に熱心なるものを網羅せるも亦、天下の期待を繫げる主大の原因ならずんば非ず。

彼れが官設研究所を去るの時、連袂辭職せるもの、志賀潔、北島多一、宮島幹之助、草間滋、梅野信吉、秦佐八郎、照内豐の七博士あり。皆彼れが研究所に在りて、其の研究を繼續す。博士北島は明治二十八年帝大醫科卒業後、直ちに研究所に入り、三十年より三個年獨逸に留學し、歸來引續き就職せるもの。他の諸博士も、其の卒業、留學の年度、及び閲歷の相違はあれ、長く北里の下に研究所にありたるなり。就中、志賀は赤痢菌の發見者として世界に知られ、秦は六百六號の發見幇助者として

名聲あり。一は漢法醫の養子、溫厚にして質素、多少の社交は心得居るに似たり。一は研究所にありては比較的新參なるも、官僚に降らざるの氣骨を稱せらる。氣骨は必ずしも醫學者としての價値を增すものに非ざるも、其の之あるは之なきに勝れり。

五　青北兩派以外の英物

暗鬪圏内の人物は、先づ之に止め、筆の序を以て、其他の人物を擧げんとす。中には青山派も目すべき者あり、北里派と見るべき者あり、更に一派を樹立せんとする者あり、或は全然孤立の者あり。官民兩派の二大派別には、どの途入るべき人物なるも、煩を厭ひて一々は之を說かず。

京大醫科大學長より進んで、京大總長となれるに、博士荒木寅三郎あり。彼れは明治二十年の帝大醫科別科の出身なれば、其の年歲に於て、其の年齡に於て、青山及び北里の後輩なり。而も其の地位は、青山の上にあり。彼れは醫化學の講座を擔任し、所謂お醫者には非ず。青山の患者に崇拜され、醫界に勢力あるに比すべからざるも、京大には總長に推擧さるる程の衆望あり。巨頭半ば禿げて、童顔僧侶の風骨を帶ぶ。斯るが故に往々邪僕用の人物と誤らるると雖も、間拔りに非ず、襟度何程か宏く且事務の才あり。元來黨派的偏執なく、努めて公平無私の態度を持し、指揮監督の勞を惜まざるが故に、京大自治の爲めの適任者たるを失はず。彼れに作詩の餘技あり、凰岡と號す。博士土肥鶚軒、永坂石埭と共に、醫界三珍の目あり。鶚軒は名を慶藏と云ひ、富豪三井の女婿にして、皮膚病學の泰斗なり。曾て獨國舊都の萬國癩病會議に出席し、其の師ナイセル博士の所說を自家の研究の如くに發表して、師を驚倒せしめたる事あり。風丰瀟洒たるも、多少の奸詭を藏す。其の文藝に趣味を有する、耳鼻咽喉科の博士久保猪之吉に讓らず。久保は短歌を詠じ、是れは漢詩を賦す。常に西詩を讀み、又哲理を談ず。醫博文博森林太郞は、素より文壇の雄、故に摘出するの限に非ず。其の博學吟閑にして、森の學を摩するもの、文博醫博富士川游あり。

博士佐多愛彥は、大阪醫專の校長なり。獨逸に赴きて病理學を專攻し論文に由りて博士を得たり。歸來大阪府技師となり、黑死病撲滅策を講じ、其の奏功の結果、贅六の信用を得、現地位を占むるに至れりと稱せらる。其の性格全く荒木と異なり、才氣橫溢、巧みに他を操縱するの靈腕あり。些事に拘泥せざるが如きも、而も街氣の蔽ふべからざるものあり。血淸販賣に關して藥屋風情と喧嘩が如き、未だ博士北里すら成さざる所のものを成すを憚らず。彼れの餘りに自信力に富める、我意を主張するに勇邁果斷にして、他を威壓するを免れず。人或は彼れを以て東大の青山に對比するも、そは單に校内に於ける勢力の側面觀のみ。未だ浪華杏林の覇權を掌握するに至らず。其の倨傲尊大の比を大阪に求むれば稍青山に近きは夫れ博士緒方正淸か。權門に諛辭を献じ、勢力の前に叩頭するも、然らざる者に對しては傍若無人の振舞をなす。名を仁術に假りて、虛勢を張る者は彼れなり。先年『社會色慾論』を著して發賣禁止に逢ひ、徒らに賣名の誹を受け、佐多の『情慾論』に一籌を輸す。其の

人物、才幹、學殖も亦然り。

部下病院の經營者中、其二三を擧ぐれば、婦人科の博士榊順次郎あり。小兒科の博士額田豐あり。外科の博士宇野朗あり。肺結核の博士佐々木政吉あり。耳鼻咽喉科のドクトル小此木信六郎あり。宇野は曾て赤門の教授兼病院長となり、外科學及び皮膚病學黴毒學等の講座を擔當せり。現に東大の名譽教授たり。榊は誠實を以て患者に接し、其の氣受宜しと雖も、貨殖に病む所あり。佐々木は無愛嬌、且傲慢の嫌あるも、打診の妙を稱せらる。小此木は諛言を人に呈せず、素朴恬淡、名利を眼中に措かずとの評あり。病院の經營は、必ずしも然らず。額田は『安價生活法』を著述し、小兒以外更に生活難の救治を試みんとす。餘技なりと雖も、惡事には非ず。

官學に衣食するもの、耳鼻咽喉科の博士岡田和一郎あり。ドクトル小此木の後輩なり。東大の講座を擔當するも、其の技術未だ妙境に達せず。加ふるに貪婪の誹あり。博士三浦謹之助は、謹厚忠實の人、先帝拜診の命を蒙りて以來、名聲嘖々たるものあり。外科の博士佐藤三吉は、漸く老境に入るも、確かなる手腕あり。懇切を以て患者に接し、篤實を以て職務に膺れり。少時東京開成學校に鑛山學を修め、轉じて大學東校に醫學を研究し、後獨逸に留學せり。歸來帝大教授となり、其の職に在ること三十年、博士緒方正規と共に東大醫科の耆宿なり。新進の人物には、博士永井潜あり。『生命論』を著して、出版界の耳目を聳動せり。其の文藻に富めること、博士鳥潟隆三と好一對の稱あり。一は國文を好み一は獨文を愛讀す、而して其の著作に於ては、未だ遂に解者を没蒐す。彼れ曾て京大醫科に在り、萬朝報の新體詩懸賞募集に應じ、其の選に當つて百金を贏ち得たり。現に大阪赤十字病院の外科部長として、關西に雄飛せんとす。更に奇物の一對を求むれば、病理學の講義を行ふに落語の呼吸を以てする博士藤浪鑑あり。デストマの博士桂田富士郎あり。學生に『キルヒヨー歿後の病理學如何』なる奇問を課したるに由りて、奇名を博せり。古賀液、菅井液、瀬脇液等を以て、未だ理想的の化學的療法に非ずと喝破せる佐々木秀一あり。男後藤の女婿を以て賣り出せる、博士佐野彪太あり。最近、軟性下疳及横痃の原因菌を研究し、其の論文に由りて博士を得たる、篤學の伊藤徹太あり。舊物の徒らに虚勢を張り虚名を擁して、凋落の哀愁を思ふ時、新人物の到る所に崛起する、人意を強うするに足る。夫の學閥に據り、權勢に貪緣して榮達を期せんとするが如きは、吾人之を取らず。閥族、黨爭の弊は獨り政界のみに非ず、刷新廓清を要すべきこと醫界も亦然り。知らず、其の人格を打診し、人物を解剖し、血清療法を行ふの名醫は、果して誰ぞ。

初めて人の親となりて

母となりて

平塚らいてう

私自身の戀愛の感情の中に母たらむとする欲求――子供に對する欲求のあることを私は久しく認めることが出來ませんでした。そして私は戀愛を大膽に肯定した後も、なほ母態たるとは避けて居りました。のみならず、母としての生活は、個人的發展を妨げ、個人としての私自身の生活や仕事を亂すであらうといふ考や、私の生來の弱いそして過敏な神經が絶えず求めてゐる孤獨の欲望や、現在の貧困な生活が到底親としての責任を十分に果せまいといふ懸念などが、私をして心から母となることを恐れさせて居りました。たとへ私は生涯を通じて遂に母となることが出來なかつたとしても、そして母としての大なる喜びも、また大なる苦しみも經驗し得ずに終つたとしても、それは自分の如きものにとつては何の不幸でも、悲みでもないばかりか却て幸福だらうとさへ考へる時もありました。そして子供に餘念ない世間の母親達を見るとき、それを羨むよりも何となく氣の毒に思ふやうな一種の憐れみの心さへ起るのがいつものことでした。と言つて、私は母の仕事の重要なことを考へないからではありません。私の理智は常に私に向つて個人としての婦人とともに、種族としての婦人の使命の重大、その能力の偉大を說き、性としての婦人を解放することによつて、婦人をして個性の力と共に、その性の力をも十二分に發現せしめるのが本當であると敎へるのでした。しかもなほ私は私自身を母の仕事に服させる氣には容易にな

れませんでした。理論の上ではともあれ、實際に於ては、人間の有らゆる時間と精力は無限でないといふところから來る避け難い結果として、現に私の中にある、そして私にとつてなくてならぬ他の多くの欲望を否應なしに抑壓したり、制限したりしなければならなくなるのは見易いことで、そしてそれは私には堪へ難いことのやうに思はれましたから。

併し戀愛の要求に滿足を與へながら、母たることを欲しない私の意志と自然との間には矛盾がありました。不一致がありました。そして私は常にその矛盾、不一致のために苦しまなければなりませんでした。

かう言ふ私は姙娠といふ事實が確定したときも、多くの女達のやうに限りない喜びを感ずることが出來ませんでした。のみならず私の心は只もう暗い處へ落ちて行くばかりでした。そしてそれが自分達をかうまで幸福なものにしてゐるふたりの何ものにもかへられない愛の創造であり、具體化であり、結晶であり、解答であるのに、それと知りながらもなほ、心からよろこぶことの出來ない自分の不幸がまた悲しまれてならないのでした。

併し月の進むと共に、子供に對する私の考には驚く可き變化がありました。私は私自身の中にも子供を欲するものゝあることを確に見たからです。この間の變化は丁度其當時書きました「個人としての生活と性としての生活との間の爭鬪に就いて」の中の次の章句によつて示されてゐる通りです。

「……私は次のやうなことをだん／＼意識し始めるやうになつて來ました。今が今まで自分の中には全くないものと信じきつてゐた子供に對する欲望や、母たらむとする欲望が實は自分の中にも潜んでゐたのである、只他の欲望の大きいため、また多いがためそれに蔽ひ隱されて表面に現はれて來ない迄で。否々ふたりの愛の憧憬そのものゝ中にすでにすでに最初から子供を欲する意志が藏されてゐたのではあるまいか、只自分自身いつまでそれを明に意識

し得ずにゐたといふ迄で。そして私は自分の内に何の欲求も、意志もなくして、子供を産み、母となるものを、母たる第一資格さへ有たないものとして一種の罪惡であるかの如く思ひもし、またそれを人間の意志と自然の結果との間に存する大なる矛盾であるかのやうに感じてゐたことの、反省と考慮に於てまだ至らないところのあつたことを感ずると共に、一たび愛の生活を肯定した自分が、しかも今その愛に生き、その愛を深め且つ高めることに努めつゝあるその同じ自分が、その愛の創造であり、解答である子供のみをどうして否定し得やう、それはあまりに矛盾した、不徹底な行爲である、もし子供を拒もうとならば、愛の生活全體をまづ拒むべきである、と。

なほまた私はこんなことも考へました、よし自分は自分の他の方面の生活のために、自分の魂のすべてを子供ゝ世話や教育に與へることが出來ないにしても、そしてそれは成程自分にとつて苦しいことであり、子供にとつても不幸なことであるにしても、それでもなほ全く無自覺な無智な劣等な女から、しかも、愛なき結合の中から生れ、さういふ母の無責任な手によつて育てられる今日の日本の多數の子供に比較すれば、それは屹度より優れた、そしてより幸福なものに相違ない、と。

かうして私の心からは、いつか忌しい空想は跡方もなく消え失せて仕舞ひました。不安と恐怖と限りなき責任の感と共に、一歩、一歩近づきつゝあるこの未知の世界に對して、新しい生活に對して、私は一種の貪欲心と、不思議な希望と期待と歡びとをさへ經驗し始めたのです。のみならずふたりの愛の結合はこれによつて一般の深さと、眞面目さと、確實さとを增したやうにも思はれて來ました。」

そして出産間際に於ける私は、もうどんな苦痛が、どんな爭鬪が、またどんな責任が自分の生活の上に落ちて來やうともたぢろがない丈の勇氣を内に感じ、またそれに堪へ得るだけの心の準備もすることが出來ま

した。私は寧ろ平かな心でその日の來るのを待ち、子供の顔の見られることをたのしみました。子供のために調へられた今迄自分の家の中のどこでも到底見られなかつたやうな赤い小さな着物や蒲團などがふと目に觸れたりしますと、急に柔らかな、優しいもの丶身内を過ぎるのを感じ、はては可愛らしさの情が湧き上つたりすることもありました。併しこれは何と言ふ變化でありませう。私はもう五六ヶ月前忌はしい空想を浮べた自分を自分だとは思へない程でした。のみならずそれを思ふことは自分にとつては非常に不快な、いやなことでした。

曾て岩野清子さんが難産をされた時、「子供は自分の敵だ」と其瞬間に於ける實感を發表されて、一部の人の非難を招いたことがありました。私は何も敵だと迄は思ひませんでしたけれど、大苦痛の只中で、最も明かな意識をもつて、しかも何の躊躇するところもなく次のやうに叫んだ自分を忘れることが出來ません。

「先生、先生、子供なんかどうなつてもかまひませんから、どうぞ早く早くすませて頂きます。」

若しかう言ふ非常時に於ける人間の叫びが最もその眞實を示すものだとすれば、私はなほ矢張り、自分の苦痛を避けるために、若しくは自分の生命を救ふために、子供を當然犧牲にするものなのでせうか。少くともそのときの私の中にはまだ子供のためには死をも辭さないといふ母親の愛情が生れてゐなかつたことだけは確だと言はれませう。

併しこれが本當なのではないでせうか。人はよく母の愛は最初からちやんと完全なものとして母親の心に備へられてゐるのもの丶様に申しますけれど、實は子供を自分で哺育したり、その他色々と手鹽にかけて行くことによつて、さうしてゐる間に次第にはぐくまれ、偉大な、力強いものに發達するので、そこには必ず或時間を必要とするものなのでありませう。現に敵だと迄言はれた清子さんさへ、お自身でお育てになつた何年か後の今日では、自分にこれ丈の力が出てゐるのは

子供があるからだと言つていらつしやいます。から考へますと、まだ生れて來ない、從つてまだ目に見たこともない、手に觸れたこともない子供に對して私がさう母らしい大きな愛をもち得なかつたのも、寧ろその發達の自然の順序だと言へはしないでせうか。そして僅にそれから四ヶ月を經た今日、私の中の母性はその時から思へばどれほど成長したことでせう。今、私の生活から子供を奪はれたとすれば、私はきつとどんなに空虛ヶ感じることでせう

子供を始めて示されたとき、私は厚い着物の中に埋もれてゐる小さな〲赤い人間の顏（人間といふ感じははじめからいたしました）を言葉なく見詰めたまゝ、併し到底それに對して愛と云はれるやうなものを感じることは出來ませんでした。これが自分の子供である、自分はこの子の母であるといふやうな氣にさへも到底なれませんでした。私はあまりに傍觀者の態度で、冷淡にそして批評的に見てゐる自分をまたぢつと眺めて居るより外なかつたのです。

併しこの私も、そして生れない前には子供を自分で育てるか、他人に托すかに就いて可成り迷つた私もも、う見も知らぬ無智の女の手などに渡さうといふやうな考は全くなくなりました。その上、何によらず子供に關することでさへあれば出來る丈自分の手でしたい、さもなければせめて目だけでも通さねば安心して居られなくなりました。外出してゐるときでも私の神經の中には絕えず子供の泣き聲が聞えました。

私はかうも子供に對して無頓着でゐられない此心持こそ、今迄私の内に潜んでゐた母性の現はれるその最初の形なのではないかと思つたりいたしました。併此心持が私を本當に疲れさせて仕舞ひました。俄に增した多くの雜務と幾晩となく續く睡眠不足は私の心身から彈力を奪ひ、さなくも過敏に苦しむ私の神經は、暴虐な子供の泣き聲で滅茶々々にかきむしられて仕舞ひました。いかほど心は孤獨を欲し求めてゐても、退いて自分自身の時を有つことも出來ませんし、いかほど讀

みたい書物が机の上に積まれてあつても容易に讀むことも出來ないのです。自分自身の欲望の絶えず滿されない不滿と焦慮と、心の統一を失ひ、自分の生活が破壞された悲しさや、淋しさに、仕事の出來ないことからくる生活上の不安なども一緒になつて、それがまた私の心を亂さずにはおきませんでした。そして私は益々疲れて仕舞ひました。

かうして私は始めて世間の多くの子を育てる母親の隱れた勞苦と忍耐とを知り、それに對する同情と感謝と尊敬の念を有つかと思へば、そしてまた一方に於ては心の總てを喜んで子供に與へ得ない自分を、子供の前に容易に自分を忘れることの出來ない自分を責め、子供を憐れむかと思へば、また忽ちこれでもなほ母の仕事は尊く美しく價値あるものだらうかと疑ひ出すといふやうな相容れない矛盾した氣分の中で、獨立した婦人の生活と婦人の家庭生活との間に橫はる複雜な、容易に解決し難い困難な問題が絶えず繰返されるのでした。

泣くより外に何の手答もなかつた私の子供は百日位から笑ふやうになりました。續いて語るやうにもなりました。私の子供に對する愛情は急に變つて來ました。生々として發動し始めたのです。私は私を見て笑ふ子供の前で全く自分自身を忘れて仕舞ひます。そして私の心は幸福と光明で一杯になつて仕舞ひます。

若い父親が子供に對して、絶えず示す愛の表情はまた私を限りなくよろこばせずにはおきません。

私がほんとうの意味で、自分はこの子供の母である、この子供の要求を誰れよりもよく知り、この子供の個性を誰れよりもよく解し、この子供の中に隱れてゐる天分を、その才能を誰れよりも間違なく發見し、それを導き出す靈魂の敎育者である、またさう事實に於てならねばならぬといふ確な感じを摑むことの出來たのは、そして母となつたことに眞のよろこびを感じることの出來たのは、矢張り笑ふやうになつてからのことで、極々最近のことなのをこゝで言はねばなりません。

私は瀧田氏に言はれるまゝに「母となりて」といふ題のもとに以上のやうなことを書きましたものゝ、何と云つても、母となつてから漸く四ヶ月あまりを經たばかりの私にとつては、母としての生活は、言ふまでもなく總て未來に屬することであります。私の中の母性はこれから一日〱と子供の成長と共に發達しそして實現されてゆくことでありませう。そして私はそこに曾て知らなかつた眞實の女の生活のあることを見出すかも知れません。併し今の私はまだ母としての自分に就いては實は何も言ひたくないのです。のみならず言へもしないのです、それ程まだ母である自分が自分自身にはつきり見えて居ないのですから。

（大正五、四、二〇）

父となりて

谷崎潤一郎

私は去る三月十四日に始めて子供の父となつた。私を知つて居る者は、私が父となつたことを大變不思議がつて居る。私自身も、意外な事實に出會つたやうな心地がして居る。大概の人は結婚と同時に早晩父となる事を覺悟すべきが當然であるのに、私は全くそんな覺悟を用意して居なかつたのである。

私は今迄にしろうとの女と關係した事が二三度あつた。さうして一遍も子供は生れなかつた。生れつき病的な性慾を持つて居る私は、體質にも何處か缺陷があるのではあるまいか。子供を植ゑ付ける健全な能力を缺いて居るのではあるまいか。必ずさうに違ひないと、私はいつの間にか妄信して居た。此の妄信に迷はされて、私は去年の六月に安心して結婚した。それのみならず、私の妻の前身が藝者である事も、此の安心を助

けるのに充分であつた。結婚してから四月五月と立つうちに、妻の體にだん〳〵姙娠の徴候が見え始めて、つはりらしいと人から云はれるやうになつても、私は容易に信ずる事が出來なかつた。「兎に角產婆に見せてやつて下さい。」と、妻の祖母が頻りに心配するのを、私は內心いまいましく感じて居た。八月目になつて、腹の膨れたのが著しく人目につくやうになつてから、私は漸く往生して產婆を呼ぶことを許したのであつた。

「大變に御丈夫で居らつしやいます。きつと御安產でございませう。」

と、產婆は云つた。それでも猶且、私は子供の生れない事を信じやうとした。「己のやうな人間の子供が、達者に發育する筈はない。きつと流產するであらう。」と思つて居た。自分が此れ迄に、自分の頭腦や肉體に加へた害毒を想ひ出して、若しかすると不具な子供でも生れはしないかと恐れたりした。

　私は何故、それ程子供を嫌がつたのであるか。——それはつまり、私が甚しいエゴイストであつたからである。飽く迄も自分獨りを可愛がつて生きて來た人間だからである。私はたゞ自分の快樂の爲めにのみ生きて行きたかつた。自分の所有して居る金錢を、自分の利益の爲めにのみ費したかつた。私は此のエゴイズムを此れまで可なり極端に實行して居た。親兄弟に對しても甚しく冷淡であつた。交友と云ふものも頗る稀であつた。私が世間から秘密を喜ぶ人間であるとか、孤獨を愛する性癖があるとか云はれたのも、實は私のエゴイズムが主たる原因をなして居るらしい。私のエゴイズムは骨肉の關係も親友の間柄も一切無視して顧みない。それ故私は、自分と他人とに不愉快な感を與へる事を恐れて、成るべく世間へ顏出しをしないやうに努めて居たのである。

　たとへ私が、他人を愛するやうに見える時でも、決して「自分」を忘れ得た事は一度もない。自己の虛榮心を滿足させる爲めに他人を惠む事はあつた。自己の慾樂を充實させる爲めに女に戀する事はあつた。けれども嘗て犧牲的に他人の利益を計つた覺えは絕對になか

つた。

「いくら子供が嫌ひだと云つても、生れて見ればきつと可愛くなりますよ。」

から云つて、私を慰めてくれやうとする人が澤山あつた。しかし其の言葉は、一向私の慰藉にはならなかつた。私は反對に「可愛くなられたら猶更大變だ。」と思つた。それでなくても充分でない私の收入の一部分が、子供の爲めに割かれるのかと思ふとそれが苦痛でならなかつだ。

第二に私は、子供を持つた爲めに私の藝術が損はれはしないかと云ふ事をも氣遣つて居た。私のエゴイズムが滅びてしまへば私の藝術も滅びてしまふに違ひないと思はれた。

子供を恐れるの餘り、更に既往に溯つて「己は何の爲めに結婚したのか。」と云ふ問題を考へて見る事もあつた。

兎に角私が、現在の妻に戀ひをした爲めに結婚したのでない事は、あの當時から明瞭な事實であつた。全體私は或る作品の中でコンフエッスしたやうなアブノオマルな所があるので、(こゝいらは或る necessity に迫られてわざと ambiguous な文字を用ゐる。)今迄自分が夢中になつて熱愛する程の女に出會つた例がない。二三の女と戀ひをした事はあつたかも知れぬが、今考へて見ると、其れ等はみんな affectation に過ぎなかつたやうな心地がする。前號に出て居た評論の中の私の弟の云ひ草ではないが、私の頭は恐ろしくマチイリアリスティクに出來上つて居るので、私には到底ほんたうの意味の戀愛と云ふものを感ずる事が出來なかつたのであらう。なぜと云ふのに、眞の戀愛はやつぱり幾分かスピリチユアルの領分に屬するものであるらしいから。

それで私は、戀愛とは全く違つた動機から結婚した譯なのである。

私は現在の自分の心の狀態を以て決して滿足して居るものではない。私が從來作物を通じて發表した所の思想や主張は、私の宗教ではなくて私の趣味に過ぎな

いだらうと云ふ批難も、一應は尤に感ぜられる。(私自身は、趣味と云ふよりはもつと遙かに深い所から湧いて來るのだと感じて居る。それが善くても惡くても、到底自分では制し切れない不可抗力を以て、常に自分を衝き動かすやうに思はれる。)しかし私には今の傾向を何處迄も押し進めて、自分の宗教とする程の、充分な勇氣と熱情とがまだまだ湧いて來ないのである。有體に云へば、私は「惡」の力を肯定し讃美しようとしながらも、絶えず「良心」の威嚇を受けて居る。聖人の傳說を讀んだり、崇高な人格に接したりすれば、何だかやつぱり自分の淺ましさを恥ぢずには居られない。名譽と云ふ事體裁と云ふ事、(それが何等の價値もないのだと信じながら)を全く忘れてしまふ程大膽になる事が出來ない。悲しい事には此れが私を知らず識らず煮え切らない態度に導くのである。

そこで私は當然の結果として今の狀態に不滿足なのである。「現在のまゝに放任してぶらぶらして居れば、遂には淺薄な生半可な人間になつてしまふ。自分はもう少し落ち着いて、しつかりと自分の事を考へて見やう。」――さう氣がついて、私は去年の正月頃から放浪生活をやめにして兩親の家に歸つた。成る可く机に親しんで、規則的に讀んだり考へたりする習慣を附ける事から始めて見た。

しかし兩親の家と云ふものはどうも落ち着きが惡くて、やゝともすると自分は昔の放浪生活に復りさうであつた。「此れではいけない。兎に角私は自分の家を作つて見やう。さうして暫く書齋の中に立て籠つて、靜かに考へを沈めて見やう。」さう思つて、卽ち私は自分の家を形作る道具の一つとして、妻を娶つて見たのであつた。

だから私の妻は、私の爲めにいろいろの意味の用達しをしてくれる高等なる Dienerin に過ぎない。自分の收入の全部を擧げて、遊蕩費に供さなければ承知の出來なかつた私は、成る可く室內の裝飾品とか、器物とか云ふ物を買うにやうにして、「居」を愉快にする事を心掛けた。前にも自白したやうに、私は此れ迄極端

なる廢頽の生活に浸る事も出來ず、さうかと云つて普通の放蕩にも倦み疲れて居た折であつたから、私の此の方向轉換は或る程度まで成功した。兎に角宿屋住居をするよりも、兩親の家に居るよりも、私はいくらか落ち着いて居られるやうになつた。

一つには又、妻とか家とか云ふ係累がどれ程自分の性癖を牽制し、矯正する力があるものか、我から其れ等の桎梏の中へ飛び込んで試されて見やうと云ふやうな覺悟もあつた。自分の惡魔主義的傾向が、それ等の係累の爲めに一變してしまふなら其れでもよい。反對に其れ等の束縛を打ち破つて、從來の傾向に突進するやうな、眞劍な力が湧き上つて來るならそれでもいゝ。いづれにしても、痛切なる實生活の試錬と、冷靜なる思索の結果とを待つて、然る後に自分の頭に生れて來る思想が、始めて本當に自分の「信仰」となり得るのであるから、幾分なりとも世間に關する經驗を豐かにし、眼孔を廣くする事は無益でないと考へられた。

斯くして私は、一家を構へてから略々十ヶ月ばかりを暮らした。其の間私は全く放浪を止め遊蕩を斷つた。無理な金づかひをするやうな事もなくなつて、世間的の信用を増し、多少は親を安心させ、自己の「良心」を喜ばせた。しかし今迄のところでは、私の藝術上の傾向はまだ依然として變つて來ない。變へやうとしても變へられないで居る。

私に取つて、第一が藝術、第二が生活であつた。初めは出來るだけ生活を藝術と一致させ、若しくは藝術に隷屬させようと努めて見た。私が「刺靑」を書き、「捨てられるまで」を書き、「饒太郎」を書いた時分には、其れが可能の事であるやうに思はれて居た。又或る程度まで、私は私の病的な官能生活を、極めて秘密に實行して居た。やがて私は、自分の生活と藝術との間に見逃し難いギャップがあると感じた時、せめては生活を藝術の爲めに有益に費消しようと企てた。私の生活の大部分は私の藝術を完全にするための努力であつて欲しいと思つた。私の結婚も、究極する所私の藝術をよりよく、より深くする爲めの手段と云ふ風に解

擇したかつた。斯くの如くにして、未だに私は生活よりも藝術を先に立てゝ居る。たゞ今日では、此の二つが輕重の差こそあれ、一時全く別々に分れてしまつて居る。私の心が藝術を想ふ時、私は惡魔の美に憧れる。私の眼が生活を振り向く時、私は人道の警鐘に脅かされる。臆病で横着な私は、動もすると此矛盾した二つの心の爭鬪を續けて行く事が出來ないで、今迄屢々側路へ外れた。

しかし私は藝術を熱愛し、たゞ藝術に依つてのみ生きがひのある事を知つて居る。それ故自分の藝術を築き上げんが爲めには、あらゆる努力を惜しまうとは思はない。云ふまでもなく、眞の藝術は生活と一致す可きものであるから、私は此の後嚴重に自分の臆病を排斥して、正直な心の中の鬪ひを、解決のつく迄續けて行かうと決心して居る。

かう云ふ氣持ちになつて居る際に、私の妻の臨月は追ひ追ひ迫つて來たのである。私は自分の係累が、最初の豫定以上に、若しくは必要以上に殖えることを恐れ且怒つた。けれども早晩父となることが避く可からざる運命であると悟つてしまつた時、却つてさう云ふ經驗を味はつて見るのも無駄ではないと云ふやうなあきらめが生じて來た。父となるのを一期として、何か私の精神にエポック、メエキングな變化が起りはしないかと云ふ期待が、心配と同時に樂しみでもあつた。

三月十四日の夕方から妻は陣痛を覺え始めて、茶の間に床を延べて臥せつた。私は隣室の長火鉢の前に据わつて居たが、彼女の狂ほしげな呻り聲を聞くと、急に總毛立つやうな戰慄を感じて二階の書齋へ逃げ上り、安樂椅子に身を屈めながら腰掛けて居た。今數時間を出でずして胎内から芽を吹き出さうとする新鮮な生命の力、それに抵抗して息も絶え絶えに悶えて居る母體の苦しみ、――それ等がみんな自分の精力から作り出されたものだと思ふと、私は云ひ知れぬ滿足と苦笑とを禁じ得なかつた。さうして心から妻の惱みに同情を寄せ可憐なる彼女の無事を祈つて居た。間もなく妻の老母が二階へ上つて來て、

「唯今赤ん坊が生れました。女の子でございますよ。」と云つた。生れ落ちた時の孤々の聲は、二階へ聞えて來なかつたので、私はそれ迄知らなかつたのである。産は産婆が間に合はぬ程輕かつた。眞赤な嬰兒はあらん限りの聲を搾つて泣くのであつた。私はその盛んなる叫び聲を聞くと、第二の「我」に私の活力が奪ひ取られて行くやうな恐れを持つた。七夜に私は「鮎子」と云ふ名を與へた。その時友人の一人が見舞ひに來て、

「どうも君が親父になつたと云ふのは滑稽だ。殊に顏つきまで君にそつくりだから益々おかしい。」

と云つて笑つた。

「父となりて」の感想を書くつもりで、私は却つて、「父となるまで」の告白を書いてしまつた。「父となりて」の經驗はまだ非常に淺い。生れてから約一と月を過ぎた今日、私は一向に子供が可愛くなつて來ない。恐らくは永遠に可愛くなるまいかと思ふ。子供よりはまだ妻の方がいくらか可愛い。

あまり泣き聲がうるさくなつたら、餘所へ預ける積りであるが、今の所では大した邪魔にもならない。妻の玩具にあてがつて置いて、自分は二階の書齋に居れば聲は全く聞えない。嬰兒が一人殖えた爲めに、どれ程經濟が違ふものやら、それもまだ明瞭に分つて來ない。從つて私は大概子供の存在を忘れて居る日が多いくらゐである。

心配なのは生れた子供よりも、第二第三の子供が生はれしないかと云ふ事である。第二が生れたら、既に或る人の養子に與へる豫約が整つて居る。

私は本誌の先月號に載つて居る私に關する批評を讀み、多少感ずる所があつて此の告白を書いた。但し、私の頭の中の葛藤はいくら正直に告白しようと努めても、到底如實に映し出せるものではない。或る一つの思想を告白すると、直ぐにその反對の思想がむらむらと湧いて來て、前言を取り消したいやうな心地になる。そこで私は、出來るだけ正直に、心の經過の成る可く大部分を書き記して見たに止まつて居る。

（大正五年四月）

好奇心をそゝる精神病

醫學士 氏家 信

精神病は世間に云ふ「キチガヒ」であるが、世に「キチガヒ」と稱せらるゝもののみでなく、猶ほ「ウスバカ」「カラバカ」と呼ばるゝ癡愚や白癡——世間では「ウスバカ」を「キチガヒ」と別にして居ることが多い——も精神病の中に入り、又「變人」「變り者」と稱せらるゝものも入るのである。「狐憑」の如きは殆ど病氣として取扱はれずに、寧ろ加持や祈禱に托されたものであるが、精神病學上に云ふ憑依妄想である。猶ほ一見してトテモ氣違と思はれざる樣な精神病も少くない。要するに私共の精神病と稱するものは世間で考ふるより甚だ範圍の廣いものである。

世間では氣違と云ふと同情の眼を以て見るよりも、寧ろ好奇心をそそり、奇異の眼を以て迎ひらるゝものである。私共は能く友人や知人などに「精神病と云ふものは面白いものでしよう」と問はるゝことが多い。面白いどころか甚だ悲慘な、氣の毒な疾病である。精神病に罹りたるものを目して世人は『前世の業が惡るいのだらう』とか『惡因惡果』など氣の毒の感じよりも、冷笑の態度を以て迎ひらるゝのは實に甚だしいことだと思ふ。恰も對岸の火を見る樣な態度である。私自身も此專門に入る以前は一種の興味を以て見たものである。其因て來る處は本邦に於ても外國に於ても同じく精神病は疾病としてよりも、「神佛の祟り」「罪業應報」「憑物」などと考へられて、看護治療せらるゝより加持祈禱に托され、甚だしきは監禁虐待せられたものである。其には傳說的影響もあらうし、演劇稗史小說などの影響もあるであらう。

然し精神病は昔より疾病として取扱はれ、ヒポクラ

テス時代に既に躁狂鬱狂に區別せられ、記載せられて居るが、爾來漸次疾病を離れて取扱はるる様になつた。然るに現今の精神病療法に曙光を與へたのは西暦一七九八年五月二十四日に佛蘭西の精神病學の泰斗ピネルが巴里の癲狂院サルペトリエーに至り鐵鎖に繋がれ、鐵窓の下に呻吟せる幾多の精神病者を自由に開放したに始つたことは有名な話である。其頃英國にてはコノツリーが精神病者の自由開放を主張した。其後幾多斯界の學者が輩出して今日の進歩せる療法看護を見るに至つたものである。本邦に於ても先年迄癲狂院に於ては鎖錮を使用して居つたソーダが、今日に於ては最早や其未開的療法の痕跡だも見ることが出來なくなつた。然し未だ精神病者を高雄山の琵琶の瀧や中山の法華寺等に連れ行くものも少くない。

精神病なる名稱は近來廣く使用せらるるに至つたが、以前は「瘋癲」「癲狂」と稱せられ、演劇稗史には「亂心」「狂氣」「物狂」などの文字を使用せられたものである。「保名狂亂」「お光狂亂」「蘭平物狂」「小袖物狂」などは世人に廣く知られて居る、謡曲にも「狂女もの」「狂もの」と稱するものが可なり多くある。「高野物狂」「加茂物狂」「丹後物狂」「天王寺物狂」「嵯峨物狂」「龍田物狂」などとの外に「角田川」「三井寺」「百萬」「櫻川」「土賊」「花筐」「班女」「水無月祓」「柏崎」など有名なものである。多くは親子情人の別離より發狂し、漂浪し、再會に至るものである。最近に於ては「お夏狂亂」や「椀久」などは演劇として廣く知られたる處である。

支那に於ては狂、狂疾、狂病、顚狂、顚疾と云ひ、本邦に於ては「クルヒヤミ」「モノグルヒヤマヒ」「クナダブレ」「タブレ」の名稱がある（吳博士著精神病學集要）。太寶令に既に癲狂の病名あり。「癲」は癲癇のことにして「狂」は精神病の意に使用せられて居る（富士川博士著日本醫學史）。

元來「瘋」は「アタマノヤマヒ」の義にして「頭風病」（集韻）「偏頭風在レ右屬レ痰屬レ熱在レ左屬レ風屬レ血」（方書）とある。「癲」は「モノクルフ」と云ふ字にて「狂也」（集韻）「喜笑不レ常顚倒錯亂也」（正字通）「多喜爲レ顚

多怒爲レ狂」(素問)と説明して居る。「狂」(サワグ、クルフ)に至りては最も能く精神病を云ひあらはしてある。「病也心不レ能レ審ニ得失之地一則謂ニ之狂一(廣韻)「狂生ニ於心一而出ニ於外一應璩詩云積レ念發レ狂癡此其事也」(疏)「躁也」(集韻)「鄭康成以レ狂爲ニ倨慢一以對ニ不敬一故爲レ慢也」(疏)などの解釋がある。「癡」は「オロカ」「ニブシ」にして「不レ慧也」(説文)「癡者神愚不レ足亦病也」とあるを見れば昔より一個の疾病と認められ、精神乃至頭腦の疾病と知られて居つたものである。

斯の如く精神病は精神の病である。今日醫學上より見るも同じく精神障碍を主徴候とせる腦の疾病である。健康ならざる精神が總て精神病の中に入るべきものであるが、扨て「健康なる精神とは如何なるものか」と人々其人に就て見る時は甚だ「健康なる精神」と「不健康なる精神」との境界に苦しむものである。然し程度問題であつて普通の人に見ざる精神の異常を精神病と見るのである。私共も實際精神病の輕きものは一見して其診斷に苦しむことが決して少くない。然し精神病には一定の症狀群より成る病型があり、經過があり、豫後(治不治)かあるものにして單に精神の病と見るよりも其人個人の侵さるる病である。由來奇人天才には昔より狂態奇行が多く傳つて居るが、其中にも幾多の精神病者があつたであらうと思ふ。有名なる彼のロンブローゾは天才を評して「癲癇に屬する變質性精神病」と迄極論して居る。ジャンドラシック教授は「大事に成功する英雄偉人には神經衰弱者が多い」と論じて居る。近來獨逸にてはメビウスの如き精神病理の方面よりニーチェ、ゲーテ、ショーペンハウエルの如き詩人哲學者の思想を研究して居る。實際樗牛が「美的生活論」を出して當時の思想界を恐驚せしめたが、其本尊たるニーチェや佛蘭西の小説家として有名なるモッパッサンや詩人レナウなどは精神病に罹つて倒れて居る。ウィルヘルム、ステッケルの書きたる「詩作と神經病」の中にゲーテが未だストラスブルグに在りし時苦悶性ヒステリーの特有なる症狀を呈せりと記して居る。其頃ゲーテは强き音響を非常に嫌惡し、殊に高き

處より暇下する時常に眩暈が起るので非常に苦痛を感じたソーである。猶ほ食事の後に呼吸が苦しくなる程咽喉が緊縮し、非常に情慾に強く、病的なる嫉妬心を抱き、甚だしく短慮であり、狂憤暴怒すれば額を机に打ちつけ、書籍を破棄するが如き行爲もありし如く記載して居る。幾多の青年子女を自殺せしめた『若きウエルテルのなやみ』はゲーテが自殺思想に制せられた時の産物である。鷗外漁史の『即興詩人』にて知られたるアンデルゼンやオスカー、ワイルド、キールケゴールなどは「同性的戀愛」の好標本たるべき詩人であるらしい。

前述せるが如く精神病は決して世間で考ふる樣な變な擧動をなし、辻褄の合ざることを喋り、妄想を抱き、狂ひ廻るものや踊り狂ふものや非常に欝ぎ込むもののみでなく、白癡や癡愚の如き生來精神發育制止や大酒家に於ける慢性酒精中毒――宴會などにて急性酒精中毒は常に見るものであるが――や莫比中毒の如き中毒性精神病やチフスの如き傳染病に見る傳染病性精神病も精神病の中である。色情の異常あるもの、强度なる潔癖性の如き强迫觀念のあるもの、身體的にも精神的にも普通の人と同じく發育しながら貪婪飽くことを知らざるもの、常に平然として虚言を吐くもの、常に反社會的行爲をなすものの如き病的性格も精神病の範圍に入るものである。斯の如きものは世間より精神病と認められずして一圖に社會より排斥せられ、漂浪落魄し、淪落的生活に終るが如きは實に悲慘なるものである。癲癇やヒステリーも精神障碍の甚だしきものは癲癇性精神病、ヒステリー性精神病と稱し、同じく精神病中に算すべきものである。然し世間に云ふ「神經衰弱が高じて精神病になつた」と曰はるるものは初より精神病にして唯だ其初期に神經衰弱樣の症狀を呈したに過ぎないことが多い。斯る點に深く注意せざる時は治癒すべき精神病も遂に手後れとなつて不治に終ることが多い。精神病者を出したる家庭は實に悲慘なものにして經濟的にも精神的にも實に慘憺たる境遇に陥るものを見る事が少くない。腦出血や頭部損傷にも精神病を發

生し、妊娠や腎臓病や糖尿病にも精神病がある。最も恐るべき精神病は梅毒に起因する麻痺性癡呆なる精神病である。斯くの如く精神病を列擧すれば其數殆ど四十に近い。決して精神病は一概に「氣違」と稱する一種のものでない。其經過も一時的のものあり、又全生涯に渡るものがある。必ずしも不治の疾病とのみ見るべきものでない。三〇％乃至四〇％は全治するものである。

精神病の發病は季節と深い關係がある樣に見える。「草生え草枯れ」の時即ち春先秋口が萬病發生の時期なるが如く、精神病も春に最も多い。何故春に多いかと云ふことに關しては未だ充分なる説明がない。春は萬物青春の氣の漲る時であり、健康者も自然と花に浮かれ出すが如く、自然の氣候溫度の影響を受けて發病するものであらう。四月が最も多く、三月及五月が之に次で發病者で多い。夏よりも秋に發病するものが比較的少ない。一般に春より夏に掛けて多く、秋より冬に渡りて少ない。要するに春夏は興奮の時期にして秋冬は沈靜の時期であらう。正確なる統計はないが、多年病院に居つて見ると春より夏に渡りて入院患者が多い。然し秋に再發するものも少くない樣である。冬は一番に私共の閑散の時期である。此は精神病發生の時期と云ふよりも、精神病の症狀の顯著になる時期と見る方が穩當であらうと思ふ。

精神病の中本邦に於て最も多く見るものは如何なる精神病であるかと云はゞ「早發性癡呆」が最も多い。早發性癡呆なる病名は精神病の中でも躁狂や誇大妄想狂などの如く廣く世間に知られず、寧ろ甚だ耳新らしい感がする。以前はチーヘンの單一狂（或は偏狂）の説が廣く行はれ、放火狂とか、色情狂とか誇大妄想狂と共顯著なる症狀を捕ひて病名とせられたるも、今日の進歩せる精神病學に於ては斯る病名は種々なる精神病に發見する症狀たることを知らるるに至つた。嘗て私共の反響言語と稱し、何を問はるるも其問と同じ言語を返答する症狀がある。例へば『今日は何日ですか』と問へば『今日は何日ですか』と答へ『家は何處です』と問へば『家は何處です』と答へ、口眞似をなす症

狀がある。斯る症狀を有する精神病に「鷄鵡狂」と名付けて病院に來たことがある。頗る奇拔なる病名である。此耳新らしき早發性癡呆は其文字の示すが如く早發するものである。破瓜期より二十歲前後に發病するものが最も多くある。三十歲前後に發病するもの之に次ぎ、四十歲以上にて晩發するものもある。生命には直接の危險なく、病進行し、永い年月の間に癡呆狀態に陷るものである。比較的長命のものであるが、其末期は殆ど「魂なき形骸」として存命するに過ぎない。

此早發性癡呆の中には「十で神童十五で才子二十過ぎれば並の人」の諺にあるが如く小學校卒業迄は級の秀才と稱せられたるものも、中學の二三年より何時しか成績不良となり、卒業するころに精神病の症狀著明になるものが可なり多い。

早發性癡呆の發病する有樣を巧に描いてあるのは嘗て朝日新聞に中村古峽氏が連載せる小說である(今題名を失念したが)。私は毎日其小說を讀んで居りながら「これは精神病者だな」と思つて居る中に幻覺があらはれ、石燈籠を人と見るところなどがある。實に良く描かれてある。

其原因は不明なる場合が多い。感動、煩悶、落第、失戀等何かしら世間にては其原因を探して來るが、多くは誘因か又は其初期に於ける病的行爲であることが多い。遺傳的關係が最も多く、七〇—八〇%に遺傳がある。親子共に同じ精神病に罹り、兄弟姉妹數人が同じ精神病に罹るものもある。小兒期に於ける頭部の怪我や「ヒキツケ」、身體の虛弱なるものにも深い關係がある。

其發病に際し或は興奮し、或は憂鬱し、或は幻覺妄想あらはれ來るも、要するに智情意の統一を缺き、主として感情鈍麻し、仕事に對する興味を失ふものが多い。

幻覺及び妄想は精神病の症狀として最も目につき易いものである。幻覺及妄想に起因する反社會的危險行爲が甚だ多い。幻覺には狹義の幻覺と錯覺とある。幻覺は見えざるに物を見、聲なきに聲を聞くものにして

幻聽が最も多い。一人の聲もあれば多人數の聲もある。遠くより聞ゆるものも近くより聞ゆるものもある。其内容も種々で誇大的のものもあれば被害的罪業的ものもある。『お前は罪人であるから代りに息子を死刑にする。』と幻聽ある爲め苦悶涕泣して其息子の名を呼ぶ患者があつた。『鐵砲で打つぞ』と幻聽ある爲めに終日室内を逃げ廻り、戸の蔭にかくれ、机の下に這入るが如き患者もあつた。女の聲にて『よい男だ』と曰はるゝのが嬉しいので毎日微笑し居る患者もあつた。尾籠な話であるが『お前の家は貧乏になつた』と聞ゆる爲めに最早入院料も拂はれざれば食事し得ずと考へ、便所に行けば空腹になるを恐れ、毎日便意あるも堪へ忍んで居つた患者があつた。斯の如きは聞けば甚だ滑稽であるが、患者自身は眞劍で非常に苦痛である。幻視としては妖怪變化を見、癲癇の如きは能く神佛を見、酒精中毒の如きは蟻や鼠や小動物の群集を見ることが多い。錯覺は白地の浴衣を幽靈と見、電燈を顏に見、時計の音を半鐘と聞くが如きものである。其内容に由て種々なる妄想と關聯するものである。

妄想には誇大妄想と微小妄想とある。誇大妄想には葦原將軍の如く自ら將軍と稱して居るものがある。巨萬の富を得たと考へ、濫りに物を求め、遊里に浪費するものがある。又は高位高官に任ぜられたりとて馬車を驅りて宮中に伺候せんとするものもある。微小妄想には罪業妄想と稱して過去の罪や現在の罪より自ら罪人なりと考へ懊惱苦悶するものがある。其結果自傷自殺を企て斷食するものがある。罪人である爲め探偵に追跡せらる(追跡妄想)と考ふるものがある。貧困になつたと云ふ考より食事せず、寒中裸體となるものもある。被害的の妄想は多きものにて財產を横領せらるるとか、名譽を毀損せられたりとか考へ、親戚や知人を仇敵に思ひ、甚だしきは之に危害を加へんとするものがある。電氣を掛けて苦しめらるると訴ふるものも少くない。嫉妬の妄想もある、訴訟を好む好訴妄想がある、甚だ始末に困るものである。姙娠妄想は見ることが多くない。心氣性妄想と稱し、體内に疾病があると

考へ、或は結核の爲め最早倒れると考へ、胃腸の働かなくなつた爲め食事し得ないと考へ、絶食するものがある。失明する故生甲斐がないと考へ、自殺を企てんとするものもある。斯くの如く妄想には甚だ其種類が多く、其内容如何によりて自他の危險あるものが多い。注意すべきことである。

幻覺妄想に關して面白いことは文明の進歩に連れて其内容が變化し行くことである。電氣にて苦しめらるるとか、無線電話にて誹謗せらるるとか、其時代の發明や出來事に關聯するものがある。又男の幻覺妄想は其種類が種々雜多のものがあるが、女の幻覺妄想は色情的關係が甚だ多い。普通男は一般に色情に關する談話をなすことが可なり少くない様であるが、女には普通殆どないと云つてよい。然るに一度女が精神病に罹ると色情に關する談話を平然として語り、或は醫員に抱きつき、甚だしきは局部を露出するものがある。厚化粧するのも色情亢進の一種である。感情の鈍麻より羞恥とか遠慮とかが鈍くなる爲めであらうと思ふ。

早發性癡呆に次で多いものは躁鬱病である。元來躁鬱病なる名稱は躁病と鬱病とを合したるもので甚だ奇異の觀があるが、昔相反したる二種の疾病とせられたるも、普通の人に於てさへ時に氣が浮き、時に沈むが如く或時期には躁揚し、或時期には沈鬱し、一定の年なり、月なりを畫して起るが故に同一疾病であるとの考より躁鬱病なる名稱が起つたのである。

二十五六歳より三十歳前後にて發病し、遺傳的關係が甚だ深くある。精神病の中では最も治り易きものである。此病氣は智情意共に普通の人より增進興奮するか、又は制止するものである。因て躁病に於ては思想の流は後から後からとドン／＼湧き出で、聯想が早くなり、感情は爽快で、時には怒り易くなり、多言多動となり、能く談話し、よく動き、作業が多くなる病氣である、其輕きものは輕躁病とて元氣のよ過ぎる恰も「粗忽者」に似て居る。

鬱憂病は之に反し智情意共に制止するもので、思想の流れは止められ、聯想が甚だ遲くなり、感情は抑鬱し、行動が甚だ少く、悲哀苦痛なる顏貌を呈し寡言となり、室内に引き籠り、問はれても容易に答へざる風あるものである。從て其妄想の内容も罪業的被害的追跡的のものが多く、苦悶性興奮のあることも多い。屢々自殺の念を起すことがある。私共のメランコリーと稱する病氣は此鬱憂病のことである。

以上二種の精神病に次で多く、殊に近年漸次多くなるものは麻痺性癡呆である。其主要なる原因は黴毒である。然し直接黴毒に罹りたるものに發病すると云ふよりも、其感染後十年乃至二十年後に起るものである。一度黴毒が治つたと思はれても、單に表面的で完全に治癒しなかつた時に起るもので、變型黴毒性の精神病である。然し遺傳や又は精神病に罹り易き素地を有するものに多い樣である。獨逸の諺に「チヴイリザーチオン(文明)とジヒリザーチオン(黴毒)」と云ふことがある。其語呂同じく、文明の潮流は黴毒の傳播を多からしむる爲めに起つたことである。文明の半面には放逸なる生活、耽溺的生活が甚だ多く、酒色に惑溺する結果斯の如き精神病が年々增加し行くが如き傾向あるのは國家の爲めに甚だ寒心の至りである。富豪や各市場を奔走して居る商人に多く、軍人にも多く、宗教家教育家に最も少きものであると獨逸ではなつて居る。男子に多く、女子に少くある。然らば賣笑婦などに多かるべく思ふが、實際彼等の最終の運命を知ること甚だ困難であるから多いか少ないか知られない。然し女子として此病に罹るものには共に近いものが多くある樣に見える。

年齢は四十歳乃至五十歳以上で發病するもの最も多く、三十代にも起ることが少くない。麻痺性癡呆の診斷がつけば大抵三年位の生命と私共は年限を定めて居る。全く不治のもので、發病後漸次精神の廢退を來す恐るべき精神病である。誇大妄想や荒唐無稽的の妄想が多く、記憶が非常に惡しくなり、計算などが非常に困難になる。其病の型は甚だ種々なるものがある。彼のニーチェやモッパンサンなどは此病で倒れた樣である。身體的に特有なる病狀があるが、普通の人には解り難い。

其他の精神病は先 病名を擧げてあるゴルキーなど露西亞派の小説によく描かれたる「どん底」に沈んだ淪落放浪の生活を送る人々や不良少年などにも精神病者が可なり多いものであらう。毎日新聞の三面記事を賑はす殺人や窃盗や自殺などにも精神病者は少くないことであらうと思ふ。單に表面より觀察すれば其行爲は甚だ憎むべきものありとするも、同じく精神病も四百四病の中ならば同情し、保護し、看護治療すべきものであらうと思ふ。然し之を保護すべき機關たる病院が本邦に甚だ少くある。確實なる統計を調ぶる暇がなかつたが、本邦に於ては人口五百人乃至千人に對して

一人の精神病者がある割合であると曰はれて居る。故に本邦には十萬以上の精神病者があり、東京市内のみ幾千の精神病者が居る次第である。未だ國立の精神病院なく、東京府巣鴨病院が最も大きい病院であるが、他は何れも私立病院である。東京醫科大學には未だ精神病室がない。モット此方面に發展して欲しいと思ふ。

谷崎氏の好んで描かれる小説に精神病者が多い。外國の小説にも甚だ多い。然し色情倒錯、私共の云ふ病的の性慾は病院に於て餘り多く見ない。私が嘗て病院に於て見た一例は女同志の患者の中に一人が男となり、其言語動作がまるで男の如く、胡坐し、聲も大きく、態度も尊大である。其側に妻の如く、之を世話する女の患者があつた。之を見て嫉妬する女の患者があつて不絶喧嘩して居るのを見たことがあるが、其他に見ることが甚だ少ない。時に新聞に見る婦女子の顔に傷を負はせ、臀部を切るものは色情倒錯の一種にて之をメッドヘンステッヒライと稱して居る（娘を切るの意味）。又異性を虐待して快感を感ずるサヂスムスや之と反對に虐待せられて快感を覺ゆるマソヒスムスの如き甚だ奇異の現象もあるが、あまり詳細に書くことは避けやうと思ふ。

一時「同性的戀愛」の問題が盛になつたことがある。此も病的性慾に屬するものであるが、實際病的なる同性の愛か何うか甚だ疑はしい。女學校などに見るものは異性に近づく機會が少ないから起るとであらうと思ふ。ステッ ルは誰しも異性に對する愛情と共に同性に對する愛情を有して居るものであると論じて居る。が然し異性に對する愛情は同性に對するものよりも强く深くあらはれるのが自然の力であるであらう。

猶ほ此等の問題や社會の種々なる出來事を精神病學的方面より觀察すれば面白いこともあるが「精神病の醫者は誰を見ても精神病に見えるだらう」と批難されると困るからこの邊にて筆を擱めやうと思ふ。思ひ出るまゝを秩序もなく系統もなく匆々の間に記したるに過ぎないから、意味の徹底しないところもあらうと思ふが、他日機會を得て更に書き度いと思ふことが多くある。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

時勢の要求に應じたる

婦人公論

◎中央公論の愛讀者は貴下の最も親愛なる家庭に一本の「婦人公論」を獻ずることを忘れ給ふな!!!

五月號要目

□女一代の幸福…三宅博士
□趣味ある女の手紙の書方…與謝野晶子
□卒業から結婚まで…下田歌子
□高いメリンスの代りに…婦人記者
□愛の家庭…中根環堂
□夫婦和合家列傳…鈴木秋風
□一家の財政を公開せよ…安部磯雄
□帯の締め方…遠藤波津子
□良い子供を産む爲めに…永井博士
□空閨に泣く妻の涙「不品行な夫に見捨てられた妻の態度」
□其愛を恢復せよ…宮田修
□愼重の態度を取れ…澤柳博士
□先づ其原因を除け…内ヶ崎教授
□夫の不正を懲せ…中島徳藏
□意志の自由になさい…矢島楫子
□大正新女大學…鎌田榮吉
□娘を持った親の注意…阪口警部
□今後の妻の資格…下田次郎
□嫉妬の研究…高島平三郎
□古風な貞女おさん…徳田秋江
□「炬燵」のおさん…岡田八千代
□安くて出來る園藝の娯み…有川ヒサエ
□妖怪變化夜話…井上博士
□女子職業調べ(女中)…一記者

小説五篇

(新短篇小説)
□孫たち…正宗白鳥
□悲みの日より…素木しづ

(長篇小説)
□情炎…長田幹彦
□舞殿…笹川臨風
□若妻…小栗風葉

◎苟も今後の婦人は毎月これ位の程度の雜誌を讀んで其知識と趣味の高上を圖ることを怠り給ふな!!!

(中付二の一)

信用なき店舗及[illegible]な賣る品の廣告掲載は[illegible]す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

春秋論集

法學博士
鵜澤總明氏
新著

■鵜澤博士の著書としては、先年出版せられし『法學通論』『法律と道徳との關係』の二書あるも後者は非賣品、前者は品切の爲め、博士世に出でて約二拾年、其豐富なる學識、其深淵なる思想は、世既に定評ありと雖も、未だ親しく著書に就いて之を窺ふに由なかりしが、今回本書の刊行によりて其風貌に接するを得たるは讀書社界の滿足この上もなかるべし。

■本書は、鵜澤博士が明治三十五年以來今日迄約拾五年間、學者として辯護士として政治家として教育家として、多端なる業務と研學の餘暇に、執筆せられたる所謂副産物を纂めて一冊となせるものなり。おさむる處八十七篇、法律論あり、政治論あり、教育論あり、哲學論あり、正に百花絢爛、眞に博士の面目流露せるを見る、近來の好著たるを斷言して憚らず。

菊判總布 特製美本 函入
紙數約一千頁 紙質極上

正價貳圓八拾錢（送料外に拾六錢）

東京築地三丁目拾五番地 春秋社

（中付二の二）

史學研究者必携

空文年表

全一冊 定價金五拾錢 郵稅金八錢

上下三千載に亘る各年代に、重要なる史的事件を記述せる外、各年代毎に必らず餘白を存して史學研究及び自習の際自ら研究し若くは記臆し置くべき事件を自ら書き入るゝことを得る便を圖れるは本書獨得の特長にして苟も史學に志あるものゝ一日も缺くべからざるもの也

東京市本郷區西片町十番地
中央公論社發行

有用なき書籍及び卑猥なる書籍の廣告掲載は謝絶す

創業二十年紀念刊行

簡野道明先生著

論語解義

五千部限り特價發賣

内容見本贈呈

古來論語を註せる書擧げて數ふ可らずと雖も、或は字義訓詁に僻し、或は考證穿鑿に偏して徒に新奇を喜び、却て統一的解釋を缺き、後學をして轉た多岐亡羊の歎あらしむ。現代斯界の泰斗簡野先生夙に論語の研鑽に志し、沈潜講究、茲に數十年、博く之を群經に徵し、遍く先哲の所說に考へ、半生の蘊蓄を傾倒して以て本書を大成せらるゝに至れり。

本書講述の**體裁**は先づ本文を揭げて、章毎に、下の六項に分つ。**譯讀**は勉めて國語の格法と合致せしめ、**章旨**は一章の趣旨を概括し、**字義**は訓詁名物を解釋し、**直解**は一章の意義を通釋し、**考異**は遍く異本を校讐して字句の異同を辨正し、併せて衆說の是非を論斷し、**餘義**は更に一章の意義を衍述して直解の羽翼と爲す。且つ**論語辭彙**とも目すべき至便至要なる**索引**を附す。考證博大、解釋嚴正、論斷穩健、用意親切、毫髮も間然する所なく、論語の眞價と光輝とは初めて現代的に發揮せられたりといふ可し。冀くは大方の諸彥、速にこの一大寶典を座右に備へ、日夕諷誦して、修身處世の規矩準繩たらしめんことを。

クロス製天金全一冊
定價金貳圓五拾錢
特價金貳圓
(小包料金拾貳錢)

創業二十年記念特賣目錄
御申越次第贈呈す

(中付二の三)

東京神田 株式會社 **明治書院**
振替東京四九九一番
電話本局二四三八番

醫學博士 永井潛序 兒玉昌著

滅び行く宇宙と人類

萬物は日夜流れて愁人の爲に暫らくも止まらず、流れに浮ぶ泡沫は且つ消え且つ結びて將た何れに歸せんとはする。宗教迷多くして此の疑を解く能はず、哲學光薄くして未だ此の眞相を穿ち得ず。著者思を玆に潛むる事多年、今や一點螢火の如き科學の灯を挑げて此の萬有の流れの末を探らんとす。上は日月星辰より下はアメーバ體内の現象に及び、全篇を貫くに勢力分散の原理に基づく佛敎の寂滅思想を以てす。世の惱める者、迷へる者は本書に來りて始めて宇宙の目的、人生の歸趣を明にせよ。

最新刊

四六判四百五十頁
布裝美本箱入
アート紙挿畫二十枚入
定價壹圓四拾錢
送料金八錢

文學士 木下四郎一著 ＝哲學入門の最新最良書出づ！

哲學汎論

哲學は事物を根本的に研究する學問にして然も其問題は多方面的なり。故に哲學に專心なるの人は宇宙の幽微に觸れ先賢未發の點を捕ふることあり得べし。本書は著者が幽玄の感に打たれつゝ解決を試みし哲學上の諸問題と世の哲學者の説とを平易明瞭に記述せるものなり。本書の讀者は世界の本體若しくは神、若しくは「天命」の「天」の所在、不滅の靈魂の所在、在天の靈の所在、矛盾の調和、有と無との一致、知的認識、情意的認識、身心關係、其他あらゆる哲學上の重要問題を翫味せんとば乞ふ本書に來れ。

最新刊

四六判三百頁
布製美裝箱入
定價金壹圓
送料八錢

發行所 東京市麹町區平河町五丁目 振替東京二〇一九四番 洛陽堂 電話番町（四）二五八

（中付二の四）

人物評論（七十一）

文壇に復活せる
德富蘇峯論



▽文壇に於ける蘇峯君

松井柏軒

（一）

德富蘇峯君が文壇に復活したりといふは聊か妥當ならず、何者彼れ曾て文壇より死したることなく、三拾幾年來、依然として斯界の一大明星たれば也。

唯だ彼れが全く意を政界に絕てるは事實也、而して彼れが爾今以後專念に文壇に立たんとするも事實也、此の意味に於て彼れ復活したりと視るも、未だ必らずしも無意味といふ可らざるが如し。

進莫、彼れが文壇に於ける地位を評論することは、吾人後進に取て頗よる興味なきに非ず。

(二)

彼れが『將來の日本』なる一書を公けにするや、我が文壇は殆んど彼れを迎ふるに驚心駭目を以てしたりき、彼れが雜誌『國民之友』を發刊して、平民主義を鼓吹するや、天下幾多の青年は、翕然として彼れに傾倒したりしが如く、啻だに彼れの華麗且つ流暢なる文章が、一時の文界を風靡して、殆んど文體を一變したるに止まらざりき、現代式の語句を以て評すれば、彼れは實に我が文壇の大なる革命家といふも過當ならざりし也。

(三)

然るに彼れは幾くならずして權勢に阿附するものと視られ、平民を捨てゝ貴族に迎合する無節操漢と罵せられ、曩の名聲嘖々たりしと反對に、多くの誹謗と侮蔑とを浴びせられたりき、彼れの音容態度が今尙ほ世間の一部者に一種の『猫』として忌まるゝも、實に此の餘波にして、必らずしも彼れの宏材を妬むのみに非ざるが如し。

彼れは『國民新聞』を發刊して、依然平然主義を鼓吹したりしも、日清戰役の前後(恐らくは少しく其の以前)よりして、彼れの態度は漸くにして變更したりき、彼れは弱冠にしてカーライルを仰び、コブデン、ブライトを師としたるが如くなりしも、彼れは其の家學として孔孟の敎を受け、治國平天下を理想としたりしなるべく、其の雜誌新聞を發行せしも必らずしも文士として斯壇に雄を稱せんと欲するに非ず、必らずや政事家として經綸を天下に行はん志操を懷けるなるべし、何ぞ況んや彼れ帝都の新聞に據り、既に居然として名を成し、多くの朝野政事家に識認せられて、益々實際の政治問題に其の趣味を深くしたるをや。

(四)

彼れは此がためには、啻に自由改進諸黨の諸名流と交際して談論を上下したるのみならず、また大隈伯に往き、井上侯、伊藤公にも往き、甚だしきは山縣公、松方侯、樺山伯にも往けり。

彼れの批評眼は實に天授にして、其の玲瓏透徹なる、實に明治、大正の兩期を通じて第一人者たり、之に加ふるに精力絶倫なる努力に由て、孜々として學識を蓄積するを以てす、其の批評識力益々俊秀なる論を俟たず斯くして彼れの眼底に映せる政治上の事實如何といはゞ、其の黨人の志徒らに大にして材足らざるに反し、藩閥官僚の徒の學能材幹の遙かに黨人を拔くありて、苟くも眞に志を天下に行はんとせば、寧ろ彼れに依り彼れを用ゆるよりも、此に依り此を用ゆるの效果の大なるを判知したりしや想像に難からず、何ぞ況んや日清役前後に於て、主として彼れを識認し、而して彼れ亦其の識力智能を認めしもの實に軍人中の麒麟兒たる川上操六子其の人なりしをや。

彼れは斯くして先づ松方侯、樺山伯等に識られ内相たる樺山伯の下に、參事官たるとも厭はざりき。

彼れが日清戰役に悟り、更に歐行に於て益々感得せしことは、實に啻

國主義なりき、彼れの如き治國平天下を志操とし、殊に一身よりも一國を重しとする風氣の間に生育せしものは、寧ろ國家主義を尊奉し易し、彼れが始めに平民主義を鼓吹せしは、素より深き研究の結果に非ずして、露骨にいへば、一時靑年の客氣に捉へられて、此の珍奇なる旗幟を標榜せしに過ぎざらん、果して然らば其の帝國主義は、是れ彼れ自から到るべき處に到りしのみ、本然に復せしのみ、然り之を以て彼れが主義を變じ、節操を貳にせしものと評するは酷也。

（五）

彼れが心を政界に存して、常に經綸を天下に行はんとせしことは、殆んど三十年來繼續したりしが如く、其の更に桂公に往き、寺内伯に往き、大浦子、後藤男にも往きしは、實に此がためならん。

彼れが心は政界に寄せし以來、最も能く相識りて、而して最も能く我が經綸を行はしむべしと做せしものは、言ふまでもなく桂公なりしが如し、彼れが桂公の經綸に就て、如何なる程度まで參與せしかは、素より窺知するに由なしと雖も、桂公が病みて鎌倉の岩下邸に呻吟せるや、彼れ一日之を訪ひ、歸來長大息して『公終に起たず、天下國家の恨事之に過ぎず』といへるは、彼れ近く十年の後、必らず米國との大問題を解決せんと期し、之を斷行し善行するもの我が國今日唯だ桂公の敏腕識材に俟つの外なしとせしが故なりと聞く。

去れば桂公の死は、彼れに取て實に終生の痛恨事なるべく、彼れの政界に對する、恰かも伯牙斷琴の趣なきに非ず、現に彼れは最近『時務一家言』の卷頭に於て、桂公の死に由て、全く政局に斷念し、一生を文壇に捧ぐることを自白したりき、吾人彼れの心を念ふて殆んど卒讀に堪へざるものあり、思ふに彼れ一代の文章として、感慨個々人を動かすもの未だ斯の如きは有らざらん。

（六）

彼れは斯くして政界と斷絶して、茲に全く文壇の人となれり、彼れ文氣益々圓熟して、然かも平板枯淡に陷らず、益々妙味津々たるものあるは、其の文を養ふに劣らざればならん、聞說、彼れ毎日少くも七八時間は讀書し、其の國民新聞社に在る時と雖も、多く客を謝して手に卷を釋しと莫しと、是れ彼れが老いて益々文章と識力とに進境ある所以なるべく、通常人の彼れに追及し得ざる所以また主として茲に在るべし。

彼れの批評眼の卓越にして、當世第一人者たることは、前に略々之をいへり、今春實業之日本社の石井白露死し、靈南坂教會に其の葬儀を營むや、彼れ同人社出身の緣故を以て一場の哀悼演說を爲せり、其の文章を論ずる氣鋒縱横、滿場をして我れ吾を忘れしめ、更に進んで白露の人物を評するに及び、白露の生前同人社の評議員たるを辭するに、全身を捧げて實業之日本社に盡瘁するの故を以てしたることを擧げ、此の事實は白露の生時實業之日本社長增田君と雖も知らざりし所なりといひ、之を以て白露の職に忠なるを立證して、爲めに其の人物を重からしめしこと數段なりき、彼れの人物を評するや、名醫の藥物を調合するが如く、牛溲馬勃敗鼓の皮と雖も空しく捨てず、況んや寶珠斷金をや、彼れは宿

判官の罪狀を斷するが如く、實に爬羅剔抉、剩す所なく又逸する所なし、此の材識は之くとして佳ならざる莫く、政治を評し、文學を評し、美術工藝を品隲するにも、立言總て群を拔くものあり、殊に彼れの精苦勉勵、殆んど倫を絶するに於て、其の能を發揮して益々奕彩あり、彼れは文壇に於てまた實に第一人者たりと謂ふも、誰か之を溢美と言はん。

（七）

彼れ現に大正青年に告ぐるの文を其の『國民新聞』に連載中に在り、未だ精讀せざるが故に、評言を挾さむの要なしと雖も、維新開國の外力壓迫のためにして、寧ろ國辱なりと道破する處、舊式史家の常套を擺脱して、頗ぶる適切、極めて痛快也、彼れ筆を新聞に執るも、日々の政治法律財政外交を評することなく、單に高處より大觀し、常に長大綱を草し詳らかに論し細かに叙す、一種の現代政治史として殊に悦ぶべし、思ふに彼れの最大得意は史的評論なるべく、評論的歴史家たるは、是れ恐らくは彼れの一大特色なるべし。

雜札に妙なること、漢詩に巧なることは、彼れの技餘のみ、彼れの古書畫の鑑識に長ぜるは、また彼れの批評眼の卓越なる所以にして、此の「評眼の卓越するは、是れ彼れが、批評的歴史家（嚴格にいへば單に歴史家）たる所以にして、而して彼れが、我が文壇に於ける第一人者としては、現代政治史に不朽の名を垂るゝことは吾人今より之を斷言して多く誤まらざるべきを信ず。

▽蘇峯先生の近情

石川半山

德富蘇峯先生の事に付ては、我輩の所見を數年前に、或雜誌へ公表した事が有る、それは彼れが國民之友から藩閥之友へ轉したる逕路に付て、我輩の見る所を公けにした者で、世間の攻擊の多くが、彼れの心事を理解せざる所から起ッて居る事を說いた者で有る、彼れとしてはアノ逕路に進む事が最も自然で有ッた事を說いた者で有る、而して今日でも我輩は此の點に於ては、飽迄も彼れの辯護者の一人たることを辭しない者で有る。

轉化の逕路

彼れは立言が實行に如かざることを感じて、其の經綸を實行すべき地位に近かんとしたので有る、彼れが松方大隈兩伯の連鎖の一人となッて、松隈內閣の實現に力を致したのは、此の見地から來た事で有る、而して彼れが倫敦に於て、松方首相の召電を受取ッた時は、內閣書記官長となる都合で有ッたから、彼れは歸朝の後、此の內閣の中堅となり、第二伊藤內閣時代の書記官長伊東巳代治子以上の手腕を揮ふ積りで歸ッて來たのだ、何ぞ圖らん、彼れが歸朝した時には、既に薩派と進步黨との間に龜裂を生じて居て、彼れは進步黨員に非るが故に、寧ろ薩派の人として目せられ、書記官長の地位に就く能はず、樺山伯の下に內務の勅參

となるに至ッた、此時からして彼れは進歩黨と戰ふべき逆路に立ッて居たのだ、松方内閣が壇の浦に沒落する時、彼れが其の少數の同志と共に、群かり來る民軍の矢面に立ッたのは、男兒の意氣地として、さも有るべき事だ、我輩共は寧ろ其の勇氣を認めなくてはならぬ、山縣内閣には松方、樺山の兩薩將が入閣した、彼れが此の内閣の親友となッたのも自然で有る、而して此の内閣の中堅には、桂公が座して居たのだから、彼れが桂公と相知り、終に其の帷幕の人となッたのも、決して偶然ではない。

彼れは自ら其の經綸を施すの地に立つ能はずんば、少くも自家の經綸を實行し得るの人に接近し、其の人の手腕を透して、國家に貢獻せんことを願ふた者で有る、彼れを以て單純なる御用記者となすが如きは、政敵の酷評で有て、決して公平とは謂はれない。

犧牲の報酬

我輩は彼れの心事を知る一人で有て、又多少其の表面の事情を知れる一人なるが故に、世間の人と一所になッて、彼れを攻撃する事は爲し得ない者だ、然かしながら彼れが止むを得ざる事情から、藩閥の友となッた事を彼れの爲めに遺憾とするの情に於ては、彼れの親友の或る者と異なる所は無い。

彼れにして若し全然實行に指を染めず、福澤諭吉先生や三宅雪嶺君と同じ樣な態度を維持して居たら、其の名望はドンなに高まッて居たか分らない、少くとも世間から攻撃される地位には立たなかッたで有らう、明治三十年から凡そ十七八年間、彼れが松方桂兩先輩の爲めに、彼れの有するあらゆる物を犧牲にした事は誠に惜しむべき事で有ッた。

彼れは此の犧牲の報酬として、果して何者を贏ち得たりし乎、一に曰く正五位、二に曰く勳三等、三に曰く貴族院議員、而して此等の者は、我輩共の目から見るなら、天稟の光彩を有する彼れに、何等の光彩を添ゆる者でなかッた、彼れは自ら其の獲たる所を以て、其の失ふたる所を償ひ得たとは思ひ得まいが、我輩共から見ても、此の商業は大缺損で有ッたと謂はざるを得ない。

野に歸れる獅子

獅子は其の檻を逃れて野に歸ッて來た、久しき間彼れの飼主たりし桂公は、世にも名高い手取者で有ッた、其のニコポンと稱する一種の怪腕を弄して、あらゆる猛獸を其の檻に繋いで、巧みに之を操縱した、樞密院、貴族院の種々の怪鳥猛獸が、彼れに飜弄されたるのみならず、彼れの怪腕は我が同郷の俠骨坂本金彌、秋山定輔の兩豪傑に及び、終に又大石正已君等五領袖にも及んだ、されば此の桂公にして生存して居たならば、獅子は決して藩閥の檻を出づることが出來なかッたで有らうが、桂公の死は彼れに自由を與へた。

松方侯は尚生存して居る、然かしながら侯は最早や過去の人で有る、蘇峯君は最早や侯を擔いで政事上に何事かを爲す心は有るまい、寺内伯は桂公に次で長閥を維持すべき人物で、彼れとの親交に於ても、頗る緊密なる者が有る、然かしながら藩閥の運命既に傾きたる今日に於ては果

して寺内伯の天下が來るや否やは問題で有る、是に於て彼れは全く藩閥の檻を逃れて二十年前に於けるが如く、全く自由の一平民として、筆を以て論壇に活動を始めんと決意した者の樣で有る、彼れの爲めには誠に祝すべき事で、我輩共は之を歡迎せざるを得ない。

文章は天下一品

蘇峯君の文章と尾崎行雄君の辯舌とは、明治の時代に於て、最も傑出せる者で有る、如何なる論題でも、尾崎君の舌と蘇峯君の筆にかゝッては、全く美化されて仕舞ふ、俗に鷺を烏と言ひくろめると云ふ事が有るが、此の卓越せる技倆に至ては兩君の舌と筆の力に及ぶ者は有るまい、恰かも荒木又右エ門に劍を持たせた樣な者だ、天下無敵の名人で、敵を斬り伏せ、味方を助け其の藝の神に入ッた所は、見物をして恍惚とさせる、必ずしも悉く其の意見に贊成しない者でも、其の一種の魔力に魅せられる所が有る。

それでも蘇峯君が藩閥の爲めに辯護の筆を揮ふた時代には、隨分苦しい文字も有ッた『白も亦可なり、黒も亦不可ならず』と云ふが如き文章も有て、頗る其の權威を失ふたが、檻を出でゝ後の彼れの文章の奔放濶達、誠に昔の國民之友の時の如き勢ひが有る。

自由なる批評家たれ

我輩が彼れの今後に望む所は、全く自由なる批評家となッて、最も公平なる見地に立て、國民を指導する事だ、彼れの健康を以てすれば、今後尚二十年は此の天職を盡す事が出來るで有らう、就任以來一言半句も吐かず、單に愚論謹聽係たる貴族院議員などは寧ろ之を辭し、閥族との惡因緣も、成るべく之を薄くする樣にして、全く獨立の見地に立て、彼れの筆を揮へば、其の權威は更らに偉大なる者となるで有らう、我輩共は此の文壇の一先輩が、近來に至て猛烈なる勢ひを以て、我が論壇に刺撃を與ふるの狀を見て、近來の一大快事として之を歡迎して居る者だ。

▽無二の現代政治史論家

川尻東馬

（一）

▲先輩多く凋落して新進の後繼者頗る寥々、我國論壇の現狀は將に秋風落莫の觀なくんばあらずである、此間に在て依然先輩の位置を完全に確保し、奮鬪努力日に新ならんことを專念するもの、吾人之を三宅雪嶺、德富蘇峯の兩先輩に見ると云ひたい、而して此兩先輩の思想論調、常に多く相反すると雖も、何れ劣らぬ一方の總帥として、覇を天下に稱する現狀は、到底新進後繼者の企て及ぶ能はざる處である。

▲吾人は遺憾ながら、常に蘇峯先輩の思想論調に多く反對するものである、世俗稱ふる處の官僚思想は、特に最も反對する處であるが、併し其論策批評に對しては、平素敬意を拂つて必ず一讀することを怠らない、雪嶺先輩の論述は時々見免すとあつても、蘇峯先輩の著述は力めて見落

さぬ方針を取つて居る、是れ他なし他山の石以て自己を琢磨せんとするもので、單に讀むといふ點からのみ云へば、恐らく蘇峯先生崇拜家同樣其著作物を愛讀して居るに相違ない。

▲『蘇峯文選』は聊か古物展覽の形あるので、未だ見ずに居るが、『政治家としての桂公』以來、『時務一家言』でも『世界の變局』でも、『大正政局史論』でも乃至現に國民新聞に連載中なる『大正の青年と帝國の前途』でも、必ず一度は通讀することを怠らずに居る、只『世界の變局』丈けは全編を通讀するの必要を認めず、否な蘇峯先生の著作としては餘りに詰らぬものと思つたので、其三分の一位讀んで止めて了つた、甚だ失禮な申分ではあるが、あの著述丈けは却て蘇峯先生の名を汚すものであるまいか。

▲『政治家としての桂公』は、餘程面白く讀んだ、而して其內容の確實豐富なる、其敍述の巧妙精細なる、一種の政界內面史として、確かに傳ふべきものゝ一たることを感じた、但し著者の云ふ如く決して至公至平の作ではない、又著者自身の知れる材料を悉く使用し盡した、少なくも完全滿足なものでないことも明である、著者の境遇と立場を知るものは、之を望むことの餘りに無理の注文なるを寛容する、又人誰れか偏頗なからんやで、己が好む處に偏し憎む處に遠ざかるは、神ならぬ人間の迹も免れぬ話、即ち此點に就て深く著者を咎めるのは、寧ろ酷評と云ふが至當であらう。

(二)

▲吾人の最も歡迎し讚賞措かざるものは『大正政局史論』である、國民新聞連載中に先づ讀み、書籍となつてから更らに二回之を通讀した、而も著者の注文の如く、一回は一日間に之を讀了したのである、吾人の知らぬ事實を知り得たことが第一、著者としては珍らしく比較的超然たる立場から論述せることが第二——尤も現存せる山縣、松方諸元老に對しては、尙幾多の遠慮を意味し居るも——一種の史筆を以て敍述し論斷し更らに啓發誘導せんとの抱負を、遠慮なく其間に現はせることが第三、就中吾人の最も歡迎したるは其緒言である、其四齣に於て、明治天皇の大德を玉成し奉れる重臣を擧げて、所謂皇室中心主義なるものゝ意義を一層明確にし、第五齣に於て、國民の自覺は乃ち民德の養成であることを切言したるは、最も時弊に適中した一大意見である。

▲事實を敍述するに當りて、繁簡其宜しきを得たるは勿論、人物を評論し事件を配列し背景を敍述し問題を批判するに當りても、悉く夫れ相應の價値範圍位置場合を標準基點として、決して之れを一律一體に論述し去らざる處、如何にも思慮あり分別あり又秩序あり責任あることを首肯せしめ、讀者をして明確に用意周到なる著者の心事を想像せしむるものがある、一例を擧ぐれば、將さに桂公と妥協せんとした政友會が、山本伯の出現に依て乍ち世俗の强硬論に一致せる內情を敍述し、暗々裡に他日海軍收賄問題起りて、終に情死の止むなき境遇に陷れるは、自業自得他を怨むべきことにあらずと、巧みに因果を說いて讀者の腦裏に徹底せしむるが如き、彼の徒らに抽象的議論に依て他を排し、罵詈讒謗至らざ

るなき不徹底の論斷に、自ら快を遣るの世間滔々たる自稱論客と、其距離霄壤の差あることを感知せしめる。

▲又同志會に對し、就中加藤男に對しては最も强く當りつけたるに反し、政友會には比較的當り方が微弱で、一寸讀んだ丈けでは如何にも不公平の如く見えるが、熟讀玩味するに於ては、政友會に對する當り方の弱きは、一面から見て其將來に餘り重きを置かぬ著者の眞意を明かに夫れと察せられる、政友會の或る部分では、蘇峯我黨に幾分の同情ありなど太平樂を並べて居るさうだが、之れこそ頗るお目出度い話で、丁度小學校の生徒が、お淸書は餘り直されて居ないと喜んで歸つた話と同樣、肝腎の採點は乙になつて居ることを氣付かぬ亞流であるまいか、何は兎に角其眞意を露骨に明示せず、只事實の配列と筆致の如何に依て、讀者の頭腦に不知不識明確なる判斷の材料を供給する處寧ろ憎い程の巧妙を感ぜしむるものがある。

▲無論中には曲筆もあり又故意の庇護攻擊もあるが、一々之を指摘して全編の價値を論ずるのは、餘りに無理な酷評である、大隈内閣時代に入りてからの材料には、幾分不整頓の箇所も二三見えぬではない、殊に大事の問題に對して内容聊か貧弱の點も確かにある、併し之れは大體から見て微瑕と云つて差支あるまい、其爲め本書の價値を彼是云ふのは、神にして始めて出來る完全滿足の不能事を人間に强ゆるもので、吾人は飽迄大正政局史論』に對しては名著の尊稱を附したい、蘇峯先輩の著述中、未來に其生命を存續するものは、此『大正政局史論』であることを確信する、蘇峯先輩百歳の後、『國民新聞社』が人手に渡ることなきを保し難い、或は時世の變遷に伴れ『國民之友』の二の舞を踏むことなしとも限らぬ、併し此『大正政局史論』のみは決して朽ち果てることはない。

（三）

▲吾人は更らに蘇峯先輩に對して希望がある、即ち著作界に復活せる此機會に於て、特に當然の要求すべきこととなることを信ずる。

（一）明治大正の政治史に就て更らに種々なる著述を公にする事

（二）出來得る丈け公平の態度に於て當世人物評論を公にする事

（三）史傳、紀行、靑年訓、漫筆流の著述を除き、彼の世界の大勢に關する問題若しくば支那問題、外交問題の如き、適當の著述者は別に其人あるを以て、今後絕對に之を思ひ止まる事

▲第一の注文は、現代政局史を編するに當り、何人が自惚れても、迚も蘇峯先輩程に事實を聞知し又材料を得るに途がない、同時に年來の個人的關係地方的情實を研究査覈しても、其眞相を穿ち實況を確めることが一朝一夕にして出來得べきことでない、要するに現代の實情は表裏餘りに複雜にして、急に思ひ立つた探聞調査では、誤聞訛傳其七分を占むるのが普通である、之れ吾人が今日の著作界に於て、蘇峯先輩を除いては他に適當の人物を發見するに苦しむとなす所以である。

▲第二の注文も、要するに前述の理由に基くが、更らに一層其必要を感ずるのは、昨今世に行はるゝ人物評論の如何にも無稽無責任極まれるが爲めである、故島谷部春汀君の在りし間は、例令間違ひあるにしても、

著者の能率を盡した硏究調査の材料に基礎を置き、其記述に對しては飽迄眞面目の責任を有したものである、然るに昨今滔々たる人物評論家の態度を一瞥するに、惡罵ならねば邪推、中傷ならねば冷笑、其人を見ず其事を知らず、材料は杜選粗漏、態度は輕浮不眞面目、只徒らに人を傷けて快哉を叫び溜飲を下ぐるもの、比々皆然らざるなき惡弊風を醸しつゝある、若し蘇峯先生の力に依て、幾分なりとも此惡風を防遏し、眞の人物評論と長屋の井戸端會議とは、自ら其趣を異にするものなることを周知せしめば、其世道人心に及ぼす利益決して尠少でないことを信ずる。

▲第三の注文は、特に其理由を辯ずる迄もなく、自知の明ある蘇峯先生必ずや吾人希望の眞意を感得せらるゝに相違ない、故に改めて呶々するの必要を認めぬ。

▲最後に蘇峯先生は、最早政治界の檜舞臺に、自ら俳優となつて舞踏するの野心を抛擲せしならんと想像するが、眞意果して如何にや、若し假りに吾人の想像をして事實否な少なくとも夫れに近きものならしめば、今後は十分の精力を傾倒して、著作界に奮闘活躍せんことを希望して止まない、而して斯くすることは、實際社會に其精力を注ぐ事よりも、個人としては勞少なきに拘らず効案外に多かるべく、又國家社會としても其受くる利益は比較にならぬ程の徑庭がある、明敏なる蘇峯先生、恐らく道般の實情を諒知せらるゝに相違なしと雖も、敢て一言蛇足を添へ、主義主張の反對者中にも、斯様な希望を有して居るものが多いことを知らして置く。

▽蘇峯先生の文章

田川大吉郎

◎若し其人の動靜が世上に聞へ無くなり、生てるのか、死んでるのか、何をして居るのか、一切分らなくなつたと噂さるゝ人達を社會的に死んだ人若くば葬られた人と謂ひ、蘇峯先生は近來其の境遇から復活したと謂はるゝ譯なら、僕は課題の意義に不滿足である、僕は曾て一日も蘇峯先生が社會より葬られたと思つたことは無い、蘇峯先生は何日も活きて居て、他の同輩若くば先輩よりも、絶えず、まめに、氣根強く、それだけ多量に働いて居らるゝと僕は思つて居た、從つて近頃に至り事珍らしく復活したやうだといふ感じは僕には殆んど無い。

◎但その政治的述作は近來著るしく殖えたやうに思ふ、頻りに國民新聞に書かるゝものが、概して政治的で、その宗教に關係あり、文學に關係あり、社會に關係ある、多方面的、往くとして可ならざる無き述作は較々衰へたやうに思ふ、此の如く政治的述作にのみ耽ることを蘇峯先生の復活といふか、然らば復活といふことにも意義は有るやうである、然し乍らそれが蘇峯先生の全人の復活で有るかは疑はしい、我社會は蘇峯先生のその復活といふことに因り十分の利益を享有し得べきかは疑はしい

と思ふ。

◎大正の政變以來、我が國民の政治的感情は稍勃興したやうな感しがする、而して蘇峯先生は天性の新聞記者である、新聞記者の感じは一般に他よりも鋭い、況や蘇峯先生に於てをや、新聞記者の文章はどうしても誇張に過ぎたる感じを免れない、天性の新聞記者たる蘇峯先生の文字には、自然に隨處にそのやうな痕跡を認められる、是れ蘇峰先生の述作の近來頻りに政治的に傾く所以であらう、同時にその文章の絢爛にして、華麗にして、衆目を眩する所以であらう。

◎曾て學堂先生の許に、數名の記者が會して偶然蘇峯先生の文章論に及んだ折、いづれも其才鋒詞藻の太く落ちたことを難じた、その際僕はさうは思はない、反つて日に〳〵進みつゝあるやうに思ふ、尤もその絢爛は幾分減つたかも知れぬ、絢爛を去つて平淡に入る、それは進んだのである、退いたのではあるまいと論じた、主人學堂先生は、それらの可否に就ては一言もせずして、矢つ張上手だと思ふことは、梁啓超の如き、日本人の文章では、蘇峯氏のが一番分り易く、善く徹底すると論じて居たと語られた、次は三十六年頃の事である、而してその近來の作は反つて絢爛に復しつゝありと思ふが如何、若し復活といへば、これ其の復活にあらざるか、但、その近來の作に就て僕は讀む所が少いから敢て主張はしない。

◎復活といふことには前の如く色々疑ひを容れるが、その文章振の復古したことは、明白の傾向で、少しの疑ひも無いことだと思ふ、明治二十年ごろ、初めて蘇峯先生の文章を讀んだ際は、之を以て天下第一等の最新の文體とすることに誰も異議は無かつた、蘇峯先生の文字は此意味に於て幾分舊派の嫉忌を買ひ、而して新派の無比の快感を惹いた、蘇峯先生は此意味に於て新文章派の唱首であり、急先鋒であり、勇敢なる闘將であつた、然も近來の文字には之のやうな怒りが段々減じて來た、或は語を切にして言へば、その怒りが年一年に減じつゝあるとも謂ひたい、一方に減ずるは一方に增す所以であらう、近年蘇峯先生の文章には、漢語、漢文句調が著るしく殖へて來た、近來の時文家の中で、一番多く漢語を用ゐて居るのは、蓋、蘇峯先生で有らう、句調は固より文體までも殆んど純漢文的だと思ふ場合が往々ある。

◎曾て新文體を以て、自然に青年の喝采を博した、近來のは舊文體である、自然に舊派の同情を博し、而して新派に慊らず感ぜらるゝに至るのは最も自然な因果關係ではあるまいか、而してその得失如何は疑問ではあるが、僕は蘇峯先生が、引き續き新派の友であり、青年の味方で有つた方が、更に國家の利益で有らうかと思ふ方である。

◎何といつても、その章文の縱横自在なることは當世無比である、近來多く述作さるゝため、殊に其の第一人者たることを確めたやうに感ずる、思ふにその精力も亦當世稀有である、今後益々同等若くば同等以上の雄篇に親しむことが來るで有らう、鶴首して之を待つ、失禮ながら、若し斷定を幾分控へ目にさるれば、更に世人を首肯せしめ、一段信望を增すべきでは無いかと思ふ。

▽論客としての德富蘇峰

若宮卯之助

（一）

瓌麗典雅、才情兼到りて、或は雍容の態を缺き、飛瀑千尺、一瀉して下りながら、泓渟淵深の趣を失ふものは、蘇峰の文である。文人としての蘇峰は、已に時代の試錬を經て、已に天下獨步の域に透入して、而して已に定まれる評價と、繼がれる隨從者とを有して居る。知らず論客としての蘇峰は如何。

（二）

『屈原放たれて、乃ち離騷を賦し、左丘明を失して厥に國語あり。』蘇峰が其の依つて以て志を成さうとした桂公の、思掛なき他界の爲に、半は壹鬱不平、半は心機一轉、蘇峰としては、聊か捨鉢的に鞭を飛ばしたらんかの『大正政局史論』を讀む者は、恐くは何人も彼が知己の桂公に對して、敬欠、老の繰言的に、一種抑え難き愛着の懐を馳せて居るに氣がつくであらう。

（三）

其の政局史論の文學的生命は、其の前半即ち桂太郎往生記とも稱すべき部分に存して居るが、此の部分に於て、事、苟も桂の失錯に及べば、著者の筆は必ず感傷的、沈痛的、同情的となつて居る。即ち桂が日韓併合

の功に依りて粗忽に公爵を拜したるの愚かさを許しては、『從來とん〳〵調子に上り來れる、彼の政治的生涯も、此を限界として、愈々曲り初めたるぞ是非もなき』と云ひ。桂が赤い信女として、其の第三次內閣を孕みながら、宮仕より下れるを評しては、『運命の廢刑は、彼を極端まで追究せずんば息まず、遂に彼をして三たび大失策を累ねしむるに到れり。吾人は桂の一生に於て、殆ど平家物語以上の悲劇を演じ來りたるを見て、人生運命の轉た賴む可からざるを慨せずんばあらず。』と云ひ。第二次西園寺內閣の瓦解を以て、豫定の退却なりと爲し、山縣、桂は却て西園寺に致されて騎虎の勢となれりと辯護しては、『但だ桂が此の虎に騎りたるは、已むを得たる乎、已むを得ざりし乎。其の邊の事情は揣摩の限りにあらざりしも、殘念至極と云はざるを得ず。』と云ひ。此の事件に關する、分明なる桂の陰謀を辯護しては、『山縣非なる乎、西園寺非なる乎、兩者共に非ならずして、桂獨り非なる乎、そは銘々の言前もあらん。吾人は桂を九原に起すにあらざるよりは、其の眞相を詳にするを得ざれども、桂は少くとも西園寺と山縣との間に介在して、兩者の調停を謀るが如くして、實は其の間に間隔を生ぜしめたりとの疑惑を双方より被りたるが如し。』と云ひ、愈々桂が赤い信女の目的を達するや、之を側面より辯護して、『炯眼なる西園寺は、內閣破壞者は桂にして、其の操縱者も亦桂也。別言すれば、桂は自ら內閣に立たんが爲に、陸軍問題に托して、我が內閣を破壞したりと看破したり。西園寺よりは看破と云ひ、桂よりは邪推と云ふ。吾人は孰れなりとも斷言せず』と云ひ。其の孰れと

も斷言せざる處、これ千萬金にも換へ難き辯護の筆力では無い乎。二個師團の毒を盛つて第二次西園寺内閣を殺害した桂が、新に政友會に御用を命ぜんとしたるの不覺を評しては、『桂は前日の政友會を知りて、當日の政友會を知らざりし也。直言すれば桂も漸く天狗病の侵尋する所となり、時務の眞相を看取する能はざるぞ口惜き、』と云ひ。且つ最後に桂が加藤男に信頼したる、人を見るの明無きを語らずに、却て之を無造作に運命に託して曰く、『桂が安危存亡の極所に於て、加藤の如き時勢に迂なる迂括を軍師としたるは、彼が一生一代の不幸たりし也と。』蘇峰は自ら公言するが如く、桂に對して努めて批評家の態度を守つて居るが、桂は彼の知己であつて、人情には自ら人情の作用がある。彼が桂に於て飽くまで短處を暗に見やらうとするところは、適々、彼の美德を示すと謂はねばならぬ。――然も蘇峰の桂に於けるや、竟に逆緣である。蘇峰は桂の死亡に因りて論壇に復活した。

（四）

餘りに多く楯の兩面を見て、却つて楯を見ず、或は故ら之を見ざらんとするは、三十年來、論客たる蘇峰に通有なる、著しき特徴の一つであるが、万骨累々たる論客の戰場に於て、蘇峰の如きは、兎に角功成り名遂げた隨一人であると謂はねばならぬ。彼は自ら嘉謀嘉猷之を施すに由なしと云ふも、文士にして論客、或は文士にあらざれば論客、彼の運命は自ら道裡に無くてはならぬ。苟も一藝一能に通ずる者は今の日本に於ては、決して實際政治に大を成すの資格を有する者で無い。蘇峰は不幸にして論客である。彼は竟に論客であらねばならぬ。誤つて桂に隨從して、桂と共に實際政治に大々的間違を仕出來さんとしたる彼は、桂の死亡に、命拾ひして、論壇に復活した。彼は如何なる種類の論客である乎。

（五）

完きを一人に求めず、難きを人に責めず、而も論客たる蘇峰の資格には明かに二つの制限がある。蘇峰は人を觀、社會を觀、世界を觀るに必須なる心理的、哲學的眼孔を缺いて居る。常識より出て、常識に返るべき彼の見解が、往々にして中上落下を免れざるは之が爲であり、形勢を揣摩して要領を得たるが如く而も或は徹底を缺くは之が爲めである。常識的易行道の政治的法門として之を見れば、大正政局史論は、明治大正に類例無き一個の政治的古典であるが、彼は此の古典に於ける中心事實の說明に對して、哲學的心理的眼孔を缺けるが爲に、遂に其の根本に透入するを得なかつた。即ち彼は大正政變に附隨せる政治的大人物缺乏の原因をさへ說明することが出來なかつた。彼は單に大正政變が一大平等作用を生じたるを指點しただけで滿足した。

（六）

政界に於ける大人物缺乏の原因は甚だ複雜であるが、其の主要のものの一は、之を國務の膨脹に歸するを得る。今や一切の國務を統攬して、略は其の細故に通ずることは、殆ど人力を超絶する事業に近い。否、單に教育の一科を以て例とするも、如何にして學校の不足と學生の志望との

調和を保つべきやの一問にすら、満足に解答する政治家も無い。今や帝諸の需要と其の架設力との調和をすら保ち得る政治家が無く、經綸事業の獨立に對してさへ根本的提案を有する政治家が無く、今や一切の問題は一人の力を超越するが爲乎、一人の責任に歸するを怖るゝが爲乎、事ある毎に、流行り出すものは、兎つた名前を陳列するだけが落ちの調査會である。政局史論の著者は、大正政變の一結果たる權力中心の破壞を以て、而して新たなる中心の定らざる事件を以て、國家の深要大患と看做して居りながら、之を說明して問題の根本に觸るゝを得なかつたのは、或は一面に於て彼が論客としての力量の制限を語るものであらう乎。

（七）

後藤、仲小路、及び蘇峯等、桂學派の政治家及び政論家の好むで訴唱する御題目、皇室中心主義とは、遂に何の事乎。內閣と宮內省とは同一の物で無く、天皇陛下と皇室とは明に異つて居る。皇室を以て政黨綱領の中心と爲すとは金枝玉葉の御繁榮を偏へに祈み來るの意味である乎。これ政治の經綸に何の關係がある。皇室中心とは天皇陛下を中心とする政治の意味である乎。然らば天皇陛下を中心とせざる政治とは如何なる政治の事である乎。其のやうな政治は果して成立の見込がある乎。所謂皇室中心主義は宮內省と內閣とを混同するが如き政治上の無意義にあらざれば、徒らに日本人民の尊王心を侮蔑して獨り之を占領せんとするが如き烏滸の沙汰である。

（八）

所謂皇室中心主義に[illegible]なる一種の政治的色彩と見れば必ずしも[illegible]家及び政論家の爲に尚むべき程の事でも無いが、桂系が桂公と共に[illegible]せんとした、其の所謂國民的一大政黨即ち擧國一致的の思想に至りては、堅實なる政治哲學の基礎を有せざる何よりの自白である。日本は抽象的には一大政黨の國であつて、實際的には二大政黨の國、二大政黨より多くも少くもならず、決してなり得ざる國柄である。此の外に於て、日本の政黨は、如何なる工合にも纏つたこと無く、纏れることも無いのである。抽象的には日本の政黨は、唯一個の國利民福黨で、實際的には常に權力爭奪の二大分派である。此の權力爭奪の二大分派は、藩閥全盛の時代ならば藩閥對非藩閥の政黨となり、軍閥の時代ならば軍閥對非軍閥の政黨となり、金權の時代ならば、財閥對非財閥の政黨となる。地理的には日本は略ぼ利害の平均した國柄であつて、一地方の利害を中心とした政黨の發生すべき因緣を全く喪うて居る。一地方の利害を中心とした政黨の發生すべき因緣を有せざるに拘はらず、其の國利民福の抽象的目的と直ちに契合すべき實際上の一大政黨に綴るを得ざるところ、そこが人間であり、そこが人間の社會に變化あり、波瀾ある甚深微妙のところである。人の權力慾は一切の方向に動く、而も議會政治に於ける權力慾は、は、贊否の投票制度に依つて二大部門に分別される。小野心家の多數の團體は悉く此の二大部門の孰れかに逐ひ込まれる。多數黨の有難味は此であり、少數黨の情け無さは、此である。與黨か反對黨かの外に擇りやうのなき所以は亦此である。政黨組織と、議決制度と、權心慾

との三つ巴の關係は我輩の一家言たる政黨論の骨子であるが、之を微細に說明するは詭辯に流れるの虞れもあれば、餘白の容す所でも無い。之を總ぶるに蘇峰の一大政黨論は、人心の根柢と沒交涉の空想である。

（九）

若し蘇峰が國利民福の空想を基本として、桂公と共に國民一大政黨の成立を策したならば、其の末路の悲劇は、恐くは桂公の悲劇よりも更に悽慘たるものであらう。彼は恐くは此の成立の爲に、其の能力の限りを盡くして詭辯の如き一種の美辯を弄するの破目に陷つたであらう。彼は其の已むに已まれぬ曲筆舞文の爲に其の品性を疑はれるの機會を益々多くしたであらう。彼を此の悲劇より救うたものは實に桂の死亡である。運命の神は特に彼に厚かつた。彼は桂の死亡に因つて其の本然の立場たる論客の地位に戻つて來た。

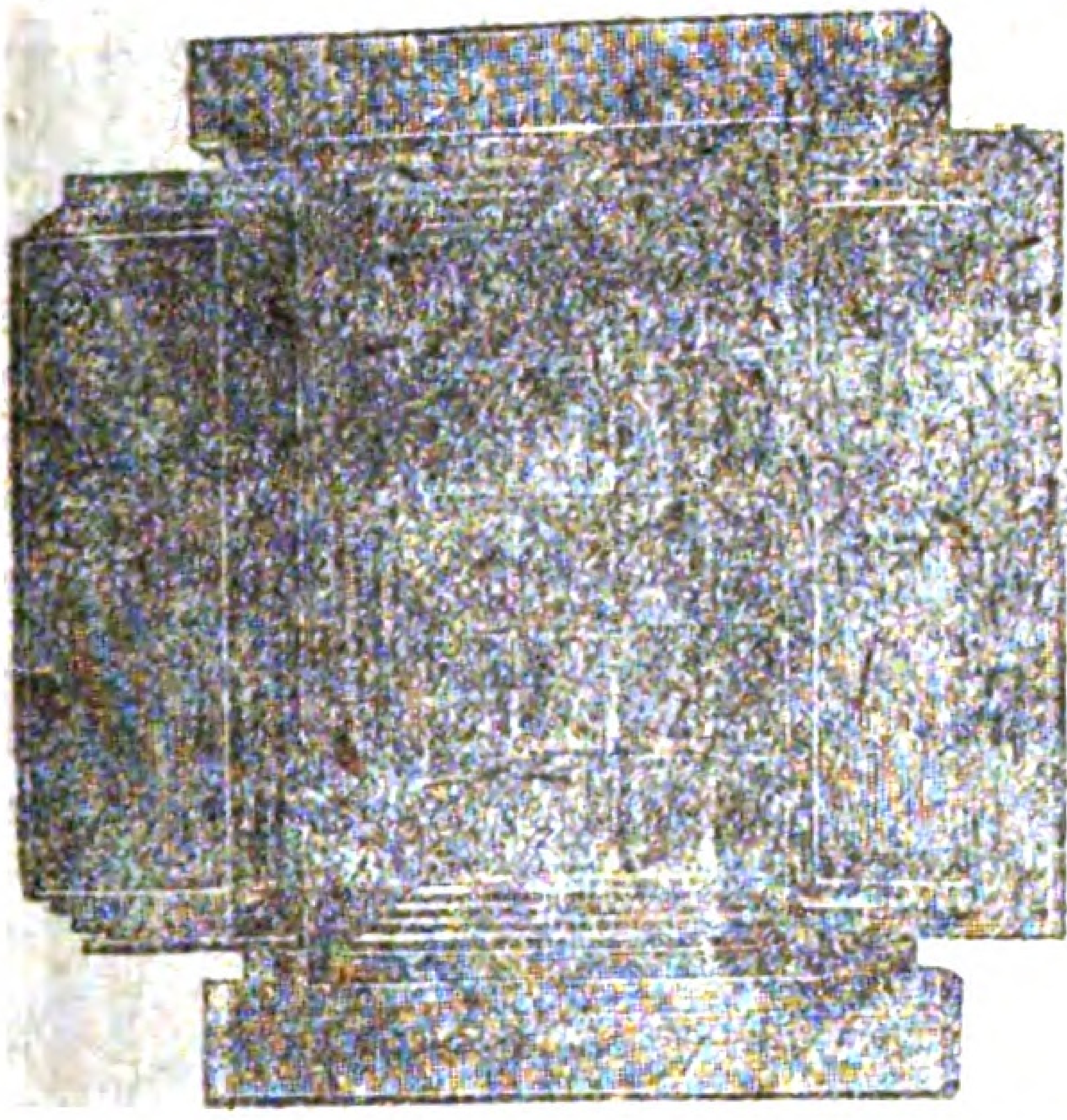
（十）

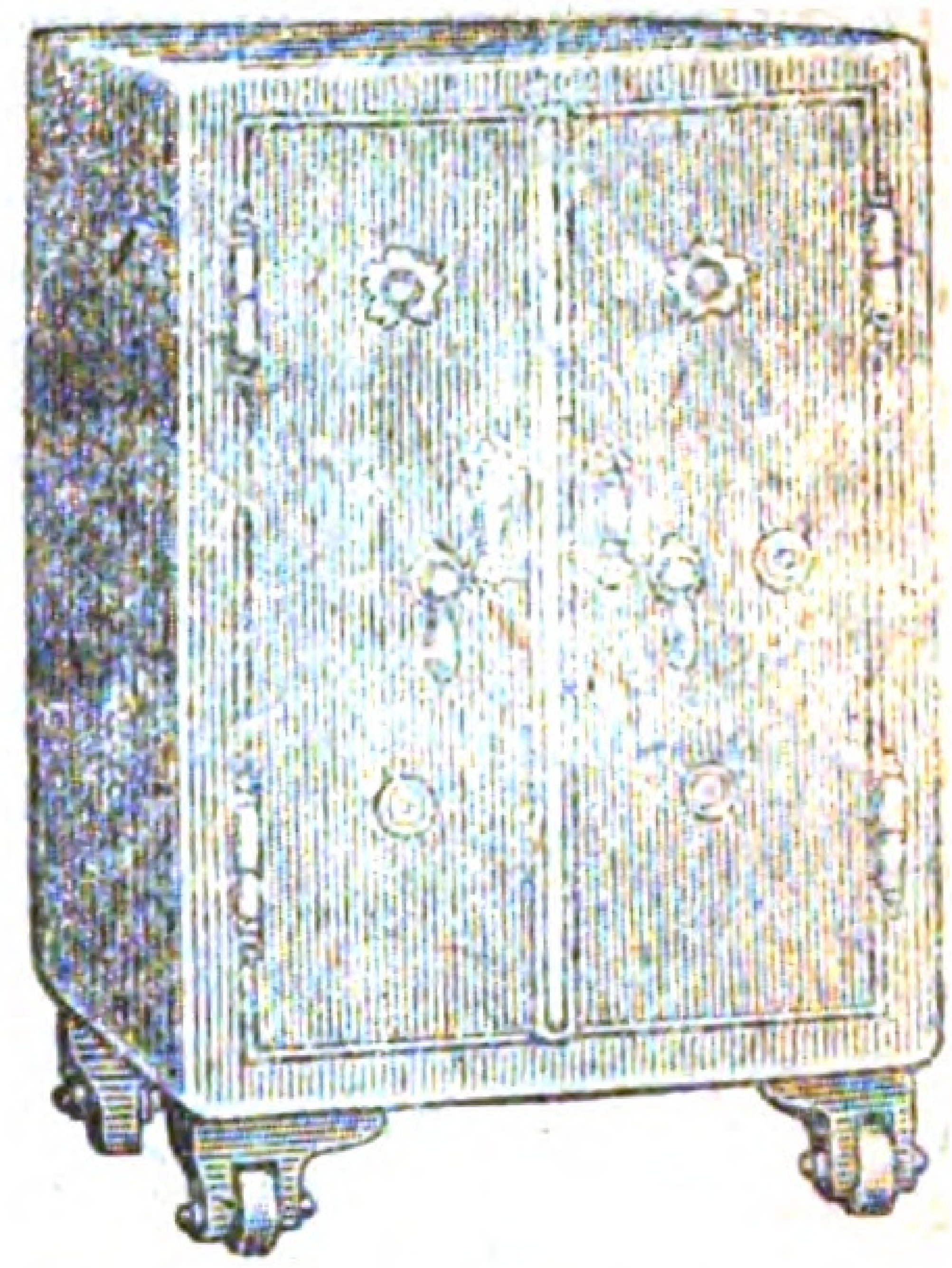
論客としての蘇峰の他の制限は、財政經濟の特別知識の根柢を具へて居らぬことである。其の論策は之が爲に常に空疎の憾がある。其の最も甚だしきものは、大陸政策である。彼の大陸政策は、陸軍一派の政策を其儘に、經濟的發展の根柢を錯覺した一種の迷妄である。我輩は沒落前の山本權兵衛が、山縣桂に對して常に一種の苦手であつたことを知つて居る。而も海主陸從の議論は我輩が當面の主題でない。我輩は單に蘇峰の論客たる資格に制限の存するを證するだけである。說明家としては心理的哲學的の根柢無く、經綸家としては財政經濟の用意を失うて居る。これ實に彼の二大制限である。彼は此の二大制限の範圍に於ける文學的政論の天才である。

追記——時代の迷信に反對してポーツマス條約を辯護した蘇峰が當年の勇氣は日本新聞史上に特書すべき大事件である。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

ベント式金庫と防火扉





此ベント式金庫は和洋金庫の長短を取捨し創製せるものにて庫體は長大なる厚き鋼鐵板に強壓力を有する機械を以て壓搾屈撓し包圍形となしたるものなれば防火、防盗、優美、耐久の四要點を最も完全具備せしめたる眞に理想的金庫なり

東京市京橋區松屋町

佐倉金庫店

電話京橋二三三二番

型録贈呈

弊店製倉庫用防火扉は各建築家に歡迎せられ追年需要を激増し數萬個の多數に達す市内は勿論各地方に取付あり最近御用命を蒙りたる最も著名なる二三を擧ぐれば

●東京市水道部 ●早川邸 ●愛國生命保險
●豐國銀行 ●川崎銀行 ●八十四銀行
●島津侯爵邸 ●古河男爵邸 ●横濱生命保險
●日本勸業銀行 ●德川侯爵邸 ●細川侯爵邸

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

(中付三の二)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

五月號の内容

早稻田文學

■錦繪に現れたる田之助（長篇論文）……秦豐吉

一、扮裝と見立繪 二、人形振と踊れる田之助 三、壽語錄。團扇繪。玩具繪並びに麻疹繪 四、評判繪 五、錦繪中の俳句 六、樂屋の田之助……

■スペンサア貞操論……平塚明子

■批評家論……稻毛詛風

■誰か病まざる者ありや……田中純

■凡人淨土（感想）……相馬御風

■附錄■フロレンスの悲劇（藝術座上演用脚本）……オスカア・ワイルド 本間久雄譯

■小說 青い鳥……中村星湖

■小說 狂飈……村山勇三

■小說 無明……三上於菟吉

詩歌 西條八十、西川勉、田邊若男、寺崎德、楠田敏郎、吉村幸夫

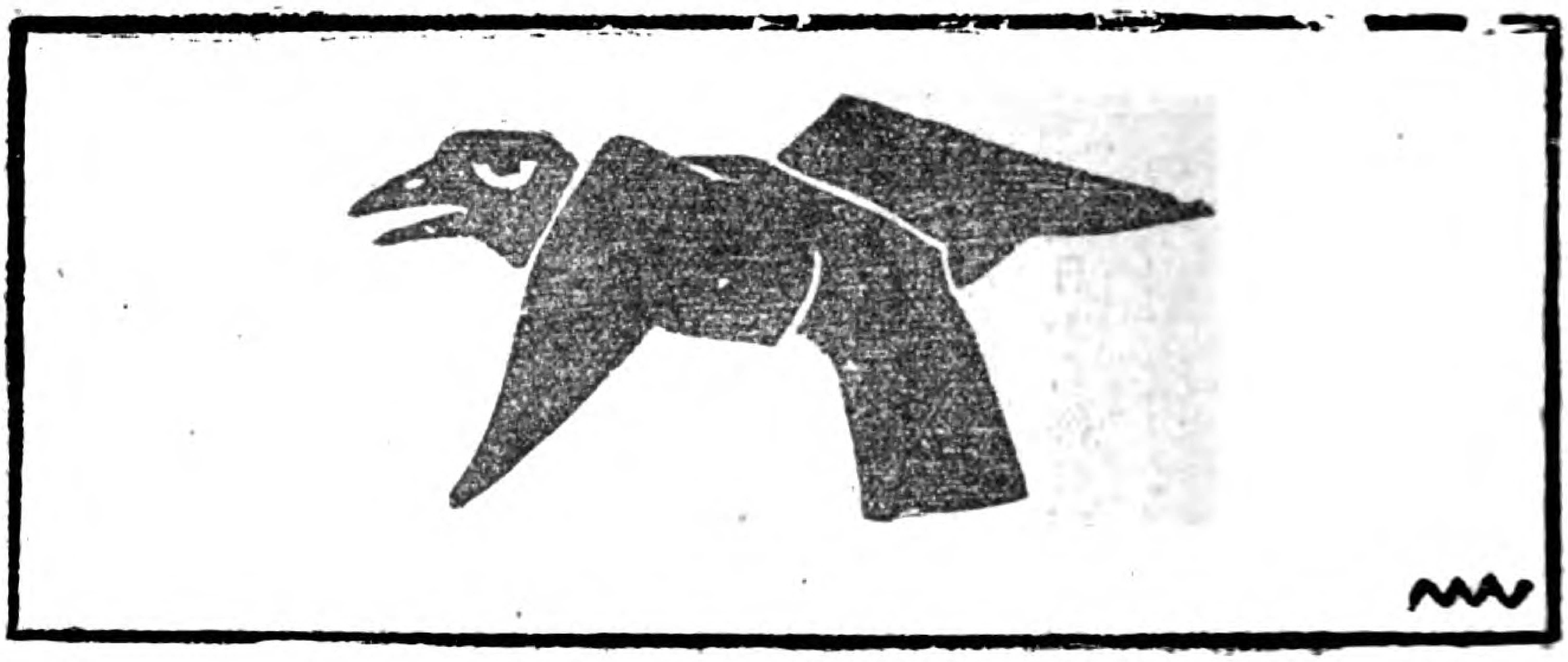
最近思潮欄

■コロンナ「マドンナ」
■黑人人種問題
■ワグナーと現戰爭
■詩人リンコルン
■歐洲戰の道德的意義
■晩年のゼームス
■今村紫紅氏の藝術
■物價の騰貴に就いて
■藝術座評
■有樂座の「小公子」
■四月の小說
■四月の評論

（中付三の四）

五月號 定價二十八錢 郵稅一錢五厘 ■東京神田表神保町 ■振替東京二七〇番 合資會社 東京堂

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絶す



牛部屋の臭ひ

正宗白鳥

（一）

稼業から潮の干滿に關係の深い漁夫どもは、季節の變化や年中行事の何事にでも陰曆を標準とした。伊勢の大神宮のお札と一緒に頒られる國定の曆には除かれやうとも、村役場などでいくら陽曆の採用を奬勵しやうとも、隣近所の村々が次第に新の正月を迎へるやうにならうとも、この小さい漁夫村の一區劃だけは、迷はないで昔通りに歳を送り歳を迎へてゐる。海で生計を立てる者に取つては、陰曆に依つて區切りをつけた方が自然の道に適つてゐた。

今年もその舊の正月が來た。大晦日までには、不斷は淋しい濱邊にも小さい舟や大きな船やが景氣よく並んだ。××丸と染出したり墨で書いたりした旗を立てたのは、多くは荒海を乘越えて遠方から歸つて來たのである。陸の家はどん

なに穢ろしくても、舟といふ舟は皆奇麗に掃除されて、飾藁を垂れ蜜柑や串柿などを供へられてゐる。汐が滿ちると漣が舟端に弄れ、汐が退くと牡蠣殼が模様のやうにところどころ色取つてゐる潟の柔い泥が舟底に吸付いた。海が淺いのに、小川からは絶えず汚い水を吐出してゐるため、干潮時の海際には一種の臭氣が漂つた。村の者が無頓着に流す洗濯水の臭ひ、腐敗した食物の臭ひ、魚の臭ひや藻の臭ひや、糞尿の臭ひさへその中に交つてゐるのである。潮の差退きの激しい海邊のやうに柔かい白砂はこの灣内の何處にも見られないが、その代りに袋の中のやうな此處の入江の魚は内海の中でも殊に旨味に富んでゐる。濁つた泥海は魚の餌を豊かにするし、靜かな水は魚の疲勞を少くした。そして、沖で勞れた魚などは鰭を休めるために、樹木の繁つた島陰に集つて來た。

海鼠や飯蛸の漁の盛りは年内に一先づ終つて、此處暫くは松明の光が闇の海を照らさなくなつた。網曳の懸聲も舟唄も聞えなくなつた。が、海がひつそりとして來る代りに陸は俄かに囂しくなつた。餅搗のために村中の井戸水が涸れて、全村の飲料水となつてゐる山の籔陰の「清水」さへ涸れかけた。

元日から毎日新平民の牛肉賣りが入つて來た。漁夫どもは注連飾をした神棚の前で車座になつて、この牛肉を喰つて酒を飲んで唄ひ囃して新玉の春を祝つた。澁紙のやうな顔色をしてゐても、猥雜な唄を怒鳴つてゐても、年中汐風で錬へた彼等の喉から出る唄聲は凛々として周圍に響いた。太鼓にでも合はすとその聲が一層よく調和してゐた。七草まで毎夜濱の集會所で催される旅藝人の浪花節よりも、漁夫自身の無心のされ唄の方がどれほど快い音を含んでゐるか知れなかつた。

浪花節は毎夜客止めの賑はひで、中日から晝席をも企てられた。藝人と名のつくものがこの狹い貧乏

村へ只の三日でも足を留めることは年に一二度あるかないかなのだから、村の浮氣な娘だの嬶だの、あるひは亭主持までも、白粉を鏝塗りにして飾裝込んで、浪花節語りの宿へ押かけた。夜は集會所の樂屋口に立つて彼等が出て來るのを待受けた。

その中でも取分けて噂に上つたのはお村といふ三十近い女だつた。何時も笑つてゐるやうな顏してゐる大柄な女で、これまでに三度も四度もこの土地の漁夫や隣村の百姓の家などへ緣付いたのだが、何時も自分で逃出すか先方から追出されるかして、半歲も尻の落付いてゐたことはなかつた。今は誰れと極つた一人の亭主は持たないで、母親と二人家內で、蜜柑だの干物だの季節々々の物を負籠で脊負つて近村を賣廻つてゐる。そして、盆とか祭とかの田舍の休日には、年下の男女の中に交つて浮かれ騷いで、惡遊びには人に遲れを取らなかつた。靑葉の頃にこの村へ廻つて來る伊勢神樂の一座や、偶然に流れ込む祭文語りなど〻いろんな噂を立てられたこともあつた。

「またお村さんが……」と、朋輩の菊代は眉を顰めて蔑んだが、この女は正月が來ても、沖から若い漁夫どもが歸つて來ても、お村のやうに臙脂白粉をつけるどころではなかつた。同い歲で幼い時分からの遊び友達で、今も同じやうに負籠を脊負つて物賣をしてゐるのだが、菊代には八十を越してゐる祖母がまだ生きてゐる。母親は兩眼とも潰れてゐる。そして父親とか兄弟とか手賴りになる男切れは身內の中に一人もなくなつて、たつた一人の姉は、菊代が十二三の頃播州室津の飮食店へ身賣りして、惣嫁とかになつて、それきり音信不通になつてゐる。菊代にも二度ばかり確かに夫と名のつけられるものが出來たの

であつたが、一人は兵役に服してゐる中幾度も脱營してつひに死刑に處せられ、後の夫は繫累の多いのを厭つて、朝鮮へ出稼ぎに行つたきり五年六年端書一本の音信さへしないので、自然に縁は切れてゐる。で、正月になつても、菊代には心待ちにする卅はなかつた。隣近所共同の一つ春で餅を搗くにも、菊代は人前の耻かしい思ひをしたが、それでも徴ばかりの餅は工面して拵へたが、餅の外には正月の仕度とて、金のかゝることは何一つ出來なかつた。何かの手傳ひに始終出入りしてゐる家主の家の仕舞湯へ入つて、其處の下女と髮の結ひ合ひをして、注連飾は其處の作男に殘りの藁で一摑み、神棚へ垂れるものだけ造つて貰つた。祖母は何十年面影に變化のない枯木のやうな身體で、他家の飲み水汲みや使歩きをしてゐるのだが、年末に水桶を擔つたまゝ蹶躓いて、向う脛を擦剝いてからは、戸外の便所へ出て行くのをさへ術ながつて、晝も夜も炬燵に臥せつて、をり／＼心細いことを云つちや唸つてゐる。壁や塀を手索りに傳つて近まはりへだけ獨りででも出掛けられる母親は、質屋使ひを稼業のやうにして、一錢二錢の使ひ賃を貰つてゐるので、節季には菊代と一緒の餅米搗きとこの質屋使ひとで、盲目相應の役があつて忙しかつたが、一夜明けると用もないので、炬燵の中で眠飽きると、隣近所の女達を相手に、持前の高聲でげら／＼と笑ひ話をして興じてゐる。

一つ春で餅搗きをする仲間内は、便所も共同で、小川の裾の方に貧しい一區劃をつくつてゐるのであるが、菊代の家は先日まで、この村では可成りな大地主の濱屋の牛小屋であつたのを、新しい小屋が上の地面に建てられたので、その跡の不用になつたのを無家賃同様で借りてゐるのである。小川の縁に堆くなつてゐる芥の臭ひやこの界隈の家々から洩れ出るさま／＼の臭氣は、不潔な臭ひに馴れてゐるこの

村の者の鼻にさへ、一種異様な刺激を與へたが、菊代の家にはその上に牛部屋らしい臭ひがまだ添つてゐた。二枚の莚を敷いた板の間に寢起してゐるが、土間は元のまゝで、牛の五體から出た汚い物は日當りや風通しの悪いためか、まだ乾き切らないでゐる。冬の間はまだしも、梅雨時や暑中には、蠅と蚊と臭い溫氣とでとても家の中にじつとしてはゐられないのである。

でも、祖母や母親は寒い冬よりも夏を戀しがつた。腰巻一つで埠頭場で涼んでゐられる夏の方が、腹の減つて手足に皸が出來て身體の凍える冬よりもどれほど蓉しいゝか知れなかつた。旨い南瓜や瓜が鱈腹食べられるし、旨い水が夏は錢入らずで飲まれた。

「おらに一合だけ神酒を飲ませて呉れ。それでおらも有難い正月が祝はれるんぢやから。祭には强請みやせんから、三ヶ日の中にたんだ一合だけ買うて來て呉れい。」

祖母のおみちは三日の朝向ひの家の老爺の酒臭い息を嗅いでから、矢も楯も溜らないやうな氣になつて、わざと哀れげな聲をして菊代に頼んだ。

「お婆がとう〳〵お極りを云ひ出したなあ。」

菊代は鼻で笑つて、「その間に新田の酒屋へ蜜柑を持つて行くんぢやから、その時に酒の糟を貰うて來て上らあ。」

「阿呆吐かせ。酒の糟でお正月が祝へるか。……去年の秋にお上から盃とお金を五十錢頂戴した時に、これも長生をしたお蔭だから、早速神様に神酒を供へて、そのお餘りをあの盃で頂かうと思ふたら、わ

れは何と云ふた。もう寒うなるからこのお金でお母の半纏を出しとくことにして、お酒は正月まで辛抱しなさいと云うたぢやないか。おらあよう覺えとるがな。」
「お婆も勝手なことはよう覺えとるなあ。おらあ何もかも忘れてしまうから苦がないと先日も云ふとつた癖に」
菊代が笑つて相手にもしないので、おみちは泣寢入りに寢入つた。其處へ長刀草履を引摺つて、何處かで貰つた飴菓子を舐りながら歸つて來た母親のお夏は、菊代に譯を聞いて、
「そないに飲みたがつとるのなら買うて上げたらえゝがの。われは知るまいが、お婆は昔は寢酒の一合くらゐ缺かしたことはなかつたものぢや。お初が重たい德利を抱へてよう買ひに行きよつた。あの時のことを思ふと、お婆に酒の氣のない正月をさすのは不憫ぢやから、一舐めでも買うて來て上げい。」
お夏は薄々物の黑白の見えてゐた遠い昔を夢のやうに思出した。その時分には、亭主もまだ生きてゐて三度の食事には不自由しなかつたので、婆さんは婆さんで自分の稼いで取つた金は、皆んな自分の飲食に費つてゐたのだつた。……母親に生寫しといはれた姉娘のお初の目の大きな脊の高い姿や、貰ひ乳して育てた菊代の幼姿は、目の開いてゐた時代の懷かしい記念として、をり／＼お夏の胸に浮んでゐた。今も炬燵に當つて、口をもぐ／＼させながら、白眼を天井へ向けて、過去つた影を捉へてゐると、先つきから炬燵の上で誰れ憚らず鏡にわが影を映して獨りで樂んでゐた菊代は、ふと顏を上げて、
「お母はにや／＼笑つて、何か可笑しいことがあるんかな。口の端に飴の汁を垂らして……」
「お母は泣きも笑ひもしとりやせん。われの目にやさう見えるんか」お夏は例になく突慳貪に云つて、

手の甲で口端を拭つて、「…お姉が今ひよつと戻つて來たらわれはどないな氣がするだらう。」と出抜けに云つて、聰い耳を戸外の足音に留めた。

「お母にも呆れるがの。突拍子もないことを云ひ出すんだもの。盆なら幽靈になつて精靈棚へでも出て來るかも知れんけれど、お正月にどうしてお姉が戻つて來るものか。」

「われは何時でもさう云うて、お母の腹の中の樂みを腐してしまう。お姉が死んだといふ確かな報知があつたのぢやなし、今の今でもどないなえゝ身裝をして、お母もお婆も丈夫で居つたかなというて此處へ入つて來んとも限りやせん。おしも婆さん所の喜左を見い。紀州沖で難船して七年も音沙汰がなかつたから、位牌まで拵へてお線香を上げたりしとつたのに、一昨年の秋祭にひよつくり戻つて來たぢやないか。八丈島へ流れ着いて生命が助かつた上に、その島は暮しえゝ土地ぢやというて、七年も其處で漁をして氣散じに暮しとつたさうぢやないか。それだもの、われ。お姉にしても何處ぞえゝ島で不自由のない月日を送つとるかも知れやせん。喜左も他國の者に親切にされても、つい家の事が思出されてじつとして居れん氣になつたから、皆んなに留められるのを逃げるやうにして、夜晝通して此方へ戻つたといふから、お姉も何時身内が戀しうなつて戻つて來まいものでもないがの。どんな遠方に居つても、この頃は汽車や蒸汽船があるから、雜作もないこつちやがな。」

「何ぼ便利でも冥途からは汽車も蒸汽も通つとらんからの。」

菊代は欠伸まぜりで云つて、炬燵の上へ額を當てゝ目を瞑つた。狹い道一つ隔てて向ひの家からは醉ひどれ聲の浪花節が聞えて來た。牛肉の燒けつく臭ひや酒の匂ひはます〳〵烈しく窓から入つて來た。

窓には疎い格子が嵌つてゐるだけで障子がないので、夜は舟板の壊れで風を防ぎ、晝間は開けつ放しのまゝで明りを取つてゐる。

「菊は居らんのかい」と、ふと窓の上の、地主の庭の方から聲がした。

「へえ、居ります」お夏は代つて返事をして、

「何ぞ御用で御座りますか」

「午餐のお菜にするんぢやから、魚を捜して來て呉れんか。何でもえゝから生かして持つとる所があつたら頒けて貰うて來て呉れいな。」

「えい、承知しました。……お松が去んどる間はお事多う御座いませう。」

お夏は窓の上の足音が消えてから、言付かつた用向を繰返して、菊代を促したが、菊代は夢現で返事しながら容易に立上らなかつた。平生過度な働きをしてゐたのが、生中二三日骨休めをしたゝめに、手足がだるくて、座つたが最後身動きもしたくなかつた。それに、初日から二日つゞけて浪花節を聞いて夜更しをしたので、今はどやされても起きたくなかつた。

「用事だけして來てから眠りやえゝのに」と、母親はやきもきしたが、菊代はわれ知らず快い夢に落ちた。

「どの舟にも今魚なんぞあるものか」と菊代はふと目を開けて、寢言見たいに呆けた口を利いたが、直ぐにまた寢息を洩らし出した。

二三度脊を搖つても手應へがないと、お夏はその上娘を急立てることは出來なくなつて、炬燵の中の

孱細い足を掴んで「お婆々々」と呼立てた。

「お婆一寸起きて下んせ。……大儀ぢやらうが、お前でも濱屋の魚を買ひに往て上げになるまいがの。」

「おらがかい。……おらに酒の一合飲まして呉れりや往てもえゝが、只ぢや一足も歩く氣にやなれん」と、婆さんは片手で支えて身體を少し持上げて子供染みた口調で云つた。

「そないな無理を云うてうちを困らせるもんぢやない。足が疼うても濱まで往て來て下んせ。神酒は乾度うちが飲ませて上げらあな。」

「本眞にか。この頃は世間が皆んなおらを欺してどもならん。今度はわれも嘘をこくと承知せんぞ。」

婆さんは自分で疼い／＼と思過してゐた足を動して、二三度唸いてから起上つた。そして、引摺り引摺り戸外へ出たが、盲目のお夏と同じやうに杖は手にしなかつた。頭巾代りに汚い手拭で頭を包んで、縞目も分らぬやうな單衣の上に綿の食出た猿子を着てゐるだけで、足袋さへ穿いてゐなかつた。魚桶を濱屋から持つて來て、心當りの漁夫の家を訊いて歩いたが、彼處此處に見覺えのない若い漁夫どもが五人十人寄り集つて、飲んだり食つたり、面白さうな話をしてゐたりした。

「誰れかと思うたらおみつ婆さんか。お婆はまだ生きとつたのか」と、遠海へ出稼ぎに行つてゐたある漁夫が道で擦違ひざま、興醒めたやうな顏して婆さんを見詰めた。

「へゝえ。……今年の寒は溫うておらのやうな老人には何よりぢやがの」

「まあ大事にして長生をしなさい」

漁夫は卒氣なく云つて、にこつともせずに行過ぎた。婆さんはその男は誰れだつたかと考へ〳〵歩いてゐると、菊代の二度目の夫と仲よしだつた何とか云ふ男らしくも思はれ出した。さうならば訊ねることもあつたのにと殘惜しさうに振返つたが、最早姿も影も見えなかつた。「まだ生きて居らいでか」と、婆さんは口の内で獨言を云つた。

（二）

正午前には靜かだつた空も、季節がら、午餐の烟が家々の烟筒から噴出される時分には、西風が濱の松林に烈しい音を立てゝ、鏡のやうな入江もうね〳〵と皺をつくつた。菊代の家では風避けに舟板を窓へ立掛けたので、家の内は眞晝でも薄暗くなつて、竈の煙が何時までも漂つてゐた。三人は餅を入れた溫い雜炊を食べてから、また炬燵の中へ藻繰込んで、話もなく互ひ〳〵の思ひ恣まゝにしてゐた。やう〳〵眠足つた菊代は、昨夕の浪花節の續きを想像してゐた。鳴物などの藝事には子供の折から現を脱かす質で、祭文や阿呆陀羅經でも語り手の後に隨いて聞惚れてゐたので、歳を取つてからも村に興行物のあるたびに工面のつく限りは滅多に缺かしたことはないのだつた。しかし、今度は二日とも濱屋で不用な入場切符を呉れたので、無錢で聞きに行かれたものゝ、三日目の今夜からはさうは行かなかつた。正月の三ケ日が濟んだら、明日からは厭でも問屋で品物を借りて出賣をしなければ、芋粥も啜れないくらゐなのに、八錢の聞賃で耳の保養などは迂濶に出來なかつた。……二つの燭臺の明りで左右の頰を照らされながら、目を細くして唄つてゐる寅若の姿が目にちらついたが、それよりも菊代の心を唆かしてゐたのは、膝と膝との擦れ〳〵に込合つてゐる場内の賑ひであつた。若い漁夫や若い百姓や若い女

どもが薄暗い席に矢鱈に入雜つて、息と息とを交互に通はせながら、語り手の聲に心浮かされてゐる有樣であつた。……不斷は相手の得られない菊代も、其處では色めいた仲間入が出來るやうな氣がした。昨夕は誰れと誰れとが前後に座つて足を抓つたり膝頭でどうしたりしてゐたとか、誰れと誰れとが終ひの一席を聽かないで早く歸つたとか、いろんな噂が翌日の若い同士の口に上つてゐた。そして菊代自身は願つても噂の種になるどころではなかつたが、女房も情人もない若い漁夫と並んでゐると、今にも何事か起りさうで心がときめきするのだつた。

　マッチの空箱に入れて神棚にそつと載せてある自分達の總財産を浚つて行けば、木戸錢が拂へた上に、中入に捩菓子の二三本は買喰ひの出來ないことはないのだが、菊代はさう思つても直ぐにさうすることは出來なかつた。そして人寄せの太鼓がどん／＼鳴り出すとそは／＼して、稍々もすると手が神棚の方へ伸びて行きさうだつた。

　朝から、行方不明の姉娘の上を樂みに思續けてゐた母親は、ふと菊代の方へ顏を向けながら、「われは遊びに行きたいのか。遊びい往てもえゝけれど、お村さんのやうにならんやうにせい。われは一度ならず業曝し奴に騙されてどえらい目に會うたんぢやから、若い男の居る所へは寄付かんやうにせい。何を云はれても本眞にしちやならんぜ」

「阿呆云はんすな。お母がまた入らん心配をし出した」

「われが先つきから尻をもぞ／＼させて遊びい行きたさうにしとるのが、お母にはちやんと分つとるがの。萬が一われが婿にならうといふ者があつても、お母によく相談してからにせい。お母は目は見えい

でも男の腹の中はよう分るんぢやから、隱さずに何でも打明けるのが、われが身のためぢや。遠方から戻つて來た漁夫の居る間は若い女子は危いこつちや」

　母親は周圍かまはずに聲高にさう云つたが、菊代が取合はないので、元の沈默に返つて、姉娘の事をまた思續けた。西風はます〱吹募つて舟板の隙間からぴう〱吹込んで白髮まぜりのお夏の髮を亂した。火の消えかゝつた炬燵の中へ菊代が粉炭を一攫み入れると、ぱち〱火花が散つて、長く突出してゐる婆さんの足の裏へも頻りに飛んだ。が、垢や何かで皮膚の硬ばつてゐる婆さんは、火の子の熱さくらゐには怯えなかつた。そして、一杯の酒が自分の目の前で注がれる時を夢まぼろしに見續けてゐた。

「菊さん……寒いなあ。どがいしとなんさる？」

　戸の外から聲を掛けて行過ぎたものがあつた。菊代は思はず伸上つて返事をしやうとしたが、聲の主の急ぎ足には追ひつきさうでなかつたので、返事は喉で留つた。

「およしぢやないか、あの聲は。今朝橋の側で會うたらえゝ匂ひをさせとつた。あれが香水と云ふものか知らんが、高い錢を出して身體に匂ひをつけたつて何の得にもならんこつちや。勿體ないのに」

　母親がさう云つても菊代は默つてゐたが、やがてそつと炬燵をすざり出て上り框の方へ行つた。「遊びに行くんなら行先をお母に云うといて行けい」と聲を掛けられると、「直きに戻つて來るがの」と答へて、表の戸を開けて横つ面を寒い風に曝した。一足閾を跨いで神棚の金入を顧みたが、そのまゝ戸の外へ出て行つた。小走りに小川の縁へ出て、袂を掻合せて首を縮めながら、何處といふ當てもなく爪先で輕く歩いてゐたが、やがて、その足はお村の家の裏口に留まつた。よく若い者の足溜りとなつてゐる家なの

に、今はひつそりとしてゐた。戸の節穴から覗くと、竈の火に照らされた母親の顔が先づ目についた。炬燵には何時ものやうに若い男の顔が動いてゐないで、お村が手枕して横になつてゐた。

様子を見定めてから菊代は戸を開けて、「寒うなつたなあ、叔母さん」と懐かしさうに聲を掛けた。

「あ、吃驚した。」

火箸を持つたまゝ、思はず立ちかけたお村の母親は、相手の顔を見てから安心して、竈へ薪をくべながら、お愛相など云つた。菊代は上り框に腰を掛けて、土間の莚に置いてある鹽魚や、板の間の脊負籠に入つてゐる蜜柑やメーブルの量の多いのを羨ましげに見廻しながら、商賣話を持出した。

「お正月なんぞ早う去んだ方がえゝ。菊さんは何日から商賣に出掛けなさる？」

「うちはもう二三日休んどりたいと思うとるけど、さうしちや居られまいなあ」

菊代は半ば自分に向つて云つた。お村のやうにちやんと用意が出來てゐるのではないし、今夜の中に問屋から品物を借りて置かねばならぬので、急に安閑としてはゐらない氣がし出した。

「せつせと稼ぎなされ。家のお村も三ヶ日が濟んだら商賣に出て與れんと困るがの。」母親はさう云つてから聲を潜めて、「今の先つきにも音松や茂平が耳の饐えるやうな聲を出して、やちもない話ばかりして、その揚句にや、本氣だか戯談だか摑合ひをし出したのぢや。うちもこれまでは皆んなのすることを大目に見て默つとつたけれど、今日はあんまりのことで業が煮えてならんから、わい等は人の家を何と思うとると糞さん／＼に怒鳴りつけて、擂棒を振廻して追出してやつたところぢやがの」

「叔母さんがそないに怒るのはよく／＼のこつちやな」

「お前さんの家にはあんなやんちや者が寄付かんからえゝ。あの連中の機嫌を窺ねても後が氣疎いし、したいまゝにさせとくと方圖がないし、うちも困つて居るがな」

「叔母さんは人がえゝから。……」

だから娘がだらしのない好いた眞似をするのだと、菊代は他人事でも齒痒く思ひながら、お村の寢様を顧みてゐたが、ぐつすり眠入つてゐるらしかつたお村は、意外にも晴々した顔をしてむく／＼起上つて、

「お母は餘計なことを云はんすな」と叱つて、「菊さんまあ上つて當りんさい。面白いことを聞かせて上げるから」

「……」菊代はどうせ朋輩の色話だらうと、聞きたいやうな聞きたくないやうな氣持になつて、にやにや笑ひながら炬燵の側へ寄ると、お村は相手の耳許へ大きな口を持つて行つて、

「……」と笑ひ／＼囁いた。

「よう聞えんから、笑はいでぼつ／＼云うとくれな」

「ちや一寸待つとくれ」

お村は笑ひを鎮めてから、菊代の福々した耳を抓んで引寄せて、再び囁いた。……それはおよしといふまだ十八九の不器量な女とある男との密會を覗きに行かうではないかといふことだつた。今夜家の者が浪花節を聽きに行つた留守に出會ふ約束をしてゐたのを、立聞きしてすつかり知つてゐるので、初心なおよしの様はさぞ面白からうと、さも面白さうに戯言まぜりで話した。

「お前さんは阿呆臭いことばかり云ふて」と、菊代は取合はぬ振りをしながらも胸をわく〱させてゐた。炬燵のほとりには今まで遊んでゐた漁夫共が喰荒らした蜜柑の皮や駄菓子の端切れの散かつてゐるのが、夕暮の薄明りで目についたが、そんな物を見るにつけても、この家では若い者の出入りが多いために餘分な利得のあることを菊代は考へないでゐられなかつた。そして、この朋輩に負けんやうに商賣をしたいと發作的に氣張つてゐた。

お村は相手が生眞面目になるのも構はずおよしを冷かしたり、浪花節の口眞似をしたりしてゐたが、その間に母親が膳立てして、ランプも點けると、炬燵から匍出て、親子差向ひで茶漬を掻込んだ。

西風は雨戸に音を立てゝゐたが、自分の家に比べると、温かで陽氣で、身分違ひの人の住居のやうなのが菊代は殊更今日は妬ましかつた。どんな仕事をしたつてお村などに引けを取るんぢやないのにと、娘の手助けをしてゐる此家の母親と、邪魔をしてゐる自分の母親や祖母とを引比べた。若い者が寄つて來ないのも、盲目やよぼ〱の婆さんがゐて穢しい思ひをさせるからだと、何もかもの不幸の元を二人に塗りつけるのが、考へ事した最後の行詰りだつた。

「うちも去んでお夕飯を食べようかい」と座を立つて。

「御馳走があると喚んで上げるのにな」と、母親は憐れみを含んで見上げた。

「今のことは別として、今夜は一緒に遊ばうでないか。お前さんが出て來にや、此方から誘ひに行くぞな」

お村の押付がましい聲を後に聞きながら、菊代は裏口から飛出した。三日月は磨ぎ澄ました空に霞へ

てゐた。何處でも戸を鎖してゐたが、ところ〴〵に賑かな聲はしてゐた。菊代は祖母や母親の傍へ歸りたくはないので、遊ぶ道さへあれば夜遲くまで遊んでゐる氣だつたが、それには先づ空腹を癒さなければならなかつた。浪花節を聽くにしても、何かの遊び事をしてゐる人溜りへ出掛けるにしても、一文無しでは仕方がなかつた。で、足許の暗い川端を傳つて自分の家へ戻ると、豆ランプが神棚で幽かに光つてゐた。盲目のお夏は、娘の留守の間は自分達老人には不用としてランプは消して置くのだが、お正月にはお燈明として神棚に載せてゐた。

菊代はランプの心を捻上げてから、取下さうとしながら、神棚をよく見ると、出掛けには確かに其處にあつた財布が見つからなかつたので、頻りに搜してゐると、

「財布ならお母が持つとる」と、お夏は訊かれぬ先に、袂から財布を出した。「今お婆に一合だけ買うて來て上げたのおや。見い、お婆はいゝ氣持に醉うて寢とらうがな」

「まあ呆れた……」菊代は浮かりすると踏付けさうな祖母の頭をランプを持つて見下したが、さう思つて見ると、皺くちやの顏にも稍々人間らしい紅味が差してゐた。微かに吐く息にも酒の香が混つてゐた。

「何ぼせがまれても酒なんぞ買うてやるといふことがあるものか。うちが明日草履買ふ錢に殘しといたのに。裸足で三里も五里もの道を歩いて商賣に出られるかよう考へて見るがえゝ。」

菊代は輕くなつた財布を母の手から取るが早いか、恨めしさうに炬燵の上へぶつ付けたが、お夏は氣にも留めないで笑顏をして、「われは戸外から戻ると、何ぞれかぞれ苦情を云うてお母を困らせ居る。草履の穿代へが入りやお母のでも持つて行けいよ。うちはお婆に正月の祝

ひ酒を飲ましたのが何ようも嬉しうてならんのおやの。これでもう死んでも些も惜しうないちうてお婆は上機嫌で、お飯も食べいで眠入つたがの。われ、よう見い。お婆の寝顔も今夜は佛様のやうおやらうがな」

「……」菊代は返事もしないで膳を引寄せたが、蓋を取ると、意外にも汁掛け飯の山盛りにされた丼が入つてゐた。宿屋のお情けとは聞かずとも分つてゐた。

「それはわれ一人で食べいよ。お母は雑炊の残りをお腹に一杯食べたから今夜は何にも慾しうないがの。」

丼からは温かい米の飯の香ひや鳥の香ひが菊代の鼻を撲つた。お夏は娘の箸の運びを快げに耳に留めながら、正月三ケ日が案じたほどでもなく、穏かに過ぎたことを獨りで喜んで、神棚の金毘羅様のお札を心で拜んでゐた。

「今年こそお初の音信が聞かれますやうに……菊代の心に魔が差さぬやうに」と、明日の糧を祈つた上に、今夜はそれを附加へた。

夢中で鳥汁飯を平げた菊代は、箸を擱くと、急に元氣づいて、約束したお村の訪づれを待構へて何處へでも浮れ出す氣になつてゐたが、誰れ一人聲を掛けて呉れるものもなかつた。で、また今夜も興もなく家内三人炬燵を圍んでごろ寝をした。晝寝をし過ぎたせいか、菊代は浪花節踊りの騒々しい足音に目を醒ましてからは、暫く眠つかれなかつた。眠れないと、窓の隙間から吹込む風が身に染みて堪へられないので、母親の掛けてゐる蒲團の中へ藻繰込んで、頭まで埋めて抱付くやうにした。夫に逃げられて

から久しく忘れてゐた人肌の溫味を、菊代は今垢臭い母親の身體で思出した。

永年寒さ暑さに鍛えて來た祖母のおみちは、肩が凍るやうに冷えてゐても、夢は少しも亂されなかつた。

（三）

三ヶ日が過ぎ寒が明けてから、厚い氷が張つたり霙が降つたりする日がつゞいた。菊代は毎日薄暗い間に起きて商品を滿載した籠を脊負つて、東西の村々へ出掛けて、日暮前にはほゞ賣盡して歸るのだつたが、家に休んでゐた日よりも却つて屈託がないだけでもよかつた。たまに顏馴染の出來た家へ寄つて、火鉢か焚火で悴んだ手を溫めながら世間話をしたり、お茶を貰つて辨當をつかつたりすることもあつたが、大抵は一日歩き通しで、日當りのいゝ所で小休みして、川水か井戸水で喉の乾きを留めるのに過ぎなかつた。をり／＼道連れになるお村などが、饂飩屋や駄菓子屋へ寄つても、自分だけは誘はれないで素通りした。その癖菊代は風付の惡いせいかお世辭のないせいか、お村などよりも安物を持つてゐながら品物の捌けがのろいのだつた。

七草が過ぎ飾卸しも過ぎると、所々の村々で初祭などがあつて、不景氣ながらも魚の價がよくて、骨惜みをしない漁夫や賣子は春早々可成り豐かな收入があつた。怠けてゐた漁夫も自分の村の惠比須神社の祭を濟ますと、纜を解いて漁場々々へ向つた。

船の出入のあるたびに質屋通ひの用事で忙しい盲目のお夏は、今度もいくらか儲けた。年末の使賃は凡て菊代に渡して借金拂ひなどの役に立てたのであつたが、年が明けて後のは、半ば自分の懷中に殘し

て置くやうにした。村の者が少くも一生に一度は參詣するといふ讃岐の金毘羅へ、お夏もかねて詣りたいと念じてゐたので、五年も十年も前からその路用に當てるつもりで、零細な貯蓄をしてゐたのだが、何時の間にか貯蓄は一文無しに消えるのが例になつてゐた。でも思出しては一錢二錢と秘密で留置くのだつた。

昔は此處の濱から屢々金毘羅詣りの船が出た。今は汽車や汽船の便利があるので、わざ／＼和船を仕立てゝ行く者は殆んどなくなつたが、それでも花の咲く季節には、たまには近村の老若男女が團體をつくつて、旅費の廉いのを取得に、時日のかゝるのも構はず、のろ／＼と和船で港々へ寄つて四國渡りをすることもあつた。お夏はその船の出るたびに、御利益のあらたかな象頭山の御社を憧憬れた。

「婆よ、われも一度金毘羅樣へお詣りしとくと運が向いて來るぜ。お母もわれと一緒なら船へ乘せて貰うてお詣りの出來んことはあるまいと思うとるけいどな」と、旅費の足らぬのを歎息した。

「目の見えん者がそないな遠方へ行かうなんて、お母もなか／＼大望を持つとるんぢやな。うちは何も願を掛けることはないし、金毘羅樣へもお大師樣へもお詣りしやうとは思やせんがな」

「さう信神氣がないと、われもこの先えゝことはあるまい。家のお婆を見い。若い時から飲食にばかり身を入れて、神詣りも佛信心もせなんだから、歳を取つてもお樂な日は送れんぢやないか。今でもお婆はお宮の前を通つても頭を下げることはあるまいがな」

　お夏は今年こそ來年こそと望みをかけながら、いざ船の出る場合になつて、自分に何の準備も出來てゐないのを知ると、落膽して、せめてもの氣休めに、參詣仲間の知合ひの老人に銅貨一つのお賽錢を託

したり、お札や護符を買つて來て貰つたりした。土産に貰つた堅い板飴を有難さうにしやぶつた。
この正月にも炬燵でうと〳〵してゐる間に、またも金毘羅詣でを思詰めて、例の貯蓄を志したので、質屋の使ひが並々ならぬ樂みになつた。菊代の商賣も正月は可成りに儲けがあるので、さして母親に求むる所はなかつた。が、漁船が出てしまつて濱が淋しくなると、お夏の用事も暇になつた。米搗仕事も精米所に奪はれて、滅多に依賴者はなくなつた。で、菊代の留守中には、日一日炬燵で暮すことが多かつたが、側で寢てゐる老婆にはあまり口は利かなかつた。何年もかうしてゐるので、二人の間には話の種が盡きたといふ有樣で、たまに話をしても同じ事の繰返しに過ぎなかつた。殊に傷をしてからの老婆はそれを氣病にして、傍の世間話などに耳を留める氣持にはなつてゐなかつた。芋でも麥飯でも與へられたものを食つては、木枕に白髪頭をのせて眠入つて、目が醒めると口の内で譯の分らぬ獨言を云つてゐた。その突拍子もない獨言がたまに耳に入ると、お夏は聲を昂げて笑つた。
ところがある日、老婆はむく〳〵と身體を起して、
「おらは今奇體な夢を見たがの」と、きつぱりした聲音で云つた。
「極樂へでも行つた夢を見たのかな」と、お夏は冷やかすやうに云つた。
「おらは極樂や地獄の夢は一ぺんも見たことがないがな、われ。……おらは今菊が目の醒めるやうな奇麗な着物を着て船へ乗つとる夢を見た。濱は一杯の人だかりぢやつた。われにも菊の奇麗な身装を一目見せたかつたがの」
「呆けたことを云はんすな。……お前が夢に見たのは、菊ぢやない、お初ぢやらうがな。お初が奇麗

な身装をして戻つて來ることなら、うちは夢でなうて起きてる時にでも見ることがあるんぢやもの」

「うんにや、おらは今確かに菊の夢を見たんぢや。何ぼ歳がよつてもお菊とお初との顔は見違へりやせん」と、老婆は力んで云つて、「われはどう思ふか知らんが、おらはな。菊がお初のやうに怨嫁にでもなつたら、擔ぎ歩きするよりやどれほど面白い目が見られるか知れんと思うとるぜ。永年見たことのないお金が一時に取れて、われやおらも好きなことして氣樂に暮らせらあ。あの女にしても碌でなしの亭主を持つて難儀するよりはどれほどましか知りやせん。われは菊の機嫌のえゝ時にさう云うて見い」

「お前はこの頃もまださう言ふことを考へとるんぢやな。興醒めたこつちや。もうそがいなことは云はんすな、聞きともないから」お夏は腹立しげに云つた。娘がひよんな噂の立てられるのさへ厭うて、休みの日にはその出先を氣遣つてゐるほどなのにと、老婆の根性を憎々しく思つた。

「よしかあの女の身を賣つて、菊の身體と同じ重量の錢が手に入つたつて、代りのない菊に遠方へ行かれたら、うちやお前はどうして生きとられると思うとるのかいな。氣が狂うても、そないなことは云へたものぢやあるまいにな」

「……お初のやうに遠方へ行かさいで近所の町で勤奉行をさせりやえゝぢやないか。菊がうんといやあ、世間には秘密でおらが奉行口を捜して來てやるがな」

「阿呆云ひなさんな。お前が襤褸を垂れて町へ行かうもんなら、それこそ乞食かと思はれらあ。誰れが相手になつて呉れるものか。お前の足で長途が踏めるくらゐなら、菊に恥を掻かせに町へ行くよりや、水汲みでも使ひでもして、お前の好きな酒を買うて飲むえゝのに」

「われはようさう云ふけいど、おらの儲けた錢は取るが早いか菊に渡しとるぢやないか。一文でお隱立てして自分の榮耀をしたことはないがの。われこそ菊に秘密で自分の使賃を隱しときながら、われ一人が菊を可愛がつとるやうなことを吐し腐つて」

老婆は久振りにこんな毒口を叩いた。そして、自分や孫娘の幸福を、お夏が何時も妨げてゐるやうに一圖に思詰めた。菊代が惣嫁にでもなれば、今夢に見たやうな美しい衣服が着られて、第一當人のために仕合せだ。老婆自身も米の飯に魚を添へて鱈腹食べられるし、寐酒の貲も盡ゝせるのだ。……おらは本眞の乞食になつても苦とは思はない、菊代が仕合せな身になるためになら、椀を持つて物貰ひしたつて自分一人の口過ぎは乾度して見せる。結句その方が氣樂かも知れん。たゞこんな盲人が何時までも生きてゐるために、何かにつけて手足纒ひになつて、菊や自分の心まかせにならんのだ、と老婆は思つてゐた。で、われといふ邪魔者が死んで、おら達がもつと樂が出來るまでは、おらはどうしても死にやせんと、腹の中で意氣込んで相手の顏を見た。が、お夏は最早取合はないで笑つてゐた。

「お前は今日は仰山な元氣ぢやな。そないに元氣があるんなら、これから先も天子樣からたび／＼お杯を頂戴出來らあな」と、話を外したが、老婆は先つきからの一つ事に暫くこだはつて、お夏に突掛つた。

そこへ、菊代が何時ものやうに腹をぴよこ／＼に減らせて歸つて來ると、老婆は「おらの云ふたことを今直ぐ菊に話すぢやないぞ」とお夏に囁いて、「われのことも秘密にしといてやる」と、きよと／＼した目付をした。そして、菊代が脊負籠に殘つてゐる蜜柑を一つ炬燵の上に投げて與れると、急いで攫取つて寐ながら食べた。

（四）

窓の上の濱屋の庭先には、蕗が芽を吹出した。日に〱彼方此方の地べたを割つて青い芽が開いた。濱屋の子供が珍らしがつて「今日はいくつ出た」と數へてゐるのがお夏の耳にも入つた。濱屋に飼つてゐる可愛らしい牝猫を追廻してゐる幾匹もの牡猫のいやらしい鳴聲も二三日前から日ましに盛んになつた。

風のない日には周圍がすつかり春景色になつたのを、お夏は總身に感じて、用がなくつても炬燵から匐出して、近所の女房達と立話をしたり、時としては索り足で埠頭場近くへ行つたりした。岸端に蹲んで小波の音や櫓の音を聞いてゐると氣持がせい〱した。そして、今年も四月の末か五月の初めにはこの埠頭場から出るといふ噂のある金毘羅船に乘れたなら、さぞ面白からうと、何十年の昔向ひの島へ柴草刈に行つて以來嘗て乘つたことのない船の乘心地をさま〲に思ひやつた。……元結がはりの藁で髮を茶筅のやうに結つた、蒼黑い顏したお夏の盲いた目の前には、麗かな日光が波に碎けてゐる。鳶が輪を描いて舞つてゐる。爪の延びた足許には寄居蟲が石垣傳ひにうよ〱してゐる。……冬の間に繁殖した蝨までも溫い日に誘はれて、彼女の肌着から匐出してゐる。

「南無、金毘羅大權現樣」と、お夏はふと海の彼方を仰いで、手を合せて拜んだ。

「………」と、一心に祈願を籠めたが、差當つて痛切に何を願ふといふことはなかつた。只五體に觸れる春らしい柔い風や日光に心が蕩かされて、神や佛が懷かしく思はれたのだつた。

「そこで何をし居りんさる？」と、たまに聲を掛けて呉れるものもあつた。

「家で寐てばかり居ると身體に毒ぢやから」と答へて、聲の主に向つて、前に滿へてゐる海の上の光景を訊いた。運送船が何艘沖に繋つてゐるとか、誰某が肥舟を漕いでゐるとか敎へられると、夢見るやうに穩かな春の海面を胸に描いて樂んだが、そり／＼は敎へられもしないお初の姿を海の上に浮べた。渡舟に乘つて向ひの村から直ぐそこまで戾つて來てゐるやうに思つて見たりした。…… 「菊は笑ふて相手にせんけれど、お初が無事で戾つて來まいものでもない」と、自分の胸に問ひ胸に答へた。神佛の御利益で自分の兩眼が開くといふことは最早信じないけれど、お初が生身を運んで生れ故鄕の母親の膝へ戾つて來るといふ不思議は待設けられないではなかつた。

親類は一軒もないし、上込んで番茶の一杯も飮んで親身な話の出來る家は村中に何處にもないので、お夏は海邊への往返りにたまさか誰れかに呼留められて立寄つても、自分の汚い身裝を憚つて、閾の外に立つて話をするか、せい／＼上框に腰を掛けるかするくらゐで、いくら親切に云はれても疊の上へ匍上るやうな不遠慮な眞似はしなかつた。

「菊代が每度御厄介になります」と、人の家へ寄ると、高い聲で挨拶がはりにそれを云つた。

お夏が濱邊の春風に吹かれて、牛小屋での長い冬籠りの退屈を忘れてゐる時分に、菊代は籠を脊負つて、雲雀の鳴いてゐる田圃道を辿つてゐた。

飯陰の泉の水もやゝ溫んで、渴を醫し汗を拭ふのに快くなつた。日が永くなつたので、歸りが遲れても暗い道を通る恐れがなくなつた。朋輩と道伴れになることは稀でも、他村の者や旅の者に向うから話掛けられて一緖に歩くことはよくあつたが、見知らぬ人と取留めのないことを言合つてゐる方が、自分

札大師詣の

の身の上をよく知つてゐる人達と話してゐるよりも、菊代には却つて氣晴しになつた。

連中の巫山戯ながら歩いてゐる間に交つて羨ましい思ひをしたこともあつたが、殊に彼女の心を惹いたのは、古ぼけた笈摺に何か黑い字の書いてある巡禮姿の女であつた。

四十あまりの頑丈な女で、脚袢甲掛の足許輕げに歩いてゐた。巡禮には大抵連れがあるものなのに、この女は一人ぼつちであつた。

「××へはまだ餘程遠う御座いますか」と尋ねられたのが緣となつて、峠を下りるまで道連れとなつた。

「何處へお詣りなさるんです」と、菊代が訊くと、

「名所見物がてら西國廻りしようと思うとります。去年は四國を八十八ヶ所無事にお詣りを濟ましましたから、今年は××まで出て汽車に乘つて、一月がゝりくらゐで彼方の札所々々を打つて來ようと思うとりますのぢや」

「お一人ぢや淋しいでせうのに」

「獨りの方が結句氣散じですがな。歩きたいところは歩いて、疲れゝば汽車に乘るし、早く宿へ泊らうと自分の氣儘が出來ますもの。……路用は不用心だから些とばかり手許に持つとつて、行先々のお寺宛てゝ爲替を家から送らせることにしとります。本眞に世の中は便利になりましたわいな。さうしとけば、途中でお詣りがいやになつても、無性氣を出して取返す譯に行きませんからの」

「でも隨分費用がかゝるんでせう」

「そりや心掛一つでどうにでもなりますわな。かういふ服裝をしてお精神物ばかり食べるのですから、

宿錢だつて並の人よりやずつと安うて濟まされます。所によつちや無錢で泊めて吳れるところもありますし」巡禮はさう云ひながら、ふと菊代の籠に目をつけて、三つ四つ蜜柑を買つて、直樣それを剝いて食べながら、三十三ヶ所の寺々の名前など語つた。

菊代は峠の裾で別れてからも、夕日を浴びた笈摺姿が蜜柑の皮を投散しながら足早に歩いてゐるのを顧みてゐたが、すると、盂蘭盆の夜など、母親はじめ近所合壁の老婆たちが鉦を叩いて、哀れな聲で唄ふ御詠歌が久振りに思出された。そして、一つ二つ口の內で唄つて見ると、自分も脊負籠のかはりに笈摺を掛けて、知らぬ他國へ行つて見たくなつた。

溫くなるにつれて、菊代は自分の家にます〳〵厭氣が差して來た。お末やお鶴のやうに岡山の紡績へ女工になつて行かうとも、あるひは下女奉公に出ようとも、どんなつらい仕事をしてもいゝから、自分の村と家とから遠ざかりたかつた。

「こんなことを何時までしてゐたつて。面白いことはない」と、母親の側に空籠を拋卸して當付けるやうに云ふこともあつたが、

「商賣が大儀になつたら一日や二日草臥休めをすりやえゝがの。お村もさう云ふとつたが、われは商賣に焦り過ぎるのが惡いんぢや。他の者に負けちや口惜しいなぞと思はいで、氣を長う持つて居れよ」と、母親は慰めて、そんな時に、菊代に媚びて力を付けてやるつもりで、かねての貯蓄の一部を、五錢でも十錢でも拋出すのだつた。

「お母はお金持ぢやな」菊代はさうされると惡い氣持はしなかつた。それに、自分の手足を働かさない

て、豫期しなかつた錢がたとへ、一厘でも一錢でも入ると、心の躍るやうな悅しさが感ぜられた。

「お母が普通の人のやうで、うちと二人で精一杯稼いだら面白からうのにな」

「もうさういふことを云ふて呉れるな」

母親は手を振つた。

（五）

「菊さん〳〵……」と幾度も呼ぶ低い聲が、親子が早寐の床に就かうとしてゐるところへ聞えた。眞先に聞付けた母親は、不審げに、「異な聲ぢやな」と菊代に囁いて、「入らんせい、誰れかいな」と表へ向つて叫んだ。が、返事もしないで、荒々しい足音が小川の方へ消えた。

「誰れか知らん。われには分つとるんか」母親は胸をどきつかせた。

「うちはよう聞かなんだ」

「あれは通り掛けに呼んだ聲ぢやないぜ。秘密でわれを呼びに來たんぢや。用心せいよ」

「またお母が妙なことを云ひ出した」

さう云つて笑ひながらも、菊代は母親の言葉に心を動かされて、ふと眠氣を醒まして戶を開けて見た。其處には誰れもゐないし、周圍を見廻しても眞暗で分らなかつた。が、先つきの聲がたゞの聲ではないやうな氣もしたので、疑念晴らしに川端まで出て行つた。海の方から吹寄せる温い南風がいゝ氣持に頰や鼻に觸れた。

「降るかと思うたらお星樣が出て居る」と、拾ひものをしたやうに喜んで空を見上げてゐると、

「おい、菊さん」と呼ぶと共に、男の手が肩に觸つた。

菊代は吃驚して飛退いて、相手を見詰めた。幽靈ではなくつて、五年前と同じ顏した繁松がにや〳〵笑つて立つてゐた。

「お主はうちをどがいしようと思うて此處へ來た？」聲は潜めたが、目は尖らせて、身體を震はせた。男の顏を掻きむしりたいと怒りに燃えてゐた。

「まあそがい怒らずにわしの云ふことを聞いて呉れい。譯をよう話すから。此處ぢや人に見られるからお地藏樣のとこへ行かんか。わしが先へ行つとるから後から來い。えゝか。……若し來なんだら、われが家へ行くぞ」

繁松は柔しく云ひながらも、嚇すことを忘れなかつた。そしてすた〳〵と行過ぎた。「誰れが行くものか」と、菊代は腹の中で逆らつてゐたが「われが家へ行く」と云はれたのが薄氣味が惡かつた。以前例のあつたことで、母親へ酷く當るだらうし、母親の方でもこの男を憎んでゐるから、大喧嘩が初まるも知れないと思はれた。それは兎に角、自分でも云つてやりたいことは溜つてゐるんだから。と、直ぐに後を追つた。

地藏樣は村はづれの小高い所にあつて、後は小さい籔で左右には松などが疎らに生へてゐる。五六年前に二人が最初に出會つたのは此處だつたので、お地藏樣と聞いてさへ菊代は妙な刺激を與へられるのだつた。

少し逆上せて夢のやうだつたが、知つた人に會はぬ用心して、淋しい小道を撰つて石地藏の側まで來

たが、男の方は何處をまごついてゐるのか、まだ來てゐなかつた。菊代は一刻も待ちあぐんで、きよときよと左右を見廻しながら立つたり蹲んだりしてゐた。沖には蛸釣船の篝火が闇の中にちらほら光つてゐて、岸に寄せる波は不斷よりもやゝ高かつた。

「菊……もう來とつたんか。早かつたな。わしは藤屋で飯米を買うて船へ拋込んどいて來たんぢや」

下脣の曲つた目の爛れた人相のよくない榮松は松の陰から忍び足で近づいてさう云つた。

「うちはこないな所に愚圖々々しとらやせん。聞くことは聞いて早う往なにやならんのぢや」菊代は突慳貪にさう云つたが、最早氣が緩んでゐて、「お前は船で戻つたのかな。自分の船に乘つとるんかな」と訊ねた。

「なあに、圓太爺の船に乘せて貰うてやう／＼戻つて來たんぢや。……わしはあれから難儀をしたぜ。三次の船で朝鮮へ行つたのはえゝが、ひよんなことから彼奴と喧嘩をして陸へ上つてから、いろ／＼な力業をやつとつたのぢやぜ。何方向いても知らん人間ばかりの中で稼ぐんぢやから此方の海で漁をしとるやうに氣儘は出來やせん。そりやまだえゝが、わしは何が祟つたのか、人違ひで牢へ打込まれて去年の盆時分まで丸三年といふものは半死半生の目に會うとつた。やう／＼本眞の罪人が知れてから牢を出るにや出たが、着のみ着のまゝの一文なしぢやからの」

「また博奕でも打つたんぢやないかな。朝鮮から戻つた人に訊ねても、お前が牢へ入つとると云ふことは一度も聞かなんだのに。陸でえゝ仕事をして儲けとるといふ話だつたがの」

「博奕どころか、わしは狐に化されたやうな氣持で牢へ連れて行かれたのぢや。しかし、わしが牢へ入

つとつたことは秘密にしとるんぢやから誰れにも云ふな。無實の罪にしても體裁が惡いから」
「そんなことを人に云ふものか」菊代は肩と肩と擦合つてゐる男の顏を星明りで見詰めたが、思ひなしか、以前よりは窶れてゐるやうに思はれた。「今夜からお前は圓太お爺の家に泊るのかな」
「泊めちや吳れるけいど、彼處は子供が大勢居つて窮屈だからの。わしは獨りで船へ寢てやらあ」
「これからは近所で漁をするつもりなのかい、お前。直ぐにまた朝鮮へでも行くのかな」
「わしはもう遠方は懲りた。お爺にでも使ふて貰うて手繰網でも曳かうと思うとる」男は石地藏の陰に踞んで、懷の財布を弄んで銅の音をさせながら、「われはこの頃は誰れと一緒に居るんなら」
「極つとるぢやないか、お婆とお母と……」
「それつきりか」男はにやりと笑つて、「二人とも何時まで經つても丈夫で生きとるのう。お母は今でもわしのことを惡う思うとるらうがな」
「そりや極つとらあ、あないに老人を酷い目に會はしたんぢやもの」
この男が母親を打つたり蹴つたりしたことはまざ〱と菊代の記憶に浮んだ。老人二人を拋散らかせて他所へ行かうと唆かされて、男の不人情を怒つたことも思出された。
「お母によう謝つといて吳れい。さうすりやわしも明日にでもお母の好きな物を買うて謝りに行かあ」。
「………」この男が村へ戻つたことが明日になつて母親に知れて騷ぎ出されるのが、菊代には恐ろしかつたが、「來るな」と斥ける力は出なかつた。そして、五年前のお地藏樣の界隈はもつと樹木が茂つてゐて、月夜にでも人目を避けるに都合のよかつたことが氣についた。吹く風に竹籔はざはついて、野良

犬の聲が間近く聞えた。‥‥

「わしは久振りで陸の家の中で思ふ存分足を踏ん伸ばして寐たいぜ」

暫く經つて繁松は手に付いた泥を拂ひながら云つた。殊に風の吹いてゐる日に、揺られながら船で眠るのは、漁夫稼業をしてゐても辛氣なものだつた。

「うちはまたあの家で寢るよりや船にでも寢たいと思ふことがあるがの」

「われ、そんなことを思ふやうになつたか。わしの船だつたら連れて寢させてやるのに」

二人は明日の晩の約束などして石地藏の側を濱邊りへ下りた。菊代は男が指差した船の在所を凝つと見やつたゞけで、男を振切つて一散に驅けて、自分の家の戸口まで歸つた。戸は自分が開けたまゝだつたので、母親などの寐姿が豆ランプの光で微かに見えた。

靜かに戸を締めて、氣取られぬやうにそつと枕に就いたが、すると母親は頭を持上げて出先を訊ねた。

「一寸用があつて行つとつたんぢやがの。そないに煩う訊いて下んすな。うちは眠たうてならんのぢやから」

がみ〳〵叱りつけて置いて、菊代は直ぐに鼾をかいた。そして、夜明け前に呼起されても容易に枕を離れないで窓の上で、雀の囀り出すまでもぐつすり眠入つてゐた。

「菊は今日は休むんか。大儀なら休めばえゝがの」と母親に云はれると、

「こんな天氣のえゝ日に休んで溜るものか」と、菊代は威勢よく云つて、大急ぎで食事を濟まして籠を脊負つて出た。近所の者に顏を見られるのが厭さにすた〳〵と傍目も觸らずに道を急いだ。しかし村を

離れると足が次第に進まなくなつた。母親の思惑や村の人々の口の端や繁松の今後の所行がかはる〴〵彼女の胸を騒かして、商賣のことなどに身が入らなかつた。で、負けと云はれるだけ負けて殆んど捨賣同様にして、田の畔でゞも道傍でゞも屢々荷物を卸して足を休めて、時の經つのも忘れて考込んだ。：獨笑ひをして浮立つやうになるかと思ふと、自分は矢張自分一人を賴りにしてゐる盲人や老耄を大事にしてやつて、かねての覺悟通りに男に掛合はないで通さうかと思つたりした。

面白い目には會はずに、徒らに年を取つて來た菊代は村に男の數は多うても、繁松の外には自分などを相手にして呉れる者のないことをしみ〴〵感じてゐるので、唇の曲つた爛れ目のこの男でも、取逃がす諦めはつかなかつた。以前の男の仕打に柔しいところや手賴りになるところの些ともなかつたことはよく知つてゐるのだけれど、菊代には最早や男に對して撰好みをする氣は些ともなくなつてゐて、相手が男の身體を具へてさへゐれば、二度でも三度でも石地藏の側で會ふだけ得だといふ氣持になつた。

それにしても、石地藏の側だけでは物足らなかつた。…祖母はゐてもゐなくても同じやうなものだが、盲目で耳の敏い悧怜な母親が家に尻を据ゑてゐるのが、どれほど邪魔になるか知れなかつた。…「お夏が可愛相ぢやから無賃で貸してやると、濱屋では牛小屋をお母に貸して呉れたのぢやから、お母は不都合のないやうにと義理を思うて、一晩博奕宿に貸して呉れいと賴まれた時にも、われがさうしたけりや、濱屋へ斷つてからにせいと堅意地なことを云ふて承知せなんだ。男を連込むのも承知する筈はない」

これやあれやで胸を惱ますものの、菊代は平生に比べると、今月は村へ歸るのに張合ひがあつた。石

地藏の裏緣に咲きこぼれてゐる紅い椿に目がついたり、石地藏の頭の上に烏の留つてゐるのが可笑く思はれたりした。夕汐は岸を浸して、舟端で米を磨いでゐる漁夫もあつた。

繁松の不意に歸つて來たために村の樣子が異つて、其處等の人々の話聲はみんなその噂かと案ぜられたが、道で擦合つた人の誰れもが菊代に向つて變つた口は利かなかつた。例のやうに、「盜うなつたなあ」とか、「今日はよう賣れたかな」とか、たまに聲が掛けられるばかりであつた。

(六)

「待つとるお初は戻つて來ず、戻らいでもいゝものは戻つて來るし、お婆、うち等はまた酷い目に會はされるぞな」

お夏は圓太爺に救はれて朝鮮から着の身着のまゝで戻つて來たといふ繁松の名を聞いた時に溜息吐いた。

「おらはどがいでも構はんがの。繁が來て呉れりや結句賑かでよからうわい」おみち婆さんは口先で毒づかれやうとも、傍で大喧嘩をはじまらうとも、繁松の飲み餘しが一杯でも飲めて、たまには魚の頭ぐらゐ食べられる樂みがありさうに思はれた。

「彼奴が居ると菊が今のやうに一心に働いて呉れんぞ。うちはあがいな獄道奴に食ふや食はずの目に會はされると思ふと、細引の一本は用意しとかにやならん。繁も朝鮮で牢へ入つとつたいふから最後の果てにや十作のやうになるんぢやらうから、うちは氣疎うてどうもならんがの。菊までも卷添になつて見んさい」

お夏はその有様が目に見えるやうで身震した。繁松とは違つて菊代のちやんとした亭主であつた十作が、脱營の罪科で死刑に會つたことはお夏の骨身に深く染んでゐて、菊代に男の出來るといふと、直くにかの死刑が連想されて恐ろしかつた。……他村から流れて來た繁松の顏は、目の開いてゐた時分に一度も見たことはないので、最切娘の入婿の格で會つた時からして、獄門に懸る顏のやうにお夏の心には映つてゐたのだつた。そして、半歳ばかり養はれてゐながらも、睦まじく打解ける氣になれなかつた。

「氣疎やく。男といふ者は何時お上に殺されるかも知れない」と、ある日隣の主人に話したことがあつた。

「緣起の惡いことを云ひなさんな。惡いことさへせにや咎めらる心配はないよな」

「そりやその譯ぢやけれどの。うちは、どうも腑に落ちんがの」

「男は殺されるにしても、お前の家には女子ばかりぢやから。安心だ」隣の主人はさう云つて笑つた。

男の子を生まいで結句仕合せかと、お夏は自分の幸福をさういふ事にでも求めやうとした。

今にも恐ろしい繁松がやつて來るかと待構へて、油斷しないでゐたが、夕方まで音沙汰はなかつた。

戶を開けて入つて來た足音は菊代に違ひなかつた。

「戶はちやんと締めて置けい」

「こんな溫い日に。開けとく方が明るうて陽氣でえゝのに」菊代は開けたまゝ家へ入つて、不斷よりも口數を餘計に利いた。滅多に云つたことのない商賣の話をもした。

「お母。××の畝には桃の花が一面に咲いとるぞな。お母に一目見せたいと、うちは思うた。もうお彼岸

が來るから、今年はお母もお婆も久振りでお藥詣りをするとえゝにな。……お彼岸といへば、濱屋でお施待の手傳ひを一日して上げにやなるまいな」

「われが連れて丶呉れりや、お藥詣りにでも何處へでも行かあ」と、お夏は大聲で云つて、「われは今日何か悦しいことがあるんか。桃の花の咲いとるのがそないに面白かつたのか」

「……」菊代は母親の顏を顧みると、急に陰氣になつた。

「お母は先きからわれが不憫でならんがの、お母やお婆に餓い目をさせてもえゝから、惡い奴に誑かされんやうにせいよ」

「そんな大きな聲を出して下んすな、人が聞いたら何事かと思はあ」

菊代は母親に脊を向けて窓の側に立つた。濱屋の子供達は庭先で繩飛びをして遊んでゐた。姿は見えないけれど、濱屋の姉娘の彈いてゐる琴の音が二階の方から落ちて來た。夕日は長閑に土藏の壁を照らしてゐる。

「菊はそこでどないし居るんならえ」と、庭先にゐた小さい子がふと身を屈めて窓を見下して笑顏をした。

「菊は坊ちやんの繩飛びを見て居ります」

「わしは此處で小便をしようか。その窓まで屆くぜ」と、子供は身體を突出して前をまくつた。すると、他の子供も寄つて來て、

「わいだつて負きやせん、見て居れ」と、身體を力ませた。臭い水の飛沫が窓の格子にまでも降りかゝ

つた。

菊代は驚いて首を引込めて、默つて晩餐の仕度に取掛つたが、賣殘りの鰺の干物を惜氣もなく焙つた。牛臭い煙が小屋の中から流れ出た。

「問屋の物を矢鱈に口へ入れると、儲けた錢を差引かれるんぢやから恐ろしい。向う見ずはわれしちやならんぜ」

「干物の一枚ぐらゐたまにや食べたつて大事ないがの、うちはどないに辛抱したつて長者になれるんぢやなし……」

「今日はわれもどえらい剛い氣になつたな……」お夏は娘の氣に障つて爭ひの起るのが氣遣はしさに、繁松の名を容易に口に出さなかつた。そして、娘が焙つて吳れた干物には手をつけないで、麥飯に鹽を振掛けた湯漬けを食べた。

「問屋へ行つて、戾りに濱屋で風呂へ入れる貰はう」

菊代は箸を擱くと獨言のやうに云つたが、先つきから隣の家の話聲に耳を留めてゐたお夏は、「とう〳〵やつて來やがつた」と、突如に叫んだ。「來るのなら、門口で秘密で呼出したりせいで、うち等の居る前で話を極めい」と誰れに云ふともなく云つた。

菊代は呆氣に取られてゐたが、ふと隣の家の女房と一緒に入つて來たのは、褞袍を着た繁松であつた。

「繁さんもこれからは此村で身を入れて稼ぐんぢやといな。よう話を聞いて元々通りにして上げなさい」と、女房は仲人氣取りで云つて、夕闇を透して皆んなの顏を見廻した。

暫くは皆んな默つてゐたが、お夏が踊り出て何か口を利かうとする前に、菊代は土間へ飛下りるが早いか、すた〳〵川端の方へ驅け出した。そして、濱邊を傳つて、昨夕數へられた繁松の船の繫つてゐる所まで行つた。四五艘の漁船の中で稍々大きなのが、朝鮮歸りの圓太爺さんの持船だといふことは直ぐに知れた。どの船にも人のゐる氣色はしなかつた。

菊代はどうなつたかと自分の身に關はつた話の決着を氣遣ひながら、岩の上に彳んで、船緣を嬲つてゐる小波の音を聞いてゐた。後を振向くと、ところ〴〵に燈火がついて、海際の家でも障子を開けて夕風の吹入るにまかせてゐる。菊代はそれ等の家々の娘や主婦の惡い品行を思出しては、「構うものか」と自分に力をつけた。

「オー、われは此處へ來とつたんか、問屋へ行つとるのかと思うとたのに」

繁松は德利をぶら提げて、突出た石垣の端から船へ飛乘つて、「誰れも居らんから、われを乘せてやらう」と、岩の上へ步板を掛けて、招いた。手を伸して攫まらせた。

伊部燒の船玉樣を正面に据ゑて、その前に茣蓙を敷いてゐた。菊代は男が點けたカンテラの光できよろきよろ船の中を見廻したが、舟板は奇麗に拭磨かれて、煮焚の道具もちやんと揃つてゐた。

「われはようあないな汚い家で辛抱しとつたな。臭うて〳〵、わしは一時もじつとして居られなんだ。何ぼ陸で寢とうてもあないな家には賴まれても泊る氣にやならんぜ」

「そんな無理を云はんすな。女子一人の腕で稼いどるんぢやもの、家賃の出る家に居れるものか」

「あの家からこの船へ來うなら氣がせい〳〵しようがな。わしはお母に謝らうと思うたけれど、家の樣

を見てやめにしたぜ」繁松は長い間慕つてゐた陸の家の住み甲斐のないのに失望してゐた。五年前に愛想を盡かして振棄てた盲人や老婆は一層見窄らしくて、同じ部屋に起臥するのも氣味が惡いやうであつた。

「わしは當分船住ひぢや。われも夜此處へ來て泊れ。圓太爺さんもまう四五日休まにや船を出しやんせから、當分は夜の間はわし一人が留守番ぢや。夜遲うやつて來いよ。萬が一他人に見つけられたつて構やせんぢやないか」

「……」菊代はにや〳〵笑つた。奇麗な船の中に人目を避けて、男と差向ひでゐるなんて、何年の間夢にも見たことのない氣保養であつた。男は買つて來た酒を溫めたり、魚を煮たりした。舟板をめくると、水槽には清水が湛へて、米櫃には白い米が入つてゐた。

「船乘りは陸に居るものに比べるとお大盡様ぢやぞな」と羨ましさうに云ふと、

「われはさう思ふか。さう思や船に乘せて連れて行つてやらうか。四國へでも朝鮮へでも渡らんか」

「ふゝん……」菊代は男の言葉が夢のやうなので眞に受けなかつた。

「われのお姉は容色よしぢやつたさうだが、われだつて些とばあ粧飾したら奇麗になるのに、われは稼いでばかり居つて身體を粗末にするのが惡いんぢや」

繁松は昨夕の闇でよく見なかつた女の顏形を見詰めて、いとゞ婆あ染みて、五年前よりも更に醜くなつてゐるのに興醒めながら、出鱈目の悅しがらせを云つたりした。そして、溫まつた酒を女に酌をさせて茶碗でぐい飮みして、女にも强ひた。菊代は興に乘つて、鼻を抓みながら一口だけ呑んだ。

「繁公……」煮えた小魚を箸の先でつゝいてゐるところへ、岸の方から呼立てる聲がした。

「圓太爺さんだ。……構やせん、一寸の間隠れとれ」繁松は慌てゝゐる菊代を船底の水槽の側へ忍ばせて、舟板を嵌めて、自分は何喰はぬ顔でその上に胡座を搔いてゐた。

「貴樣はまた秘密で酒を喰つてるな。おらにも一杯吳れい」と、赤銅色した爺さんは既に酒臭い息をさせながら入つて來た。

「たつた二合ぢやもの、もう飲んぢまつた」繁松はさう云つて、女の飲み殘した茶碗へ徳利の餘瀝を振落した。

「貴樣の飲滓を頂戴するのか」爺さんは腰を据ゑて茶碗を手にしちび〱やりながら女の持つてゐた箸で小魚を挘つた。

菊代は生臭い臭ひに悩まされて、先つき飲んだ一口の酒をも吐出した。爺さんの威勢のいゝ聲のみはとぎれ〱に耳に入つたが、繁松の聲は殆んど聞取れぬほど低かつた。

「貴樣は甲斐性なしぢやぜ。えゝ歳をして居りながら、女房一人よう持たいで。……牢へぶち込まれるやうな間抜けた眞似をして可笑な奴ぢや。貴樣なぞは親はなし子はなし、何時何處でくたばらうと構はんのぢやから、命懸けのどえらいことをやつて見い。おらは貴樣に米の飯を食はせて一兩二兩の酒手をやるくらゐ苦にやしとらんがの。おらの前でそがいにびく〱しとるやうぢや駄目ぢや」爺さんは一杯機嫌で毒口を叩いたが目には柔しい微笑を浮べてゐた。

「お前がかういふことをやれいと云やあ、わしは何でもやつて見らあ」

「さうか。そいぢや貴樣、今から濱屋の菜園へ行つて、分葱を一握り盜んで來い。家の子供が貝を拾うて來とうるから、あれを酢味噌にして一杯やらうぜ。今夜は闇夜だから知れりやせん、塀を飛越へて入つて見い」

「阿呆云はんすな。分葱ぐらゐで盜人にはなりたうないがな」

「高慢なこと吐すな。‥‥菜園物で取足らにや、土藏の錠前でも切つて金庫でも盜んで來い」

「そんなことよりや、もつと氣の利いたことをして、お前を吃驚りさせて見せらあな」

繁松は爺さんが容易に座を立ちさうにしないので當惑して鬱ぎ込んだ。酒はないし喰ふものはないし、じりじりする氣持を紛らす術はなかつた。そして、菊代の身體を動かす微かな音も耳についた。いつそ破れかぶれで舟板をめくつて、女を爺さんの鼻の先へ引据ゑて見ようかとも思つたが、さうすると、明日から自分の食扶持にも泊り場所にも離れなければならないのが恐ろしかつた。「貴樣、おらの大事な船を穢しやがつたな」と、爺さんがその目に角を立てゝ怒出すのが目に見えるやうだつた。

「お爺、今夜だけお前の家に泊めて下んせ、四五日すりやまた沖へ出るのに、一晩も陸で寢んと、船を着けた甲斐かないもの」

「貴樣は昨日高慢な口を叩いた癖に、もう陸が戀しうなつたか。貴樣も不憫な奴ぢや、女子の子が待つとるんぢやないしの」。爺さんはさう云つたが、今急に思出したやうに、「たしか貴樣は盲人の娘の家へ入込んどつたんぢやな」

「あれや些つとした惡戲ぢやがの」

「いや、貴樣にや丁度えゝ女房かも知れんぜ。乞食見たいな樣をしとるから誰れも相手にすりやせん。あがいな女子を女房にしときや何年沖へ出とつても、留守に間違ひの出來る心配がないから、漁業に身が入つて結局仕合せぢやらうかい」

「そないに腐して下んすな」繁松はむつとした。

「まあ腹を立てるない。……おらの先の女房はの、おらの留守に眞桑瓜二つで角の野郎と抱寢をしやがつた。痢病で死んだ後で知らせて呉れたものがあつたから、おらは何ぼ腹が立つてもどうすることも出來やせん。せめてもの腹癒せに、お墓を打倒して踏付けてやつたがの。……それ、漁夫の女房は眞桑瓜二つぢや。えいか」

爺さんは獨りで喋舌つて獨りで面白がつてゐたが、やがてひよろ／＼起上つて、「酒もないのに糞面白くもない。もう歸るから、貴樣は後片付をして、火の氣のないやうにして後から泊りに來いや」と云殘して、掛聲かけて岸の上へ飛んだ。

繁松は生返つたやうな氣持で急いで、舟板を取つて、菊代を呼んだ。が、菊代は泣吃逆してゐて身を持上げなかつた。そして、繁松が引出さうとして伸した手を力強く突きのけた。

（七）

「朝鮮へでも四國へでもお前の好きなところへ連れて行つて下んせ。うちは何處へでも行くがな。今直ゝに」

やがて船底から引張り出された菊代は、陸へ上らうとはしないで、涙ながらに氣色ばんで男に迫つ

た。「お前は先き何處へでも連れて行つてやると、うちに約束したぢやないか。船にやお米もあるし水もあるし、今夜夜中に出掛ける氣にやなれんのかの。人がうちを捜しに來りや夜中でも船の下へ隠れて居らあ」

「われ、氣が狂うたんか。この船はわしの船ぢやないのに勝手に出せるものか、よう考へて見い。われが遠方へ行きたいんなら、四五日中にわしが手筈を極めて、えゝ鹽梅に行けるやうにしてやるから、それまで待つて居れ。急ぐことあないぢやないか」

「思ひ立つた時に直ぐに行かにや、愚圖々々してる間にや家が出られんやうになるもの。うちはこれまでに何度も一人で他所へ行つてしまはうかと思うたことはあつたけいど、お母や祖母のことが氣に掛つてどうしても行けなんだ。ぢやけど今夜なら覺悟がついたのぢや。この船が出せにや、傳馬にでも乘せて連れて行つて下んせ」

「路用も持たいで何處へ行けるか」

繁松は嘲笑つてゐたが、最早女と差向ひでゐるのが煩いばかりで何の興もなくなつた。女は男の膝を搖ぶつたり腕を小突いたりして、船が駄目なら徒歩で村を逃げやうと言出して止まなかつた。

「歩いて何處へ行たつて、御馳走してわし等を待つとるところはないぜ。わしは貧乏してもまだ乞食をした覺えがないからの」男の言葉はます／＼冷かだつた。「われは些たお錢を溜めとるのか」

「……………」そんな馬鹿げた問ひには答へないで、菊代は、「お前さへ約束を間違へにや、今夜中にうちが路用を拵へて來るぞな」と、目を見据ゑて云つた。

「えらいなあ、誰れかに借つて來るんか」繁松は眞に向けなかつた。

「誰れに借るものか、誰れが貸して呉れるものか。皆んなしてうちを蔑視つとりやがつて」菊代は船底で洩れ聞いた圓太爺さんの言葉を憎んで、村の人々にも憎みの刃を向けてゐたが、それにつけて、濱屋の土藏だの金庫だのと云つた爺さんの言葉も頭の中に響いてゐた。……濱屋の土藏や物置へは、年末の煤掃の手傳ひをした時や、平生でも屢々出入りして、その樣子を彼女はよう知つてゐるのだ。

で、菊代は薄暗い船の中に座つてゐながら、濱屋の母屋から離座敷、土藏や物置部屋の隅々まで、ありありと目の前に浮べた。慾しい物は何でも心まかせに奪つて來られさうに思はれた。

「繁さん。その時になつてうちを拋たらかしちや承知しせんぞ。厭ぢやと云ふても以前のやうに默つてお前を逃しやあせん。えゝ事でも惡い事でもお前は卷添になる覺悟になつて居らんせ」

菊代はさう云つて、寢ころんでゐる繁松に夜着を被せて、後刻を期して、突出てゐる岸の上へ飛んだ。空はどんより曇つて生温い風が吹いてゐる。波に搖られてゐる一艘の傳馬船は彼女の目を惹いた。

時刻を忘れてゐたが、まだ宵の口なのか戸を鎖した家は少かつた。提灯を持つた老和尚や、浪花節を唄つてゐる三人連れの若漁夫などに擦違つたが、菊代は此方から途を避けるほどの遠慮もしなかつた。皆んなを敵として引受けるやうな氣持になつてゐた。

「オー菊さんか。お母がお前を搜し居つたぞな。何處へ行つとつたのならえ」と、ふとお今婆さんの聲がした。

「何處へ行かうとうちの儘ぢやがな」

菊代は濱通りから脇道へ外れて、ところ〲に野菜を作つてゐる空地へ入つた。よく見廻しても周圍に人影は見えなかつた。自分の家の裏手へ廻つて、窓の側から石垣を攀ぢて濱屋の庭先へ匍上つた。母屋の階下の雨戸は皆締つてゐたが、二階の障子にはまだ燈光が映つてゐた。

まだ時刻は早いし、何處へどうして忍入るのやら見當がついてゐなかつたので、菊代は半ば夢中で石段の脇の塵溜の中へ身を潛めた。

「お婆今そこから濱屋の庭へ誰れか入つたやうぢやな」と、窓の側で物案じしてゐたお夏が云つた。

「猫か犬かゞ通つたんぢやらうがな」

「うんにや、確かに人が入つたんぢや。そらまだ音がして居らあ」

お夏はさう云つて、竊かに濱屋へ知らせやうとして出掛けた。

母親が下女のお松に話してゐる聲は、塵溜の中でもぞ〲してゐる菊代の耳へも幽かに入つた。はつきり聞取れはしなかつたが、菊代は水を浴せかけられやうに吃驚して、慌てゝ其處を飛出した。母屋の潜戸が開いて、お松の持つた提灯の光は庭先を照らした。險して石垣を無闇に飛下りかねてまごまごしてゐる菊代の姿は、お松の寢呆眼にも見逃されなかつた。

「まあ、菊さんかな。そこでどないし居るのなら」お松はたゞ不思議に思ひながら、「伯母さん、菊さんぢやないか。うちは今時分盗人が入る譯はないと思うとつたのに。伯母さんは寢呆けとるんぢやな」と、戸口を顧みて叫んだ。

「呆れたこつちや……」お夏はぞつとしながら庭に立竦まつた。

一體はどうしたのおや」濱屋の人達は皆んな戸口へ集つて、お松に手を執られた菊代の蒼褪めた顔を訝しげに見詰めた。

「狐にでも憑かれたんでせうぞいな」

お夏はさう言捨して、菊代の手を摑んで「さあ家へ戻れ」と引張りながら、とぼ〳〵と索り足で川端を傳つて、自分の家へ入つた。家には豆ランプさへ點いてゐなかつた。

「お母はもう何にも聞きとうもない。氣疎や〳〵……」

お夏は明日の日からのゐが世の恐ろしさに戰いてゐた。この時にふと心に浮んだ姉娘のお初の影は、昨日までの思出でにあつたやうな娑婆の何處かに生きてゐる姿ではなかつた。お墓の彼方から手招ぎしてゐるのだつた。脊負籠の繩切や、上り口の上にある横木や、炬燵の踏臺やが、自分のために用意されてゐるやうに、彼女の心に浮んだ。

「菊は何を泣いとるんぢや。繁と喧嘩でもしたのか。明日仲直りをして、家へ連れて來て一杯飲ましやえゝがの」老婆はさう云つて、身を起して、「おらがランプを點けてやらう。眞闇ぢや仕様がない」とマッチを索つた。

窓の外では、濱屋の主人が提灯を持つて、石垣の側を彼方此方檢分してゐた。そして時々窓の方へも目をつけた。



葛城太夫（續篇）

近松秋江

五

お君がいつてしまふと、春雪は嬉しさうに、先刻茶席で遠目に見た葛城の顔や頭髪をまた近くでつく〲と眺めながら

「よう來とくれやした。大阪のお客さんも今日は來てゐるのやろ。」

「さうどつしやろ。」葛城は、春雪が下手な京都言葉で戯弄ふやうにいふのを、またかと笑ひもせず、他人事のやうにいつた。

お客に、ほかのお客のことを訊かれるのは彼等にしては誰れでも厭がるのであるが、わけてもそんな浮氣稼業をこそしてをれ、ついぞこれまで男に戀れたといふことのない彼女はそんなうだ〲したことをいひ出されるのを何より好まなかつた。

「君、今日どこへもお花をお斷りしやうか知らん思ふてたんどつせ。」葛城は、よくその氣質を知つてゐない者にはやゝ驕慢に見えるやうなねうつとした顏をしていつた。
「なんでどす。」春雪は、その澄ました顏をどうかして一遍笑はせねば氣が濟まぬやうな心持ちがするのぜ、またしても京言葉で追ひかけた。
「なんでいふこともおへんけど、今日あんたはんに途中でお逢ひしまへなんだら、私お母はんのとこへいこ思ふてましたけど、約束ちがへるとまた惡いから寄せてもらひました。」
「大層恩にきせるぢやないか。」
「そんなことおへんけど。」葛城は早口にさういつたが、何といふこともなく、またしても吾れ知らず氣が沈むやうになつてきて、それつきり口を噤んでしまつた。
春雪はあゝまたいつもの癖だと思ひながら、知らぬ顏をしてそうつとその顏を見守つてゐた。
「私いつでも汚うしてゐますやろ。」といつてゐるくらゐ京女には珍らしい色氣や厭味の微塵もない女であるが、青いほど白い顏を今日は眼の邊から頰にかけて肉白粉でほんのりと紅く染めて、小さく見えるやうに彩取つた口紅が舞妓のやうに靑く光つてゐる。肌膚の細かい地にお白粉や眉黛が心持ちのいゝほどよくのつてゐるので傍で見てゐてもそんな厚化粧をしてゐながら、すこしも厭らしい氣はしない。香油に潤んで漆のやうに雲のやうに鮑かな鬢のあたりが水際たつて匂やかである。
「どうしてそんなに沈んでゐるの。」
春雪は脇息の肱を置きかえながら訊ねた。

「私そんな沈んでゐしまへん。」

葛城は紅の唇を小さく綻ばして細い面に重さうな頭髪を徐にあげて黒い二重瞼の瞳をぱちと瞬いた。口では事もなげにさういつたが、さうなくてさへこの頃漸次心の疲れてゆくのを覺える彼女は弟が重い病の床に就いてからは一入氣が沈みがちになつてきた。それをお座敷にいつて客の前で努めて顔に出すまいとすればするほど心が滅入つてどうかすると口を利くのさへ億劫なことがあつた。騷々しい三味線の音や浮つい高笑ひの聲が頭に響いて顳顬が痛むやうなことが多かつた。それを知らぬ客や仲居には葛城は氣取つてゐるとか愛嬌が乏しいとかいつて厭味や陰口をいふものもあつた。どうせこんな卑しい稼業をしてゐる者だと頭からきめてかゝつて、此方から別にいふ心はないけれど、つい訊かれるまゝに弟が病氣をしてゐることや實家の困つてゐることを話すと大抵の客は嘲けるやうに笑つて、それをば賣色の女が客の憫みを買ふための例の手管のやうに嘘にしてしまふのである。春雪はそれをよく知つてゐた。葛城はまた春雪が多くの客と異り昨今の淺い馴染でありながらまだ廓勤めをせぬ堅氣の時分からの知合でゝもあるやうに交際つてくれるのをよく知つてゐた。春雪はどうかして女の心を引立てるやうな言葉をかけてやりたいと思ひながら、自分もともについ引き入れられるやうに思ひ沈んだ。口を結んだまゝうつとりと美しい女の果敢なさを考へさせられてゐた。

口數の少い葛城は默つてゐるやうでも彼女の胸にはいろ／＼な想ひが往來してゐた。先刻屋形を出やうとするところへ丁度外から歸つてきた姉さんは

「ほ、あんた今日はほんまに好う出來ましたえ。」といつて賞めてくれた。姉さんは今宵わざ／＼御殿の

見客席に入つて自分のお手前を見てゐてくれたのであつた。

「ほしてあんたこれから何家へおいきやすの。」といふて聞かれたから、

「わたしこれから下河原へ寄せてもらひます。」

さういふと姉さんは微笑しながら、

「あんた下河原のお客さんよつぽど好きなんやな。大阪のお客さん先月から約束してゐたのやから、今日はどないかして木屋町の方にいとあげやしたらえゝやろに。」

さういつたのを、自分で此方へ來てしまつたのであつた。今まで一度も心から男に戀した經驗がない葛城は大阪のお客さんを好きも嫌ひもしなかつた。初はこちらから縋つたのでも頼んだのでもなかつたが、忘れもせぬ一昨年の秋店せ出しをしてから一と月ばかりもたつた頃松池からの知らせで家からは自分と勝山と、ほかから二人ばかり、大阪のお客さんで多勢一座した時そのお客に初めて會つた。中一日置いてすぐ二度目を知らしてくれはつたさうやけれど、ゆくことが出來なかつた。その時は大阪のお客は四日も京都に逗留して、こちらのあくのを待つてゐたけれど到頭待ちあぐねて歸つてしまつたといふことを後になつて聞かされた。それから後も機わるく大阪から來て知らしさへすれば必ず出來るといふやうにはゆかなかつた。それで松池のお女將はんと木屋町のおかあはんとが仲に入つて此度からはどこへお花にいつてゐてもそこを貰ふて此方へ來とくれやすならお客さんにさういふてなにがしか少なからぬ當座の御褒美を頂いてあげる、その代りお客さんの方でも前以つていつ幾日にはきつと來やはるといふ日をお茶屋まで知らしておくといふことにして双方の約束が成立つたのであつた。けれども永い月日

にはそれがそのとほりにならぬ場合もあつた。――だん〳〵馴染みの重なるにつれて楽しい行末のことまで寝物語りに説ききかされて、遠からぬうちには必ず仕合せな身にしてやる。しばらく辛抱して待つてゐよ。さうなれば弟はかねての望みにまかせ、それほど學問が好きなれば不自由のない學資を與へて東京の學校にも遣つてやる。お母はんとおまへとにはどこか閑靜なところに小奇麗な家を持たして氣樂に遊んで暮らせるだけのことはしてやる。さういふ嬉しいづくめの話は今までにもう幾度かきかされてゐるのである。大阪へも月に一度は必ずお茶屋の仲居がついて天王寺の弘法様にお參詣かた〳〵此方から出かけていつて芝居であつたから、此度は文樂座といふやうに閑暢かな一日を遊び暮らして晩には何處か人目に立たぬところで御飯にしてその夜遲く京都にかへつて來るのであつた。大阪では旦那に人目の關の遠慮があつた。多勢の番頭丁稚を使つてゐるうへにまだ兩親もあれば妻子もあつた。そして尚ほそのうへに新町には藝妓あがりのお妾があつてそれにお茶屋を出さしてあつた。かねての話しの樣子ではそれがなか〳〵容易ならぬ女であるらしかつた。人目の多いところへはうつかり一緒に行くことが出來なかつた。芝居や淨瑠璃はいつも前から日を約束しておいて棧敷と土間とで別々に觀た。そして「あゝあこにきてゐやはる」と兩方で氣が付くと遠くから眼顔でそうつと人知れぬ合圖の挨拶を交はすのである。

もと〳〵道樂や浮氣でこんな稼業をしてゐるわけでないのやから、先きで深切にいふてくれはるとほりにしてもらへば多くの人に名を呼ばれて、つらい耻辱を曝さずにすむけれどさうなればこのさきまだうら若い一生を暗い日陰者で過す覺悟をせねばならぬ。今の變身をそれよりも好ましいといふのではな

いけれど歴とした國許にあるうへに既に一人の妻子のあるところへ、かくし人には知らせぬやうにかくさはれた京都の地に住まうともそんな恥辱に置く自分の身も浅間しいし、人の怨みの罪も恐ろしいこ、つらい勤めをしてゐれば寧そひと思ひに淵河へでも身を投げて死んで仕舞ふかと思ふほど情けない、悲しい、口惜しいこともたび〳〵あるけれど自分が死んだ後でお母はんや弟の悲しみを思へばそんなことも出來ない。そしてこんな人やつたらやつぱり大阪のお客さんのいふとほりにしてもらはうかとまた思ひなほすこともあるが、ほんならどうぞさうしてくだされと此方から頭を下げて頼んで出るほどの氣もすゝまない。その間には向の嫉妬や疑ひがあつたり、それにつれて此方の思ひ過しもあつたりして兩方の間が水臭くなつてしまふやうなことも度々あつた。定めの手當てもこの頃では約束のとほりにしてはくれなかつた。向からさうせねば、こちらからいひ出すこともしなかつた。

實家でお母はんと親子對向ひでそんな先々の話が出る折にも、

『ほんまに落籍かしてくれはる氣があるんやつたらもう疾にさうして貰ふてゐる。』葛城はさういつて、今となつてはあんまり當てにもしてゐなかつた。

『あのお客さんも今までせんど女に手を焼いとゐやすから、いろ〳〵に此方の氣をひいて見てゐやはるのや。』お母はんもさういふてゐた。

いつであつたかこのお客さんから、委しい今の身の入譯を深切に訊ねられたときにもさういつてありのまゝを打明けたのであつた。その折お客さんの身の上ばなしも打明けて聞かされた。一度は奥様を貰はゝつたさうやけれど、恩のある繪のお師匠さんの愛娘であつたその奥様は、幼い時から、藝事などの

好きな兩親に甘やかされて育てられたので、何かにつけて我儘で、それまでもいろ〳〵な善からぬ噂があつたが芝居者とやらとの關係はもう世間の口に戸をたてることの出來ぬほどの表沙汰になつてしまつた。今までは、幼少の時からわが子同樣にお師匠さんの手許に引取られて、日夕座右について居て墨を磨る術から敎へ育てられた恩義に縛られて、どんなことがあつても靜つと眼を瞑つて無念の淚を呑んで堪へてゐたのであつたが、此次といふこんどはさすがに奥樣の親達の方でもそのまゝにして置かなかつたし、友人やまた平常鑑賞にあづかつてゐる繪の愛護者の誰れ彼れよりも斷然たる所置に出てることを注告した。自分が二十七奥樣が二十三の時から、五年の間の同棲に幸ひ子供もなかつたので、その時から春雪は家を疊んで奇麗な獨り者になつてしまつた。

彼には淺草の方で人形師をしてゐる叔父が一人あるきりで幼い時から親も兄弟もなかつた。父親は自分が五つの時に亡くなつたが母親はどこかの藝者であつたといふことだが、それは自分でもよくは知らなかつた。叔父のところに養はれて人形を造る手傳をしてゐたのを、小供ながらに、だれも敎へぬ繪を上手に描くので、叔父の家へ偶に話しに來るそのお師匠さんの目にとまつて、下谷の家へ弟子に所望されて貰はれていつたのであつた。生みの父母の愛に饑えてゐた彼は、氣の荒い叔父のおかみさんにいつも口汚く言ひのゝしられてゐたが、師匠の家に引取られてからは、奥樣をはじめ皆から實の子のやうに可愛がられた。とり分け師匠にはだれよりも目にかけて愛せられてゐた。師匠は好い人であつた。あゝいふ人にどうしてあゝいふ娘が出來たかと思はれるほどお師匠さんは溫厚の長者であつた。春雪はかうして遠い旅の空にさすらふてゐても、娘のことなどがあつてから急に兩鬢におく霜の目立つてきた恩師の

甚だ深い恩寵を片時も忘れることが出来ず、ともすれば放縦の愛き枕に不貞の妻の身を悲しむよりも恩師の寂しい心を思ふて暗涙に咽ることも度々であつた。——

その時、

『さうか、それは頼りないなあ。そんなら私が及ばぬながら、どうかしてあげやう。妻君があるうへにまだそんな妾などがあつてはたとへ落籍してもろうて自由な身になつてもあんたも寝覺めがわるい。』

さういつて深切に慰められたので、

『どうぞおねがひいたします。』といつて彼女は頭をさげたのであつた。屋形の姉さんには堅く口を噤んでそんなことは何にもいはなかつたけれど葛城の心はその時分から移らひそめてゐた。

これまでとても夜毎に變る多くの男の中には深切にかき口説いて、太夫の心に媚びやうとて浮華な遊びをする客もあつた。半としばかりも通ひつめて身がつまり勘當同様に田舎の親類におあづけになつた若い男もあつた。商用とやらで月に一度は必ず京にくる東京の客は大阪の客と張り合ひかけて二十日も揚げづめにゐつゞけしたことまであつたが、それ等はいつのまにかおのづと便りなく風が吹いて過ぎるやうに遠ざかつてしまつた。

『こないにいつもいそがしい體やのに、また不思議や、葛城さんは良縁がえらい遲い。』

さういつて屋形の姉さんは、始終話しにゆくお母はんに向ひ彼女の身について語つてゐるのである。

この方かて今は深切にいふてくれてはつてもお客の心くらゐ當てにならぬものはない、いつどういふ風の吹きまはしでついとほかの方へそれてゆくか分らない。それのみならず常に處定めず諸方を歩いて

繪を描いてゐやはるといふのやから口では必ず變らぬと堅い約束をしてゐても末のことを思へば頼りない。さうかといふて疑へばまた限りもない。まだ一と月あまりの交際ではあるが正直らしい口のきゝやうといひ、思ひつめたらしい氣性といひ顔を見るたびに口癖のやうに、

『私は哀れな女が好きや。』

といふて、京には多勢女もゐるに自分をば二人とない者のやうに愛惜しがつてくれはる心に滿更虚僞もなさゝうに見える。

さう思ひかへすごとにおのづから自分の心も打解けて、優しい言葉をかけられるたびにまだ眞實の戀を知らぬ身にもさすがに懐かしさ頼母しさの思ひはつのるのであつた。

葛城は、自分がさつきから思ひありげにうつとりと考へ沈んでゐる風情に、こちらの氣心をはかりかねて、口をきくさへ遠慮がちにしてゐるらしい男の心をよう知つてゐた。それで先刻屋形を出るとき姉さんに笑はれたことを、男に聞かして二人で樂まうかと思つてよつぽど口まで出かゝつてゐたが、空々しい世辭にならはぬ彼女はそんなことを蓮葉らしう口にするのも、氣はづかしくてやつぱり默つてゐた。けれども男の傍に座つてゐる彼女は向が思つてゐるほどに心は沈んでもゐなかつた。

『大阪のお客さん、ほんとに來てゐるんだらう。かうして來てもらへばきて貰うて、私はそつちが氣になつて仕方がない。』春雪はそれがいかにも氣になるらしく訊ねた。

『來てゐやはつたかて、大事おへんたら。』葛城は少し苛々したやうにいつた。

『さうだらう。來てゐるんだらう。』春雪は、今靜かな夜遲く二人きりかうして樂しく對向ひながら、美

しい頭髪かたちを獨りで傾してゐてもそのまぼうしの姿は明日はまた他人の花と眺められるのであるかとおもへば戀ゆゑ心弱くなつた彼は胸が潰れるばかり果敢なく、あはれであつた。

すると葛城は寂しく沈んでゐた顏をふつとあげて、黑瞳がちの大きな眼で春雪の顏を見まもりつゝほゝと微笑みながら、

『あんたはん、だれにもこなこともう言はんとおきやす。』と冒頭しながら『うちの姉さん、私にお金を貸すと、またそれだけでもちよつと私の縊が長う繋がりますやろ。そやから私今屋形を出かけるとき姉さん、「あんた下河原のお客さんよつぽど好きな人やなあ。大阪のお客さんもうこの間から、約束してゐた人やから、今夜はどないか都合して木屋町へいとあげやしたら、えゝやろに。あんたまた月末になつてどないするのえ。こまる場合にはまた內でもどないかしてあげんならんけど。」さういふて笑らふてました。』

春雪は、それが何ともいへない嬉しかつた。そしてその一言にわけもない不安の雲を拂はれながら、

『へえ、姉さんそんなことをいふてゐたの。ぢや姉さんもう私がどんなにあんたを思つてゐるかといふことを知つてゐるんだな。』彼は微笑しながらいつた。

『そして私達の相談してゐることを知つて、邪魔をするといふやうなことはないだらうか。』春雪は嬉しければうれしいほどまた不安も倍してきた。

『そなこと何も知らはらしまへん。』

『だつて金を少しでも餘計に貸さうとするの。』

「格別さういふこともおへんけど、まあ道理がさういふもんどつしやろ。」

この二た月三月大阪の方が途絶えてゐるのは姉さんにも知れてゐたがそれがなくては差詰め困る筈の葛城がどうして苦しい意地を立て徹してゐるかは姉さんさへもまだよく知らなかつた。まして大阪のお客や松池のお女將はんや、木屋町のおかあはんなどに分りやうがなかつた。

「さうか、よろしい。どんなにしても私がこれから立てとほすから、あんたも心が變らぬやうにたのむ。」春雪は、深く思ひ込んだやうにさういつた。が暫くたつて、

「傾城の涙で藏の屋根が漏りかはゝゝゝ。」といつて好い氣嫌さうに笑つてゐた。

そこへ、

「えらいお靜におすなあ。」と、お君が膝をついて靜つと襖をあけながら、廣蓋に載せたものを運びこんで一つひとつ塗り物の餉臺の上に並べた。

「さあ、あんたの好きな物が來たから澤山お上んなさい。」

さういつて春雪が見やる膳の上には源五郎鮒の子あひ、鰻の蒲燒、それに鮑の奈良漬にいつものとはり鱧の吸物が付いてゐた。膳をこしらへておいてお君が銚子の熱いのをとりに立つてゆくと、

「あんたはんもお上りやすな。」葛城はすこし甘へるやうにいつて一番さきに鮑のなら漬に箸をつけた。

「私、これがなによりいつち好きやのつせ。これやつたらなんぼ食べたかて飽かしまへん。」

「さうかなあ。こゝの家でも時々それを出すけれど、私はあんまり好かない。鰻も東京の方が甘い。めづらしいのはこの鱧だけだ。これなら毎日一度はいゝ。」さういひながら春雪も箸をうごかしてゐた。

「あんたはん繪もう描けましたか。」

「うむ、よく見てきた。好かつたよ。あれで隨分頭が重いだらうなあ。何だか首がぬけて落ちやしないかと思はれる。」

「そんなことおへん。」

「あの頸のところに黒い房のやうなものが垂れてゐるのは、あれは何といふもの。」

「いたづら。」

「それから頬のところと兩方の鬢に小い珊瑚樹のやうなものが下がつてゐるのは。」

「ながさき。」

「私はあのいたづらが可愛らしいなあ。」

「あんたはん早う繪描いとくれやすな。」葛城はまた甘えるやうにいつた。

「うむ描くよ。明日描かう。」

寢る時はゞかりに立つて、細めにあけた戸の隙間から仰いだ空がいつの間にか暈月夜になつてゐたと思つたら、快よく一と寢入りして目覺めた曉方から昨夜はあれほど寒かつた陽氣が俄にまた暖くなつて、しつとりと汗した蒲團を知らぬ間に一枚はね除けてゐた。

軒を流れる春雨の音が柔かに枕にひゞいた。

二人は十時ごろになつてやつと目を覺ました。昨日一日晴つた春雨はまたもや本降りになつて濕々と

前栽の木々を濡らして、絹絲のやうに降りそゝいでゐる。庭のあるじは我ぞといはぬばかりに滿開した櫻花は昔の小町をでも思ひ起さしめるやうに雨の中にも眞白に咲き誇つてゐる。小川になぞらへて敷いた木蔭のさゞれ石は艶かな濡れ色をみせて、春雨に溶けて落ちた薄紅の花片が、美しい染模樣のやうに三點五點そこに散つてゐる。植込みの奥の眞青な笹の葉蔭に降る雨にとまどひした名の知れぬ小鳥が青い羽色のぬれるもいとはず枝から枝に飛んでゐる。

二年近い廓づとめをしてゐても少しも遊里の風に馴染まぬ葛城は、寢床を離れると行儀よく、眞青な地に薄く櫻の花びらを刺繍した半襟のかゝつた長襦袢のうへに直ぐ昨夕の着物をきてそのうへに幅廣の伊達卷だけを細腰がくびれるほど強く卷きつけた。

「よう春雨が降りますなあ。」

しつとりと足に冷つく緣側に立ちながら二人は軒端を流れる飛沫のふりかゝるのも忘れて春雨に濡れてゆく庭の面を眺めてゐた。

「お早うござります。」お君は二人の起きたらしい物音をきいて上つてきた。

「あのお風呂が出來てますよつて、ちよつとお入りやしたらどうどす。」

「それは結構。」

二人は楊枝をつかひながら湯殿におりていつた。

葛城はまだ襟頭のまはりに殘つてゐた昨夜の厚化粧を風呂ですつかり洗ひ流してしまつて、肌膚の細い素顔をほんのり櫻色に染めて濡れ手拭を持ちながら上つてきて、それを緣の欄干にかけた。

田舍亭の粋な料理で朝とも晝ともつかぬ御飯をあつさりと濟ますと、ほうつとしたやうに薄ら眠い、淡い疲れをおぼえてきた。

「あんたはん、こないしてる間に繪描いとくれやすな私あとになつたら頭髪を解きまつせ。」

「あゝさうか、そんなら一つ描かうかな。」

春雪はさういつて寫生帳を取つて來て正面から或は横から或は斜に葛城の似顏を色々に描いて見た。

お茶を煎れ替へて上つてきたお君はそれを見て、

「ほ、粋なわ。」といひながら春雪の黒八の襟のかゝつた褞袍の肩先に顏を覗けて火鉢の向に窮屈さうに口を結んで座つてゐる葛城の顏と見比べながら、

「よう〳〵似てまつせ。」

「あんたはん私にもちよつと見せとくれやすな。」葛城は甘えるやうにいつて春雪の手から寫生帳を取つて、わが繪姿を見てゐた。

春雪は、なほ葛城にきゝながら自分の想像を加へて頭の飾りや裲襠の繡ひ模樣を鉛筆でざつと形を付けると、それを水彩畫の顏料でさつと濡らした。

「さあ、かうして置けばまたいつでも本當に描ける。」

「あんたはん、これだけどすか。」葛城は繪の具を塗つた寫生帳をまた取り上て眺めながら、物足らぬやうにいつた。

「そしておいて、また絹に大きく描んだよ。」

「今描けまへんか。」

「今は描けない。そのうち描いてあげる。」

「はやう描いとくれやすな。‥‥ほんなら何かほかのものを今描いとくれやすな。」

葛城は甘えて强請つた。

「描いてもいゝ。‥‥が、お君さんその代りに濟まないが御褒美に一つ飮まして下さいな。」

「へえ、畏りました。」

「ぢや何かあんたの羽織の裏にでも描いてあげようか。」

「羽織の裏て、あれ夕染どつせ。」

「ぢや羽二重にでも描かう。」

さういつて春雪はお君に出入の吳服屋に電話をかけさして早速白羽二重を持つて來さすことにした。

「ほんなら私、その間にちよつと頭髮をなほします。姉さん、これ重うおつせ。姉さんほしていろ〳〵我儘いふてえらい濟んまへんがちよつと道具かしとくれやすな。」

「へえ、へえ。ぢつき持つて參じます。」

さういつてお君の立つてゆかうとするのを待たして、

「それからねえお君さん‥‥どうだらう、今日はまた一つ春雨に閉ぢこもつて、しんみりと春吉さんの好い聲でもきかしてもらはうか。」

春雪はさういつて葛城の方を見た。

「えい、それよろしい。」葛城はうなづいた。

お君は畏つて下りていつた。そしてすぐまた鏡立てと櫛箱とを持つて上つてきて、

「葛城さん、あのお内から電話どす。」

「さうどつか。」と葛城はお君と一緒に下りていつた。

電話口に出ると屋形のお清の聲で、昨夜はあれから葛城がこちらへ來たあとまた度々松池からも木屋町からも電話がかゝつてお清や仲居頭のお文までが言ひ譯の仕様に困つて後には到頭姉さんまでが電話口に出てそこをえゝやうにいひ繕らふて置いたから、もし貰へたら今からでも貰らふて戻つて一遍大阪のお客さんのところへも顏を出してもらへまへんやろかといふ口上である。

葛城は屋形の人達や松池のお女將はん達の當惑は察したけれど昨夜から氣嫌をわるくしてゐる客のところへ直ぐゆくのはどうしても氣が進まなかつたし、また此方のお客がこれから歸へす筈もないと思つたから、何處までも病人が惡くつてとても歸つて來られないことにしてよくお清にいひ含めて電話を切つた。

葛城がさあらぬ體で靜に座敷に戻つて來ると、春雪は火鉢の傍に肱をたてゝ横に寢そべりながら春を流してゆく雨の音の中にうつとりと蕩けたやうになてゐたが、

「何の用」と不安さうに訊ねた。

「何の用ちうこともおへんけど、ちよつと。」

「弟が惡いの。」

「大阪。」春雪は其方が氣にかゝつたが、それを先に訊ねるのも端ないと思つて自分を抑へたのである。
「ちがひます。もう大阪へ歸らはりましたやろ。」葛城は眞實をいふて男に入らぬ心配をさすこともないと思つて電話のことは秘した。
春雪はそれを聽くとまた顏を和げて倍々好い氣嫌になつてゐた。
葛城はお君の持つてきてくれた鏡の前に座つて白い纎やかな兩肱を頭の上で菱のやうな形にまげて太い金元結を解いて大きな伊達兵庫の髷を解いた。降る雨に襖も障子も閉切つた部屋の内がしつとりと生暖く潤んで、春らしい心地の中に葛城の濃い頭髮から立ち迷ふ柔かい香油の薫が媚びるやうに漾ふてゐた。入れ毛を取つてしまつてやがて好ましい銀杏が彼女自身の手によつて巧みに結へた。
「あんた上手だなあ。」さつきから眼を離さず見てゐた春雪は横になつたまゝいつた。
「私、いつも自分で髮結ひまつせ。」
「それは感心だ。」
「頭髮かて、みな自前どすもの。」
「へえ、そんなら全抱へでゐて頭髮も自分でもつの。」
「自前でないのはお花にゆく着物だけどす。屋形にゐる時はいつも自分の着物を着てゐます。」
「全抱でそれはひどいねえ。」
「私、こして奉公しておつて自分で所帶を持つとゐると同じことどつせ。そやからたんと金がかゝります。」

お君が早速呉服屋からとゞけた白二枚重を持つて上つてきた。

「これでよろしおすか。ほて春吉さんおつきやはります。……に、よう出來ました。あんたはん上手どすなあ。」お君は葛城の頭髪を眺めた。

「今いつてゐる處なんだ。商賣柄とも覺えない、いつも頭髪は自分で結ふんださうです。どうです。これなら落籍して宿の妻にしても所帶持ちはいゝでせう。」

「よかつた。」それを好機にお君は笑つて急しさうに立つていつた。

それと入れちがひに淨瑠璃の春吉が、大きな箱を持つた内の芋姆と一緒に入つてきた。

「今日は。よう降りますなあ。」

春雪の好みによつて春吉はいつもの通り「新の口」のはなと「三千歳」のさはりを二つばかりやると、一服して此度は葛城のお好みで「白石噺」をすこし長く語つた。葛城は好きな中にも揚屋の段は今のわが身につまされていつもいつも悲しく聽くのであつた。年はまだ葛城よりも二つ若い二十であるが春吉は聲が好いうへに藝に熱心で、それにすこしも色氣のないのが面白くつて春雪はまだ葛城を知らぬ時分から折々こゝへ呼んで旅の憂さはらしに自分でも三味線をたよりに、わたしの父さまかゝ様は京の六條珠數屋町などゝ唸つてゐた。

「……便のないを杖柱、首尾よふ年を勤めたら國へ歸つてお二人に樂させまして、どうしてと、色や浮氣を嗜んで、勤め大事と……」

春吉が悲哀をこめた音調につれて濕やかに語りつゞける宮城野しのぶの姉妹が涙の物語にじつと聽き

入つてゐる葛城の黑瞳がちの二重瞼は大きく潤んで長い睫毛にはいつしか露が光つてゐた。

その夜も葛城は小休みもない春雨に降り籠られて泊つた。

六

それから十日ばかりも過ぎて、京の春も漸う闌け、東山の青葉の奥からひゞいて來る鐘の音とゝもに薄ら寂しい夕暮れの風にさそはれてほろ〳〵と庭の櫻の散りゆくやうな晩であつた。

その日も葛城は午から春雪の宿によせてもろうて久し振りにのんびりとした氣持ちになりながら、昨夜花見小路の近あさで多勢一座の陽氣なお座敷で飲めもせぬ酒を拳に負けて惡じひせられたせゐで今日もまだ頭がふらつくやうな心地がするので、いつもの按摩を呼んでもろうて横になりながら療治をしてゐると、

『葛城さんお内からお使ひどす。』といつてお君が上つてきた。

葛城は玄關まで降りていつて會ふと女衆のお清がわざ〳〵迎へにきてゐて、

『あの今松池さんから電話どして、ちよつとでもいゝさかい今日はぜひともあんたはんに顏を出しとくれやすいふて來やはりましたんどつせ。ほて内の姉さんが、あんたはんにそない云ふとくれやすいは、りました。今日はぜひちよつとでもそちらを貰ふて來るやうにいふたはりました。』

葛城は「さうどつかおほきに。」といつたまゝそこに立つてちよつと考へた。彼女の眞實の心はもう春雪の方に傾いてゐたけれど、この二三ヶ月妙に水つぽくなつてゐるものゝ向は長い間世話になつたお客でもあるし、それに出てゐる以上はお茶屋に對する義理もあるし、この間の點茶の晩からあのまゝにな

つてゐる詫びも一言はいつてゐかねば方々へ申譯けがないと思つたので、

『ほんならちよつと待つとくれやす。』といつてそこにお清を待たしておいて春雪の部屋に上つてきた。

春雪は今に夕飯の仕度が出來てくるのを樂しみに待ちながら縁側に蒲團を持ち出して靜かに暮れゆく微明るい黄昏の風にさそはれて散つてゆく庭の櫻を眺めてゐた。

葛城は春雪が快よく聽いてくれるか、どうかといふ不安やら、これから往くとしたら、向のお客やお茶屋で此の間のことを何といはれるであらうといふやうな色々の思ひに急かれてぽうつと上氣したやうになつてほんのり面を染めて、

『あんたはんちよつと。』と妙に口ごもりながらいつて障子の小蔭に春雪をつれていつて、

『私、あんたはんにお願ひがあるのどつせ。』

『何を。』

と、春雪はさそはれるまゝに立つてゆきながら、もしや貰ひではあるまいかともう不安に驅られてさう訊ねた。

『えらい濟まんけど、これからちよつと内へ往してもらへまへんやろか。』葛城が赤くしてさういふ顏を心の底まで見徹さうとするやうにじろ〳〵見まもりながら春雪は、

『大阪のお客さんのところ。』と不安さうに訊ねた。さういはれて葛城もさすがにお客での貰ひでないとまで全く噓をいふ心はないので、

『いゝえ違ひます。神戸のお客さんどす。』と奇麗にいつた。もし大阪のお客だと本當のことをいつたら、

貰へないかも知れぬといふ懸念があつた。

「神戸のお客……深いお馴染。」

「そんなんと違ひます。たゞちよつと。……すぐ歸つてきます。」葛城はその後をいひ濁した。

「たゞちよつと。それからどうした。」

春雪は妙に薄笑ひしながら葛城の顔をまたじつと見てゐたが、ぽうつと薄紅に染めなした女の顔に一生懸命なところが顯はれてゐるのを見てとると、それほどそちらへゆきたがつてゐると思へば一層歸す心はしなかつたが、さうかといつて、あんまり惡留めして勸めの邪魔をするのは、まだ女の本心は何處まで自分に傾いてゐるか分らぬまでも、折角こちらに靡いてゐるものをそれが爲に却つてあらぬ方へ外らせるやうなものである。さう思ひきめると彼は、

「すぐ歸へるといつたつて、君達は藝者と違ひさうはゆかないだらう。」

「いえ、すぐ歸つてきます。これから汽車で神戸へおかへりやすのやから一時間か二時間したら私すぐかへつてきます。唯ちよつと顔さへ出しておけば後はもうどうなつたかて構しまへんお客さんどすから。」

「さうか、ぢきかへつて來るなら、ちよつと行つておいで。」

「ぢつき歸つてきます。八時か九時にはかへります。遲なつても十時か十一時には必らずかへります。あんたはん、……お腹空きましたか。……ちよとくらゐお腹すいても私戻つてくるまで御飯食べんと待つてとくれやす。私と一緒に食べますから。あんたはんそれまで按摩してもろてとくれやす。」

「十一時。それは遲いよ。お腹が空いて待つてゐられやしない。」春雪はいかしとおなげにいふ。

「ほんなら八時にかへります。かた〳〵食べんと待つてとくれやす。」

「そんなら、いつておいで。」春雪はさういひつゝ片時も傍を離したくない可愛い娘を外に出しでもするやうに葛城の上氣した顏を見入りながら靜つと指端で額にかゝつた小さい塵を拂つてやつた。

「ほんならいかしてもらひます。」

葛城は階子段を降りながらも同じことを何度も繰返してかへつて戻つた。

一旦屋形へ歸つていつもの通り早速俥で木屋町まで驅付けた。

「ほ、來やはりました。」といふ仲居の聲に迎へられて玄關から屠所にひかれる小羊の思ひで歩きわづらひながら細い渡り廊下を傳ふて一番奧の川添ひの離れ座敷の襖の小蔭まで進みよつた。內では松池のお女將はんの聲もしてゐる。彼女は思ひ切つて靜かに微笑みながら入つてゆくと大阪の旦那は肥滿した大きな體をどつかりと趺座をかいて脂切つた赤黒い顏をてら〳〵光らせながら淨瑠璃の縫之助とお女將はんとを對手に酒を飮んでゐる。

「今日は。おかあはんおほきに。」葛城は鷹揚にいひながら好いところにいつて座についた。

葛城が、いよ〳〵來るといふ返事があつてから、もう、今日は何もいはぬといふことにしてあつたと思はれて、お客もお女將はんもこの間のことなどはおくびにも出さず、彼女が來るのを待つてこれから多勢で宇治へゆかうといふ相談が纒つてゐた。

「あんたそのまゝでもよろしいやろ。」お女將はんは葛城の方を向ひてきいた。

『おかあはんさうどすけと宇治にゆくのどしたら。』と半分いひさして葛城は考へた。

此方へ來る以上は今あちらで約束したやうにさう易々と一時間や二時間で貰ふて歸れる筈はないと自分でもそれを知つてゐながら實は吾れをも欺き向をも欺いてやつて來たのである。尤もこれまでは大阪から出て來る日は朝からでも花を付けておいて自分は急がしい體の都合で遲くからやつて來て一時間か二時間くらゐですぐその夜歸つてしまふことが多かつたのである。が、こう宇治ゆきの彈んでゐる場合にそれをいひ出したとて到底聽いてくれる道理はない。生中そんなことをいへばいふだけ惡く邪推されるばかりである。さう思つて返辭の仕様に途惑ふてゐると、

『あんた着替へるんやつたら、早う電話掛けて取寄さんことには遲なるえ。』お女將はんは催促した。

『おかあはん、私もうこのまゝでいきます。』

葛城の支度がそれでいゝことになると同勢四人そこから俥をつらねて五條の停留場に急がした。

宇治ゆきの電車に乘つてからも葛城は後髮をひかれるやうな心地で、それとなく春の夕暮れの風に吹かれながら窓から顏を斜にして東山の方に眼をやるともう薄黑く黄昏れてゆく青葉の奥から清水の高い舞臺には神々しい燈影が瞬きそめて、黑い人家の甍が段々上りに高く重り合つてゐる山裾の方は澱んだやうな暮靄に閉ざれてゐる。その中に今頃あの人は自分の歸つてくるのを待ちわびてゐやはるやろ。

愛宕の頂に長く殘つてゐた夕榮えも中書島のあたりでとつぷりと暮れて四邊の野も堤もほの白い靄の暗に包れてしまつた。その中を明るい電車ばかりが燭燈を輝かしながら、駛せていつた。

電車を降りてから一行はまた俥に搖られて宇治川べりを夜風に吹かれながら興聖寺の下から溫泉まで

辿りついた。

その夜二人きりになつてから、それまでは口を噤んでお女將はんなどの手前を遠慮して何もいはなかつた旦那はこの間の厭味をいつたりいろ〳〵に手を換えて葛城の氣を引いて見たりした。

「ほんとにあるんなら、さつぱりとあるといふてくれたらえゝやないか。私がその人に會ふてよう話をして見て一生夫婦になつてもいゝ人と見たら私が仲に入つて一緒になれるやうに盡力してあげる。」

そんなことまでいつて優しく訊いてくれたけれど、葛城はただ温順しく笑つた、

「ほんまにそんな人あらしまへんたら。」といつてゐた。

「さうか、ほんならえゝけど。お前も、私が唯口でばかりいふておつたのでは安心出來んやろから八月か九月までには五百圓だけでも渡しとくさかい、まあ今年中には落籍すやうにしてあげる。」

「どうぞおねがひいたします。」葛城は今までのゆきがゝり上厭だともいひ切れないのでさういつて好い加減な挨拶をしてゐた。しかしさういふことは度々聞かされてゐるのであつた。

翌日になつたら歸ることゝ思つてゐたが、昨夜が遲かつたので一同が眼を覺ましたのは彼れ此れ一時に近かつた。それからまた船を仕立てさせて酒や肴を持込んで渦ヶ卷いて流れる紺碧の急流を溯つて米かしの瀬までいつたりして、そこを引揚げたのは向河岸の花屋敷に若葉がくれに明るい灯影の見えそめる頃であつた。その夜はまた木屋町で縫之助の三味線を聽いたりして夜を更かしたが、旦那はいつになつても歸る樣子は見えなかつた。この間のことがあつたので意地になつてゐるのであつた。こちらもまけない氣になつて歸りたさうな顏は少しも見えないやうにして、

「あんたはんがいゝとおいひやすまで、いつまでゝも此處にゐます。」
葛城は口數少くさういつてゐた。さうしてゐる間も病人のこと、あのまゝになつてゐる下河原のことが始終氣にかゝつてゐたが、少しもそんな顏は見せなかつた。病人の方は出先きが分つてゐるからもし急に變つたことでもあれば屋形が知らしてくるからその方は却つて安心してゐるけれども、下河原のことは濟まないと思つてゐた。
そして三日めにお淸が使ひに來たのにそつと手紙をわたしてそれを下河原にとゞけるやうにいひつけた。

七

咲き遲れてゐた知恩院の櫻花も寂しく散つてしまつて蒸し薫るやうな青葉にはもう暑過ぎるやうな惱ましい日が照つてゐた。
梅雄は物憂いゆく春の日をいつまでたつても思ふやうに捗々しくない病に厭倦きて時々癇癪を起しては母のおつねを困らすやうなことがあつた。母はそんな時そばについてゐて獨りで泣かされた。そして母は娘を子は姉の見舞ふてくれるのを待ちこがれて夜を明かした。
「お母はん、姉さんはどないしたんやろなあ。今日でもう四日にもなるのに姉さんちよつとも來とくれやへんなあ。」この頃になつてまためつきり衰弱の加つてきた梅雄は焦れつたさうにさういつて姉の姿を戀しがつた。
「今お淸どんの話ではまた大阪のお客さんやちうからこない長うなつてゐるのやろ。今日はもうかへる

やろから、歸つたらちよつとでも來とくれるやうに賴んどいたさかひ。」母はさういつて病人の氣を靜めるやうにいつたが、先刻お清がこんな物をこしらへましたからお母はんお上りやしとくれやすといつて屋形から五もくを持つて來てくれたときこの間點茶の時行かなんだので、それでえらいごて〳〵いふてこんなに長う引張つとゐやすのどす。といつてゐたことを思つてゐた。今まで長い間世話になつてゐたことを思へばそれを怨むことも出來なかつた。梅雄は大阪のお客のことは知つてゐた。姉や母の話にも大阪では船場の大きな寶石商で市の公職をも勤めてゐると聞いてゐる。京都からめつたに外へ足を踏み出したことのない母も一度大阪へ見物にいつたついでにかねて聞いてゐる旦那の家の前を通つて餘處ながら大きな店がまへを見て來て驚いてゐた。

けれども梅雄にはそれが不滿であつた。父には早く死なれ、今の姉よりもまだ美しいといはれた上の姉も死んだあとでは一家を背負つて立つべき男子は自分である。自から招かぬ禍からかくまで淺猿しく零落した境遇を挽回するのは自分一人の双肩にかゝつてゐるのである。さうしてそれを救ふ方法といへば自分の苦學の他にはない。自分は學問を以つてどうぞして、一家の悲運を救ひ姉の恥辱を雪がねばならぬ。それが目前の急務である。その若い美しい姉は彼にとつては恰も戀人のやうなものであつた。その戀人の姉は僅かばかりの金の爲に體の自由を縛られて朝夕多くの人の汚れたる欲望の犧牲になつてゐるのである。大阪のお客といふのは惡い人ではないさうだが、いつか姉と一緒に藝妓や舞妓を多勢連れて四條の通りを歩いてゐるのを見たことがあつた。洋服を着ていかつい髯を生した肥つた男であつた。梅雄は初めてそれを知つた時あれがいつも聞いてゐるわが姉の旦那かと思ふとその赤黒く肥つてゐるの

が丁度岩見武勇傳の講談で讀んだ猅であつて纖弱い色の白い優しい姉がその猅に人身御供に上げられた生贄のやうな感じがして自分は少しも早く岩見重太郎のやうなものになつて姉の耻辱や老いたる母の悲しみを救はねばならぬと思つたのである。

かうしてたつた一人の弟が重い病の床についてゐても姉はたまに深切なお客に樂花をつけてもらふか或は自分で花をつけねば急しい體を夜をこめて自分の傍にゆつくり來てゐてくれることも出來ないのだ。たゞ人の好いばかりの母親には何をいつたつて分らぬので梅雄は病の重うなるにつれて一層昂奮してくる心持に襲はれながら凝乎と睨ひやうに天井を見詰めてゐた。

そんなことを思ひながら四五日顏を見せぬ姉の姿を頻りに戀してゐると表格子のあく音がして誰れかと訪ねて來た氣配がした。

「お母はん誰れか來てゐるえ。」

敏く耳についたまゝもしや空耳ではないかと暫く默つてゐた梅雄はそこに座つてゐる母親にいつた。

母親がすぐ立つていつてそれと一緒に入つて來たのは梅雄の好きな春雲であつた。東京にいつて苦學をしたいとあけくれ口癖のやうにいつてゐる梅雄には東京の人と聞くさへ懷かしかつた。その東京の人で繪をかく人がこの頃姉をひいきにしてくれてこゝへも二三度見舞ひにきてくれて、來る度に東京には學校の數多いことや京や大阪と違ふて學生がみな活潑なことや本屋の多いことやいろんな梅雄の胸をそゝるやうな話をして聞かして今に精出して早く病氣が癒つたら東京に連れてかへつて學校にやつてやるといつて元氣をつけてくれてゐるのである。

「どうぞこれをおひきやしとくれやす。」と母親は蒲團を春雪にすゝめながら、
「丁度いゝとこどした。今屋形から女衆が來て歸つたばかりのとこどすさかい、もう誰れも來いしまへん。」といつてまた立つていつて入口の方に氣を付けてきた。
「お客さんにこして來てもらひますのを屋形できつう嫌らはゝりますので、私の方ではほんまにお氣の毒に思ひますのどすけど、どうぞわるうとらんとおいとくれやす。」
「いえ、そんなことは構ひません。屋形でもいろ／＼疑ふんでせうよ。」
「えゝそない思ふたはりますのどす。あの娘も滅多なお客さんに吾が家のことなど話さしまへんけど、いつかも一遍そんなことでしくじつたことがごすので、それから屋形でもきつう氣を付けはりますのどす。」正直な母親は凡てのものにおづ／＼したやうにしていふ。
「屋形では葛城さんが自分の家へ馴染の客でも連れこんできて影日向でもするやうに思つてゐるんですか。」春雪は煙草に火をつけながら笑つていつた。
「まあ、そんなこともないやろけど、そなことがあつては葛城さんのためにようないよつて云ふて姉さんがそない云はゝりますのどす。」
「だけど姉さんといふのは大變可愛がつてくれてゐるといふぢやありませんか。」
「そらよう氣を付けて可愛がつてくれはります。またあの娘が平世勤めねばならんところはよう勸めてゐますさかい、屋形でもそれはよう知つてくれてはります。」
「どうかね、今日は。」春雪は梅雄の方を見ながら微笑んだ。

「え丶難有うぞんじます。」梅雄は衰弱した體を努めるやうにして强ひて顏に笑を出さうとした。

春雪は傍に置いてゐた小さい包みの中から鑵詰をとり出しながら、

「これは先刻東京からとどいたんだが榮太樓の梅干飴といつて病人が食べても障らないものです。も一つの方は甘納豆です。」さういつて鑵をあけて、

「一つ摘んで御覽。格別甘くもないけれど。」

「さうどすか毎度結構なものを戴きまして。」母親は茶を入れて出しながら禮をいつた。

春雪はこの間葛城がちよつといつて來るといつて歸つたまゝその夜は十一時が十二時になつても一時になつても遂に姿を見せなかつたのでその夜はいろんな不愉快な思ひに苛まされながら惱ましい一夜を殆ど寐ないで明して、翌日になつたら何とか挨拶をするであらうと思つてゐたが晩まで待つても何の音沙汰もないのでそれからそれへと取留めもない嫉妬や疑惑に包まれながら三四日は描きさしの繪絹を仕舞つたまゝに放棄してゆく春の日を心を空に惱みつゞけてゐたが、それもまちあぐねて弟を見舞ひかたがたそれとなし葛城の動靜を訊きに母親のところへ訪ねて來たのである。

「どうです。やつぱし毎日姉さんは見舞ひに來ますか。」

「丁ど今二人でそのことをいふてゐましたとこどす。この間から四五日お客さんにつれられて宇治とか大津とかへいたいふて、あんたはんちよつとも屋形へも歸つてきいしまへんさうどす。屋形へさへ戻つてくればちよつとでも顏を見せんことはないのどすけど、この兒がもう今日で五日も顏を見んもんどすからえらうあの娘を懷かしがりまして、「姉さんはどないしたんやろ」いよてなあ今もそのことを親子し

て昼飯をいふてましたとことどす。』

母親は鼻聲になりながらいつて、梅雄が暖かさに踏み脱いだ蒲團の裾をなほした。

『さうですか、實はこの間私のところへ來てゐて、屋形から迎へに來てちよつと行つて來るからといつていつたきり何の挨拶もないのですが。』といつて春雪はそのことを話した。

『あゝ、さうどすか、ほんまにえらい濟まんことどす。あのお客さんいつもすぐおかへりやすのに、此度はえらい長い、お母はんお客さんも葛城さんも兩方で意地になつてゐるのやいふて屋形の姉さんもそない云ふてはりました。』

『あのお客さんといふのは、どんなお客さんです。』

『大阪のお客さんどす。』母親はそんなことをいふて善いか惡いかの考へもなさゝうにいつた。

『あゝ、大阪のお客さんですか。私のところでは神戸のお客さんだとかいつてゐた。』

春雪はさういひながら、心の中では葛城が自分を神戸のお客といつて欺していつたことにまたいろいろな疑ひを挾んで不安の思ひに胸を閉されてゐた。

『この間都踊の點茶のときあの兒がいかなんだのでそれでえらうごてくいふてはるのやいふて先刻女衆がきてそない云ふてゐました。』

『あゝ、さうですか、あの時は私のところへ來てくれたのです。』

『そやさうにおす。それも女衆がさういふてゐました。』

『それにしてもこんな病人があるのだから、さういつたら歸してくれないこともないでせうがねえ。』

春雪はさういひながらそつと梅雄の方を見ると、默つて二人の話を聽いてゐる病兒の興奮した眼にはしとゞに露がとまつて、仰向きに寢てゐる病み疲れた頰には、ほろりほろりと涙のしづくが流れ落ちてゐる。

春雪はそれを靜と見まもりながら自分もともにやる瀨ない感慨に迫られて逆上げて來る私情と公憤のまじつた涙の滲むのを抑へかねた。

『そんなに思つてゐるほどなら、いつそ自由な身にしてくれたらよささうなものですがなあ。』

『こつちやではさう思ひますのどすけれど、それももう長いことさいてゐますので、あの娘もこの頃ではあてにしていませんのどす。』

『その人がどうもしてくれなければ、そんなに忙がしい人だから誰れかさうしてくれる人がありさうなものだがなあ。』春雪は半ば獨語のやうにいつた。

『屋形の姉さんもそない云ふてはるのどす。葛城さんはえらい仕合が遲い、いふて。それで姉さんの云はゝりますのにはこの先まだ四年にのびてるさかい、その年期があくのがあの娘が廿六の八月になりますよつて、それにまだ休んだり病院に入つたりしてひけ日を入れると丁ど廿六の年の十二月までゞ借金が濟むことになりますさかい。ほしたらあと自前で二三年勤めると千や千五百の錢は樂に殘せるから、そして一人妓を抱へて自分も働けば三十までには大分殘せる。大抵三十までは體はめつた落ちるもんやない、ほして内で出店のやうにて立つてゆけるやうにするさかい、まあ氣長う辛抱してたらいゝ、そのうち借金でも濟してやらうといふお客さんがあつたら、内でもよう聽いて堅い人やつたらこつちやもま

た考へてることもあるよつて、そない云ふて深切にいふてくれてはりますのどす。あの娘が平常何事もない時分にはよう體を勤めてゐますさかい多勢抱えてゐる妓の中でもあの娘にいつち目をかけてくれてはりますのどす。」

母親はそんなことをいひながら指を折つて娘の年期の明くのを勘定してゐる。

春雪は默つてきゝながらたよりにならぬことを手頼りにしてゐる老母の無智なる正直を哀れむやうな眼で見てゐた。そして危かしく顔を顰めるやうにして、

「そんな、あなた、あの纖弱い體でこの先長くそんなことをしてどうなるものですか。」

さういふ春雪の心には葛城もやがては弟と同じやうな悲しみの日の襲ひ來るのをまざ／＼と見てゐるのであつた。

「この兒もそれを毎日いひくらしてますのどす。姉さんがいつまでもあんなことをしてゐてはどもならんいふて。あの娘もあの娘どすけど、どうぞしてまあこの兒が早うようなつてくれまへんことには私自分でも病になりさうどす。」

「まあ、まあ。そんなに氣を落さん方がいゝです。それにしても姉さんが早くかへつてくればいゝがなあ。」

春雪は梅雄の方を向いていつた。が、病人は疲れていつの間にかすや／＼と假睡んでゐるのか返辭がない。

「なんぼ何でもあのお客さんもお弟の惡いことを知つてはるのどすから、もうかへしてくれはりますやろ。

あんたはんにえらい濟まんことどした。まあさういふ具合どすからどうぞ惡るう思はんとおいとくれやす。』

『いゝえ、なに。』

さういつて春雪は誰れも來ぬ間にといつてそこ〳〵にそこを出た。

その春はいつまでも陽氣が不順であつたせゐか病人にはひどく障つて、梅雄の病は俄に變調を呈してきた。

大阪のお客はそれからまだ三四日は花をあけてくれなかつた。もし急變でもあればすぐに知らするといふことになつてゐるまゝ、まさかまだ今日明日にそんなことはないだらうと安心して木屋町の居つゞけにも飽きて此度もまた新に多勢で大阪へ引返へして芝居を見にいつたりしてゐる間に病勢はどつと重つてきた。そして屋形からの大阪へ電話がかゝつて來たのに驚いて葛城が急いて驅け戻つた時にはもう梅雄は、

『早く姉さんに會いたい、早く姉さんを呼んできとくれ。』

と、それをいひつゞけにいひながら眼を瞑つてゐた。

（おはり）